

# 研究紀要

第6号

2011

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 序

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団は、平成4年に発足し、以来、高速自動車道・国道・北陸新幹線に関連した遺跡の発掘調査を実施しております。平成8年10月には、新潟県埋蔵文化財センターが設立され、新潟県教育委員会の委託により当事業団が管理を行ってまいりました。

当事業団はセンター業務として、埋蔵文化財の調査・研究、整理・保存、情報収集、専門職員研修などのほか、発掘調査等で得られた情報を県民の皆様に還元する普及・啓発活動を行っております。「発掘調査報告会」・「出土品展」・発掘調査現場における「現地説明会」の開催、広報紙「埋文にいがた」、「埋蔵文化財講座」への協力等がその活動の代表的なものです。

近年、発掘調査の件数は減少の一途をたどっておりますが、その一方でより高度な内容の調査と迅速な情報公開が求められてきております。このため当事業団の職員は日々の業務に従事するかたわら、埋蔵文化財に携わる者としての社会的付託を意識し、自らの研鑽を積んでまいりました。その成果の一部を『研究紀要』として発行します。今後の調査・研究活動にご活用いただくとともに、皆様のご叱正をいただければ幸いと存じます。

最後に、本書の刊行にあたりご協力をいただいた関係各位に感謝申し上げるとともに、今後とも一層のご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年3月

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

理事長 武藤克己

## 目 次

阿賀北における弥生時代中期後半～後期の土器に付着したスス・コゲの観察 ······ ······ ······ ······ ······ 1

瀧沢 規朗

新潟市正尺 C 遺跡出土の縄文施文土器－天王山系土器の下限を探る－ ······ ······ ······ ······ 21

加藤 學

上越市岩ノ原遺跡出土の古代土器について ······ ······ ······ ······ ······ ······ ······ ······ 61

春日真実

# 阿賀北における弥生時代中期後半～後期の 土器に付着したスス・コゲの観察

滝 沢 規 朗

## 1 本稿の目的

南北に長く、国内最大の離島である佐渡を有する新潟県は、現在の下越・中越・上越と、佐渡の4つに区分されることが多い。ここで対象とする「阿賀北」は下越でも北部で、阿賀野川より北を示す場合の名称である。この名称は単に新潟県北部を指すだけではなく、日本列島史を考える上でも重要な意味を持つ。弥生後期においては、ハケ調整で「く」の字状口縁の甕が主体的に分布する阿賀野川以南の海岸平野部に対し、阿賀北は縄文施文された土器が主体的に分布しており（第1図）、この傾向は更に北上して続縄文土器が分布する北海道にまで及ぶ。阿賀野川は縄文施文された土器群と非・縄文施文土器群が主体的に分布する日本海側の境界にあたる。北と南（西）の文化の境界。新潟県の特徴を最も端的に示すこの状況は、本稿で対象とする弥生時代中期後半～後期でも特に顕著に認められる。

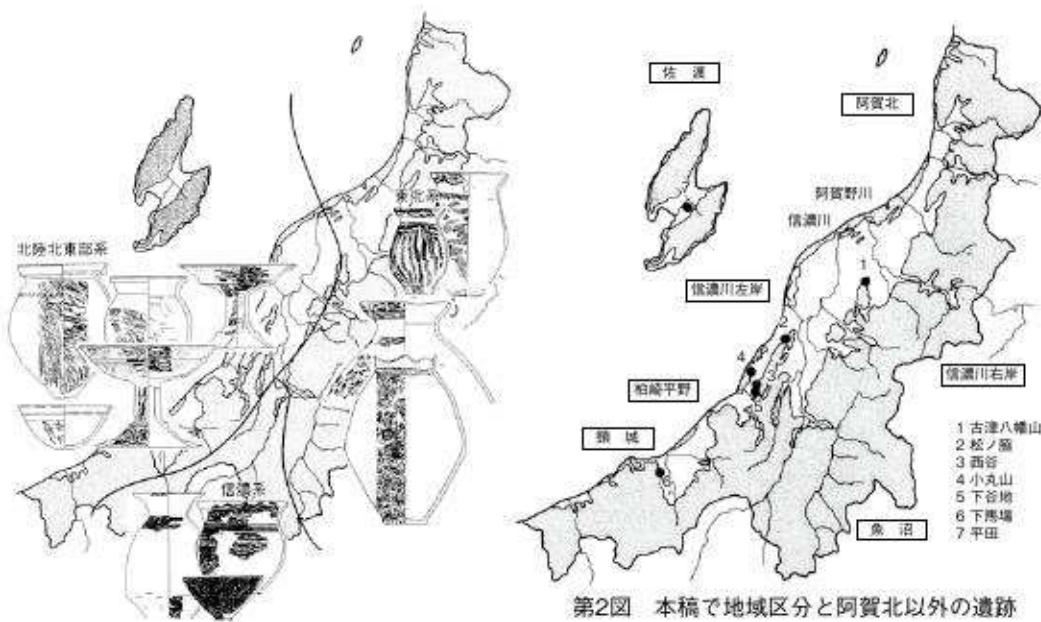
一方で、この境界が画一的でないことを示す事例も確認された。新潟県の弥生時代後期を象徴するキーワードに高地性環濠集落がある。新潟県は日本海側最北の地と認識されて久しい。その分布は阿賀野川以南であったが、村上市山元遺跡の発見により、阿賀北にまで及ぶことが確認された〔滝沢ほか2009〕。現在、山元遺跡は国指定史跡を目指して範囲及び内容確認調査が村上市教育委員会により実施されており、新潟県の弥生時代では初となる筒形銅製品が確認されるなど〔村上市教委2010〕、「縄文施文系」土器群を主体としながらも、西日本的な遺物も確認されている。

特に重要な位置を占める山元遺跡であるが、報告書の刊行にあたり、紙面の関係から掲載しなかった項目に土器のスス・コゲの付着状況がある。縄文施文系土器分布圏で、米がどれくらい食べられているのか。この疑問は、当概期集落を検討する場合に大きな課題となる。このことを検討する一手法として、煮炊用土器に付着したスス・コゲからアプローチを試みる。

## 2 観察にあたって

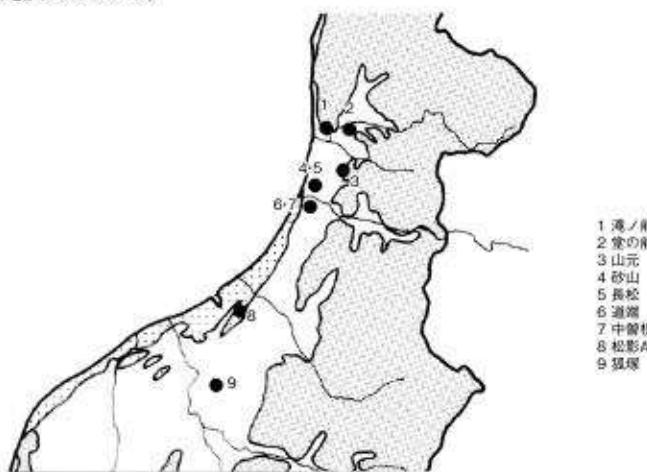
主に甕形土器（以下、形土器を省略して甕とする）に付着したスス・コゲを観察した。古墳中後期における竈導入以前の甕については、小林正史氏の一連の論功により、作り分けと使い分けが指摘されている。北陸の加賀地域における弥生時代後期後業では、容量3/4未満の小型品は汁物用、3/4以上の中型品が炊飯用で、プロポーションも異なるという〔小林2003ほか〕。

このことについて、古墳時代前期の甕を対象に検討を試みたことがある〔滝沢2008〕。容量では3/4未満の小型、3～6/4の中型、7/4以上の大形に区分できる。容量毎のスス・コゲの痕跡は、小林氏の指摘どおり中型は汁気を飛ばす調理（炊飯）を示すコゲが主体であった。ただし、数量は少ないながらも小型でも同様の調理方法を示すスス・コゲが確認されており、小型でも炊飯に使用されたものがあるという結論に達した。一方、先のこの検討では、数量が少ないとから参考としたが、弥生時代後期の北陸系と東北系土器群を観察した。ここではこれらの資料に、今回観察した結果を含めて検討を行う。



第1図 県内における弥生時代後期後半の主体的土器  
(滝沢2009より)

第2図 本稿で地域区分と阿賀北以外の遺跡



第3図 阿賀北におけるスヌ・コゲ観察した遺跡分布図

第1表 時期区分と併行関係

本稿	時代・時期	東北型式	福島・新潟(下越)		新潟			北陸南西部		北陸型式
			石川2004	滝沢 2006	野田2003-2005	渡邊 2001	滝沢 2005-2010a	田嶋2007 ほか		
中期 後半	弥生中期 後半	二ツ釜	1期	+	砂山1・2群 (1a期)					小松 尊光寺 戸水B
		川原町口式								
	弥生後期 前葉	天王山式	和泉	砂山3群(1b期)	砂山4群(2期)	1期古 1期新	1期	V-1 V-2 V-3	猫橋	
			蛭登							
1期	弥生後期 後葉	砂山1	砂山2			1期古 2期新	2期古 2期新	2-1 2-2期 2-3期	2-1 2-2	法仏
			天王山							
2期	弥生後期 後葉	屋敷段階			滝ノ前2・3群 (3a・3b期)	3期	3期	3-1 3-2	3-1 3-2	月影
3期	弥生後期 末葉	赤穴など				4期	4期	4群	4群	白江
							5期	5期	5群	
								6期	6群	
4期										
5期										
6期										

## A. 観察資料

### 1) 観察資料の選定

本稿の目的は、阿賀北地域における土器の作り分け・使い分けと米調理の度合いである。このため、阿賀北地域内における変遷をうため、弥生時代後期の資料に中期後半の資料を加えた。観察には完形品が望ましく、一つの遺跡で20個体程度の観察を行うことで、おおむねの傾向が判別できるという〔小林2003ほか〕。この条件にあう遺跡は、東北地方で縄文施文された土器（以下、東北系とする）では他県でもほとんど存在しない。資料的な制約が当該土器群におけるスス・コゲからみた調理実態解明に遅れにつながっている。観察資料を増加して、少しでも当該土器群での状況について目安を持ちたいため、完形・略完形土器に加え、横方向の残存率が1/3以上、縦方向が7/10以上のものを対象とした。観察個体の数量が不十分であることを認識しつつ、阿賀北で確認されている完形ないし残存率の高い土器を観察した。具体的には村上市山元遺跡〔滝沢ほか2009〕の5個体に加え、村上市内では滝ノ前遺跡〔石丸ほか2003・野田2009〕2個体、砂山遺跡〔石丸ほか2003〕3個体、堂の前遺跡〔石川ほか2010〕1個体、長松遺跡〔田辺1991〕2個体、道端遺跡〔前川ほか2006〕3個体、六百地遺跡〔田辺ほか2002〕1個体、阿賀野市狐塚遺跡〔佐藤ほか2009〕7個体である。これに前回、観察結果を提示した新潟市松影A遺跡〔加藤ほか1999〕2個体、村上市中曾根遺跡〔青木ほか2006〕3個体を加えた（第4・10図）。

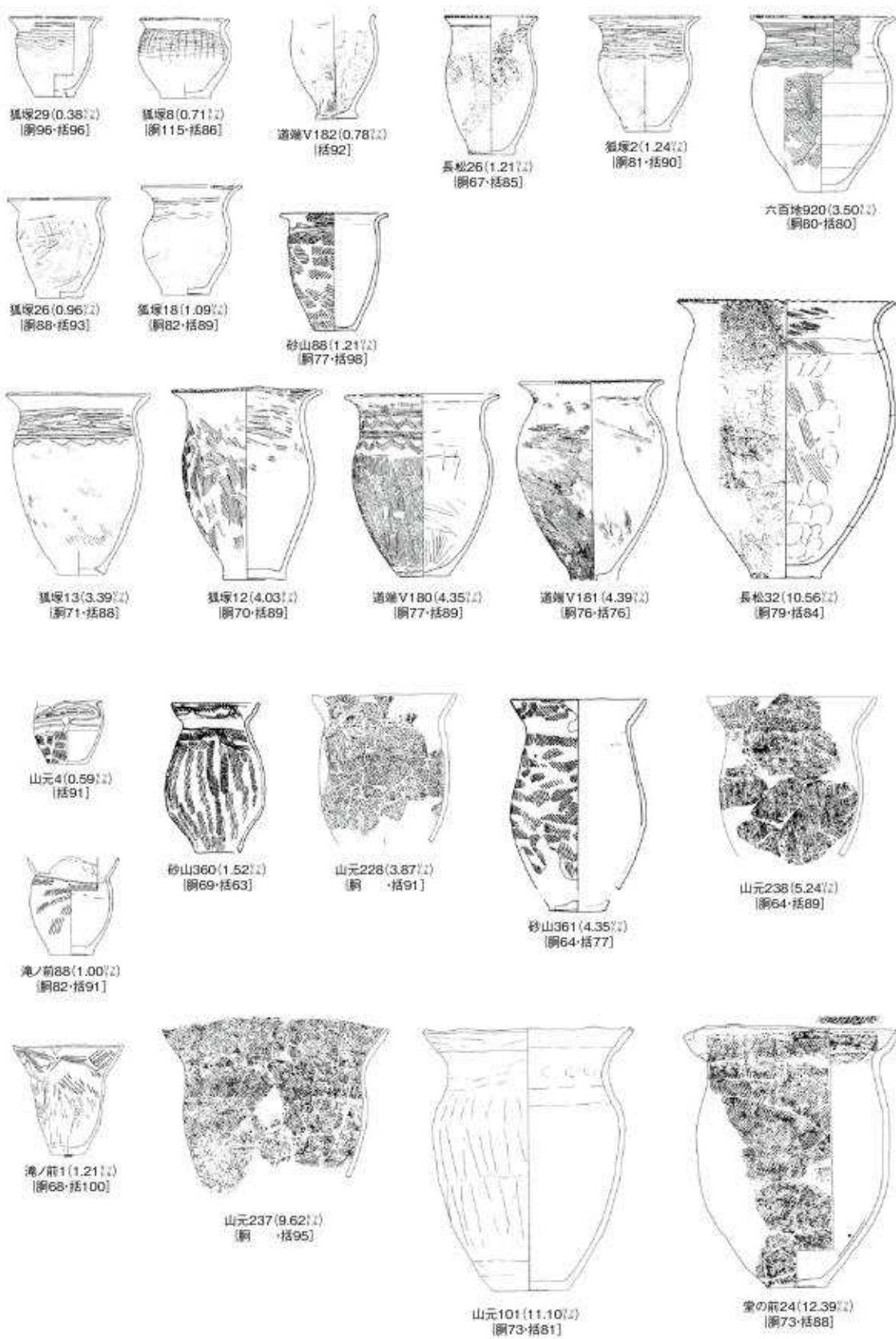
### 2) 観察資料の時期について

前述のとおり中期後半～後期の甕を対象とするが、個別の土器の時期比定には多くの課題を残している。特に東北系土器群のうち、天王山式土器（及びその併行期）の解釈は、県内では中期説〔田中1990、丸山1999など〕と後期説〔石川1990、野田2003など〕がある。ここ数年は、県内で新たに中期説を唱える研究者はいないが、なお支持が残っているのが現状であろうか。筆者は山元遺跡の報告書で後期説に立ったが〔滝沢2009〕、個別の土器の位置付けでは検討を有するものが多いと考える。東北南部の天王山式に併行する下越（日本海側）の型式（様式）名は砂山式が提唱され〔石川2004〕、筆者はこれを支持する立場である。今回の観察資料も石川氏、野田氏〔野田2003・2010など〕の変遷観に準拠しているが、現状での筆者の見解を第1表・第5図を使って提示しておく。

中期後半の宇津ノ台式系甕の口縁部形態は少なくとも2タイプある（第5図上段）。口縁部が長く「く」の字状を呈するもの（1）と、頸部が直立ないしは内傾して外へ開く短い口縁部に至るものである（2～5）。後者は更に頸部が直立し、胴部との境界が明瞭なもの（3～5）と明瞭ではないもの（2）に分かれる。2～5は砂山式甕の主要な器形であり、山元遺跡出土土器と合わせ、口縁部形状・頸部の重菱形文の施文方法から、3段階程度に区分が可能と考える（第5図中段）<sup>註1)</sup>。

この器形は弥生中期後半の北陸系土器（以下では便宜的に小松式系とする）にも置換されており、越後では柏崎平野までは確認できる（第5図下段）。佐渡では平田遺跡〔坂上ほか2000〕でも定量確認されており（19～22）、北陸系との併行関係を考える上でも重要と考える。これらは笹澤編年〔笹澤2006〕のⅠ期に通るものは確認できず、+期及びⅡ期（第1表）に多い。おおむね畿内第Ⅳ様式併行期にあたることから、現状ではこの時期が宇津ノ台式系甕と小松系土器との接点の上限としたい<sup>註2)</sup>。

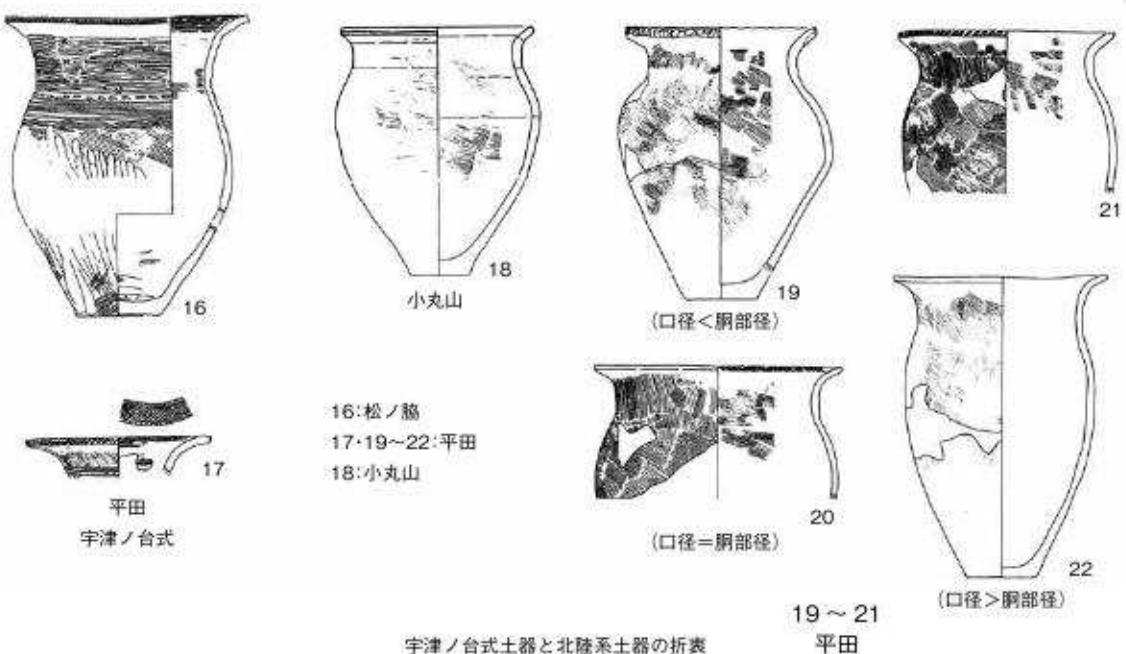
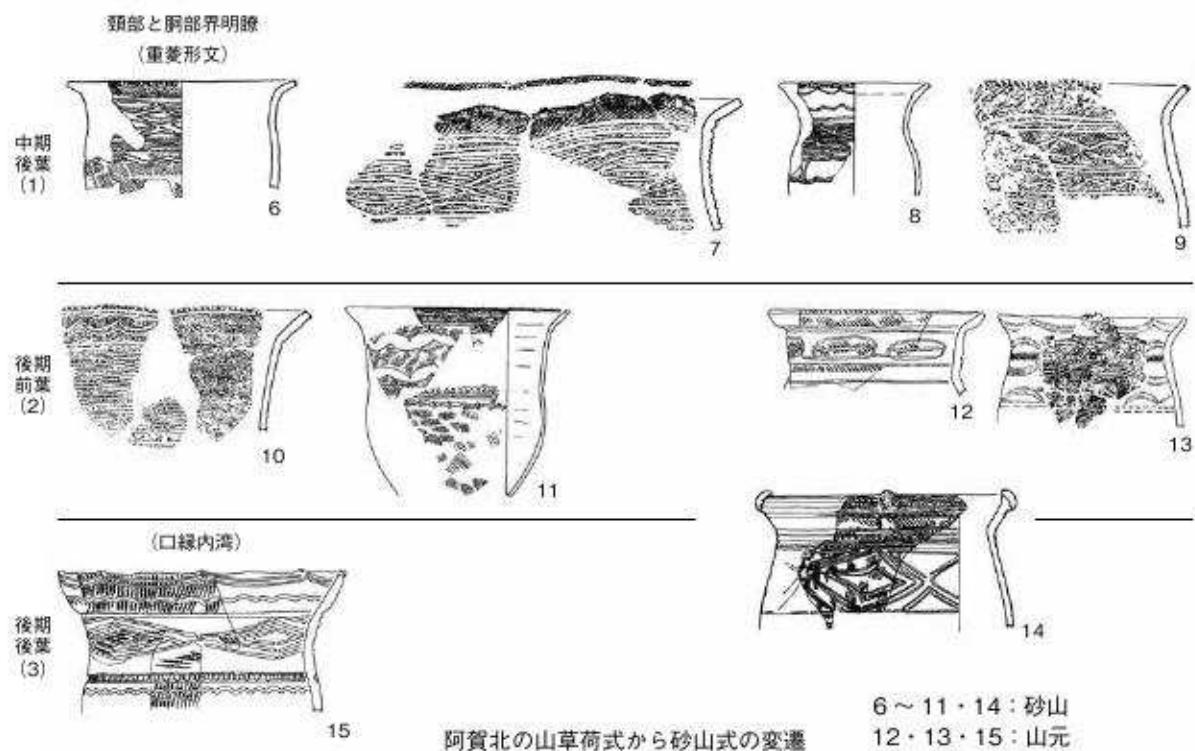
一方で天王山式との関連では、阿賀野市狐塚遺跡〔佐藤ほか2009〕の成果が特筆される。12基の土坑墓が確認され、残存率の高い土器が1～3個体伴う。供獻土器で、同時性を検討する場合に特に重要な資料となる。いずれも中期後半に帰属するもので、小松式系、宇津ノ台系、川原町口式系統の壺など石川氏の山草荷式のセット〔石川2004〕に加え、中部高地の栗林式がある。宇津ノ台式は小松系との折衷が著



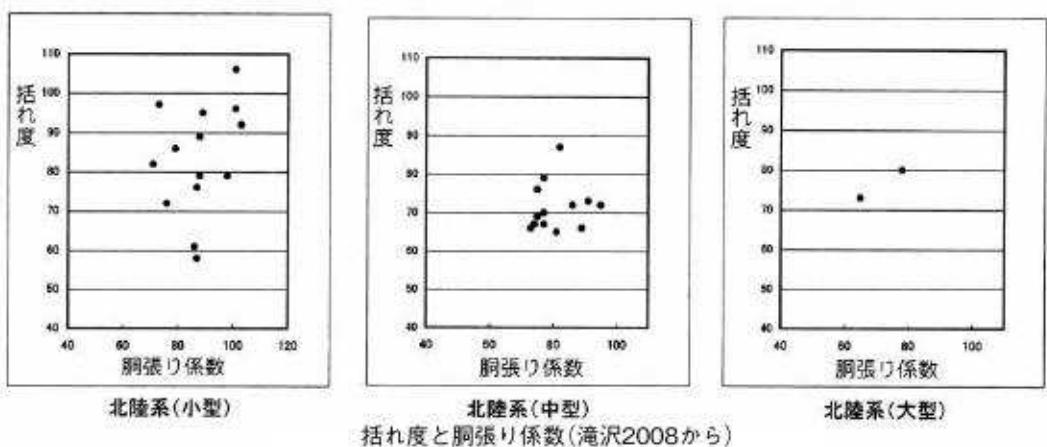
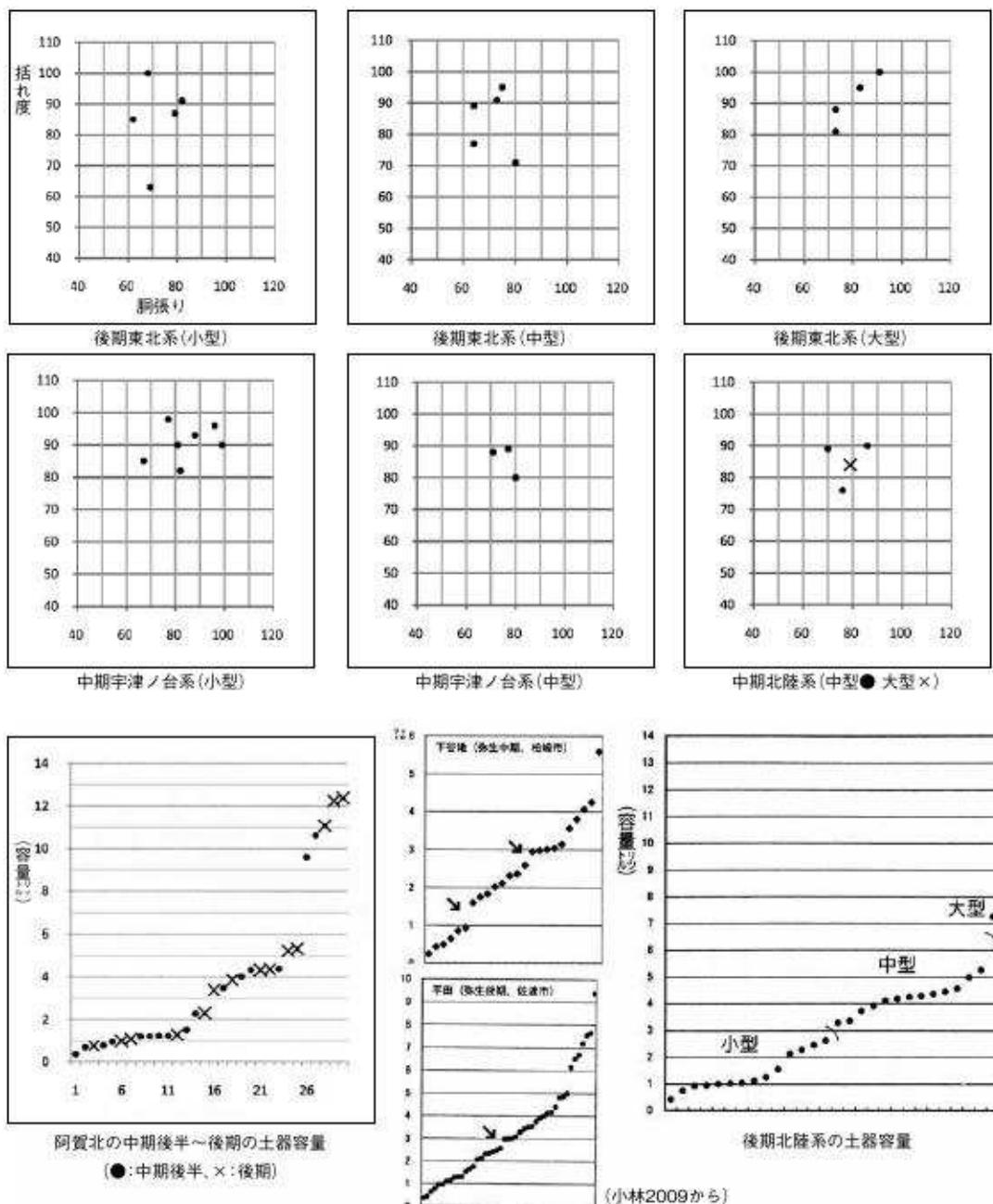
第4図 スス・コケ観察土器 S=1/8



宇津ノ台式土器 (須藤 1970 から)



第5図 本稿で対象とする土器に関する土器の時期区分と地域性 S=1 / 8



第6図 分析対象土器の属性

しいが、台形刺突列ないしは交互刺突文が施された砂山式ないしは天王山式土器は確認できない。北陸系は小松系でも比較的新しいものが多く、 笹澤編年II-1期を過るものではない。また、破片資料のため交互刺突文の有無は明確でないが、上越市吹上遺跡4号玉作工房（笹澤編年II期）から宇津ノ台式系甕が出土している〔笹澤2006〕。当遺構は笹澤編年II期でも新しい段階と考えるが、重菱形文の特徴は砂山式よりも宇津ノ台式に近い。このことからも宇津ノ台甕式は笹澤編年II-2期まで残る可能性があろう<sup>注3)</sup>。

なおも解決しない問題も多いが、おおむねの時期区分として第1表を示した。この結果、今回観察結果を提示する資料は中期後半が14個体、後期は15個体である。

## B 観察にあたって

### 1) 容量とプロポーション

土器の大きさによる使い分けを検討するため、滝沢1997に準じて容量を計測した（第6図）。中・後期共におおむね一致した分布を示し、3%付近、6～9%付近で大きな分布の断絶が認められる。このことから3%未満を小型、3%以上6%未満を中型、9%以上を大型とする。一方で、3%未満の小型では13%付近、中型では5%付近で緩やかな分布の断絶が認められるが、ここでは更に細別は行わない。

この区分を中・後期の北陸系（第6図中段）と比較する。後期の北陸系<sup>注4)</sup>はおおむね一致した傾向と言える。一方で中期・北陸系（小松系統）の柏崎市下谷地遺跡〔高橋ほか1979〕は小型で細分が可能な点、佐渡市平田遺跡〔坂上ほか2000〕では6～8%で分布がやや濃いが、3%付近で小型と中型の区分が可能な点や、5～6%付近で分布の断絶が認められることから、おおむねおおむね一致した分布と考えたい。プロポーションの属性として、頸部の括れ度（頸部径／胴部最大径×100）、胴部の張り出し具合（胴部最大径／器高×100）をそれぞれ数値で求めた。稲作農耕民の土器作り民族例における煮炊き用土器の作り分け（炊飯用とおかず用）では、頸部の括れ度が最も重要な識別基準との指摘〔小林1993〕による。ここで数値では数量が小さい程、括れが強いことを示す。小林氏の指摘によれば炊飯具は括れが強く、おかず用は括れが弱いという。胴部の張り出し具合は、時期・地域的な変異や容量毎での差異が予想され、頸部の括れ度と共に重要な属性と考えたことによる。ここで数値は大きいほど胴部の張り出しが強くなる。両者の組み合わせを第6図上段に示した。また、参考として後期北陸系を第6図下段に掲載した。

時期・系統別でみると、括れ度は後期の小型で60台のものが1点あるが、80～100主体、中型で70～95であるが、大型は80～100と幅をもつ。容量毎で若干の違いが認められるが、北陸系（第6図下段）に比して括れが弱い。胴部の張り出しは小・中型が60～80、大型は70～90となり、わずかに大型で胴部が張り出すものが認められる。数値の幅が広い小型、数値がまとまる中・大型に分かれるが、中型は大型に比して、括れは強いものの高さに比して胴部の張り出しが弱い傾向にある。

一方の中前期は宇津ノ台系の小型では括れ度80～100、胴張り係数が70～100と胴部の張り出し、括れ共に弱いものが多い。中型の計測は3点のみであるが、括れ度80～90、胴張り70～80とまとまる。中期・北陸系は括れ度70～95、胴張り度が70～90で宇津ノ台系の中型に近い。計測点数から有効性に課題を残すが、宇津ノ台系の小型は後期のものに比して数値がまとまり、胴部が張り出すものが多い傾向にある。

### 2) スス・コゲの観察視点

#### a) 使用回数（外面の観察から）

スス上端のライン位置や、括れ部のスス付着程度から、暫定的な使用回数の復元が可能という〔小林・柳瀬2002〕。スス上端ラインの位置する胴部外面上位は、比較的強い炎を一定時間受けた場合は、ほぼ同

一レベルでめぐるのに対し、炎が小さめの加熱ではスス上端ラインが低めで、炎が高く上った部分のみスス上端ラインが突出する。よって使用回数が少ないほど、スス上端ラインの凹凸が激しいとされている。括れ部（小林氏らの頸部最小径）は、①小型品・②括れが弱いものを除き、最もススがつきにくく、炎を直接受けることがないので、一旦付着したススが酸化消失しにくい。このため頸部のスス付着程度から、使用回数「少なめ」「多い」と目安になるとされている。ただし、今回対象とする土器は、小型品が多いこと、②頸部の括れが弱いものが多い。このため、あくまで頸部のスス付着の有無は目安とはしたが、使用回数の「少なめ」「多め」の根拠とはしていない。

#### b) 吹きこぼれ痕（外面の観察）

吹きこぼれ痕には、以下の3種があるとされており、使用回数とも密接にかかわるという。また、炊飯の根拠の一つともなっていることから、観察を行った。

**白色吹きこぼれ痕**：煮汁が流れた部分で薄いススが洗い流され、さらに煮汁中の有機物のコーティングにより、その後もススが付かなかった結果、スス付着部位の中に白い筋として残るもの。その後、ススに覆われると見えなくなるため、厚いススが付きにくい部分（口頸部～胴部）で観察できる。白色吹きこぼれ痕は、それ以前に煮炊きに使われていない、吹きこぼれが行った後も煮炊きに使用されないなどの条件で残存するものであることから、「白色吹きこぼれが顕著なものほど、使用回数が少ない」。

**黒色吹きこぼれ痕**：吹きこぼれた有機物が炭化したもの。強い加熱を受けて吹きこぼれた有機物が炭化する、ススが付かない部分でしか認定できないため、胴部中位～下位のスス酸化部に付く。

**黒縁吹きこぼれ痕**：黒色吹きこぼれと同様の過程でできるが、水分が多いため輪郭のみ炭化したもの。強い加熱を受けて吹きこぼれた有機物が炭化する、ススが付かない部分でしか認定できないため、胴部中位～下位のスス酸化部に付く。

#### c) コゲの観察

内部に付着するコゲは、付着部位と形状を重視した。口縁部のコゲは喫水線上のものと予想される。一方、胴部でも下部のコゲは最終段階まで汁気がなくなる調理で高い頻度で付着する。汁気が多いものでも、大型の内容物が長時間器壁に密着した場合には、水面下にもコゲができるが、この場合は小円形（パッチ状）に付着するのみで、環状（バンド状）にはならないという。

また、胴下部には環状（バンド状）に巡るコゲについては、喫水線上のコゲである可能性が指摘されている〔小林・阿部2008、北野2009〕。両者で生成要因の解釈は異なるが、喫水線上コゲとする認定基準に対して①コゲ下端ラインがほぼ水平で輪郭がシャープ、②コゲ下端ラインがほぼ高め、③したたり痕を伴う、④コゲバンド内部のコゲ酸化部があること、⑤幅狭いコゲバンドである、などが挙げられている〔小林・阿部2008〕。特に④は空炊き状態（喫水線上）以外、生成されないという。胴下部に環状（バンド状）に巡るコゲが確認された場合には、その形状を観察した。

#### d) スス酸化と側面からの加熱（内外面の観察）

薪と複製甕による調理実験では、煮炊きを始めてまもなく甕の外面全体がススに覆われる。その後、強い炎を受けた部分はススが酸化して消失する。また、次の調理では同様に、全体にスス＝強い炎を受けた部分のスス酸化、が繰り返される。スス酸化の位置は煮炊き前に変化することが予想される。

一方で、民族例では米調理の最終段階で、米のむらとして最終段階に側面から加熱する。側面を均等に加熱するために、数分おきに120度程度回転する〔小林・谷2002〕。このことから、側面加熱の痕跡として、外面のスス酸化に対応するような内面の円形コゲ等が認められるか否かを観察した。

#### d) 炉への設置方法

竈を用いずに甕を加熱する方法には以下の3種類が推定される。

**浮き置き**: 三脚等の上に浮き置きし、甕を底面から炎により加熱する。底面が最も強い加熱を受けるため、内底面に最も顕著なコゲが付く。また、外面のスス酸化も底面に最も顕著に現れる。支脚上に置かれていたため、胴中部～上位が横方向から強い加熱を受けることはないこと、使用回数が少ない場合には、支脚に接した部分のススが薄くなることがある。

**直置き**: 炉に直置きした甕を側面から炎により加熱する。胴下部が最も強く加熱されるため、顕著なコゲとスス酸化ができるのに対し、内底面にスス・コゲが付着しない。

浮き置き、直置き以外に、炉から離した後に甕をオキ火の上に載せて底面から加熱・保温する「オキ火上加熱」がある。オキ火上加熱は、コゲが内底面にのみ着く。浮き置きとの区分は、オキ火上加熱はむらしが主なため、内底面のコゲ・外底面のスス酸化消失が弱い点が挙げられる。直置き+オキ火上加熱が複合した場合に、浮き置きとの区分が問題となるが、底面のコゲ痕跡がより弱いものを直置き+オキ火上加熱と判断した。

#### e) 内容物の確認

土器内面を観察すると、細長い粒、円形に近い粒状の炭化穀粒が確認される場合がある。これは、細長いものが米、円形に近いものは粟・稗の可能性が指摘されており〔柳瀬 1988〕、岡山県上東遺跡（弥生時代後期）〔岡山県教育委員会 1973〕で特に多くの資料が得られている。これらの痕跡は、土器で煮炊きされた内容物を、直接しめすものとして特に重要である。

### 3 観察結果

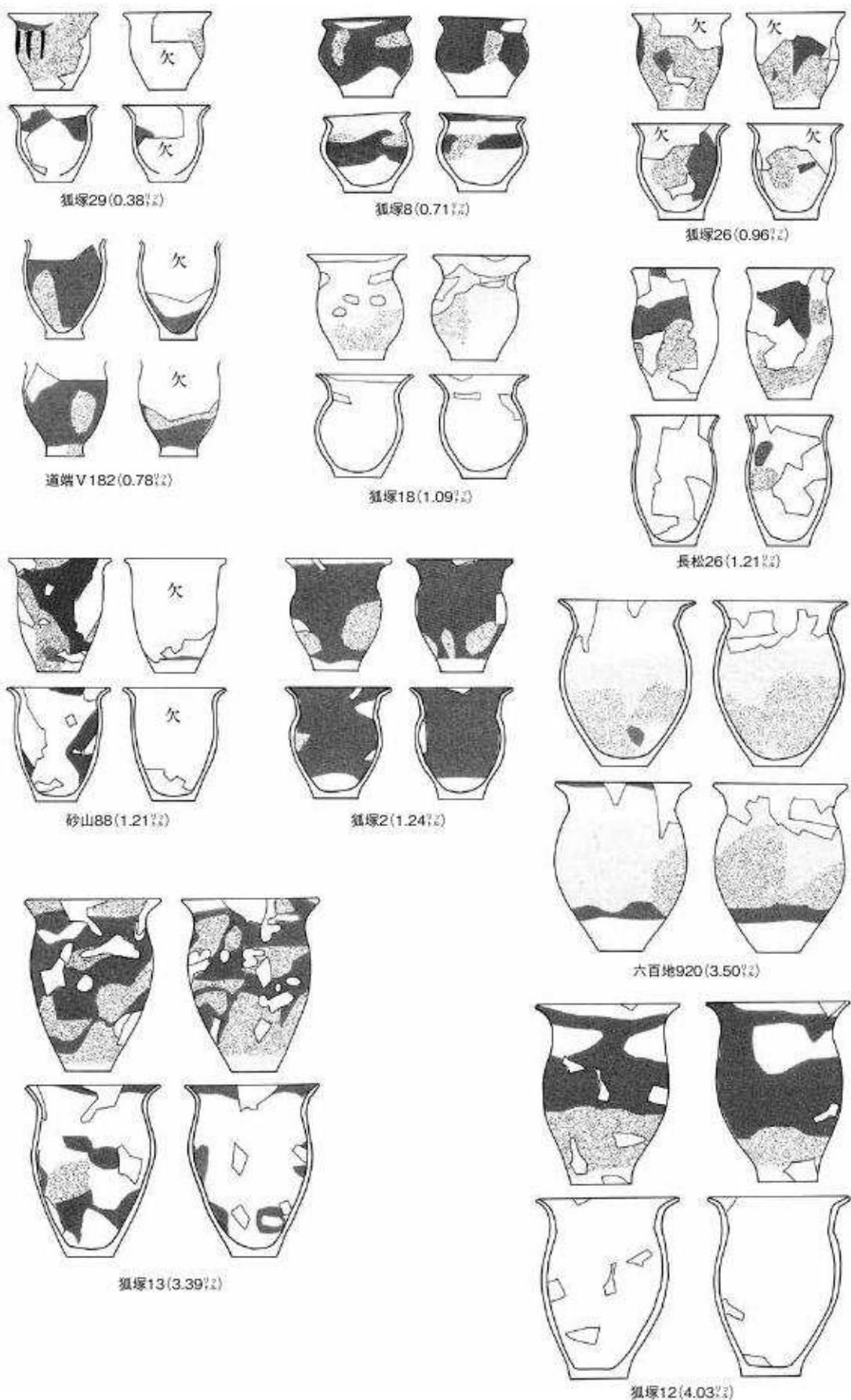
#### A 中期後半

墓の供獻土器である阿賀野市狐塚遺跡のものは、スス・コゲが観察できたもののみを加えた。系統毎の内訳は宇津ノ台系が8点（砂山88、長松26、道端180、六百地920、狐塚2・18・26・29）、北陸・小松系が5点（長松32、道端181・182、狐塚12・13）、栗林式が1点（8）の15個体である。法量毎では小型が8点と多く、中型は5点、大型品は1点である。

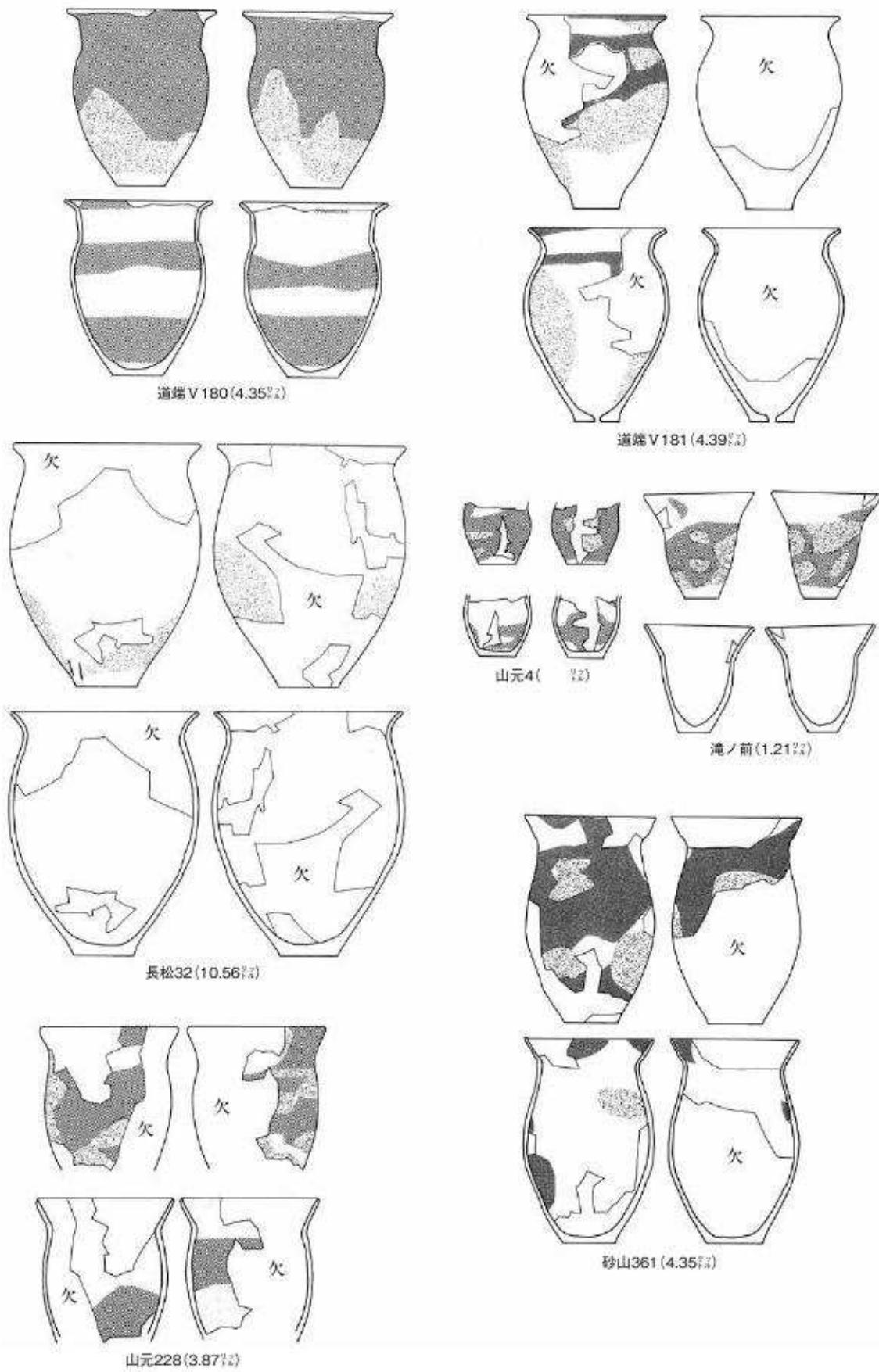
外面にスス、内面にコゲが付着したものが多い。内面のコゲは薄く、ヨゴレ程度のものがある。小型ではコゲが比較的明瞭であるが、中型で2点（道端181、狐塚12）、1点のみの大型品（長松32）では淡いヨゴレが付着する程度である。内面にコゲが濃く付着するものでは、①胴上部～下部にパッチ状に付着するもの（長松26、狐塚13・18・29）、②胴下部を除くほぼ全面（道端182、狐塚2・26）と、③胴中部及び下部に層状に付着するもの（道端180、六百地920、狐塚8）に分かれる。内底面にコゲ付くものがないことから、炉への設置方法は直置きと考える。これらは外面のスス酸化と対応するものが多いが、米調理の根拠となる側面加熱と内面のコゲが対応するものには5点（砂山88、長松26、狐塚13・18・26）、コゲ酸化が認められるものは3点（道端182、六百地920、狐塚8）がある。

吹きこぼれ痕は、各法量で1点（小型-狐塚29、中型-道端180、大型品-長松32）の黒色吹きこぼれ痕が確認できた。コゲから内容物を確認することはできなかった。

上記の観察結果から、特に小型では高い頻度で内容物のコゲ付く調理が推定できる。外面の側面加熱とコゲが対応することから米調理が推定できるものは5点あるが、うち4点は小型である。また小型品は観察資料8点中、6点で明瞭なコゲが確認できるなど、高い頻度でコゲが付着している。小型品のスス・コ



第7図 スス・コゲ観察結果1(中期後半1) S=1/8



第8図 スス・コゲ観察結果2(中期後半2・後半1) S=1/8

ケ付着具合が特徴的であるが、これは今回の小型品8点中5点が狐塚遺跡例であるため、「墓に供献した小型土器の状況が大きく影響した」可能性もある。

## B 後期

容量別の観察個体は小型が5点（滝の前1・88、山元4、松影44、砂山361）、中型が5点（山元239、砂山360・361、中曾根7・11、松影47）、大型が4点（堂の前24、山元237・101、中曾根20）の合計14点である。煮沸痕跡が確認できない小型の2点（滝ノ前88・361）を含む。

内面でコゲが確認できないもの、ないしはコゲは薄く、ヨゴレ程度のものは小型の1点（滝ノ前1）である。内面にコゲが濃く付着するものでは、①胴中部～下部にパッチ状に付着するもの（中曾根7・11、中曾根20）、②胴中部～下部にパッチ状ではあっても比較的広い範囲に付着するもの（松影44、山元4・228・238、松影47、砂山361）、③胴下部にのみ層状に付着（堂の前24、山元101・237）に分かれる。中期後半に多かった胴下部を除くほぼ全面にコゲが付着するものは確認できない。①～③は容量との関連でも一定の方向性が確認でき、①は中型・大型、②は小型・中型、③は大型に限られる。

これを容量別にみると、小型では煮沸痕跡がないものを除く3点中、コゲが付着しないものが1点、付着するものは胴下部にパッチ状に付着したものが多い。中型では胴下部～中部にパッチ状に付着したものが多い。一方の大型4点中、コゲは胴下部に限定され、層状に付着するものが3点、パッチ状に付着するものが1点となる。このことから、後期の観察資料は、汁気を飛ばす調理は中型が主体で、一部、小型でも認められる。一方の大型の胴下部のコゲは、縄文土器の中・大型品（10%台）のものの付着状況で一部が類似する。外面のスス酸化と対応するものが多いが、米調理の根拠となる側面加熱と内面のコゲが対応するものには3点（砂山361、中曾根7・11、松影47）、スス酸化とコゲ及びコゲ酸化が認められるものは1点（山元238）がある。これらのうち中曾根の7・11と山元238を除き、スス酸化か所が1か所のため下面からの加熱で有る可能性も残る。内底面にコゲ付くものがないことから、炉への設置方法は直置きと考える。

吹きこぼれ痕は、大型の1点（堂の前24）で確認できるのみである。コゲから内容物を確認することはできなかった。

## C 阿賀北における中期後半と後期の違いと米調理の可能性

### 1) 土器の使用痕跡

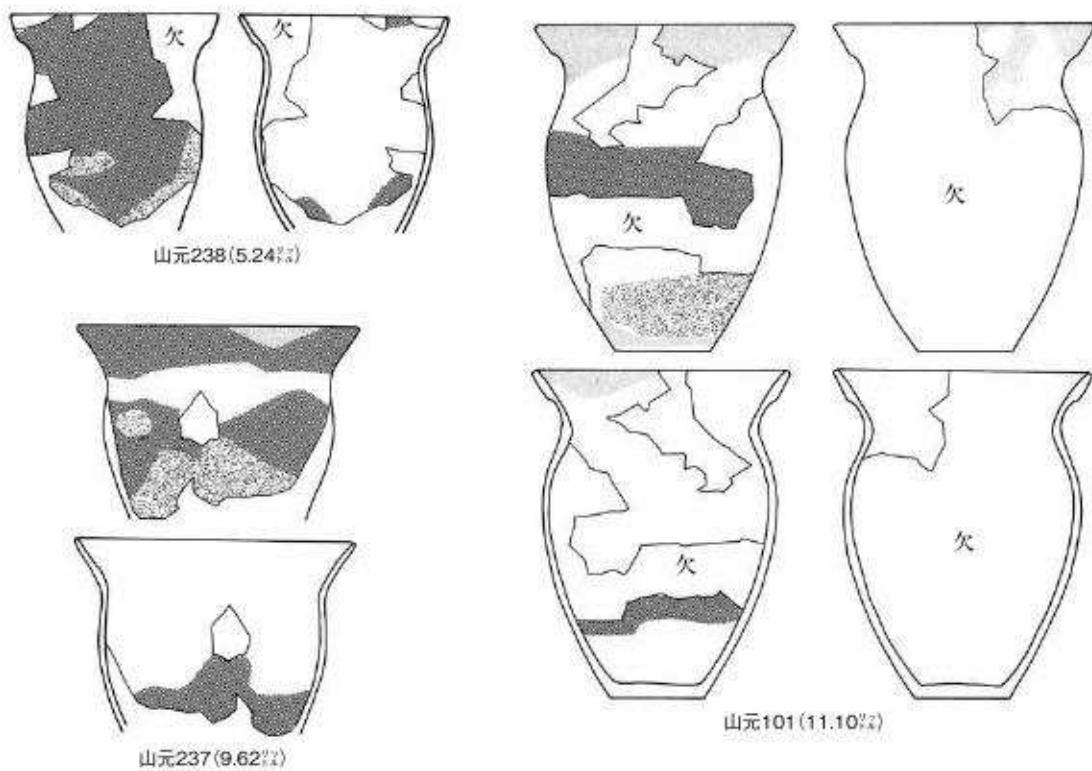
同一地域における中期後半と後期では類似点・相違点が認められる。

**小 型**：中期後半では高い頻度で内面にコゲが付着する。墓に供献された土器が多いなど、資料に偏りがあるものの、一つの傾向として抽出できる。

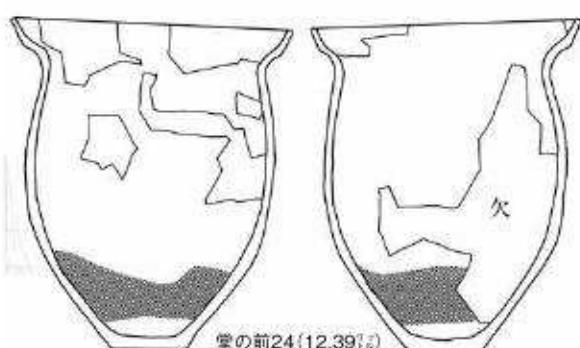
小型品のスス・コゲ付着状況を、後期北陸系と比較すると大きな差異である。すなわち、後期北陸系の小型品では10点中8点でコゲが付着しないか、ごく淡いコゲであったのに対し、阿賀北の中期後半ではコゲが明瞭であり、高い頻度で汁気を飛ばす調理が推定できる点で大きく異なる。

**中 型**：様相は大きく異なる。中期後半ではコゲが付かないものが5点2点あるのに対し、後期では5点中全てでコゲが付着しており、外面のスス酸化も顕著な点で異なる。後期北陸系では高い頻度でコゲが付着することから、阿賀北の後期東北系土器は、北陸系と同様の様相が考えられる。

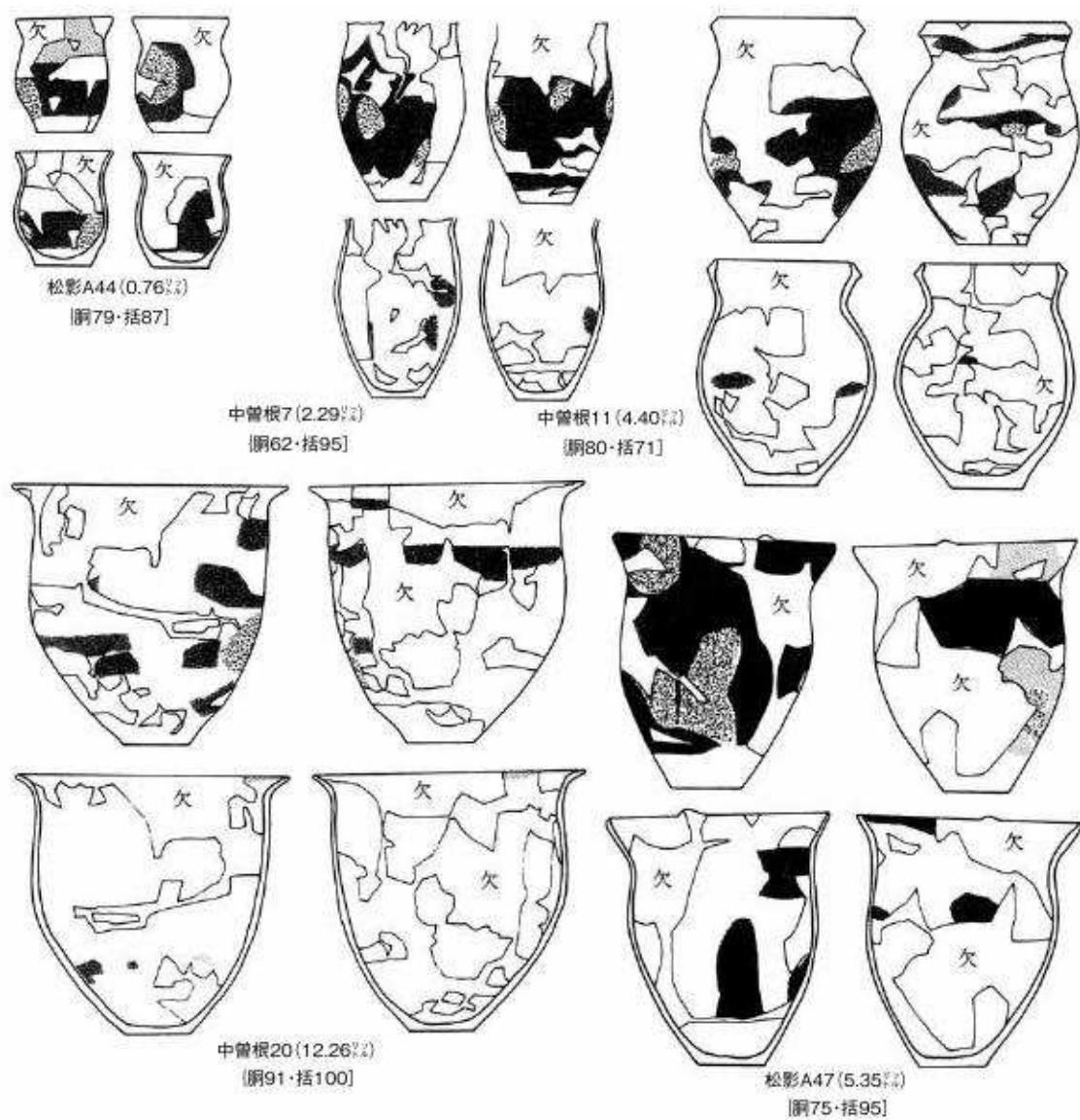
**大 型**：中期後半の観察数は1点のみであるが、コゲが付着しない。後期では観察した4点全てでコゲが



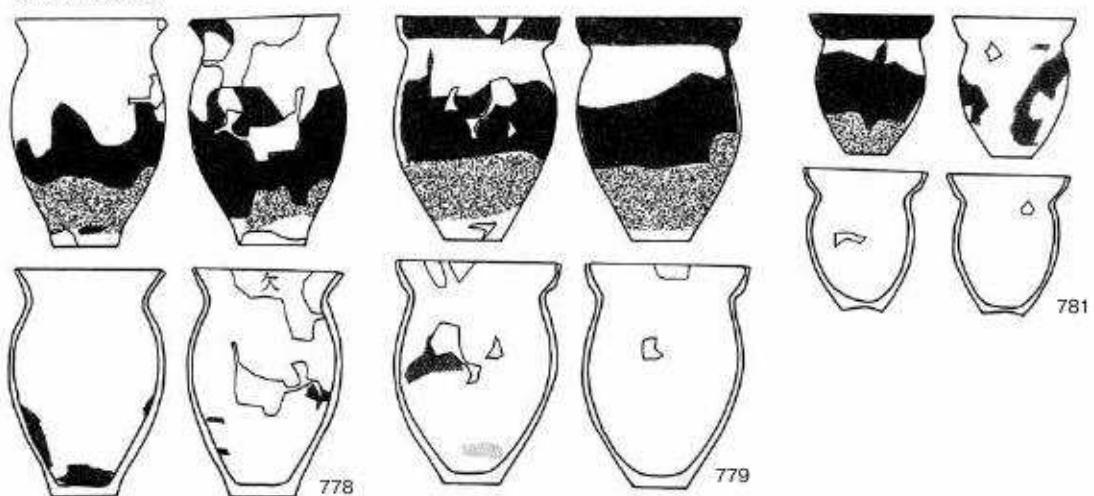
【外面】	【内面】
■ スス	■ コグ
■ うすいスス	■ うすいコグ (ヨゴレ)
■ スス酸化消失	
■ 吹きこぼれ	
スス・コグの凡例	



第9図 スス・コグ観察結果3(後期2) S=1/8



古津八幡山遺跡



第10図 スス+コゲ観察結果4(後期3) S=1/8(滝沢2008より)

第3表 スス・コゲ観察遺跡及び容量計測遺跡

遺跡名	報告No.	出土地点等	容量	口径	器高	頸部径	腹部最大径	底径	肩張り度	括れ度	時期	系統	外蓋スス		吸水線下のコゲ			備考	
													ふきこぼれ	有無	側面加熱	コゲの有無	バッヂ状	環状	環状+円形
鶴塚	2 SK5	1.24	14.5	15.5	11.4	12.6	6.0	81	90	中期	牛津/台系	○			○ ○				
鶴塚	8 SK6	0.71	11.9	11.0	10.8	12.6	6.6	115	86	中期	集林	○	○		○ ○				
鶴塚	12 試掘87	4.00	19.8	25.2	15.6	17.6	8.2	70	89	中期	北陸系	○			△ △				
鶴塚	13 SK12	3.39	18.9	24.2	15.3	17.3	6.0	71	86	中期	牛津/台系	○	○	○ ○		○			
鶴塚	18 SK25	1.09	13.3	14.7	9.8	12.0	6.1	82	82	中期	牛津/台系	○	○		○				○
鶴塚	28 集中4	0.95	13.8	13.4	11.0	11.8	6.0	88	93	中期	牛津/台系	○			○ ○				
鶴塚	29 集中10	0.38	12.3	10.8	10.0	10.4	5.0	96	96	中期	牛津/台系	○	○		○				
砂山	88 包含層	1.21	13.8	15.5	11.8	12.0	5.5	77	98	中期	牛津/台系	○			○				
砂山	360 包含層	1.52	11.5	19.5	8.5	13.4	6.0	59	63	中期	後期								煮沸なし
砂山	361 包含層	4.35	17.8	28.0	13.8	18.0	10.0	54	77	後期	東北系	○	○	○ ○ ○					容量のみ
砂山	462 包含層	2.31	18.6	18.6	14.4	16.0	7.0	86	90	中期	北陸系								
流ノ前	1 包含層	1.24	14.8	15.0	10.2	10.2	4.2	88	100	中期	後期	○	○		×				
流ノ前	88 3号建物	0.98	12.0	13.4	10.0	11.0	5.0	82	91	中期	後期								煮沸なし
葦の箱	24 SRI	12.39	29.9	35.5	23.0	28.0	8.0	73	88	後期	東北系	○	○		○ ○				
中曾根	7 包含層	2.29	14.4	22.0	12.0	14.2	5.6	62	85	後期	後期	○	○	○ ○ ○					
中曾根	11 包含層	4.40	15.1	25.3	14.4	20.2	7.7	80	71	後期	東北系	○	○	○ ○ ○					
中曾根	20 包含層	12.26	30.7	28.7	26.2	26.2	7.5	91	100	後期	東北系	○		△ △					
長松	28 包含層	1.22	12.4	18.3	10.4	12.2	6.0	67	85	中期	牛津/台系	○		○ ○					
長松	32 包含層	10.65	28.8	37.2	24.6	29.4	9.0	79	84	中期	北陸系	○	○		△ △				
松影A	44 包含層	0.76	11.0	13.2	10.2	10.4	6.5	79	87	後期	東北系	○	○	○ ○					
松影A	47 包含層	5.35	25.2	28.0	20.6	21.6	7.7	75	95	後期	東北系	○	○	?	○ ○				
道端Ⅲ	225 包含層	1.30	13.1	14.1	12.6	14.0	4.4	99	90	中期	牛津/台系								容量のみ
道端Ⅳ	189 SR2a	4.35	28.4	24.4	16.8	18.8	6.3	77	89	中期	牛津/台系	○		○ ○					
道端Ⅴ	181 SR2a	4.39	19.4	26.6	15.4	20.2	6.2	76	76	中期	北陸系	○		○ ○	△				
道端Ⅴ	182 SR2a	0.78								中期	北陸系	○	○	○ ○ ○					
山元	4 3T埋設	0.59								後期	東北系	○	○	○ ○					
山元	101 367 球窓	11.16	27.0	35.5	21.0	25.8	10.0	73	81	後期	東北系	○		○ ○ ○					
山元	228 29TⅢ層	3.87	19.0	24.0	15.8	17.4		73	91	後期	東北系	○	○	?	○ ○				
山元	237 30T球窓	9.82	30.0	30.0	23.6	24.8		83	95	後期	東北系	○		○ ○					
山元	238 31T球窓	5.24	22.0	30.0	17.0	19.2		84	89	後期	東北系	○		?	○ ○				
穴百地	920 P616	3.50	18.5	23.3	14.8	18.6	5.1	80	85	中期	牛津/台系	○	○	○ ○					
【参考】																			
古津八幡山	27	4.11	16.0	24.6	14.2	19.0		77	75	後期	東北系(折衷)	○	○	○ ○ ○		○			11~14次
古津八幡山	295	1.82	14.0	18.4	11.6	14.4	6.0	78	81	後期	東北系(折衷)	○	○	○ ○ ○					11~14次
古津八幡山	778	3.26	18.2	25.0	13.2	17.0	7.0	68	78	後期	東北系(折衷)	○		?	○ ○				
古津八幡山	779	3.54	17.4	24.2	14.8	17.8	6.0	74	83	後期	東北系(折衷)	○		○ ○					
古津八幡山	781	0.97	12.8	15.3	10.2	12.0	4.4	78	85	後期	東北系(折衷)	○		*					

第4表 時期・系統毎のスス・コゲ観察結果集計

時代・遺跡名	系統	容量区分	観察数	未使用	吹きこぼれ			コゲ						設置方法					炭化穀粒
					白色	黒色	不明	喫水線下			ヨゴレはなし	底部内面残存	直置き	浮き置き	浮き置き+オキ火	対象数			
								パッヂ上	パッヂ	環状+円形									
弥生時代中期後半	東北系	小型	6			1		1	4	1		1	5		5			5	
		中型	3					3	1	2		3		3				3	
		大型																	
	北陸系	小型	1								1	1	1	1?				1	
		中型	2				1	1	1		1	2		2				2	
		大型	1		1						1	1	1	1				1	
弥生時代後期	東北系	小型	6	2				1		2	1	4		4				4	
		中型	5					4	4	1		3	0	3				3	
		大型	4		1			2	1	2	1		3		3			3	
	北陸系	小型	1	3	1?				1	1		7	9	1	5	4?		9	
		中型	7	2	1			1	4		3	7	1	6	1			7	
		大型	1								1	1	1	1				1	
反対目下層 (古墳時代前期)	小型	19	2					1	8	2	4	2	16	6				16	
	中型	9	1	2				2	1	1	3	1	8	5				9	
	大型	1	1			1									—	—	—	1	
西川内南(古墳時代前期)	小型	13	1	5	1			2	9		2	2	12	2	4		3		7
	中型	7		3				1	4?		3			1		3		4	
	大型	3		1							1?	1	1	1				1	

認められ、胴下部に環状に付着するものが多い傾向にある。観察数が安定しないが、中期後半と後期では異なる可能性がある。後期北陸系も観察数が1点のみのため傾向は見出し難いが、明瞭なコゲは付着していない。検討の幅を古墳時代前期（第4表）にまで広げると、後期東北系の特異な様相は浮き彫りとなる。古墳時代前期の大型品も観察数は4点であるが、胴下部に環状に巡るものは確認できない。このことから、後期東北系の胴下部・環状コゲは当期の特徴である可能性がある<sup>註5)</sup>。

上記の傾向を、以前に検討した①北陸系弥生後期、②阿賀北の古墳時代前期（北陸北東部系）と比較すると、その差は更に顕著である。①②は、おむね小型・大型は顕著なコゲが認められず、中型でコゲ付く調理が顕著である〔滝沢2008〕。このことから、中型は炊飯が主体、小型は汁気を飛ばす炊飯も一部で認められるが、多くは最後まで水分を持つ調理で、大型も同様である。①②と比較すると中期後半では、小型での炊飯、中型では炊飯を主体に一部で、①②の大型的な使用方法が予想される。一方で後期は小・中型で①②とはほぼ同じ傾向が確認できるが、大型は高い頻度で胴下部にコゲが付く調理が行われている点で大きく異なる。胴下部のコゲについては、喫水線上のコゲの可能性もある。この場合、縄文的なコゲ付きとの評価も可能であろうか。

一方で、①②で比較的高い頻度で確認できた外面の白色吹きこぼれ痕は、確認できなかった。吹きこぼれ痕はいずれも、黒色吹きこぼれ痕であり、内容物が確認できる例もないことから、米調理とした場合に、その要件を満たすものがない点も気にかかる。外面のスス酸化と対応する内面のコゲは、「米蒸し」段階の側面加熱を示唆するが、白色吹きこぼれ痕・内容物の未確認から、①米調理する場合でも、やや異なった炊飯方法が採用されていた、ないしは炊飯・オカズ調理など容量別の調理が一定しない可能性を示唆する。小林正史氏の検討では、東北南部の中期では側面加熱・外面の吹きこぼれがないものが多い〔小林2009a〕。ただし、内面に穀粒が付着したものが多い点、稻作に関わる木製品・石器が出土していることから、稻作は確実であるが、北陸以西とは異なる炊飯が行われていた可能性が指摘されている。この状況は今回の検討結果と一致すると考えたい。

## 2) 土器の使用痕跡以外の要素

少なくとも中期後半における北陸系土器群の流入に伴って、稲作植物の積極的な利用が予想される。道端V遺跡では、粉痕が付着した土器やイネ科植物を刈り取った石器の存在が確認されている〔前川ほか2006〕。県内における石包丁の存在は比較的限定されるが、中期後半が一つの盛行期である〔沢田2007〕。低地での集落数が増加することはなお検討を要するが、集落の規模が拡大・増加は確実であり、当期が大きな画期と認識している。

一方で、後期でも2期に入り、阿賀野川以南の越後では高地に比較的規模の大きな集落が環濠を伴って出現するのに対し、阿賀北では未だ集落数は少ない。わずかに山元遺跡と堂の前遺跡が確認されたに過ぎない。建物プランが明確でない中曾根遺跡例を含めても、きわめて少ないので現状である。山元遺跡は立地や環濠を伴うなど阿賀野川以南の状況で理解したいが、低地に立地した堂の前遺跡や中曾根遺跡の評価が問題となろう。県内における後期北陸系土器分布圏の集落は、低地に展開した集落は上越市子安遺跡〔野村2009〕など極めて限られる。堂の前遺跡における鉄製品・ガラス小玉の保有から西方との交流は十分に予想できるが、中曾根遺跡と共に大規模に展開した農耕集落という姿は想像しがたい。一方で両遺跡において堅果類の大量出土も確認できない。縄文的な植物利用を積極的に裏付けることはできない一方で、米に大きく依存した食料事情も確認できない。

#### 4 まとめと今後の課題

完形品や遺構一括資料が乏しい阿賀北の弥生後期又は東北系土器分布圏。この要因は①集落の存続期間、②土器の製作・使用から廃棄までのシステムがそれ以南の地域と異なることも予想される。土器編年は型式学的な検討により同じ東北系土器分布圏との併行関係や地域性抽出が大きく進展したが〔石川2004、野田2003など〕、細分が進んだ隣接する北陸系北東部系土器との併行関係は、古津八幡山遺跡以外は一括資料がきわめて少ないとから、3・4期の動向が大きな課題となっている。今回の検討ではかなり幅広い時期を対象としたことに加え、観察数量の少ない。今後、ここでの観察対象を満たす量の土器（1遺跡20個体程度）が出土する遺跡が、数多く見つかるとも思っていない。上記の②が大きく起因していると考える。このため、資料の不備を認識しながらも観察を行い、以下の可能性を提示する。

- ① 中期後半では小型において高い頻度で内面のコゲを確認した。一方、中・大型品ではコゲ付く調理に使用されたものは少ない。
- ② 後期は中型品において汁気を飛ばす調理が多いが、小型では少ない点で中期後半と大きく異なる。一方で大型は、胴下部に層状のコゲが認められる。
- ③ 外面に認められる円形のスス酸化と内面のコゲが対応する側面加熱の痕跡は、中期後半では小型で多く、後期では中型で多い。
- ④ 吹きこぼれ痕は、いずれも黒色で、中期後半・後期共に1個体で、全体の10%に満たない。内容物が分かるものは確認できない。
- ⑤ 上記から予想される調理法と内容物は、中期後半では小型、後期では中型において炊飯で顕著な汁気を飛ばす調理、すなわち炊飯の可能性が考えられる。ただし、側面加熱が明瞭でないことから北陸北東部系の弥生時代後期～古墳時代前期の使用方法とは大きく異なり、東北南部の中期後半の状況に近い。
- ⑥ 土器の使用痕跡以外でも、稻作が推定できる遺物が中期後半には確実に存在するが、後期では未確認である。中期後半と後期の質的な差異の可能性があるが、いずれも米への依存はそれほど高くなかった可能性を想定した。

今回は後期東北系土器分布圏における米調理の痕跡を求めての検討であり、スス・コゲの観察に終始したため、観察は行ったが黒斑の付着状況を提示していない。検討結果の公表は今後の課題の一つである。前回の仮説では、縄文施文された土器と非・縄文施文土器では、同じ野焼き焼成でも、覆い型野焼き（非縄文施文）と開放型野焼き（縄文施文土器）という差異を指摘した。スス・コゲの付着状況と加え、列島規模でみた場合に日本海側で北と南を2分する大きな境界が、本県の阿賀北と認識している。数量が整わない場合は、1遺跡1個体でも観察資料を増加させ、傾向をみていくたい。

本稿を作成するにあたり、小林正史氏にはスス・コゲの観察視点を、澤田 敦氏には道端V遺跡での発掘調査成果の解釈について、笹澤正史氏には北陸系及び栗林式の土器について、野田豊文氏には宇津ノ台式及び後期東北系土器群について、それぞれご教示いただいた。村上市教育委員会には資料の実見に対して、多大なご配慮を賜った。また、以下の各氏（五十音順、敬称略）には、様々な点でご教示いただいた。文末ではありますが、記して感謝いたします。

石川博行、坂上有紀、塩原知人、丸山一昭、吉井雅勇

## 【註】

- 1) 石川日出志氏は、野田氏の砂山3群・4群〔野田2003〕をそれぞれ砂山1式、2式とし以下の変遷を指摘する。

砂山1式	無文地に細線を密にした重菱形文。頸部の台形刺突列。口縁内面の狭い文様帶。RL縄文
砂山2式	縄文地に粗い重菱形文。台形刺突列の消失。

上記の特徴で示された石川氏の変遷観で砂山遺跡出土資料を第5図中段に並べ、山元遺跡出土土器を加えた。頸部に重菱形文が施された左列を例にとると、3段階の変遷が想定可能で、口縁部は徐々に伸び、3段階では内湾傾向が顕著になる。重菱形文・頸部区画文は①無文地にやや粗い構図・沈線のみ(6) - ②無文地に細線を密・台形刺突列を用いた交互刺突文(10) - ③縄文地に太く浅い線・円形工具による交互刺突文(15)となる。
- 2) 旧稿では平田遺跡の時期を笹沢編年Ⅱ期(旧稿では中期Ⅲ期)とした(滝沢2010b)が、より古い様相を示す土器があることから笹沢編年Ⅰ期～Ⅱ期(旧稿の中期Ⅱ～Ⅲ期)と訂正したい。また、平田遺跡では阿賀北では確認されて文様の宇津ノ台式土器が確認されている〔石川2004〕(第5図17)。報告書でも指摘されているとおり斜格子目を籠描したものであり、更に日本海を北上した地域との関連が予想される〔坂上ほか2000〕。
- 3) 畿内第IV様式併行期における日本海側の動きは直接的な波及はないものの、凹線文系土器群と連動した結果であろうか。具体的な数値は提示できないが、畿内IV様式併行期と考える笹澤編年Ⅰ期に入り、底部充填法で製作された底部外面がドーナツ型のものが増加する印象をうける。ただし、北陸系土器群の北上は道端V遺跡の成果〔前川ほか2006〕からも笹澤編年Ⅰ期から確認できるが、南(西)から北へという一方的な動きではなく、北から南(西)の動きも重要である。このことを示すのがハケ調整された宇津ノ台式系甕であり、海岸平野部では柏崎平野までは確認できる(第5図18)。佐渡平田遺跡例は、佐渡産とされる管玉が東北地方にも色濃く流通していることと関連しているのかもしれない〔薦科2010〕。
- 4) 天王山式土器と北陸系の併行関係については、吉岡康暢氏は氏のIV2期とする。その根拠の一つに会津坂下町能登遺跡出土で北陸系「く」の字口縁甕の出土がある〔吉岡1991 p.167〕。この土器は中村五郎氏の論稿に図が掲載されており〔中村1996 p107〕、中村氏も他の要素を加えて天王山式が畿内IV様式に併行するという根拠に活用されている。能登遺跡出土の北陸系土器とされたものについて、実見していないことに加え、「共伴関係」についてもコメントが難しいが、長岡市松ノ脇遺跡〔丸山1999〕でも天王山式併行期の北陸系土器は不明である。笹澤編年Ⅱ～Ⅱ期、V様式併行期直前に天王山式・砂山式が成立していない根拠は、資料が増加した現状でも薄い。
- 5) 堂の前遺跡24の内面に付着したコゲは、C14年代測定が行われている。この時の副産物として得られたC13の値は-22.88%となっており、窒素同位体を行っていないが、C3植物(イネ・コムギ、クリ・トチ・ヤマイモ・ダイズ等)を加工した可能性が指摘できる。

## 【スス・コゲ観察遺跡(阿賀北) 刊行年代順】

- 田辺早苗 1991『長松遺跡発掘調査報告書』神林村教育委員会
- 加藤 学ほか 1999『新潟県埋蔵文化財調査報告書第106集 松影A遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田辺早苗・大賀 健 2002『六百地遺跡発掘調査報告書』神林村教育委員会
- 石丸和正ほか 2003『新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相－村上市砂山遺跡・滝ノ前遺跡を中心にして』『三面川流域の考古学』第2号 pp.45～117 奥三面を考える会
- 前川雅夫ほか 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書第162集 道端遺跡V』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 青木 学・鈴木俊成ほか 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書第168集 中曾根遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗ほか 2009『新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集 山元遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 佐藤友子ほか 2009『新潟県埋蔵文化財調査報告書第203集 庚塚遺跡・狐塚遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 野田豊文 2009『村上市滝ノ前遺跡の弥生時代後期後半の土器紹介－新潟県内の弥生時代後期後半の理解の一助として－』『三面川流域の考古学』第7号 pp.101～106 奥三面を考える会
- 石川博行ほか 2010『新潟県埋蔵文化財調査報告書第213集 堂の前遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 【引用参考文献】

- 石川日出志 1990「天王山式土器編年研究の問題点」「北越考古学」第3号 pp. 1～20 北越考古学会
- 石川日出志 2000「天王山式土器弥生中期説への反論」「新潟考古」第11号 pp. 5～32 新潟県考古学会
- 石川日出志 2003「関東・東北地方の土器」「考古資料大観1 弥生・古墳時代 土器1」 pp.357～368 小学館
- 石川日出志 2004「弥生後期天王山式土器成立期における地域間関係」「駿台史学」第120号 pp.47～66 駿台史学会
- 大手前大学史学研究所編 2007「土器研究の新視点～縄文から弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理～」  
考古学リーダー9 六一書房
- 尾崎高宏 2006「新潟県埋蔵文化財調査報告書第152集 下馬場遺跡・細田遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 岡山県教育委員会 1973「上東遺跡の調査」「岡山県埋蔵文化財調査報告書第2集 山陽新幹線建設に伴う調査II」
- 北野博司 2009「縄文土鍋の調理方法 - 脈下部バンド状コゲの形成過程 - 」「歴史遺産研究」No.5 pp. 1～24 東北芸術工科大学歴史遺産学科
- 小林正史 1992「中相川遺跡の甕の炭化材分析」「相川遺跡群」 pp.125～162 石川県埋蔵文化財センター
- 小林正史 1993「野本遺跡の甕の使用痕分析」「野本遺跡」 pp.85～122 石川県埋蔵文化財センター
- 小林正史 1997 a 「炭化物からみた弥生時代の甕の使い分け」「北陸古代土器研究」第7号 pp.109～129 北陸古代土器研究会
- 小林正史 1997 b 「弥生時代から古代の農民は米をどれだけ食べたか」「北陸学院短期大学紀要」第28号 pp.161～179
- 小林正史 1999「煮炊き用土器の作り分けと使い分け - 「道具としての土器」の分析 - 」「食の復元」 pp. 1～59 帝京大学山梨文化財研究所
- 小林正史 2000「弥生時代の煮炊き用土器の作り分けと使い分け;長野地域を中心として」「松原遺跡 弥生・縄論3 弥生中期・土器本文」 pp.185～225 長野県埋蔵文化財センター
- 小林正史 2001「煮炊き用土器のコゲとススからみた弥生時代の米の調理方法 - 中在家南遺跡を中心として - 」「北陸学院短期大学紀要」第33号 pp.153～178
- 小林正史 2003「使用痕跡からみた縄文・弥生土器の調理方法」「石川県考古学研究会誌」第46号 pp.67～96 石川県考古学会
- 小林正史 2009a「ススとコゲからみた東北地方の弥生深鍋の使い分け - 中在家南遺跡を中心として - 」「新潟考古」第20号 pp.47～78 新潟県考古学会
- 小林正史 2009b「東北地方の弥生深鍋のつくり分けと使い分け」「新潟県の考古学II」 pp.305～334 新潟県考古学会
- 小林正史・柳瀬昭彦 2002「コゲとススからみた弥生時代の米の調理方法」「日本考古学」第13号 pp.19～48 日本考古学協会
- 小林正史・谷 正和 2002「南アジアにおける米の加工、調理、食べ方の関連; バングラデシュ西部の調査から」「北陸学院短期大学紀要」第34号 pp.153～178
- 小林正史・阿部昭典 2008「縄文深鍋のスス・コゲからみた調理方法; 脈下部コゲの形成過程を中心に - 」「新潟考古」第19号 pp. 3～42 新潟県考古学会
- 坂上有紀ほか 2000「新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集 平田遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 笠澤正史 2006「第VI章考察 第4節(2)編年の位置付け」「吹上遺跡」 pp.136～144 上越市教育委員会
- 笠澤正史 2009「新潟県出土の栗林式土器」「新潟県の考古学」II pp.267～288 新潟県考古学会
- 沢田 敦 2007「新潟県内の弥生時代石製収穫具」「新潟考古学談話会」第33号 pp.29～42 新潟考古学談話会
- 品田高志ほか 1985「刈羽大平・小丸山遺跡」柏崎市教育委員会
- 須藤 隆 1970「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」「文化」第33卷第3号 pp.72～109
- 高橋 保ほか 1979「新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集 下谷地遺跡」新潟県教育委員会
- 滝沢規朗ほか 1992「西谷遺跡」新潟県刈羽村教育委員会
- 滝沢規朗 1997「縄文時代中期中葉～末葉の土器容量」「新潟考古学談話会会報」第17号 pp.25～36 新潟考古学談話会
- 滝沢規朗 2005「土器の分類と変遷 - いわゆる北陸系を中心に - 」「新潟県における高地性集落と古墳の出現」 pp. 4～18 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2007「弥生時代後期における北陸系・東北系・八幡山式の野焼方法について(予察)」「新潟考古学談話会」第32号 pp.15～30 新潟考古学談話会
- 滝沢規朗 2008「古墳時代前期における甕の使用痕跡について - 新潟県北部の旧紫雲寺潟周辺の反貫目遺跡・西川内南遺跡を中心に」「三面川流域の考古学」第6号 pp.39～62 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2009「第VI章2C土器の年代について」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集 山元遺跡」 pp.54～59 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 滝沢規朗 2010 a 「新潟県弥生後期における北陸北東部系の高杯・器台について」『三面川流域の考古学』第8号 pp.41～88 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2010 b 「土器からみた佐渡玉作遺跡の年代観」「今なぜ佐渡の玉作りか－離島「佐渡」の玉作文化を探る－」 pp.94～118 日本玉文化事務局
- 田嶋明人 2007 「法仏式と月影式」『石川県埋蔵文化財情報』第18号 pp.55～80 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 田中 純 1990 「北陸地方の天王山式土器」「天王山式期をめぐって」の検討会記録集』 pp.263～280 弥生時代研究会
- 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」「考古学研究』20～4 pp.20'47 考古学研究会
- 寺沢 薫・寺沢智子 1981 「弥生時代の植物質食糧の基礎的研究」「考古学論巧』5 pp. 1～120 檜原考古学研究所
- 徳澤啓一・河合 忍・石田為成 2005 「弥生土鍋の炊飯過程とスス・コゲの産状」「土器研究の新視点～縄文から弥生時代を中心とした土器生産・焼成と食・調理』 pp.43～75 大手前大学史学研究所編
- 中村五郎 1995 「弥生土器・続縄紋土器・古式土師器」「福島考古』第36号 pp.95～107 福島県考古学会
- 野田豊文 2003 「新潟県岩船郡域における弥生時代中期～後期にかけての様相－村上市砂山遺跡・流ノ前遺跡を中心として－ 第V章まとめ 2 土器について A 東北系について」『三面川流域の考古学』第2号 pp.102～110 奥三面を考える会
- 野田豊文 2005 「三面川流域における弥生時代のおわり－天王山式土器から見た新潟県内弥生後期の様相－」『三面川流域の考古学』第4号 pp.51～64 奥三面を考える会
- 野田豊文 2010 「新潟県の弥生時代後期後半の東北系土器群考－村上市流ノ前遺跡出土土器の検討から－」『新潟考古』第21号 pp.125～144 新潟県考古学会
- 野村忠司ほか 2009 『子安遺跡』 上越市教育委員会
- 丸山一昭 1999 『松ノ輪遺跡』 和島村教育委員会
- 村上市教育委員会 2010 『山元遺跡現地説明会』資料
- 柳瀬昭彦 1988 「米の調理方法と食べ方」「弥生文化の研究』2 pp.84～95 雄山閣
- 渡邊朋和 2001 「第VI章まとめ 1 弥生土器 B 八幡山式土器の設定」「八幡山遺跡発掘調査報告書』 pp.112～118 新津市教育委員会
- 渡邊朋和・立木宏明ほか 2001 『八幡山遺跡発掘調査報告書』 新津市教育委員会
- 渡邊朋和・立木宏明ほか 2004 『八幡山遺跡発掘調査報告書－第11・12・13・14次調査－』 新津市教育委員会
- 薦科哲夫 2010 「佐渡玉作遺跡出土石製玉類の石材産地同定分析」「今なぜ佐渡の玉作りか－離島「佐渡」の玉作文化を探る－』 pp.44～93 日本玉文化事務局
- 吉田邦夫 2006 「煮炊きして出来た炭化物の同位体分析」「新潟県立歴史博物館研究紀要』第7号 pp.51～58 新潟県立歴史博物館
- 吉岡康暢 1991 「4 北陸弥生土器の編年と画期」「日本海域の土器・陶磁』[古代編] pp.79'168 六興出版

# 新潟市正尺C遺跡出土の縄文施文土器

## －天王山系土器の下限を探る－

加 藤 学

### はじめに

正尺C遺跡は、新潟市北区（旧豊栄市）に所在する阿賀北地域（阿賀野川以北の新潟県北部地域）を代表する古墳時代前期の集落である。平成11・12（1999・2000）年度に発掘調査が行われ、このうち平成12年度は筆者が調査担当者となった。調査では、外周約22mの周溝を有する建物を検出したことで注目され、これとともに古墳時代前期の土器に混在して出土した縄文施文土器にも注意が払われた。筆者は、調査直後に行われた新潟県考古学会第13回大会において、縄文施文土器を次のように報告した。

「編年的には漆町編年〔田嶋1986〕の5～7群に属するものが認められるが、そのほとんどは6・7群に位置付けられる。土器の系統は、北陸系を主体とするが、東海系の壺・高杯、東北系の縄文が施された甕も認められた。東北系と考えられる土器については、弥生時代後期の天王山系土器との共通性が認められるが、出土状況から編年差を判断することはできない。むしろ、出土土器群の編年的なまとまりを鑑みれば、あえて分離すべき根拠は乏しいと考えられる。」〔加藤2001〕

この報告段階では、出土状況の観察から古墳時代前期前半の土器に縄文施文土器が伴う可能性が高いと考えた。このように報告した念頭には、福島県会津坂下町稻荷塚遺跡における共伴事例があった。そして、稻荷塚遺跡の報告書における〔中村1995b〕の記述も踏まえ、古墳時代前期のものと指摘した。ただし、類例が少なく、このように報告することに不安要素もあった。実際、正尺C遺跡における古墳時代前期の土器に縄文施文土器が伴うとは考えられないとの助言を幾人かの研究者からいただいた。そして、広義の天王山系土器〔石川2000〕が混在したのであろうと指摘を受けた。このような所見も踏まえ、調査の6年後に刊行された報告書では、縄文施文土器の編年的位置付けについて、次の3点の理解が可能とした〔土橋2006〕。

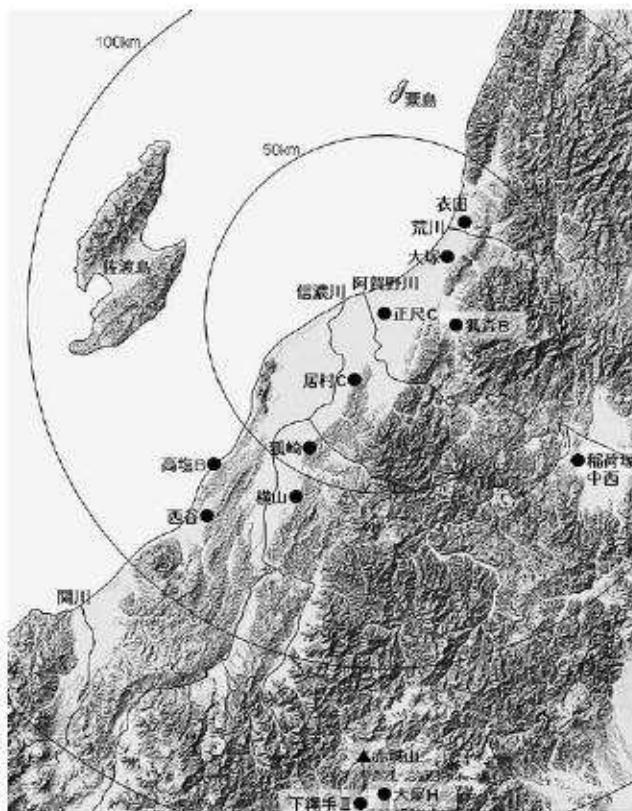
- ① 形態的に見ると2～5期に位置付けられる。この場合、その他の土器とは共伴しない。
- ② 出土状況から縄文施文土器とその他の土器を分離することは難しい。会津に6～7期の共伴事例があるので、正尺C遺跡においても共伴の可能性がある。その場合、502・504（第11図）などは天王山系土器の器形や装飾が退化した最終形態ともいべきものといえる。
- ③ 共伴とした場合、形態的に2～5期までの幅がある全ての縄文施文土器が伴うのか、その一部が伴うのかは問題点として残る。

極めて慎重な表現に留意していることが分かる。現段階でこれ以上のことを言うことが困難なことは事実である。一方、出土状況を最も間近で見てきた発掘調査担当者としての見解を明らかにしておく必要性も感じた。報告書から、一步踏み出せるか否かということを念頭に置き、縄文施文土器の位置付けを行いたい。

## 1. 正尺 C 遺跡の概要

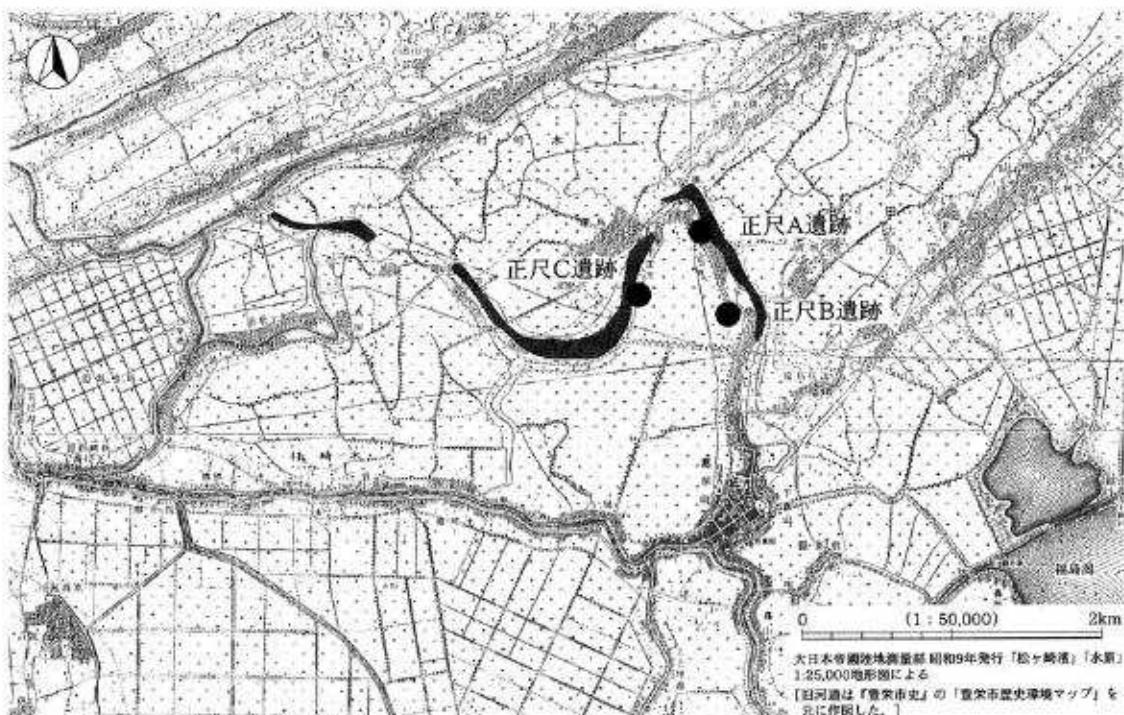
正尺 C 遺跡は、新潟市北区葛塚字正尺に所在する（第 1・2 図）。旧新井郷川によって形成された自然堤防上に立地し（第 2 図）、遺構検出面の標高は約 -0.5 m である。阿賀北地域を代表する古墳時代前期の集落で、周溝を有する平地建物 1 棟、竪穴建物 3 棟、掘立柱建物 8 棟、方形周溝状遺構 1 基等から構成される。現在でこそ類例が増加したものの、調査当時、阿賀北地域で古墳時代前期の遺跡はほとんど発見されておらず、特に外周が 22m を超える周溝を有する建物（第 3 図）が注目を集めた。

阿賀北の地域的特徴としては、東北系の遺物が断続的に認められる点を挙げることができる。日本海沿いに形成された古砂丘上には多くの遺跡が密集し、弥生時代においては天王山系土器、古墳時代には続縄文土器、古代においては東北北部型土師器が出土する等、北方の要素を多く見出すことができる。本稿で取り上げる縄文施文土器は、同様の系譜に位置付けられる東北系の

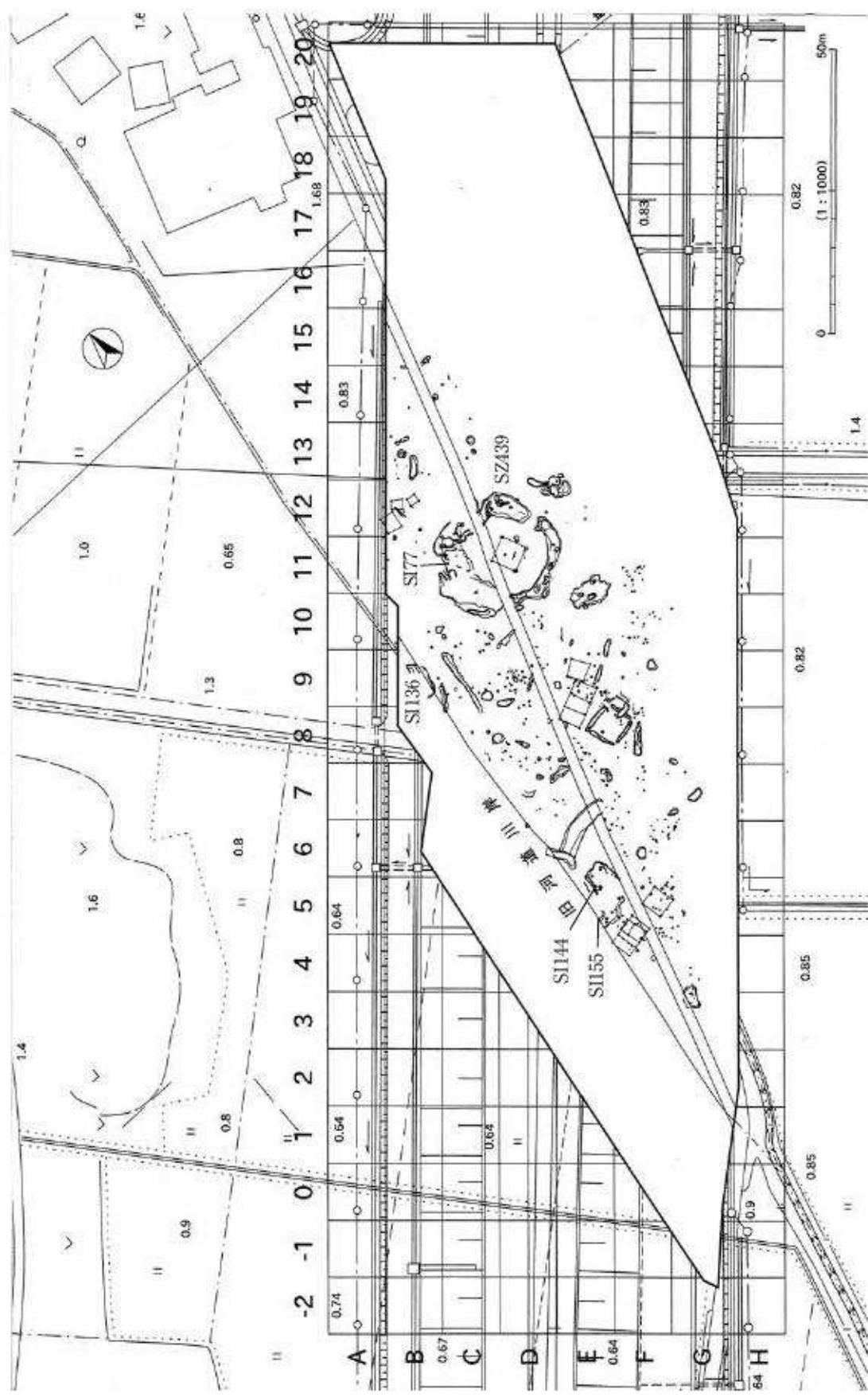


第 1 図 正尺 C 遺跡と関連遺跡の位置

(国土地理院 2002 「数値地図 200000 地図画像 日本 II を合成の上、作製」)



第 2 図 正尺 C 遺跡と旧河道の位置



第3図 正尺C遺跡遺構全体図

遺物と考えられる。

正尺C 遺跡から出土した多数の土器は、新潟シンポジウム編年6期を主体に一部7期まで下る。したがって、極めて短期間に築かれ、消滅した集落と言える。一方、多くの時期の遺跡が重複しないことは、資料的価値の高さの裏返しでもあり、この点においても遺跡の重要性を指摘できる。すでに報告書が刊行されているので、詳細は〔土橋 2006〕を参照されたい。なお、本稿で示す遺物番号は、すべて報告番号と一致する。

## 2. 正尺C 遺跡出土土器の編年観と特徴

### (1) 土器の編年的位置付け

弥生時代後期～古墳時代前期の土器は、2度にわたって新潟県で行われたシンポジウム（日本考古学協会新潟大会実行委員会『東日本における古墳出現過程の再検討』〔川村 1993〕、新潟県考古学会『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』〔滝沢 2005a〕）で提示された編年（以下、「新潟シンボ編年」とする。）を基軸に考えたい。時期及び器種の分類名は、定点観測の蓄積が必要と考えることから〔滝沢 2005a〕を採用した。各地域における編年との対応関係は、第1表のとおりである。

報告書においては、周溝を有する平地建物 SZ439、堅穴建物 SI155・SI33・SI144・SI77（第3図）を遺構の変遷を辿る上での指標とした。各遺構から出土した主要な遺物は、第4～8図のとおりである。報告書の記述を基本に、筆者の所見を補足し再編した。

**SZ439（第4図）** SZ439は主にSD209・311・214から構成される。甕は「く」の字口縁で面取りが顯

時 代	実年代 滝沢 2010c 2005a	滝沢 2005a	川村 2000	漆町編年 田嶋 1986-2007	北陸(南西部) 型式・様式	東北系日本海側 石川 2004	東北系福島 石川 2004	東海編年 赤堀 1990	県内 編年		
弥 生 時 代	AD00(°C)	1期	漆町 1 群	専光寺～戸木 B	山草背式	川原町口式	山中式後期	IV 様式	V 様式		
				V-1							
				V-2		妙山1式	天王山 1a 期(和泉)				
				V-3							
	AD100(°C)	2期	漆町 2 群	法仏	妙山 2 式	天王山 2 期(天王山)	延岡 1 式	VI 様式	店内 1		
				2-1							
				2-2							
	AD169(年輪)	3期	漆町 3 群	月影	高/前 2-3 群	屋敷段階	延岡 1 式	店内 1	店内 1		
				3-1							
古 墳 時 代	AD258(年輪)	4期	漆町 4 群	白江	古府ケルビ	延岡 1 式	店内 II	店内 III	店内 IV		
		5期	1段階	漆町 5 群							
		6期	2段階	漆町 6 群							
		7期	3段階	漆町 7 群							
		8期	4段階	漆町 8 群							
		9期	5段階	漆町 9 群							
		10期	6段階	漆町 10 群							

第1表 弥生時代～古墳時代における地域間の編年の対応関係と実年代

〔春日ほか 2008、滝沢 2005a・2009-2010c〕をもとに作成〕

※AD169(年輪)は大友西 SE18、AD258(年輪)は二口みみあれた SX208 の資料による。〇年代は、おおむねの目安である。  
※弥生時代・古墳時代の境界は、定点を何に置くかによって見解は様々であることから、漸移的なラインを設けた。

著な 91、口縁端部を丸く收める 92 のほか、有段口縁の 194 がある。壺は畿内系 153・154・215、東海系 152、小型壺は北陸的な 111、東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態 109・217 がある。器台の形態構成が多様であることが特徴的で、小型器台のほか、装飾器台 128・165・237、結合器台、鍔付結合器台 129・130・234 がある。このような内容を各期の基準資料と比較する。二重口縁の畿内系壺 153・154 は 7 期の基準資料とされる新潟市緒立遺跡 2 号住居〔金子 1983〕のものと比較して口縁部の稜線が明瞭なので、より古相を呈する可能性がある。同じく 5 期の緒立遺跡 3 号住居〔金子 1983〕に見られるような有段口縁擬凹線の甕を組成しないので、これより新相を呈すると考えられる。よって、SZ439 は 6 期に位置付けるのが妥当であろう。

**SI155** (第 5 図) 甕は比較的しっかりした有段口縁の 4、「く」字口縁の 1~3 がある。ほかに大型の有段口縁大型壺 25、有段口縁の鉢 15 がある。いずれの器種も有段部が明瞭で、6 期の中に位置付けておきたい。

**SI36** (第 6 図) 甕は口縁に面取りがある「く」字口縁を主体に、近江系の可能性がある 53・64、口縁が強く外側に引き出される 62 等、多様である。壺は畿内系の二重口縁壺 65 がある。SI36 最大の特徴は小型器台・装飾器台・結合器台等、多様な器台を組成することである。装飾器台 83 は受部端部が突出する。類似資料は 5 期に位置付けられている三条市狐塚遺跡〔金子 1981〕にある。鍔付結合器台 85 は受部に稜をもつ、稀な形態である。〔土橋 2006〕では、SI36 を 6 期の中でも古い段階に位置付けられているが、微妙な判断も伴っており、本稿では 6 期の範囲に含まれるものとしておきたい。

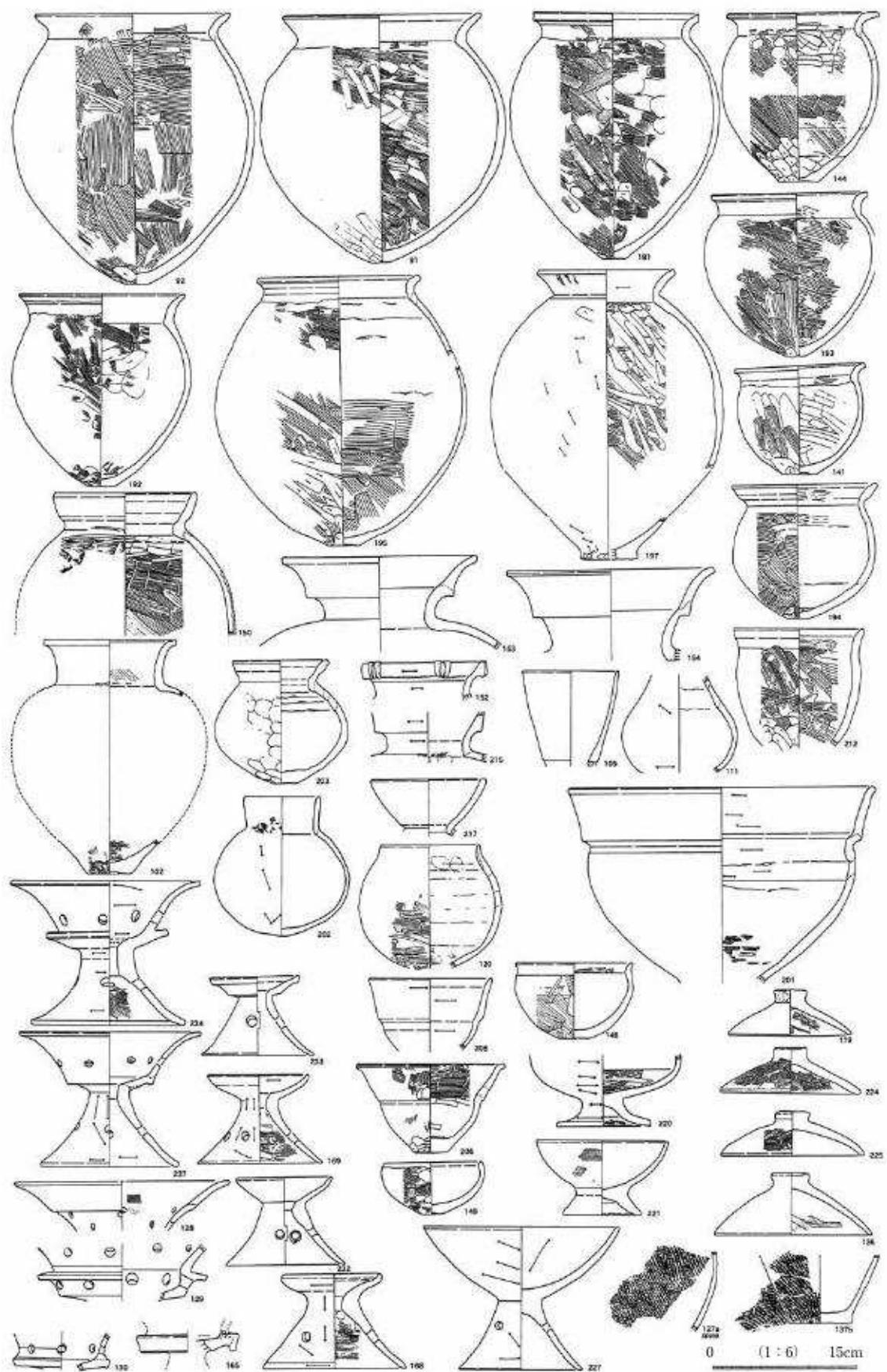
**SI144** (第 7 図) 「く」字口縁の甕は面取りされるものが多い。有段口縁壺 32・33 の有段部は明瞭に作り出されている。脚部の裾が大きく開く高杯 48 は、6~7 期に位置付けられている正尺 A 遺跡 SI1 [尾崎 2001] に類例がみられる。

**SI77** (第 8 図) 甕は有段口縁甕 249、体部最大径が下方にある 250 がある。口縁の面取りはしっかりしたものが多い。壺は畿内系の二重口縁壺 259、小型壺は無頸壺 258 や東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態 256・257・261・262 がある。蓋 255 の摘みは大きく、新しい要素をもつ。高杯は東海系 272 がある。276 は外面がケズリで仕上げられた高杯脚部である。報告書では東北地方で 9~10 期に認められるものに共通性を見出したが、正尺 C 遺跡における土器群の時期的なまとまりとの相違が著しい。中実に近い低い脚部は、越後でも 5 期以降に存在する〔滝沢 2005a〕ことから、東北地方との関係については慎重に評価しておきたい。器台は小型器台のほか装飾器台 275 がある。SI77 は総体的に新しい要素をもつ土器が多く、本稿では 6~7 期の時期幅をもって位置付けておきたい。

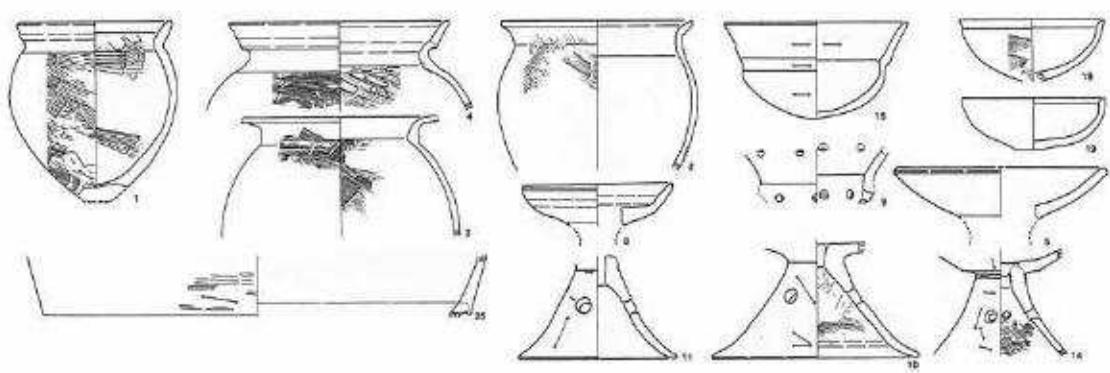
## (2) 外来系の土器

地域間の編年関係を対比する上で重要な指標となるのが外来系土器 (第 9 図) の存在である。東海系二重口縁壺、東海系ひさご壺、畿内系二重口縁壺、近江系壺、北陸系小型器台、北陸系装飾器台、そして東北系の绳文施文土器である。〔滝沢 2005a〕を基本に記述し、これを補足する記述があるものは〔土橋 2006〕をもとに形態的特徴を記述したい。

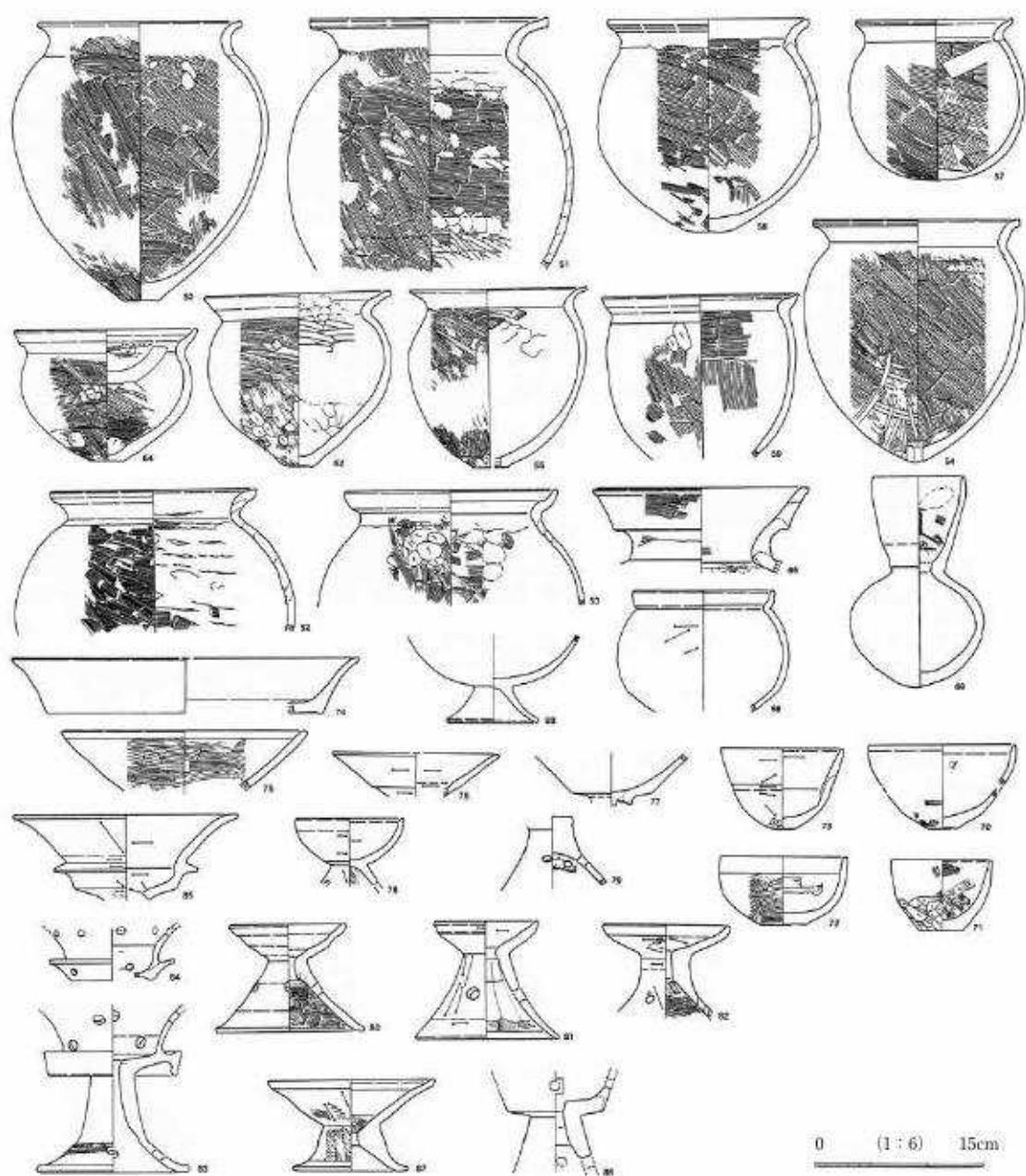
**東海系二重口縁壺** ([滝沢 2005a] O 1 類) 5 期頃から認められ、7~8 期には主体となる。頸部が外反して、短い口縁部に至るものを 1 類とする。出土例は多く、文様の有無で細分可能とされる。口縁部には、棒状浮文 2~4 本 (436~438) やボタン状浮文 (413) が貼り付けられる事例がある。肩部 439 には、櫛歯状工具によって平行沈線文で区画し、その間を同じ工具の先端部で押圧して山形文が施される。東海系バレス壺を模倣したものであろう。



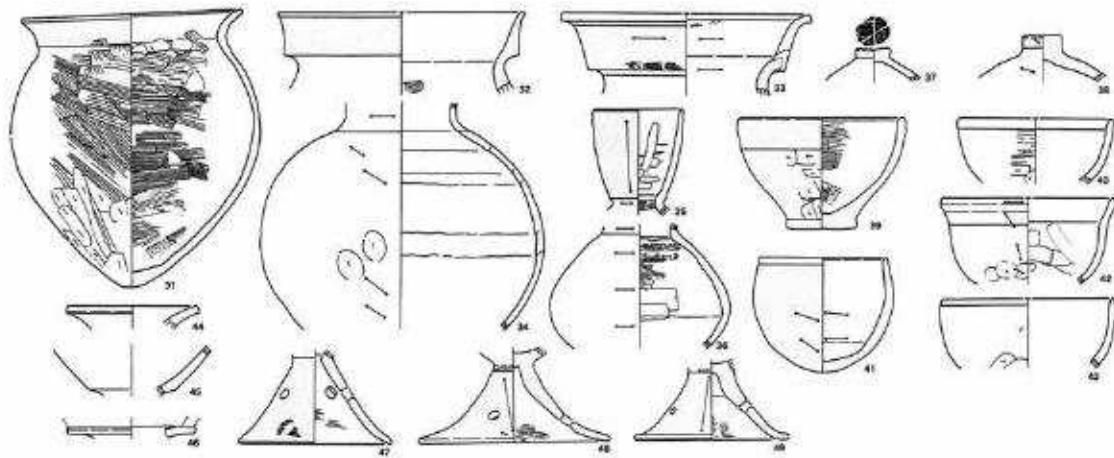
第4図 正尺C遺跡SZ439出土土器(6期)



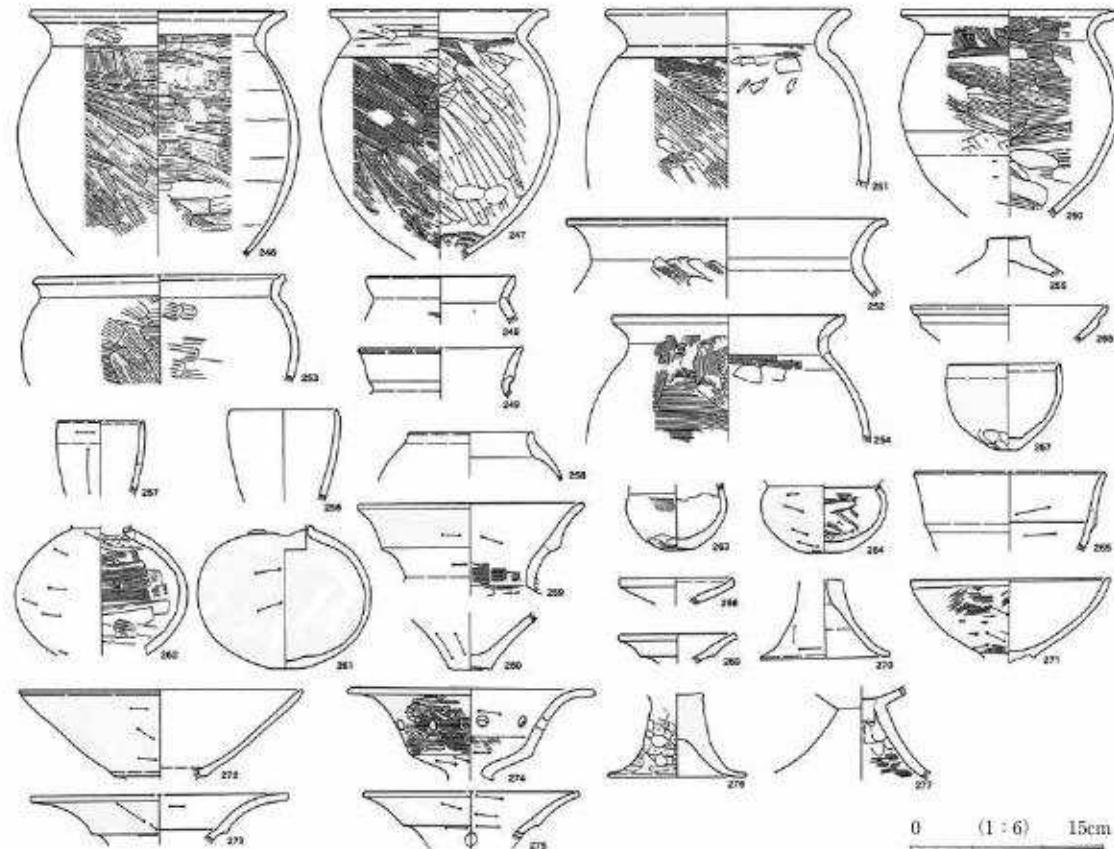
第5図 正尺C遺跡SI155出土土器(6期)



第6図 正尺C遺跡SI36出土土器(6期)



第7図 正尺C遺跡SI44出土土器(6~7期)

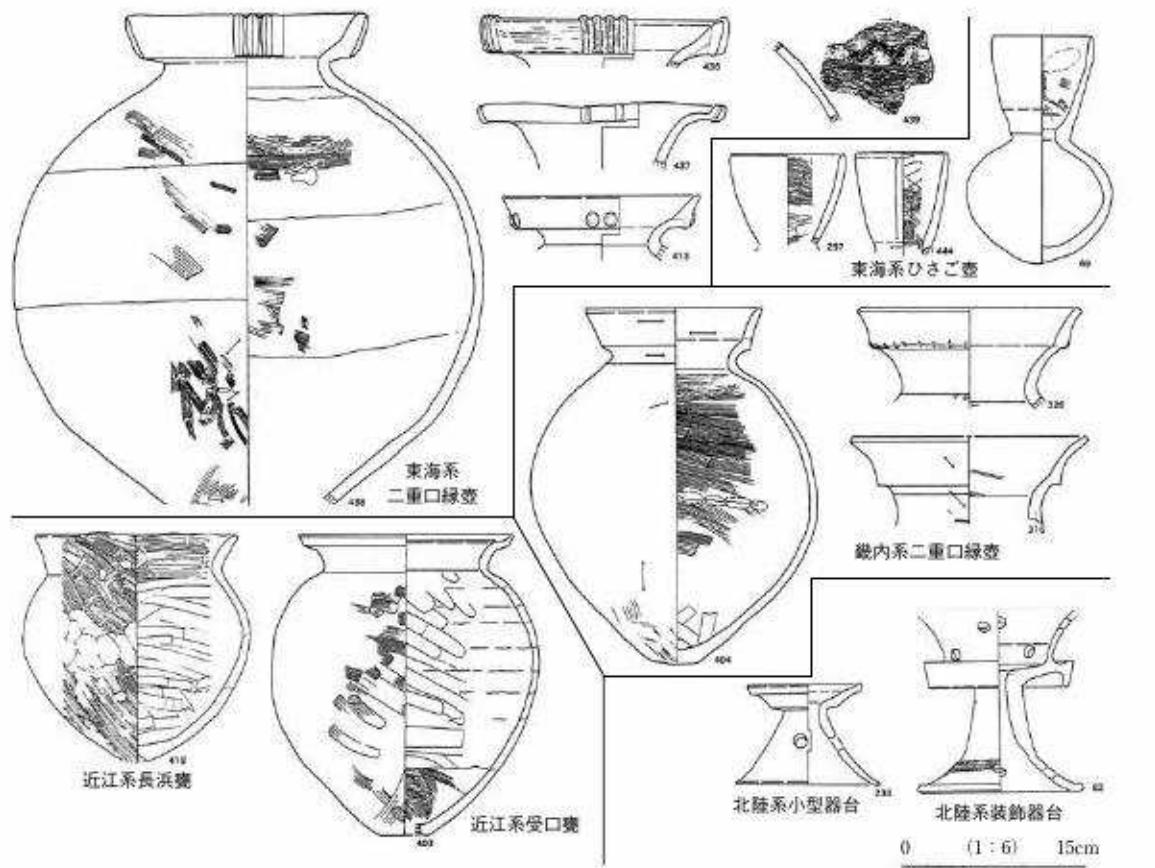


第8図 正尺C遺跡SI77出土土器(6~7期)

東海系ひさご壺（[滝沢 2005a] H類） 東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態 [川村 1993]。内湾ないしは直線的に立ち上がる細長い口頸部と、球形ないしは下膨れの胴部とからなる。

巣内系苔（「遼海 2005a」 M・N 類）M 類は頸部が直立する二重口緩壺、5 期以降、一定量認められる。

頸部が直立するもののみを一括し、文様の有無により I 類：口縁端部や口縁有段部に、刺突や沈線等が巡らされたもの、II 類：無文のものに細分されている。N 類は二重に外反する二重口縁壺。2 期には存在し、以降 10 期頃まで続く。内面段部の形態により、I 類：内面の段部が明瞭なもの、II 類：内面の段部が不明瞭なものに細分されている。316・326 が M 類で、このうち口頸部界に刺突が施さ



第9図 正尺C遺跡出土の外来系土器

れる 326 が I 類に分類されよう。404 が N 類である。

**近江系甕** ([滝沢 2005a] E・F 類) 1 ~ 6・7 期頃まで認められるが、2 期以降の出土例は少ないとされる。

E 類: 近江系受口状甕と、F 類: 近江系長浜甕に細分されている。F 類は、口縁端部の作りが弱く波打ち、口縁端部までハケメが施され、口縁部には指頭圧痕が残る。403 は E 類、418 は F 類に分類される。

**北陸系小型器台** ([土橋 2006] A 類) 北陸系小型器台。口縁部の立ち上がりが急な A1 類と、大きく開く有段口縁の A2 類に細分できる。233 は A2 類に相当する。

**北陸系装飾器台** ([滝沢 2005a] D 類) 北陸南西部が分布の中心とされる装飾器台、またはその類似土器。受部・口縁部・脚部の形態で細分されているが、83 は受部の上下端が大きく突出する D I 類に分類される。

**東北系壺・甕** 繩文施文の壺・甕は、弥生時代後期からの系譜にある天王山系土器の最終段階の資料と考えられる(第 11 図)。詳細は、後述する。

### (3) 繩文施文土器の特徴

正尺 C 遺跡から出土した繩文施文土器は、第 11 図ではほぼすべてである。個別の観察所見は、第 2 表に観察表を転載したが、筆者が観察の上、改変した。なお、実測図についても見直し、一部については天地や傾きを修正した。修正した個体については、その旨を第 2 表に記載した。

胎土は、報告書で「大粒の石英・長石、ものによっては海面骨針を含むが、金雲母を含まない点で在地土器とは区別される。色調も在地の土器より黒味を帯び、一線を画する。」とされている。筆者も同様の所見を得ており、在地の土師器と比べると異質であることは明らかである。

文様帶については、鈴木正博による基本構造概念図〔鈴木1976〕(第10図)を基準に考えたい。しかし、正尺C遺跡においては、文様帶を捉え得る個体は少ない。503は唯一、沈線が認められた個体である。報告書では「体部に横走する沈線が引かれ、その下に弧線が連続する文様構成が推定される。503bは拓本右上にも沈線らしきものがあるので、ほかの文様構成をとっていた可能性もある。」とされる。そのように考えた場合、第11図503a～cに示したような文様帶構成になると考えられ、503bcは報告書と天地・傾きを修正する必要があった。個体で見れば、報告書の図化が正しいようにも見えるが、Ⅲ文様帶上部の構成を考えると修正することが適当と考えた。ただし、同一個体とされる底部と傾きが異なり、整合性については課題を残す。

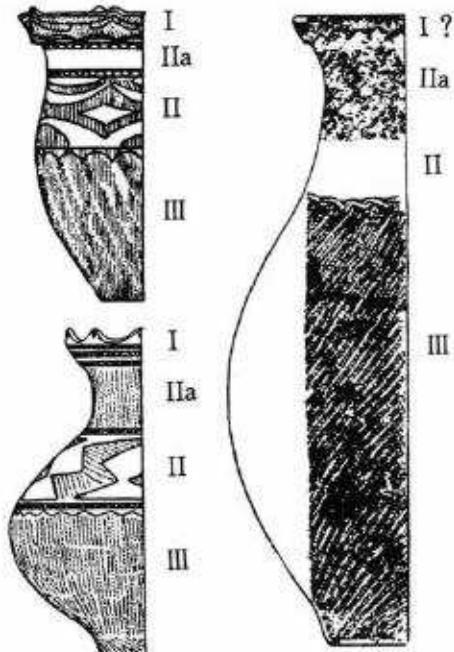
連弧文が細い工具で施文されていることも注目される。山形県内における弥生時代後期～古墳時代前期(4期併行段階)の天王山式に後続する土器群の特徴は、「細い沈線で連弧文や羽状の撲糸文等施文」〔植松2005〕にあるという。細い沈線による連弧文の存在は、正尺C遺跡の特徴と共に通するが、編年的にはより古い段階に位置付けられている。相互の年代関係に齟齬があるが、より後出する段階の天王山系土器の特徴を示すと考えられる。

504は、頸部に相当するⅡa文様帶が無文となる。同様の状況は334にも認められる。507aは有段の口縁の端部に刻みを施した個体、505bは口縁端部に繩文施文が施された個体である。

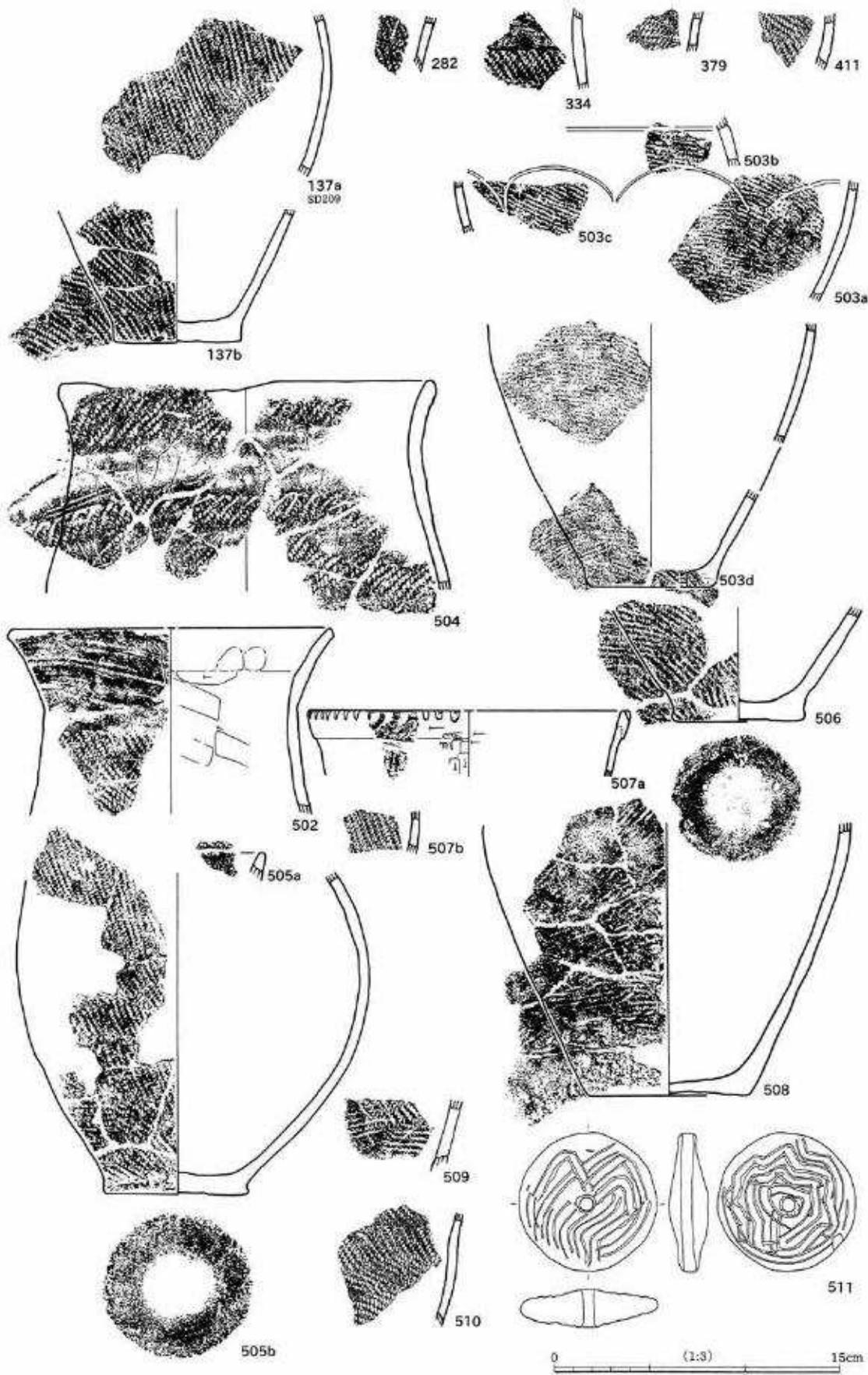
地文である繩文は、天王山系土器と同様にRLが主体を占め、若干のLRが認められる。また、504の胴部最上段のみに附加条LRが認められるが、装飾的な効果も考慮されている可能性があり、Ⅲ文様帶上部に対比できるかもしれない。また、条間がやや離れた個体(137b)や節が詰まった個体(503・506・508)が特徴的に認められ、単節繩文のみではない可能性もある。附加条や撲糸文も含まれるのかもしれない。

器形は、多くが壺と見られる。しかし、外面にスヌの付着が著しく、甕として使用されたものが大半を占めると考えられる。有段又はそれに類する口縁部を有し、頸部がややすばまり、胴部最大径が上位に位置する。このような特徴は、天王山系土器の器形に共通する。しかし、全体的に部位間の境界が不明瞭になっており、変化に乏しい器形をなす。このことは、文様帶が崩壊していく過程と関連して理解することができよう。すなわち、文様帶の退化に伴い、各部界を明瞭に形成する必要がなくなったのであろう。

504は、Ⅰ文様帶の幅が一定でなく、口縁部が緩やかに波打つことを考慮すると、波状口縁である可能性も考えられる。天王山式に顕著な口縁部の突起が形骸化した姿と見ることができるかもしれない。また、502は頸部～胴部が垂直に近い傾きで図化されていたが、検討したところ胴部が若干外方に張り出すことが分かった。そこで実測図を修正したところ、壺を意識した器形となつた。胴部～底部は、505bのように最大径が下位に位置し、球胴に近い形態をなすものもある。底部は、やや上げ底状になっており、底面の拓本は円環状を呈する。



第10図 鈴木正博による文様帶  
基本構造概念図



第11図 正尺C遺跡出土の縄文施文土器

報告No.	遺構名	グリッド	層位	時代	器種	分類	残存部	残存率	法量(m)	口径	底径	高さ	口径	底径	高さ	口径	底径	高さ	色調		付着物		焼文		備考
																			内面		外面		内面		
																			内コゲ	外スス	内コゲ	外スス	内コゲ	外スス	
137a	SD209	10E25	寄生～古墳前期	甕	縄文	体部	石英・長石	6.6		石英・長石	6.6		6.6	石英・長石	6.6	石英・長石	6.6		内コゲ、外スス	ナデ	縄文RL、底部、無調査	天王山系(図上復元)領土修正	天王山系(図上復元)	天王山系(図上復元)	天王山系(図上復元)
137b	SD311-P33-719	11D16-17	4-M	寄生～古墳前期	甕	縄文	体部～底部	1/3		石英・長石	6.6		6.6	石英・長石	6.6	石英・長石	6.6		内コゲ、外スス	ナデ	縄文RL、底部、無調査	天王山系(図上復元)	天王山系(図上復元)	天王山系(図上復元)	天王山系(図上復元)
282	SD114					縄文	体部							長石		長石			明褐色	ナデ	縄文RL	天王山系	天王山系	天王山系	天王山系
334	SD004	8F13	2	寄生～古墳前期	甕	縄文	体部							長石		長石			褐色	ナデ	縄文RL	天王山系	天王山系	天王山系	天王山系
379	Pit19	10D				縄文	体部							石英・長石		石英・長石			褐色	ナデ	縄文RL	天王山系	天王山系	天王山系	天王山系
411	SK23-P105	9D7				縄文	体部							石英・長石		石英・長石			黒褐色	ナデ	縄文RL	天王山系	天王山系	天王山系	天王山系
502		8D10				縄文	体部							(8) 石英・長石		(8) 石英・長石			にぶい黄褐色	ナデ	口輪部、ヘラナデ、体部、縄文RL	口輪部、ヘラナデ、体部、縄文RL	口輪部、ヘラナデ、体部、縄文RL	口輪部、ヘラナデ、体部、縄文RL	口輪部、ヘラナデ、体部、縄文RL
503a～e		11D12-13	II下	寄生～古墳前期	甕	縄文	体部							石英・長石		石英・長石			にぶい黄褐色	ナデ	ハクメー縄文RL+洗練	天王山系	天王山系	天王山系	天王山系
503d		10D13、11D12	II下	寄生～古墳前期	甕	縄文	体部～底部							6.4		石英・長石			にぶい黄褐色	ナデ	縄文RL、底部ナデ	天王山系(図上復元)	天王山系(図上復元)	天王山系(図上復元)	天王山系(図上復元)
504		SD9-10D11	II下～13・17	寄生～古墳前期	甕	縄文	体部～底部	2/3	19.5					29 手4-1ト		石英・長石			灰白色	ナデ	口輪部、口縁部(9日コロ)、頭部ナデ、脚部直下・附加素LR、体部LR	天王山系	天王山系	天王山系	天王山系
505a-b		8G24		寄生～古墳前期	甕	縄文	体部～底部							7.4		(1) 石英・長石			にぶい黄褐色	ナデ	口縁部、口縁部ナデ、底部ナデ	天王山系	天王山系	天王山系	天王山系
506		9D10・12、16		寄生～古墳前期	甕	縄文	体部～底部	1/2						6.9		石英・長石			にぶい黄褐色	ナデ	口縁部、口縁部ナデ、底部ナデ	天王山系	天王山系	天王山系	天王山系
507a		9E13	II上	寄生～古墳前期	甕	縄文	体部							(1) 石英・長石		石英・長石			黒褐色	ケズリ	口縁部等工具の痕跡	天王山系	天王山系	天王山系	天王山系
507b		9E13	II上	寄生～古墳前期	甕	縄文	体部									石英・長石			黒褐色	ナデ	縄文RL	天王山系	天王山系	天王山系	天王山系
508		16E1・5～8	II	寄生～古墳前期	甕	縄文	体部							8.5		石英・長石			にぶい黄褐色	ナデ	縄文LR部位、底部、無調査	天王山系	天王山系	天王山系	天王山系
509		9D11				縄文	体部									石英・長石			にぶい黄褐色	ナデ	縄文RL	天王山系	天王山系	天王山系	天王山系
510		9E2	II下	寄生～古墳前期	甕	縄文	体部									石英・長石			灰褐色	ナデ	縄文RL	天王山系	天王山系	天王山系	天王山系

報告No.	遺構名	グリッド	層位	器種	分類	最大径	最小径	厚さ	重量(g)	法量(m)	口径	底径	高さ	付着物		調査(焼文)			
														表面	裏面	表面	裏面		
511		10D6	新鋸車			12.3	7.5	20.0	88.5	0.9	石英・長石	明褐色	1.4						

第2表 正尺C遺跡出土の縄文施土器一覧表([土橋2006]に加筆・修正)

以上のように、器形に共通性が見出せること、頸部であるⅡa文様帯が無文帯であること、Ⅲ文様帶上部に連弧文や附加条による装飾的な施文が認められることから、正尺C遺跡出土の縄文施文土器は、広義の「天王山系土器」の範疇に含まれると考えられる。しかし、口縁突起の不在または退化、交瓦刺突文の不在、口縁部における連弧文の不在、磨消縄文の不在、連弧文を含む文様帯の退化を考慮すれば、狭義の「天王山式」[中村 1976]とは明らかに区別すべき土器群といえる。これらの要素を勘案すれば、「天王山系」の最終末段階を示す可能性が高い。

これらの土器群を、新潟市八幡山遺跡出土土器をもとにした編年〔渡邊 2001〕と対比すれば、2期新段階～4期に位置付けられた土器に類似する。そして、報告書では6期以降、縄文施文土器は越後平野には残らないとされた。土器同士を比較すれば、八幡山遺跡の2期新段階～4期と併行すると考えることもできる。しかし、正尺C遺跡ではこれより新しい6期の土器群に同様の土器が伴う。このことを如何に評価するかが、議論の大きな争点となる。

なお、土製紡錘車511は、天王山系土器にしばしば伴う遺物であるが、後述する北関東地方の赤井戸式土器等にも伴う。当遺跡例と同様に、幾何学的な文様が刻まれ、前後の時期には顕著に見られない特徴的な様相を認めることが可能である。弥生時代～古墳時代前期の東北日本に、普遍的に存在すると考えられ、天王山系の遺物と単純に評価することはできない。ただし、正尺C遺跡例は、胎土の共通性から天王山系土器に伴う遺物であることは明らかであり、主体をなす北陸系の遺物ではない。

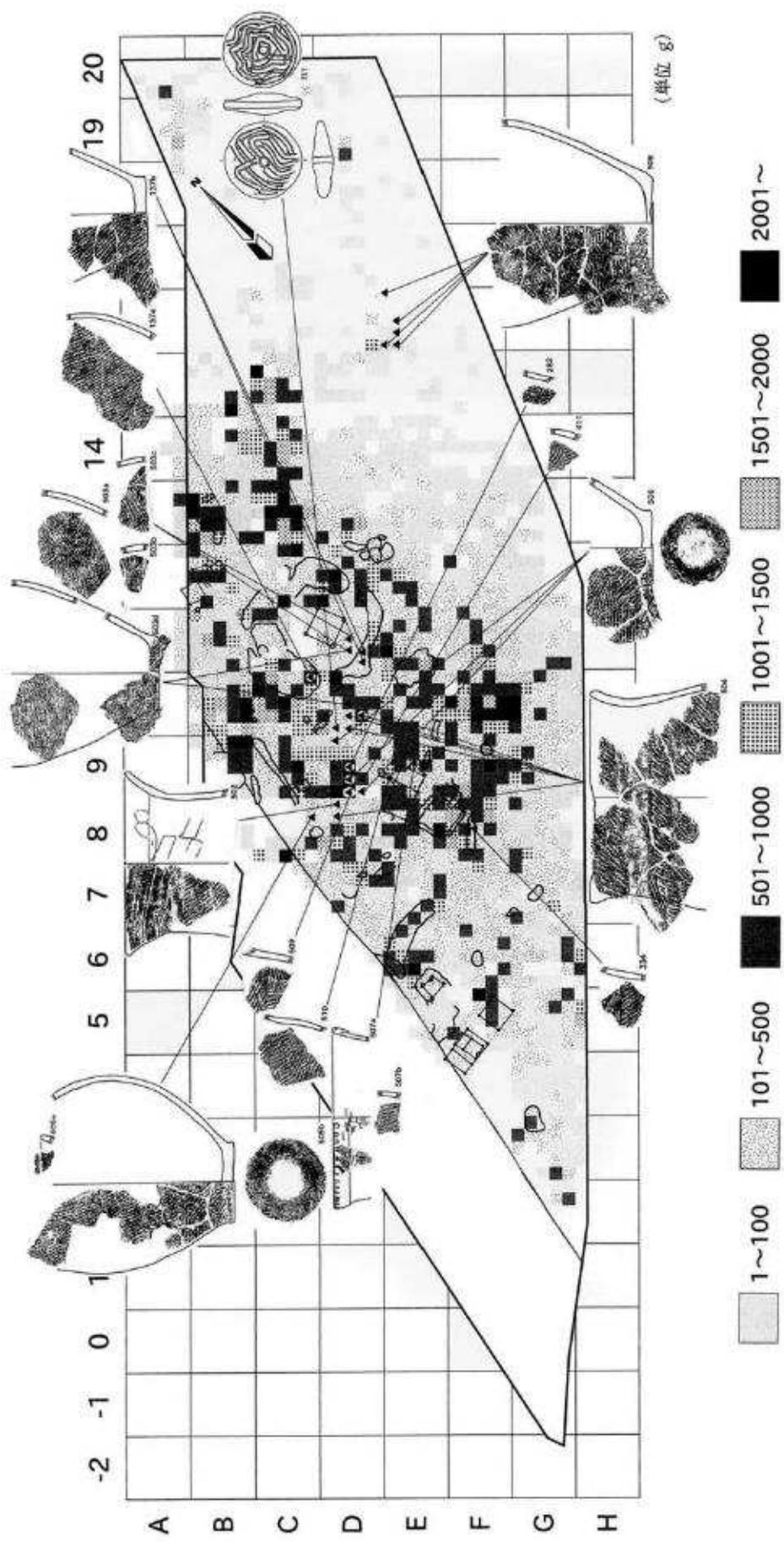
### 3. 縄文施文土器の出土状況

縄文施文土器は、調査段階でその存在を見出し、出土状況に注意を払いながら調査を進めた。遺構出土の資料は少なく、前述のとおり第11図で示したものではほぼ全量である。口縁部～底部までの資料が揃っている個体は無く、散布するような出土状況であり、共伴関係を断言できるものではない。

137・282・334・411が遺構出土資料であるが、このうち137が器形をある程度読み取れる大きな破片であるほかは、いずれも小破片であり、共伴関係を論ずるには十分な資料と言えない。137については、底部～胴部上半にかけての資料が認められ、器形をある程度復元できる個体である。これは平地建物SZ439の周溝から出土した土器に混在して出土したものであり、唯一、共伴関係を検討できる資料である。ただし、溝の覆土と不明瞭な盛土（M層）から出土したものがあり、遺構の年代を反映するとはいえない。SZ439は6期に位置付けられる遺構であり、6期以前の遺物であるという点までは言うことができる。一方、他の土器についても同様の出土状況が認められたことから、137の年代のみをこれから分離することには問題もある。

このような状況にあるため、遺物包含層も含めた出土位置について検討していきたい。各遺物の出土地点を示したのが第12図である。「▲」で示した地点が、縄文施文土器の出土地点であり、土器の重量分布の濃淡と重複する様子を理解できる。唯一、508のみが集落から外れた地点から出土しているが、周辺からは他の個体の出土も認められ、これを特別視することは適切でない。むしろ、分布が希薄な範囲においても、分布が重複することを重視すべきであろう。

次に層位的な状況を見ていきたい。11年度調査区においては、出土層位が明らかでないものが含まれるが、層位が明らかな遺物包含層の出土状況は、Ⅱ層1点、Ⅱ上層3点、Ⅱ下層4点、Ⅲ層1点であり（第2表）、やや下半に偏った分布を示すことが分かる。しかし、それほど大きな相違ではなく、この情報をもつ



第12図 正尺C遺跡出土土器重量別分布図と縄文施文土器の出土位置

て層位的な傾向を読み解くことはできない。なお、この状況は他の土器の出土状況にも共通する。

このように、平面的にも層位的にも、その他の土器の分布と重複することは明らかである。また、古墳時代前期以外の遺物は、平安時代の須恵器杯2点があるに過ぎない。このような出土状況を鑑みれば、縄文施文土器のみを別時期の遺物として分離する合理的な事由は見当たらない。これが、発掘調査担当者の所見である。

#### 4. 古墳時代前期における縄文施文土器

古墳時代前期に縄文施文土器が遺構内で伴う事例は、新潟県域では狐森B遺跡や狐崎遺跡等において認めることができる。また、近隣地域では会津地方と群馬県北西部でも共伴事例があり、これらも検討対象とした。群馬県北西部については系譜が異なり、同じ議論の組上に載せることそのものに問題もあるかもしれないが、同時期に伝統的に縄文施文土器が使い続けられる点では共通する。また、北陸系の土器が群馬県北西部に流入する状況も確認される。新潟県域と群馬県北西部の間では、編年の対応関係が不明瞭な面もあるが、参考資料として対比したい。なお、遺構内における出土位置を示した図面を併せて提示したが、縄文施文土器の出土位置に「○」印を付した。

##### （1）新潟県域

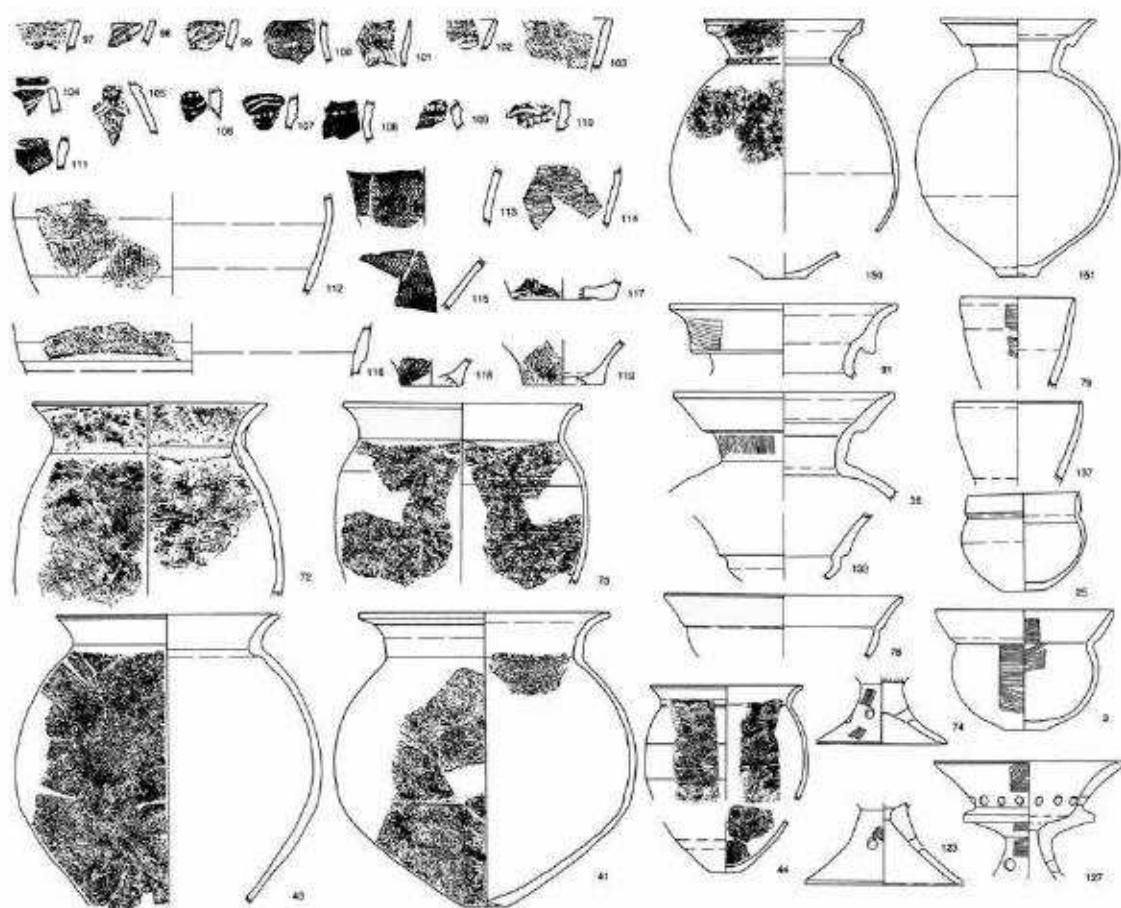
###### 1) 大塚遺跡 [吉村 2002、水澤 2006]

胎内市大塚遺跡第2次調査（第13図）・第4次調査（第14図）では、7・8期の土器群に混在して縄文施文土器が出土した。いずれも小片であるが、第2次調査では285片、第4次調査では41片が出土している。いずれも遺構出土資料ではないものの、特に第4次調査では正尺C遺跡と同様に北陸系土器と分布を一にしており、他の土器群と時期差を認めることは困難とされた。そして、会津地方での共伴事例から、7期頃まで縄文施文土器が残存しても大過ないものとされた〔水澤 2006〕。一方、周辺で調査された同時期の遺跡において、縄文施文土器が伴わない事例もあるという問題点が指摘された。

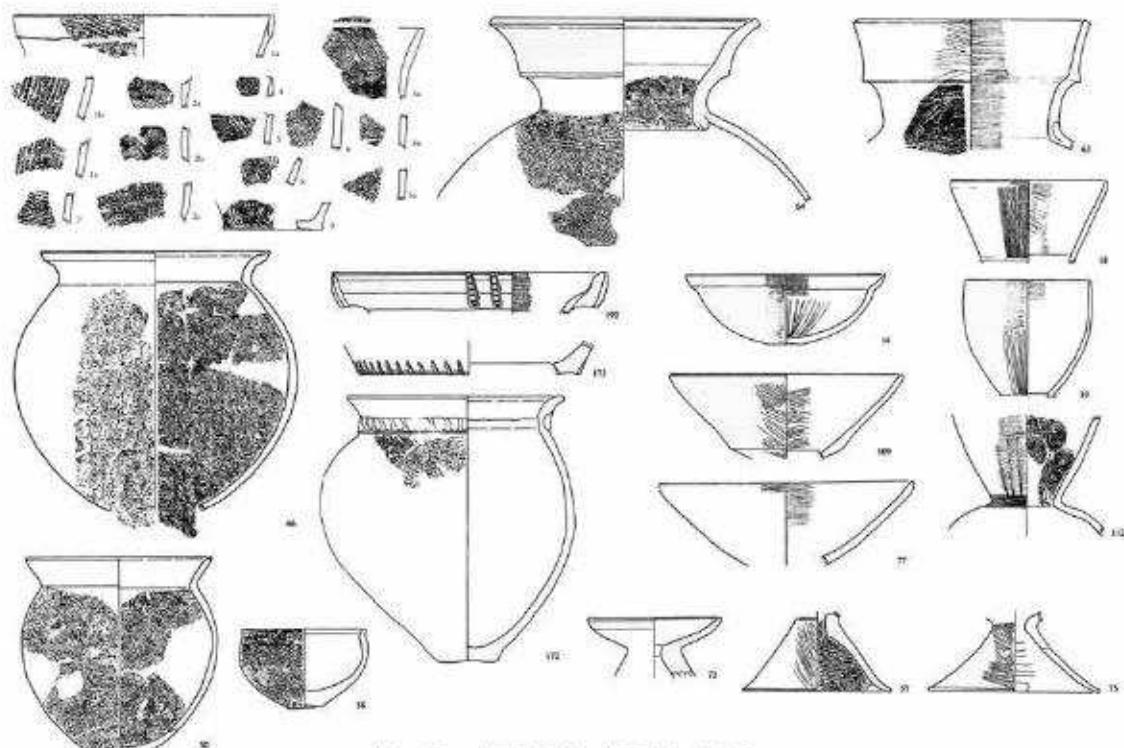
土器片は、いずれも小片であり、接合関係も認められないことから器形を復元できる個体は無い。断片的な情報ではあるが、口縁部が有段またはそれを意識した形態であること、頸部がすぼまり、胴部が膨らむことを読み取ることができる。縄文の原体はRLを多用するほか、LRと撲糸文も認められる。また、条間が広い個体もあり、附加条を多用している可能性がある。文様帶は、I文様帶は縄文、IIa文様帶は無文、IIまたはIII文様帶上部に対応する刺突文や連弧文が認められる。IIまたはIII文様帶上部が出土したのは第2次調査分のみである。刺突文は交差刺突文が形骸化したものと見られ、天王山系土器でも後出的なものと見ることができよう。連弧文は太く、二重に重ねており、正尺C遺跡のものとは著しく異なる。水澤幸一氏のご教示によれば、第2次調査における縄文施文土器の出土範囲は、7・8期の土器群とやや離れるとのことであり、共伴関係については慎重に評価すべきかもしれない。一方、第4次調査分については、分布が重なっており、出土状況から両者を分別することはできないとのことである。正尺C遺跡と同様に、遺物包含層からの出土遺物が大半であるが、共存する可能性が高い一群と評価したい。

###### 2) 狐森B遺跡 6号土坑 [田中・坂野井 2007]

新発田市狐森B遺跡では、墓坑と見られる6号土坑の下部から、新潟シンボ編年5～6期に位置付けられる広口壺9と共に、縄文施文土器が出土した（第15図）。報告書に詳述されており、以下、転記する。『8の附加条施文甕は、弥生時代後期に東北地方一円に分布した天王山系土器〔石川 2000〕の系譜をひくと考えられる。東北南部における天王山系土器には、天王山式に後続する屋敷式がある。天王山式から屋



第13図 大塚遺跡第2次調査出土土器



第14図 大塚遺跡第4次調査出土土器

敷式への変化は、器形面では、天王山式に明瞭な口縁の内湾や頸部の屈曲が弱まり、口縁部幅が総じて拡張する。文様においては、天王山式に特徴的な交互刺突文が形骸化する。地紋は附加条が多数を占め、ともに撚糸文も普及する〔石川2001〕。8を見ると、天王山式土器の器形的特徴が崩れ、附加条を施文することからして、天王山系土器の中でも新しい段階と理解できる。ただし、頸部無紋帶は不明瞭なもの、附加条は口縁部から体部上半は斜行、体部下半は縱走となり、回転方向を変えることで文様帯を意識している様子がうかがえる。」

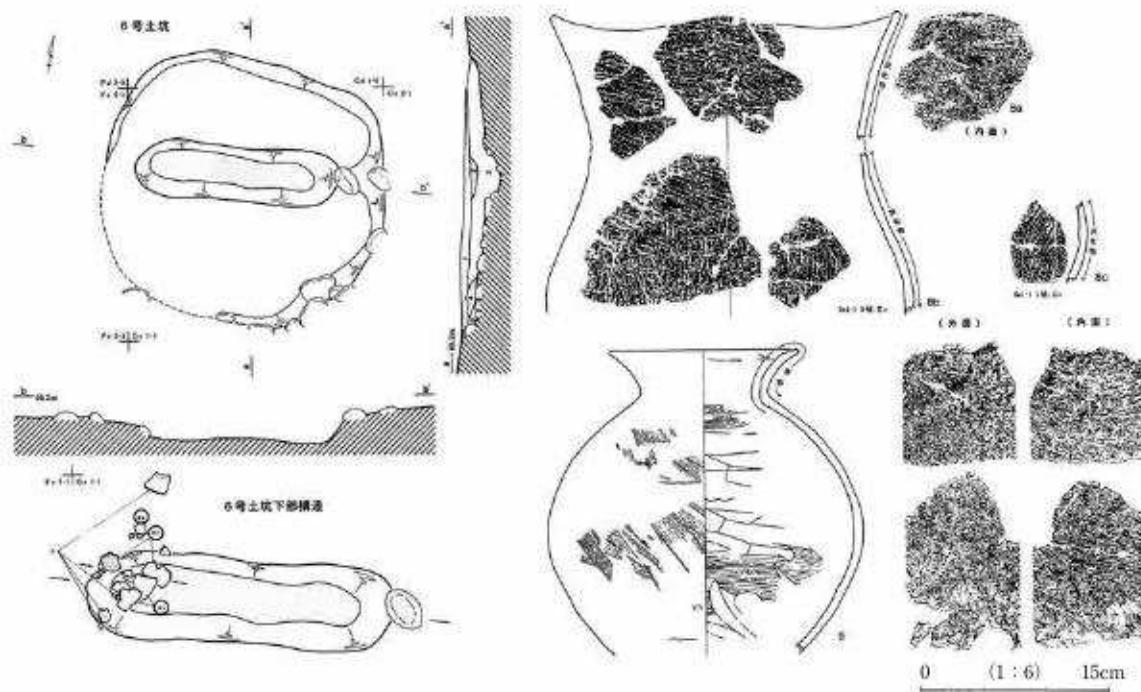
器形において、まず注目されるのは波状口縁である。これは、天王山式の口縁突起が退化した姿と考えることができよう。口頸部界には明瞭な段を設げず、頸部のくびれ・体部の張りが弱いならかな器形が想定されている。文様帯の退化に伴い、各部界を明瞭に示す必要がなくなったことが、このような器形を生んだ一因であろう。器面外面のほぼ全面に附加条RLが施文されることから、条間が開く。また、条の向きを変えながら、天王山系土器の文様帯を意識した施文がなされていることが理解される。出土状況からは、5～6期に位置付けられる広口壺に伴うことは確実と見られ、天王山系土器の終末を示す資料の一つと評価したい。

### 3) 狐崎遺跡第1号住居址〔金子1981〕

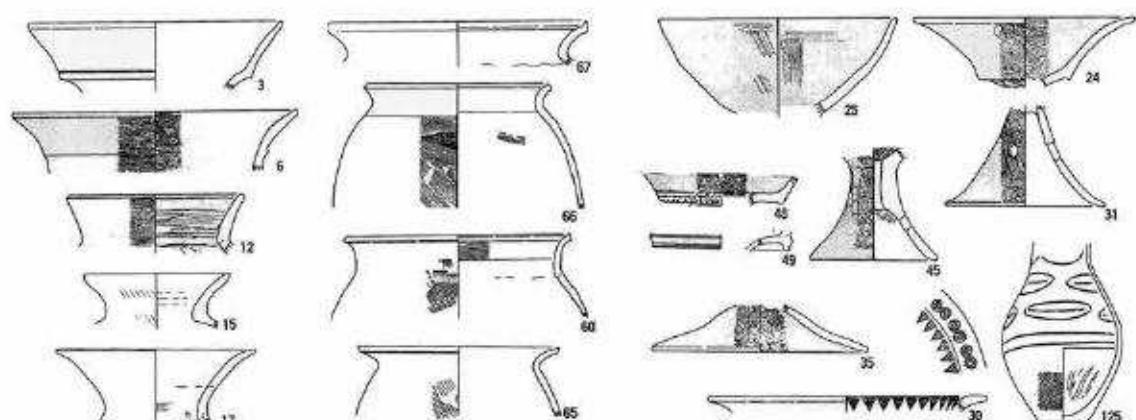
三条市狐崎遺跡においては、古墳時代前期の竪穴建物が検出されており、〔坂井・金子・川村1993〕で遺物の出土遺構が明らかにされている。検出した3棟の竪穴建物のうち第1号住居址において、新潟シンボ編年5期の土器群が出土し、ここに「弥生土器」と報告された縄文施文の壺1点が伴う(第16図)。出土位置の詳細は不明だが、弥生土器の遺存率は高く、5期の土器群に共伴する可能性が考えられる。むしろ、弥生土器として、5期の土器群から分別したように見える。弥生土器として古式土師器から分離したことは、報告当時の常識的な判断といえる。本稿では、共伴するということも想定しつつ改めて検証してみたい。東北系の壺とされた125は細頸壺であるが、口縁部～頸部は残存しない。Ⅱ文様帯は間延びしており、頸部下半～胴部中位まで認められる。最上段に上開きの連弧文があり、その下位に横長楕円形の区画が2段重ねられ、「工」字状の空間が設けられる。そして、楕円形の区画には横走する沈線で、上下に分割されている。横長楕円形の区画は、上開きと下開きの連弧文を結合するように施文されたように見える。Ⅱ文様帯の最下位に2条の沈線が引かれ、Ⅲ文様帯には縄文(LR?)が施される。口縁部の様子は明らかでないが、横長楕円形の区画は連弧文が変形した姿と理解することもできる。したがって、天王山系土器であっても後半期の資料であることは確実と見られ、5期の土器に共伴すると考えることも可能である。〔坂井・川村1993〕においても、縄文施文土器を5期に相当するⅡ-1期に位置付けている。

### 4) 横山遺跡第1号住居跡〔駒形ほか1987〕

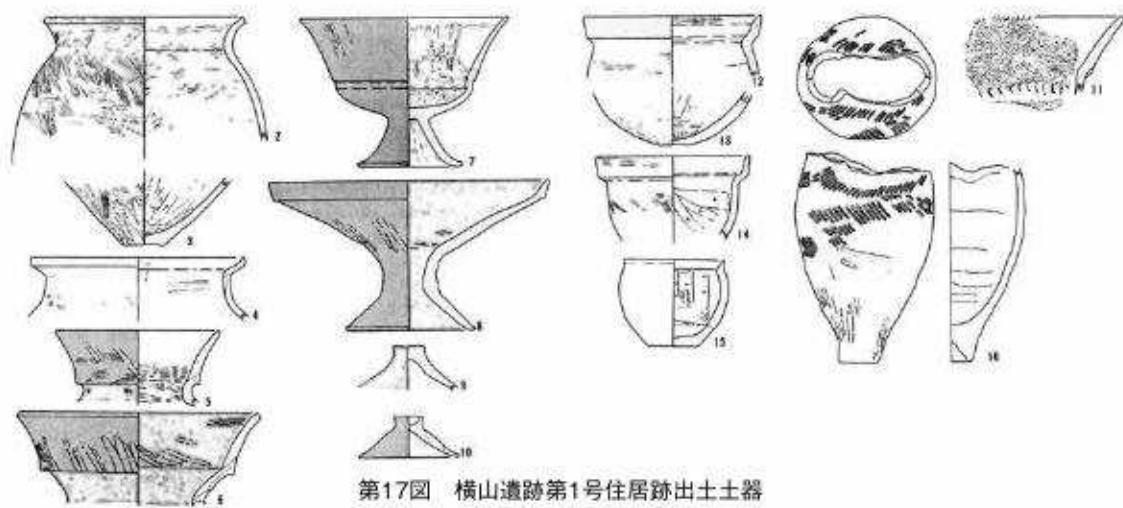
長岡市横山遺跡は、4～5期を主体とする高地性環濠集落である。第1号住居跡は、良好なまとまりをもつ土器群であり、4期の標識資料とされている〔滝沢2005a〕。ここに2点の縄文施文土器が伴う(第17図)。11は口縁部に縄文LRを施し、口縁端部と口頸部界に刻みを加える個体である。破片資料であり必ずしも明らかでないが、天王山系の器形をなすと推測される。16は異形土器である。床面下からの出土とされ、4期の土器に伴うかという問題が残る。しかし、竪穴建物の掘り込まれた床面の下位に16を包含する層位が存在するとは考えにくい。遺存率が高いことも勘案すれば、床下に埋め込まれた土器である可能性がより高い。器形は頸部がなく、口縁部の上面観は楕円形であり、一端に注ぎ口が認められる。文様帯は見られず、撚糸文Rが上半部施される。極めて特徴的な土器であり、〔坂井・川村1993〕では「北海道系」と位置付けている。また、環濠からも縄文施文土器の破片が出土している。出土位置・層位が明らかでな



第15図 狐森B遺跡6号土坑出土土器



第16図 狐崎遺跡1号住居址出土土器



第17図 横山遺跡第1号住居跡出土土器

いため、検討の対象としなかったが、交互刺突文を有する土器が存在する等、より古い段階を示すものも認められる。

#### 5) 衣田遺跡 [鶴巻・磯部 1990]

村上市衣田遺跡は、不時発見で確認された遺跡であり、その際、採集された土器が報告されている。5期前後の土器と縄文施文土器が採集されている。共伴関係は明らかでないが、比較検討する上で取り上げることとしたい。縄文施文土器は、弥生土器として紹介されている(第18図)。1は、口縁部片と胴部片が出土しており、壺の器形が復元されている。口縁部は段を持ちながら外反し、張りの弱い胴部から口縁部にかけては緩くくびれる。口縁端部は角ばかり、波状口縁気味になる。口縁部内外面は、粘土帶の縫目が観察される。口縁部～頸部は無文で、縄文は胴部から底部に施される。縄文の原体は、LRを軸にRを2本絡めた附加条とされる。3は、有段口縁のI文様帶に縄文が施される。原体は、RLを軸にLを2本絡めた附加条とされる。衣田遺跡から出土した縄文施文土器の縄文原体は、いずれも附加条であることが特徴的であり、底部付近まで縄文施文されていることが6から理解できる。4は小破片であるが、いずれも細い沈線文が1条横走する。これらの縄文施文土器は、変化に乏しい器形をなすこと、文様帶が退化していることから、天王山系土器でも後出的なものである可能性が高い。採集資料であるため断言できないが、5期前後の土器群に伴うと判断することも可能と考えられる。

#### 6) 居村C遺跡D地点 [渡邊 2001]

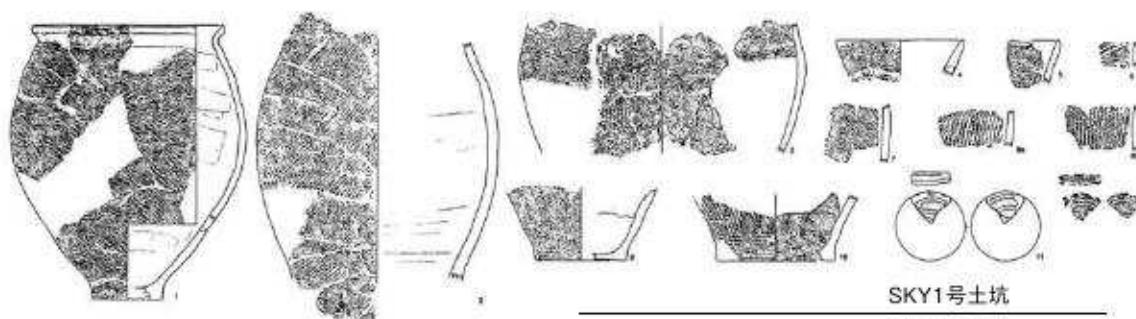
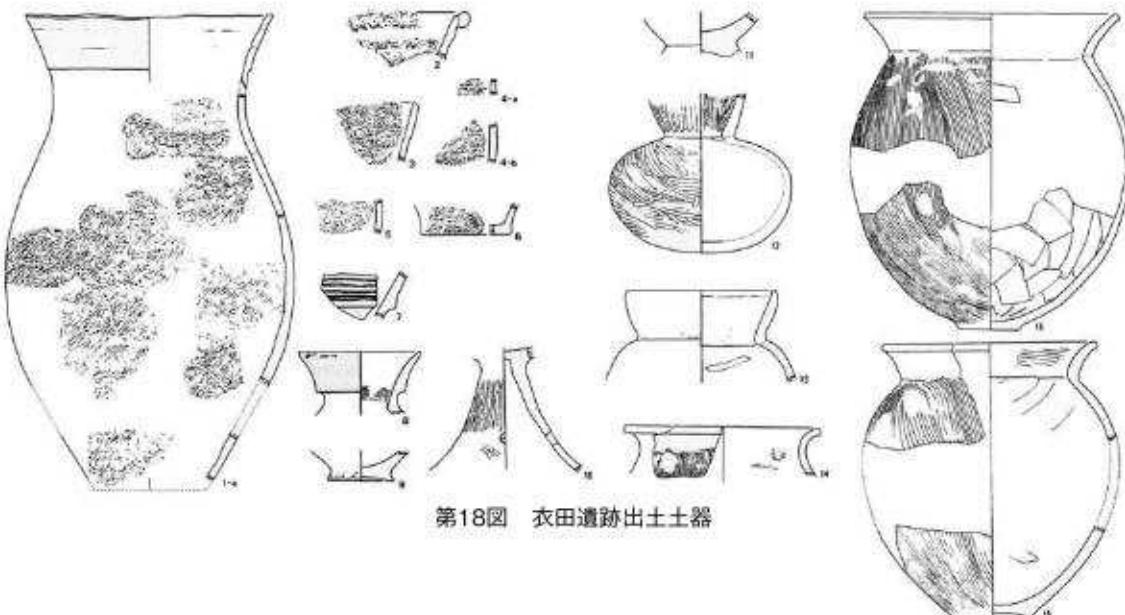
新潟市秋葉区居村C遺跡D地点は、八幡山遺跡から300mほどと至近に位置する。SKY1土坑出土土器が5期に位置付けられており、八幡山遺跡廃絶後に位置付けられている(第19図)。5期とするものの、縄文施文土器のみの出土であり、新潟シンボ編年との相関関係は必ずしも明瞭ではない。なお、遺物包含層からは7期頃の土器が出土しているが、遺構出土遺物との関係には言及できない。しかし、両者は近接した地点から出土しており、しかも分布の広がりは認められない。両者の共存を積極的に評価すれば、縄文施文の土器が7期頃まで残存することとなる。

#### 7) 西谷遺跡 [宇佐美・坂井 1987]

刈羽村西谷遺跡は、発掘調査により2～5期を主体とする集落であることが明らかにされている。縄文施文土器は、採集資料の中にある(第21図12)。口縁部～頸部上半を欠損しているが、残存状況は極めて良好である。頸部下半から胴部上半に形成されるII文様帶には、横長長方形の区画を二重に重ね、「工」字状の区画を四単位設けている。長方形区画内には、横走するように刺突文が連続的に施される。大きな刺突列が中央に位置し、小さな刺突列がそれと平行するように充填されている。その下位に1条の沈線を引き、2つで一単位の刺突文が施されているが、III文様帶上部に対比できるのであろう。モチーフは狐崎遺跡出土の細頸壺と酷似するが、文様帶の構成がより明確といえる。狐崎遺跡例と比べれば、より古相の特徴を示すと考えられ、共に採集されている2期の土器(第21図)に伴う可能性が想定される。採集資料であり共伴関係については言及できないものの、狐崎遺跡出土例と比較する上で重要な資料であり取り上げた。

#### 8) その他

柏崎市高塙B遺跡[金子・坂井 1983]では、7・8期を中心とする多数の土器の中に、「時期不詳」とされた縄文施文土器(第20図)がある。これは、稲荷塚遺跡SI01出土土器(第24図13)に似ており、古墳時代前期に属する可能性があるが、共伴関係を検討することはできない。新潟市西蒲区南赤坂遺跡では統縄文土器等の北方系土器が認められるが、8～9期に伴うものである[前山 2002]。系譜が異なること



第19図 居村遺跡D地点出土土器



第21図 西谷遺跡出土土器

から本稿の対象範囲に含めなかったが、海岸沿いに北方の土器が局所的に搬入された様子を理解できる。

## (2) 会津地方

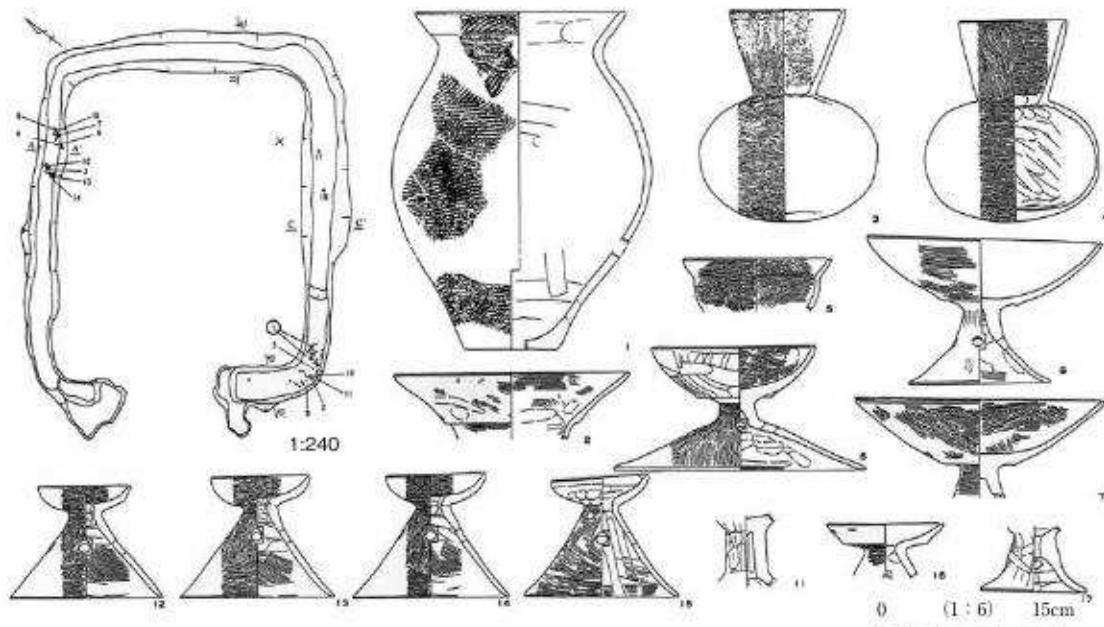
会津地方には、北陸系の遺物が多数認められ、縄文施文土器がそれに伴うとされる。中村五郎は、福島県では「稻荷塚資料のように月影式以後の段階まで縄紋を施す伝統がのこる。」[中村 1995a] とし、木本元治は、稻荷塚遺跡 SI01 の土器群の評価から会津地域では 5 期まで縄文・沈線文を有する土器が伴うことを指摘した [木本 2009]。会津地方は、「天王山式土器の影響を受けた在地の土器と日本海側（裏日本）系の外来土器が卓越・顕在化する点」が福島県内の他地域と異なるとされる [猪狩 2000]。特に、稻荷塚遺跡における共伴関係は、正尺 C 遺跡の評価において極めて重要である。出土状況も含めて検討していきたい。

### 1) 稲荷塚遺跡 [吉田ほか 1995]

福島県会津坂下町稻荷塚遺跡は、建物と周溝墓が検出された古墳時代前期の集落である。正尺 C 遺跡出土遺物を検討する上で極めて重要な遺跡であり、本稿では遺構一括資料における縄文施文土器の位置付けを行っていきたい。資料の年代観は、これまでに多数報告されているため、まずはそれらを第 3 表に整理した。ほぼすべての遺構から縄文施文の土器が出土しているが、細片である等、共伴関係そのものに問題が残るものもある。そこで、本稿では出土位置が明らかで縄文施文土器の残存率が高い遺構、特徴的な個体を伴う遺構から出土した土器群を検討の対象とした。検討の対象としたのは、周溝墓 SZ02・SZ06、竪穴建物 SI01・SI04ab・SI06・SI15 から出土した一括資料である。

遺構番号	吉田 1995	辻 1993	渡邊 2001	青山 2005	木本 2009	千田 2009	本稿
竹ガ森古墳	漆町 7 以降	新潟シンボ 7	漆町 7	新潟シンボ 7		新潟シンボ 7	
SZ01	漆町 7	新潟シンボ 6	漆町 6	新潟シンボ 7		新潟シンボ 5・6	
SZ02	漆町 7	新潟シンボ 6	漆町 6	新潟シンボ 7	漆町 5	新潟シンボ 5・6	新潟シンボ 6
SZ03	漆町 7						
SZ04	漆町 7						
SZ06	漆町 7			新潟シンボ 8	漆町 5		新潟シンボ 7~8
SZ09	漆町 7						
SZ10	漆町 7						
SI01	漆町 5・6	新潟シンボ 5	漆町 5	新潟シンボ 5・6	漆町 5	新潟シンボ 5・6	新潟シンボ 5~6
SI04a・04b	漆町 5・6			新潟シンボ 5~7	漆町 5 (SI04b)	新潟シンボ 5・6	新潟シンボ 5
SI06	漆町 5・6			新潟シンボ 5~6		新潟シンボ 5・6	新潟シンボ 5~6
SI10	漆町 5・6					新潟シンボ 5・6	
SI11	漆町 5・6					新潟シンボ 5・6	
SI12a・12b	古墳中期			南小泉併行			
SI13	漆町 5・6					新潟シンボ 5・6	
SI14	漆町 7				漆町 5		
SI15	漆町 7			新潟シンボ 7	漆町 5~6		新潟シンボ 7

第3表 稲荷塚遺跡における各遺構の編年的位置付け

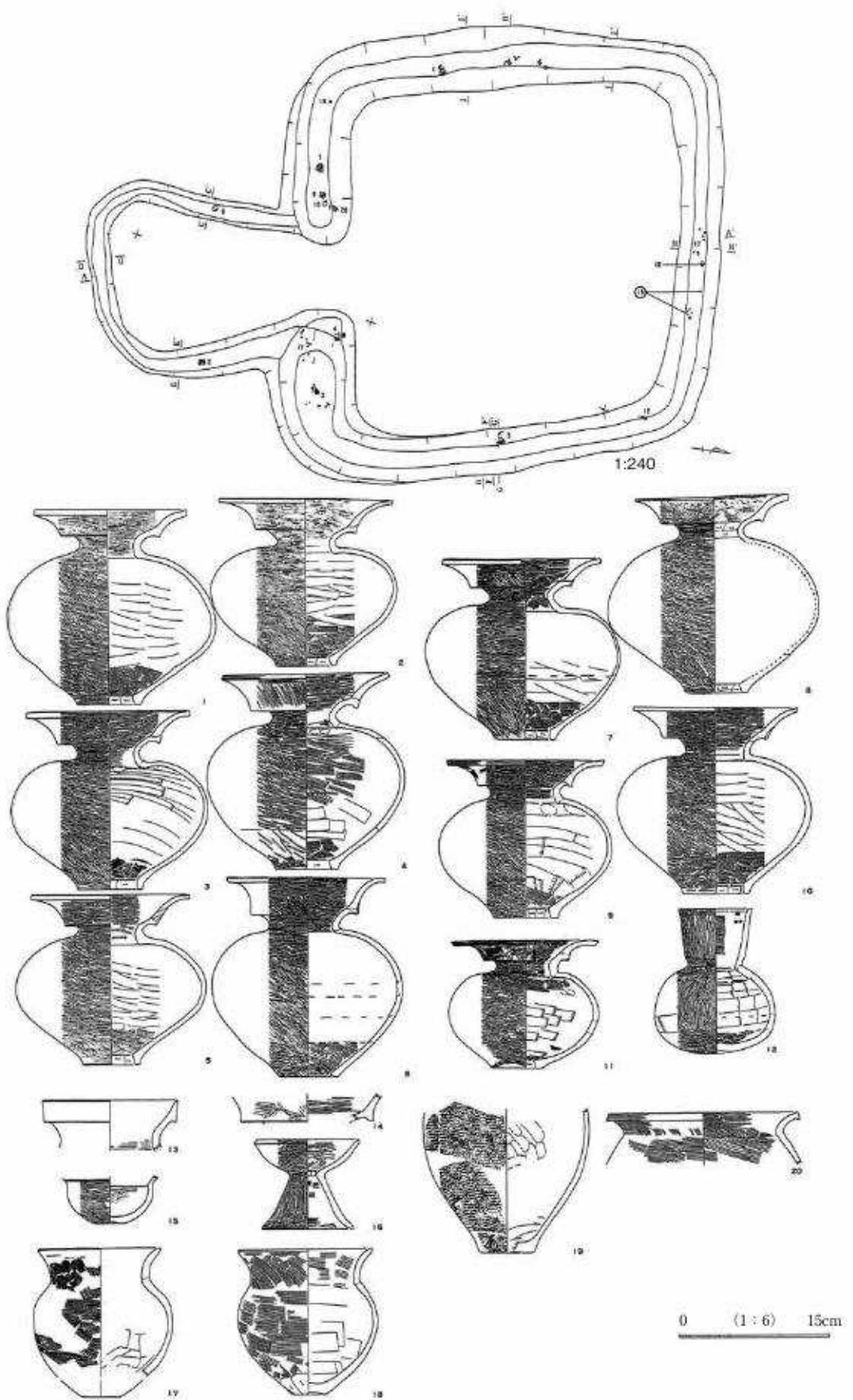


第22図 稲荷塚遺跡SZ02出土土器

**SZ02** (第22図) 1は縄文施文の甕である。有段口縁で、頸部は無文、口縁部と胴部～底部に縄文が施される。2は二重に外反する畿内系の二重口縁壺で、内部の段部が不明瞭なN II類である。3・4は壺H類である。直線的に立ち上がる細長い口縁部と球形の胴部とからなる東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態である。6～8は高杯C II類である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、外面には段を有する。脚部は「ハ」の字を呈する。東海系の高杯で、5～7期に定量認められるものである。12～15は受部が内湾して立ち上がる小型器台N類で、脚部が「ハ」の字に開く。16は脚部から大きく外反して、有段の口縁部に至る小型器台H類で北陸系とされるものである。5～7期頃に認められる形態とされる。これらの土器群を総体的に見れば、6期頃に位置付けることが妥当であろう。縄文施文土器の出土位置は周溝内の南隅で、2・5・11等と近接して出土している。

**SZ06** (第23図) 1～11は壺N I類である。二重に外反する二重口縁壺で、畿内系と考えられる。形態・法量の齊一性が高く、また赤彩されていることから、墳墓への供献土器であろうか。12は壺H類である。東海系のひさご壺と在地土器の折衷形態で、やや内湾気味に立ち上がる細長い口縁部と、やや下影れの胴部からなる。13・14はN類の畿内系二重口縁壺である。16は、受部が内湾して立ち上がる小型器台N類である。17・18・20は「く」字甕である。端部が丸く収められるC3類(17・18)と、面取りされたC2類(20)がある。19は縄文施文の甕または壺である。胴部～底部に縄文が施文される。やや球胴気味の胴部は、正尺C遺跡505b(第11図)に共通する。青山博樹氏は[2005]で8期、[2004]で7・8期としており、稻荷塚遺跡における後出的な土器群と評価している。甕には、胴部の最大径がやや上位に位置する20があり、本稿では7～8期と幅を持って位置付けておきたい。縄文施文土器の出土位置は周溝北辺の中間部付近で、甕17・18が近接して出土している。

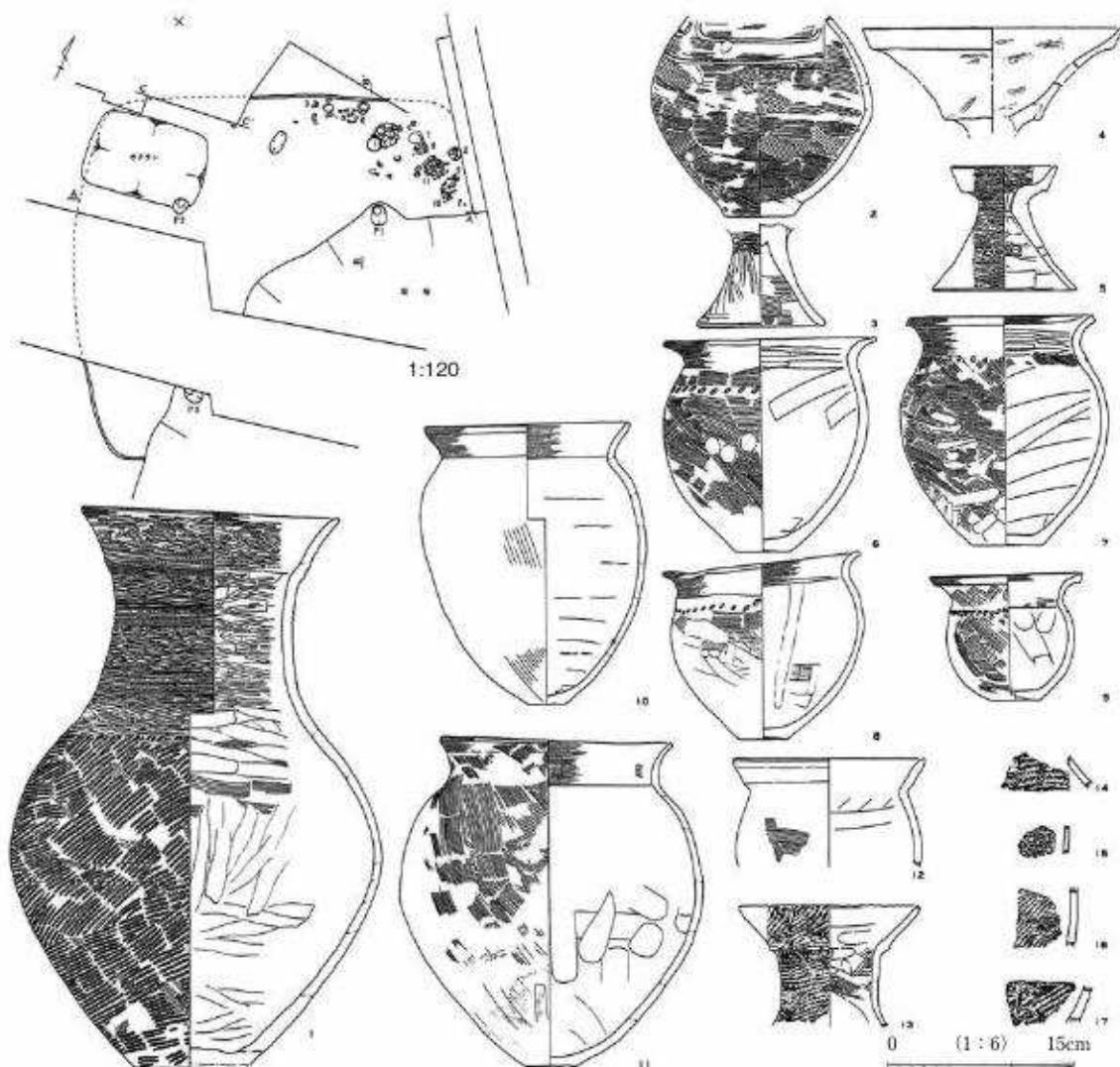
**SI01** (第24図) SI01は、杵ガ森古墳の周堀に切られており、遺構の残存率は約5割である。隅丸方形の竪穴建物で、北隅付近から遺存率の高い個体がまとまって出土した。1は、外反する有段の口縁部を持つ細頸壺である。口縁部界・頸胴部界、頸部中位にそれぞれ5条の横走沈線が引かれる。口縁部～胴部最上位までミガキ調整され、Ⅲ文様帶は縄文施文されている。2は壺の胴部～底部である。全面がハケ



第23図 稲荷塚遺跡SZ06出土土器

メ調整されているが、II文様帶に対応する部分に、沈線で横長の楕円形区画が設けられている。北陸系と天王山系の折衷形態と言えるかもしれない。4は器台と報告されているが、破損部の表現を見ると高杯である可能性が高い。器形も器台には見られない形態であり、高杯 A II類に相当すると考えられる。[滝沢 2006]では、口縁端部を上端につまみ上げることを除けば北陸地方に主体的に分布する形態とした。そして、5～7期に拡散する北陸北東部系の土器の一つとした。一方、[中村 1995c]では、利根川上流域で同様の形態がまとまって認められることを指摘した。5は北陸系小型器台 F II類である。6～9の甕は、口縁端部が面取りまたは上方につまみあげられ、肩部に列点文を持つものがあり、[青山 2005]の5・6期（会津1期）に位置付けられる。13は天王山系の壺である。平坦な有段口縁で、筒状の頸部を有する器形である。外面には縄文、内面にはハケメ調整が見られ、東北系と北陸系の折衷的な様相を示す。時期的にはまとまりを欠くが、本稿では総体的に見て5～6期頃のまとまりと理解したい。縄文施文の土器の出土位置は堅穴建物北東隅の土器集中部で、2・5・7・8・10・11と共に、潰れたような状態で出土している。

SI04a・04b(第25図) SI04aとSI04bの関係は、SI04bを拡張してSI04aが構築されたと理解されており、最終的な埋没段階はSI04aと考えられる。したがって、覆土内から出土した土器をaとbとで分離することには大きな意味は持たず、一括して捉えたい。1・2・4は二重に外反する畿内系の二重口縁壺 N II類で

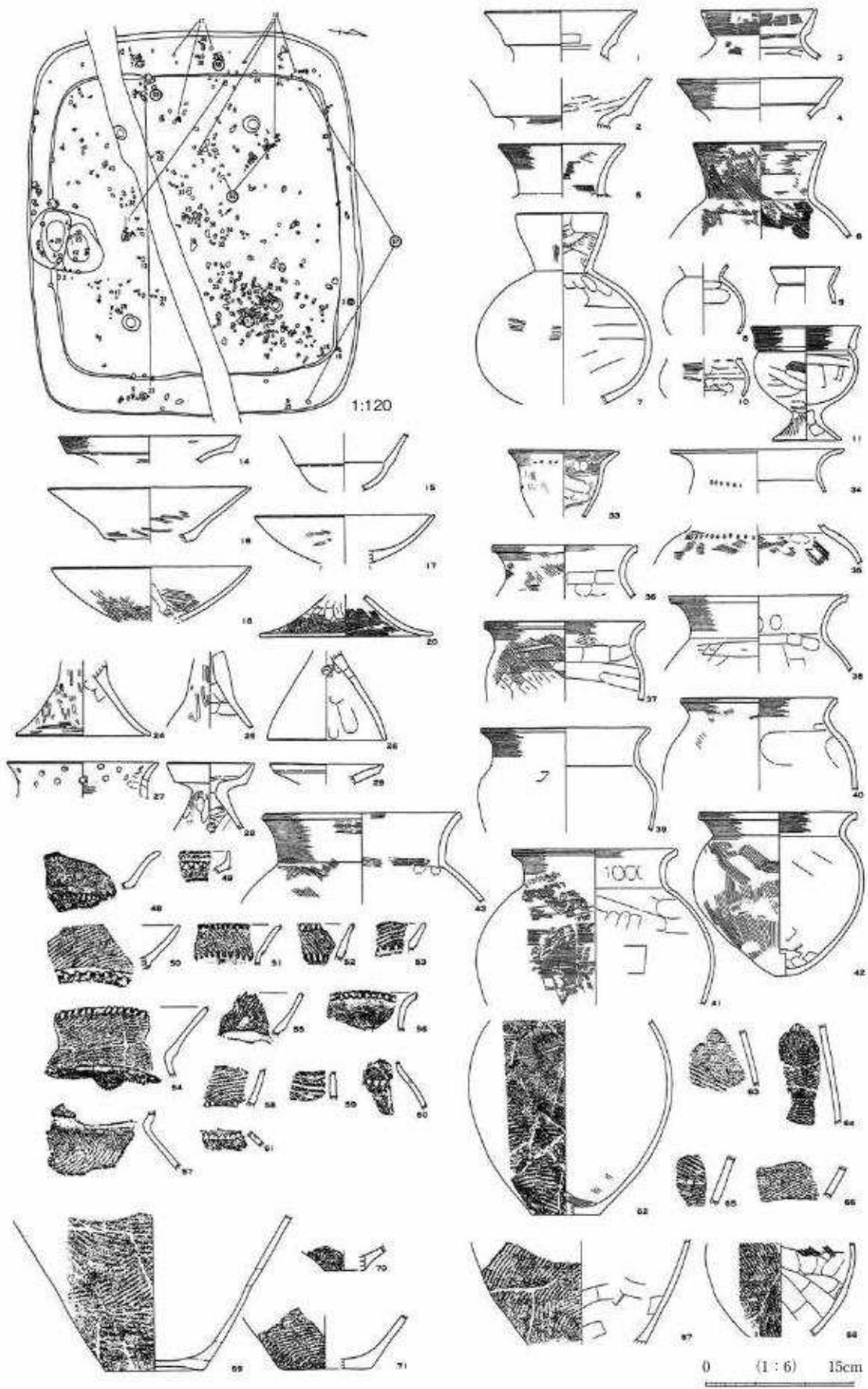


第24図 稲荷塚遺跡SI01出土土器

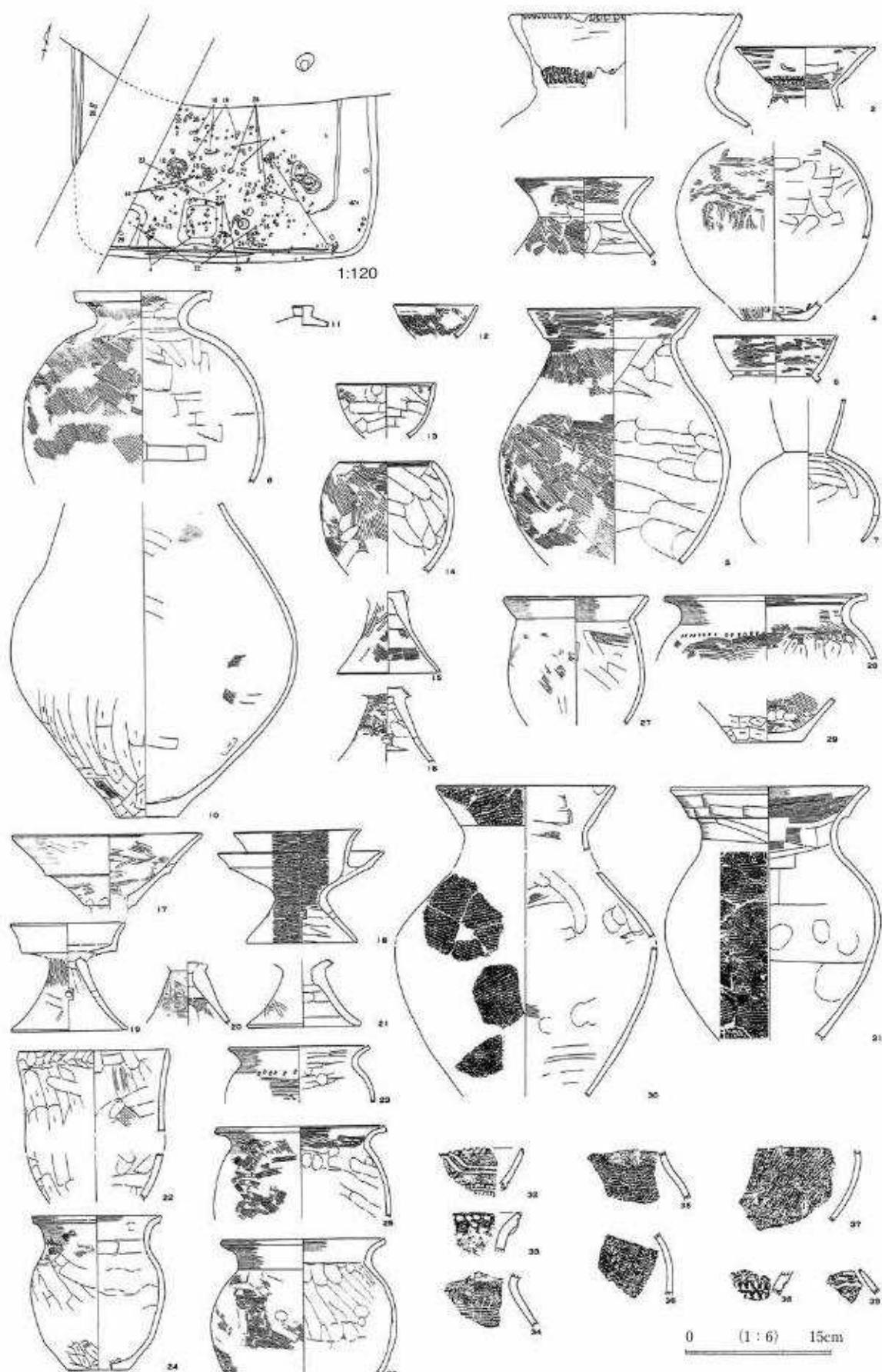
ある。5・6は短頸直口壺S類で、胴部の張り出しが弱くII類に分類できる。7は直線的に立ち上がる口縁部と下膨れの胴部からなる東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態であるH類である。11は低脚を有する有段口縁鉢A II類である。2期に定量認められるようになり、5期頃まで残存するとされる。14～18は高杯の受口部である。14・16は口縁部が有段で外反・外傾するA類である。15は口縁部が外反する有段鉢形のB類であり、御経塚ツカダ型式に相当する。4期に出現し、7期まで主体的に存在するとされる。内面にも口縁の有段部分が認められ、5期頃に位置付けられよう。17・18は口縁部が浅く楕形をなすD類で、5期以降に認められるものである。29は上端で短く外反する受部からなる小型器台1類である。甕は、口縁端部が上方につまみあげられるもの、肩部に列点文を持つものがあり、また胴部最大径は上位に位置することから、[青山2005]の5・6期（会津I期）に比定できよう。縄文施文土器は破片が多いが、壺・甕が主体を占めるようである。口縁端部や口頸部界に刻みが施されることが特徴的である。また、肩部に刺突が認められる縄文施文の60は、北陸系との折衷的な在り方を示している。胴部には縄文が施文されるのみであるが、最大径が上半に位置するものと下膨れの球胴をなすものがある。これらの土器群は、有段口縁鉢A II類の存在を踏まえ、総体的に捉えれば5期頃に位置付けることが妥当であろう。縄文施文土器の出土位置は、62・67・68・69・71が明示されている。建物内に遺物が散在する中に混在するような出土状況を読み取ることができる。

**SI06**（第26図）1・2は、有段口縁の端部及び口頸部界に列点文が施される壺である。列点文は、口頸部界に2段重ねられており、交互刺突文が退化した姿のようにも見える。2はI文様帶とIII文様帶上部に沈線文による施文が認められ、II-a文様帶は無文である。これらは広義の「天王山系」に含まれるものであろうか。7は東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態H類である。10は下膨れの壺胴部～底部で、器形は樽式系や赤井戸式と共通する（第35図）。17は高杯A II類に相当し、SI01出土の第17図4と共に通する。[滝沢2006]では、北陸地方の5～7期に主体的に分布する形態とされている。18は、北陸系の装飾器台D類に共通性を見出せる。8・23～30の甕は、総じて胴部最大径が上位に位置し、口縁端部が上方につまみあげられ、肩部に列点文を持つ。[青山2005]でいう5・6期（会津I期）に認められる特徴である。5・30・31は、器形が極めて良く似た壺である。ここで特に注目したいのは、5と30・31の関係である。器形は同一であるが、5はハケメ調整のみ、30・31はハケメ調整に加えて縄文施文も認められる。器形は天王山式の系譜を踏むものと考えられ、いわば折衷的な在り方を示している。渡邊朋和によって提唱された「八幡山式」のような存在といえようか。これらの土器群を総体的に見ると、新潟シンボ編年5～6期頃のまとまりと理解することができよう。縄文施文土器の出土位置は31のみ明示されている。堅穴建物内に遺物が散在する中に混在するような出土状況を読み取ることができる。

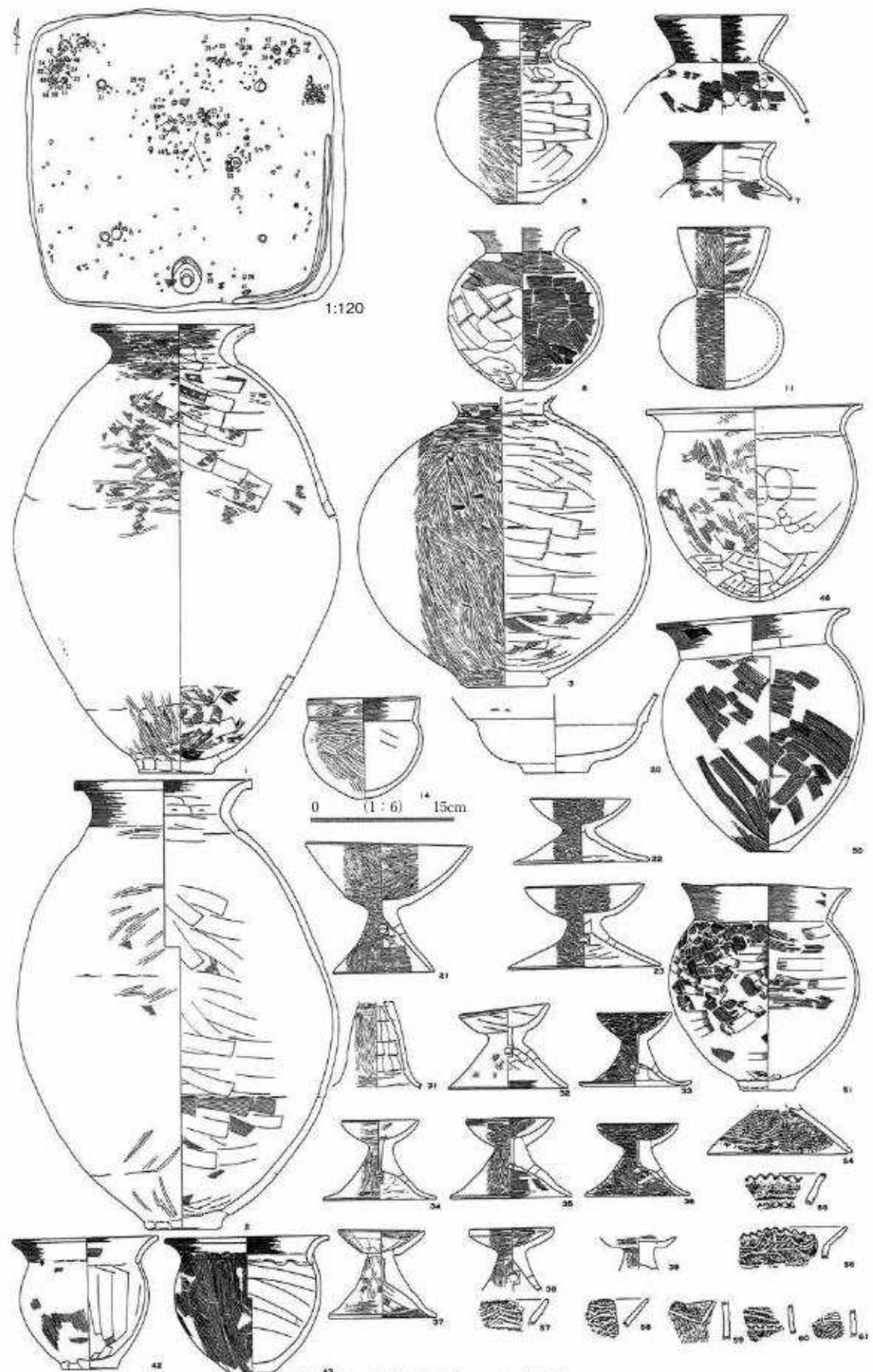
**SI15**（第27図）1・2は外反し端部がつまみあげられる口縁部、細い頸部、細長い胴部を有する極めて特徴的な個体であり、報告時に中村五郎により注意が払われている。[中村1995c]で、「特異な長胴壺は、何を祖形として生まれたか、奇異に感じていたが、案外、（群馬県）町田小沢遺跡21号住居跡発見の甕の実状の長胴の壺の影響なのかもしれない。」とした。指摘のとおり、長胴の壺は樽式系や赤井戸式に特徴的に存在する（第35図）ことから、地域を超えて等質的に比較検討することが必要となつてこよう。5は二重に外反する畿内系の二重口縁壺N II類である。6・7は短頸直口壺S類で、胴部の張り出しが弱くII類に分類できる。11は直線的に立ち上がる口縁部と球形の胴部からなる東海系ひさご壺と在地土器の折衷形態H類である。14は小型で短頸、かつ身の深い鉢E I類である。20は有段口縁鉢A類である。2期に定量認められるようになり、5期頃まで残存するとされる。21は高杯C II類である。口縁部は内弯



第25図 稲荷塚遺跡SI04a・SI04b出土土器



第26図 稲荷塚遺跡SI06出土土器

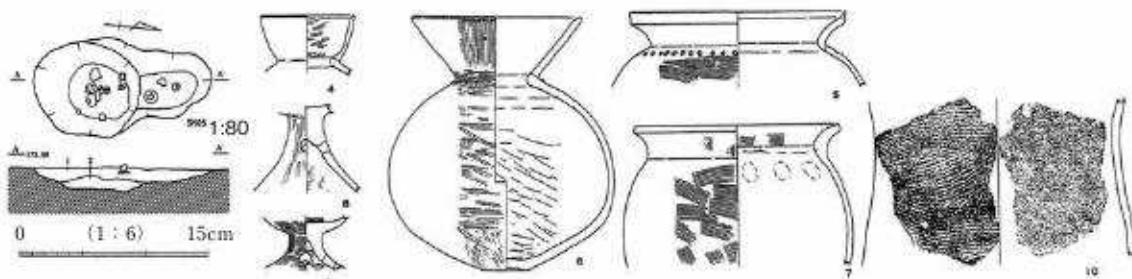


第27図 稲荷塚遺跡SI15出土土器

気味に立ち上がり、外面には段を有する。脚部は「ハ」の字を呈する。東海系の高杯で、5～7期に定量認められるものである。22・23は口縁部が浅く楕円形の高杯D類で、5期以降に認められるとされる。脚部が大きく開くことが特徴的な個体である。31は畿内系屈折脚E類であり、8期以降に認められるとされる。32～36は受部が内湾して立ち上がる小型器台N類である。甕は胴部最大径が上位に位置するものも認められるが、51のように球胴化・平底化する個体も見られる。また、他の遺構に見られた肩部の列点文は見られない。甕の個体差が著しく、時期の詳細を論ずるのは難しいが、総体的には新しい様相を示すと考えられる。畿内系屈折脚の存在・甕の形態を考慮すれば、[青山2005]で示されているように7期頃に位置付けるのが妥当であろう。縄文施文土器は、いずれも遺存率が低い。I文様帶に連弧文が認められる個体がある(56～58)が、細い工具で施文している点は正尺C遺跡に共通する。一方、60には明瞭な交互刺突文が観察され、より古い様相も見られる。縄文施文土器の出土位置は脚部54のみ明示されている。堅穴建物内に遺物が散在する中に混在するような出土状況を読み取ることができる。他より明らかに新相を示す畿内系屈折脚31も、縄文施文土器と同様に遺物が散在する中に混在するような出土状況にある。したがって、共伴関係については、他の遺構よりも慎重に評価しなくてはならない。

## 2) 中西遺跡 [和田1990]

福島県会津坂下町中西遺跡は、古墳時代前期前半の集落である。第5号土坑において、新潟シンポ編年5～6期に対応できる壺・甕・高杯・器台と共に縄文施文土器が1点認められた(第28図)。甕には、口縁端部が上方につまみあげられ、かつ肩部に列点文を持つものが認められる(5)ことから、[青山2005]では5・6期(会津I期)に比定されている。報告書を見る限り、縄文施文土器はこの1点のみで、弥生時代・縄文時代に遡る遺物の出土は認められない。縄文施文土器は、壺と報告されており、正尺C遺跡出土の第11図502のような器形であろうか。縄文の原体は、撚糸文とされている。



第28図 中西遺跡第5号土坑出土土器

## (3) 北関東地方

北関東地方には、古墳時代前期まで縄文施文土器が多数残存する。群馬県赤城山南麓地域を中心として関東地方北部一帯に分布する弥生時代後期～古墳時代前期に位置付けられる型式に「赤井戸式土器」がある。土器の表面に縄文が施文されるということが最も大きな特徴の一つである[小島1996]。赤井戸式でも最も新しい段階に位置付けたⅢ期には、S字状口縁台付甕・小型器台との共伴関係が認められるという[小島1983]。小型器台は、小型丸底土器を加え「小型丸底土器群」として古墳時代土師器成立の指標の一つとされており[岩崎1963]、S字状口縁台付甕と共に古墳時代前期の遺物として評価されている。小島純一は、これらの土器の共伴関係をもとに、赤井戸式Ⅲ期を古墳時代前期中葉頃に位置付けた[小島1983]。また、近年では共伴土器の分析から、古墳時代前期に存在することが明確に指摘されている[深

澤 1999・2000、入澤・加部 2000 等】。

赤井戸式土器とほとんど同じ内容をもった型式に「吉ヶ谷式土器」がある。関東地方西部、特に埼玉県比企地方とその周辺に濃密な分布を示す吉ヶ谷式【熊野 1996】は、赤井戸式とほとんど同じ内容をもつた土器群であり、ほぼ同じような変遷を示すとされる【小島 1983】。そして、赤井戸式Ⅲ期は、柿沼幹夫がいう吉ヶ谷式Ⅲ期【柿沼 1982】に併行するという。吉ヶ谷式土器は、弥生時代後期の土器型式とされる【熊野 1996】が、【柿沼 1982】では赤井戸式土器の研究動向も鑑み、編年表（同論文 66 頁）ではⅢ期を弥生時代末～古墳時代初頭に跨るように示している。

また、北関東地方には、櫛描文の伝統を残す土器も古墳時代前期まで残存する。関東地方北西部に分布する「樽式土器」は、弥生時代後期の型式である。最終段階のものは古式土師器の標徴である S 字状口縁台付甕等との関係の検討が必要とされている。また、赤城山南麓では後述する赤井戸式と混在したり、両方の特徴を持った個体もあるとされる【外山 1996】。すなわち、樽式の最終段階は古墳時代に入り込むと考えられ「樽式系」と呼ばれている。利根川上流域と会津地方の関係については、中村五郎が重要な指摘をしている。中村は会津地方の長胴壺と樽式系の壺との形態的共通性を指摘し、会津地方と利根川上流域の編年の関係について検討する必要性を指摘した【中村 1995c】。この所見には極めて重要な問題を含んでいるが、その後、積極的に議論の俎上に上った形跡は見られない。会津地方を介し、現段階では不明瞭な北陸地方と北関東地方の編年の対応関係を検討することができるかもしれない。

若狭徹・深澤敦仁は、古墳時代前期古段階を 5～7（古）期に併行すると考えるが、主体を 6 期とした。そして、この段階まで「樽式系」及び「吉ヶ谷式系（赤井戸式系）」が組成に加わるとした【若狭・深澤 2005】。いずれにせよ、縄文を施文する赤井戸式（吉ヶ谷式）の最も新しい段階は、6 期頃まで下ることは確かと見られる。本稿では、これらの代表的事例である群馬県大屋 H 遺跡・内堀遺跡群（下繩引 II 遺跡）における一括資料を具体的に見ていただきたい。

### 1) 群馬県桐生市大屋 H 遺跡【加部 1998・2000】

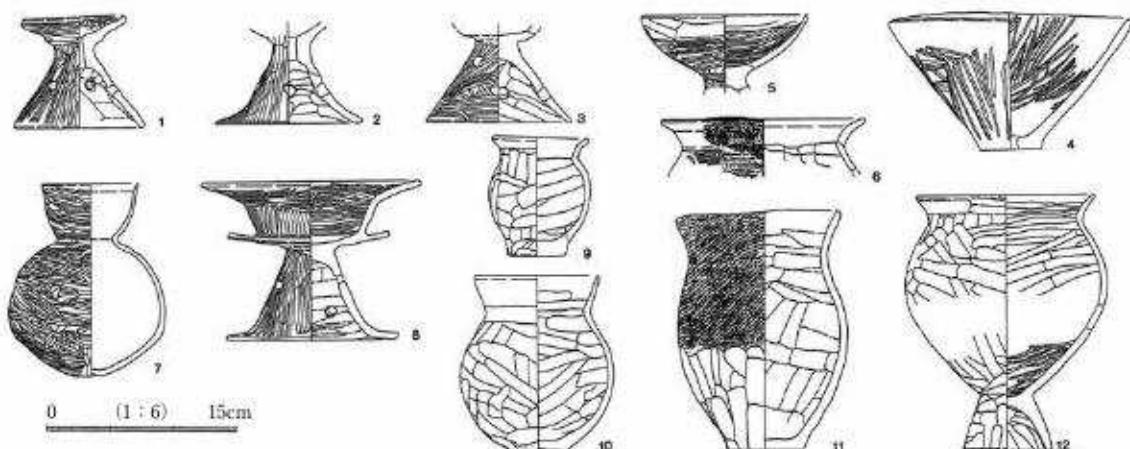
群馬県桐生市（旧新里村）大屋 H 遺跡では、居館を巡る溝から出土した一括資料が注目される（第 29 図）。縄文が施文される赤井戸式土器の甕と畿内系のタタキ甕（6）・東海系のひさご壺（7）・小型器台（1・2）・高杯（3）が同レベルで出土している。また、建物内においても、赤井戸式土器に北陸系の結合器台（8）等の外来系土器が伴う。赤井戸式土器は、弥生時代後期まで遡るとされていた【小島 1983】が、最古とされる事例にも古式土師器が共伴しており、弥生時代まで遡るか疑問視されている【加部 1998】。共伴する外来系土器について、東海地方の編年関係にあわせると廻間 II 式（新潟シンボ編年 5・6 期併行）に相当するとされている。図化されている小型器台・結合器台については、正尺 C 遺跡 SZ439（第 4 図）・SI36（第 6 図）に共通性を見出すことができ、6 期に併行すると見ることができよう。現在、提示されている資料を総体的に見れば、6 期前後の一括資料と考えたい。

### 2) 群馬県前橋市内堀遺跡群（下繩引 II 遺跡）【園部ほか 1989、加部ほか 1993、前原 1991、加部 2000】

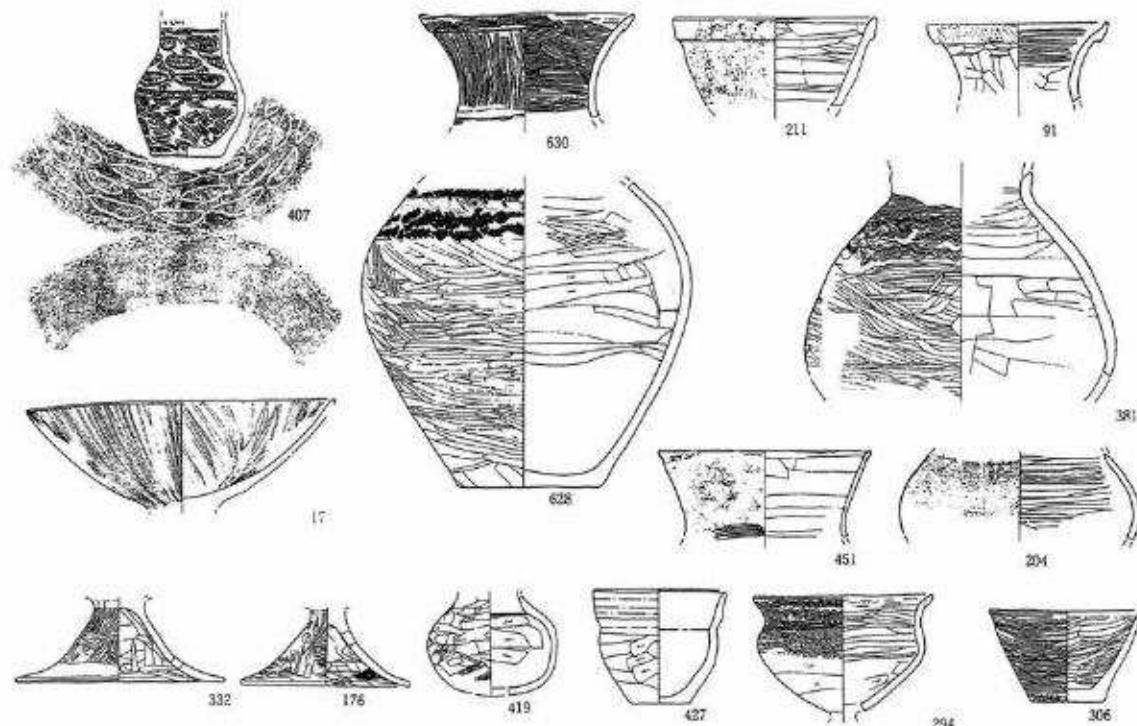
内堀遺跡群（下繩引 II 遺跡）では、浅間 C 軽石（As-C）純層を覆土に含む竪穴建物と、降灰後に構築されたテフラを含まない竪穴建物が認められる。As-C の降下時期は、新潟シンボ編年 5～7（古）期に併行すると考えられ、6 期前後に位置付けられると見られる【若狭・深澤 2005】。As-C は、新潟シンボ編年との対応関係を探る上で重要な指標の一つとなる。

竪穴建物内からは豊富な土器群が出土しており、「東北系・北陸系・東関東系・東海系の土器が、在地の弥生系譜の土師器と共に関係にある。特に、H-15（第 30 図）出土の壺 407 は胴部の磨消縄文や交互刺

突文の特徴は「弥生式土器集成」のPL-23.No.16に掲載されている白河市天王山遺跡出土品に器形及び模様構成が酷似しており、天王山式土器の範疇で捉えられる」[加部2000]とされている。交互刺突文が退化・形骸化しており、「天王山式」の範疇に入るか否かの判断には問題も残るが、その系譜にある土器であると考えられる。また、横長の楕円形区画が設けられる在り方は、孤崎遺跡1号住居址出土土器（第16図125）や稻荷塚遺跡SI01出土土器（第24図2）に共通する。稻荷塚遺跡例はハケメ調整の土器であり、単純に比較することはできないが、器形や文様帶においても共通性が認められる。第21図に示したとおり、樽式系土器が存在すること、器台の脚部が大きく開く状況を〔若狭・深澤2005〕と対比すれば、5～7（古）期（6期頃）に位置付けられる。覆土にはAs-Cが認められることからも、6期前後に位置付けることが妥当と考えられる。



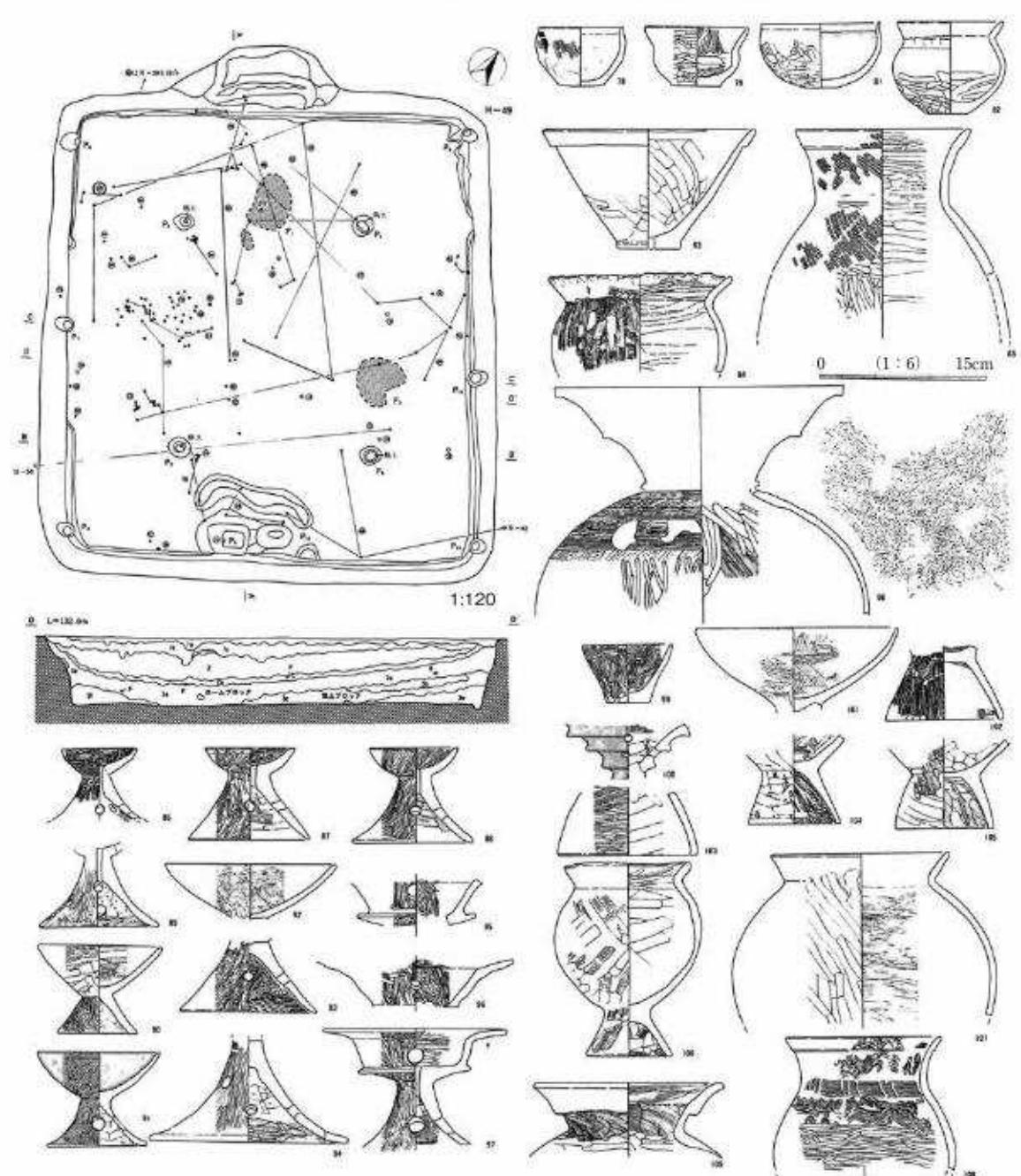
第29図 大屋H遺跡出土土器



第30図 下繩引II遺跡H-15住居出土土器

竪穴建物 H-49においては、多系統の土器が共存する（第31図）。84は口縁端部の作りが複雑で弱く波打ち、口縁部には指頭圧痕が残る近江系長浜甕 F類であり、5期以降に認められるとされる。85は在地の赤井戸式土器である。口縁部から胴部上半に縄文施文が認められるが、頸部下半は無文帯となる。胴部下半はミガキ調整される。95～97は北陸地方南西部が分布の中心となる装飾器台 E類であり、5～8期頃に認められるとされる。98・109は畿内系の二重口縁壺 N類である。108は在地の樽式系である。[若狭・深澤 2005]と対比すれば、5～7（古）期（6期頃）に位置付けられる。覆土下半には As-C が多く含まれており、6期前後に位置付けることが妥当と考えられる。

竪穴建物 H-50においても、多系統の土器が共存する（第32図）。縄文施文土器は赤井戸式（119・120）のほかに東関東系土器（124）も認められ、ここに樽式系（121・125・126）、S字状口縁台付甕と考えら



第31図 下縄引Ⅱ遺跡H-49住居出土土器



第32図 下縄引Ⅱ遺跡H-50住居出土土器

れる胴部片が伴うという〔前原 1991〕。脚部が大きく開く高杯（113・117）、小壺（115）、器台（114）の形態を〔若狭・深澤 2005〕と対比すれば、5～7（古）期（6期頃）に位置付けられる。覆土が、As-Cで覆われていることからも、6期前後に位置付けることが妥当と考えられる。

## 5. 正尺C遺跡における縄文施文土器の編年的位置付け

### （1）新潟シンボ編年5期以降の縄文施文土器

正尺C遺跡出土の縄文施文土器については、出土状況の検討から新潟シンボ編年6期を主体とする古墳時代前期初頭の土器に伴うと考えた。むしろ、共存する土器と異なる年代観を与えることは、不合理と考えられる。このような事例を、従前の編年観から排除することは容易である。しかし、新潟県域及び会津地方、系譜は異なるものの北関東地方における共伴事例を如何に説明すべきであろうか。もはや異時期の混入という説明だけでは解決できない。

そこで、再び隣接地域の共伴事例を確認したい。新潟県域においては、狐森B遺跡・狐崎遺跡の遺構出土資料を見る限り5・6期頃まで縄文施文土器が残存する可能性が極めて高い。縄文施文土器を「天王

山系」としたものの、変化に乏しい器形や文様帶が退化・形骸化する様子からは、その終末期を示すと考えられた。会津地方の稻荷塚遺跡・中西遺跡においては、少なくとも5・6期、場合によっては7期まで縄文施文土器が残存すると見られた。このうち一部は、共伴関係を慎重に評価すべきものも含まれるが、共伴関係を覆すことが難しい事例もある。混在の可能性が極めて低い正尺C遺跡の事例は、これらの共伴関係を支持する資料と言える。また、北関東地方においても、外来系土器を指標に新潟シンボ編年と対応させれば、少なくとも6期頃まで縄文施文土器が伴うことが明らかである。このことは、6期頃に噴出した浅間C軽石(As-C)を指標に裏付けることができる。

一方、山形県に目を転ずると捉え方が異なる。植松曉彦は山形県内における弥生時代後期～古墳時代前期の変遷観を述べる中で、4期併行段階に天王山式に後続する土器群が存在することを指摘した。そして、その特徴を「細い沈線で連弧文や羽状の撫糸文等施文。」[植松 2005]とした。特に、細い沈線による連弧文の存在は、正尺C遺跡の特徴と共に通するが、植松は編年的により古い段階に位置付けている。同様の形態が長く継続すると理解するのか、編年の齟齬と理解するのか、筆者は判断することができない。しかし、新潟シンボ編年を基軸に考えることで、地域間の編年上の対比を行うことができる。今後、地域を超えて等質的に検討されることを期待したい。

なお、縄文施文土器が出土した遺跡に墓域が伴うことが特徴的である。孤森B遺跡・中西遺跡では墓坑?、稻荷塚遺跡では周溝墓から縄文施文土器が出土している。正尺C遺跡においては、性格は明らかでないものの方形周溝墓状の遺構が検出されている。墓域を伴う当該期の集落が少ない現状において、縄文施文土器の出土率の高さは特筆すべきであろう。このことが意味することは明らかでないが、今後、類例の増加に注視する必要がある。

## (2) 文様帶の比較

文様帶構造を他遺跡と比べると、いくつかの共通点を見出すことができる(第33図)。鈴木正博による文様帶[鈴木 1976](第10図)にしたがって記述すると、I文様帶では口縁端部に刻みが施されることがあるものの、基本的には縄文が施文されるのみである。IIa文様帶は無文である。II文様帶が消滅し、III文様帶上部の一部には連弧文が施される事例がある。しかし、弥生期のそれと比べると細く、貧弱である。また、胴部最上段に施された附加条は、装飾的な効果も考慮されている可能性が高く、III文様帶上部に対比して理解できる可能性がある。III文様帶下部では、縄文が施文される。縄文の原体は弥生期からの伝統を引き継ぎRLに偏重するが、LRも認められる。

このような文様帶構造を会津地方の天王山系(稻荷塚遺跡SZ02出土資料)、北関東地方の赤井戸式(下縄引II遺跡XII H-11号住居出土資料)と比較してみたい(第33図)。I文様帶は縄文施文(口縁端部に刺突文を施すことあり)、IIa文様帶は無文であるところまでは共通する。III文様帶上部は、正尺C遺跡では連弧文や附加条による施文、稻荷塚遺跡では条が縱走する縄文、下縄引II遺跡では縄文である。III文様帶下部は、正尺C遺跡では縄文、稻荷塚遺跡では条が横走する縄文、下縄引遺跡ではミガキ調整である。稻荷塚遺跡例のように、条の方向を変えながら文様帶を形成する事例は、天王山系土器にしばしば認められる。このように手法は異なるものの、胴部上半と下半とで、施文・調整が異なることが明らかである。このような相違を文様帶と呼ぶかという問題はあるとしても、東北日本で伝統的に保持してきた文様帶の基本構造を反映するものと考えられ、その終焉を示す事象と評価したい。

### (3) 折衷土器の存在

天王山系土器が終焉を迎えるにあたっては、折衷土器が出現する。越後では渡邊朋和によって「八幡山式」が設定された〔渡邊 2001〕が、会津地方でも良好な資料を認めることができる。第 34 図に稻荷塚遺跡 SI06 から出土した器形が良く似た土器を提示した。いずれも有段口縁で細い頸部を有することを特徴とする器形であるが、施文方法が異なり、比較検討する上で貴重な資料と言える。

A は、沈線や刺突により文様が施されるものである。I 文様帶には沈線による文様、口頸部界に刺突文が施される。刺突文は、交互刺突文が退化・形骸化したものと評価でき、弥生期のものとしても後期後半段階に位置付けられよう。II a 文様帶は無文、頸胴部界に 1 条の沈線を引いて、その下位に III 文様帶上部が形成される。内外面にはハケメ調整が認められ、土師器との折衷的な様相をうかがい知ることができる。広義の「天王山系」の範疇に含めることができる土器である。

B・C は、外面：縄文施文、内面：ハケメ調整の土器である。B は I 文様帶に縄文、II a 文様帶は無文、III 文様帶は縄文である。C は B と良く似るが、I 文様帶が縄文施文でなくハケメ調整される点が異なる。

D は、全面ハケメ調整の土器である。I 文様帶は横方向、II 文様帶は横方向、III 文様帶は縦方向のハケメ調整認められ、胴部下半ではハケメの方向が斜めになる。

これらを単純に時間軸に置き換えるなら、A → B → C → D という変化の過程をたどることができよう。しかし、これらは共伴関係にある。古相を示す個体と、新相の特徴を取り込んだ個体が共存することは、土器変遷における重要な転換期を反映する事象といえよう。そして、こうした折衷土器を介して、天王山系土器は終焉を迎えていくのである。

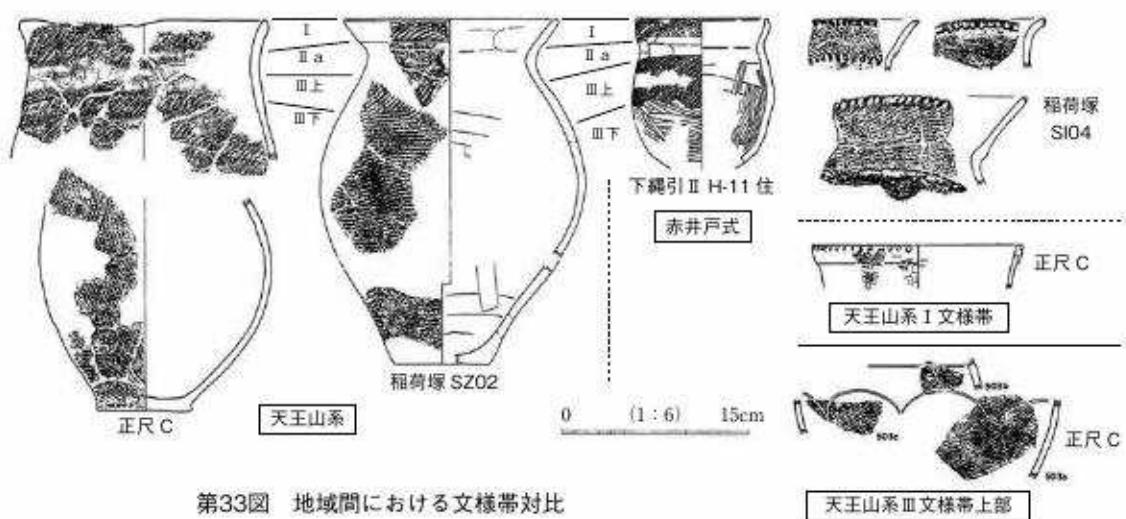
### (4) 正尺 C 遺跡出土土器の評価

正尺 C 遺跡出土の縄文施文土器は、発掘調査直後に話題となつたが、報告書刊行後にその位置付けについて具体的に言及したのは、管見の限り野田豊文のみである。野田は、「屋敷段階よりも新しい段階の存在については、杵ガ森古墳・稻荷塚遺跡や正尺 C 遺跡の成果の中で、周溝内や同一層位から古式土師器とともに検出されており、広義の天王山式土器の新しいものは古墳時代初頭まで下る可能性が高い。しかし、この点については慎重を要する。」〔野田 2010〕とした。縄文施文土器が、古墳時代初頭まで残存することを明言した点において注目される。そして、縄文施文土器群の特徴を次のように記載した。

「器種は壺・甕のみで、器形は天王山式と同様である。口縁部に刺突列や押圧列をもつものがあるが、基本的に素文で、LR 縄文、撚糸文、付加条、羽状撚糸文などが施される。多段にわたる文様帶や胴部上半文様帶に磨消縄文をもたない土器群を『杵ガ森段階』とする。現在のところ、このような条件を満たすものが屋敷段階に後続する土器群に相当すると考える。」

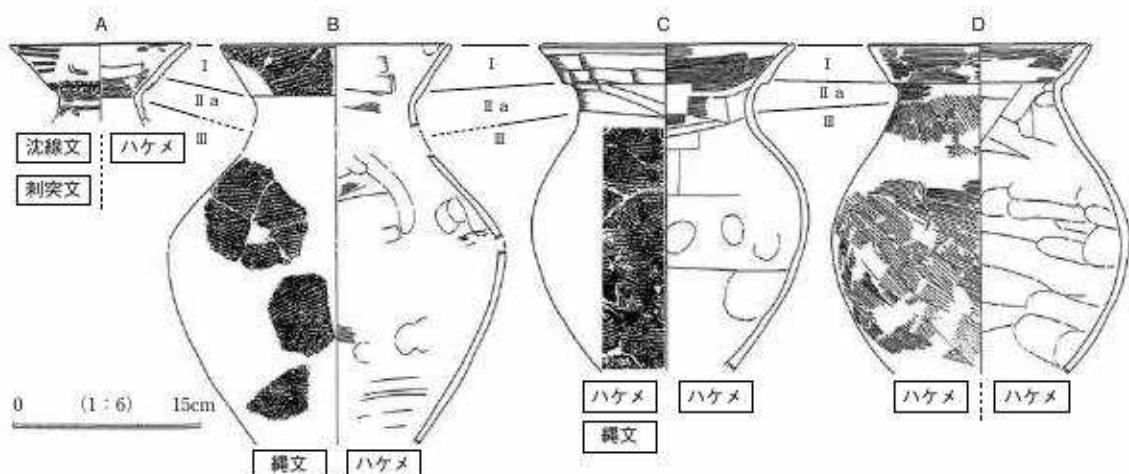
そして、正尺 C 遺跡の縄文施文土器について「型式学的特徴は、滝ノ前段階というよりは、八幡山 B 群 2 期新以降に相当する。この土器群が古墳時代前期、現在の状況では、6 期までは存在するのは、確かのことである。杵ガ森古墳例からも 7 期ぐらいまでは、縄文の施文された土器が含まれる可能性が強い。ここでは、福島県域の最新段階を杵ガ森段階としたが、正尺 C 遺跡出土土器は、県内の天王山式土器の終末を示す資料であるといえる。」とした〔野田 2010〕。

野田の指摘は、従前の枠組みを再編する上で極めて大胆な論説である。まだ、公表されて間もないため、反応は聞き及んでいないが、今後の研究に向けて大きな転換点となる論文と評価したい。弥生時代からの系譜を踏む天王山系土器が、地域的に古墳時代前期前半まで残存したとする考えは、ごく自然な理解と考えられる。

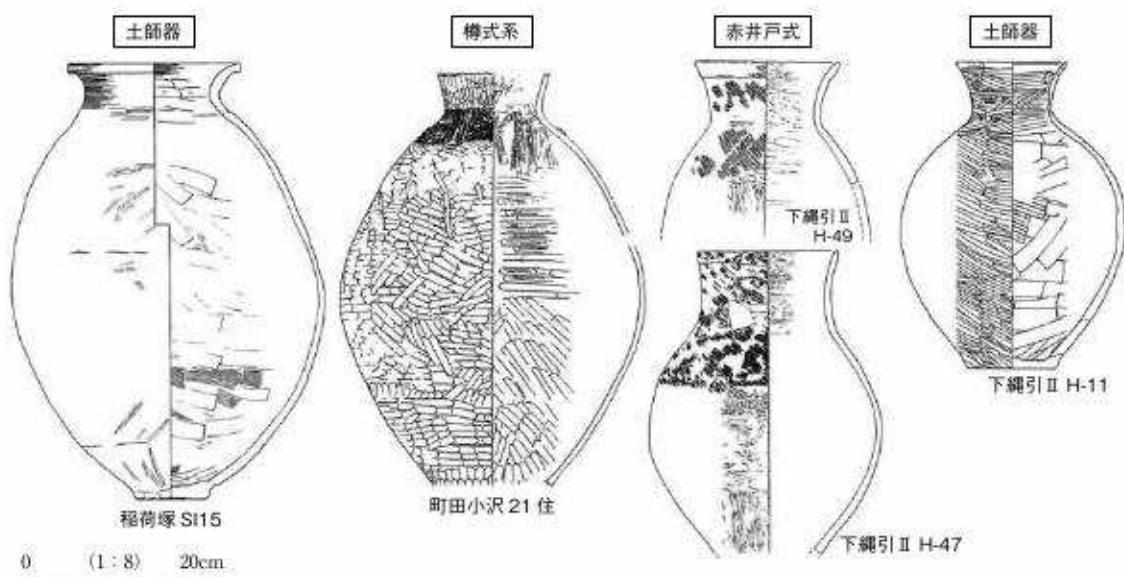


第33図 地域間における文様帶対比

天王山系 III 文様帯上部



第34図 稲荷塚遺跡SI06出土の折衷土器



第35図 長胴甕の系譜

えられる。古墳時代の幕開けとともに、天王山系土器が突如として姿を消したのではなく、漸移的に消滅していくのは自然の成り行きである。弥生時代後期には、その兆候を読み取ることができ、新潟県域では東北系土器の比率が暫時、減少する様子を理解できる。また、北陸系と東北系の折衷的な土器の存在も、その兆候のひとつといえよう。

このような背景のもと、正尺C遺跡が所在する阿賀北地域では、古墳時代へ移行する過程で、天王山系土器が残存したと理解したい。すなわち、東北系（天王山系）の文化圏にある地域では、古式土師器と天王山系土器が共存する時期があったと考えるべきであろう。天王山系土器は、本稿における共伴・共存事例の検討から、新潟シンボ編年6期頃までは確実に残存する。それ以降の資料については共伴事例がなく明瞭でないが、会津地方では7期頃までは残存する可能性もある。特に、大塚遺跡の状況を勘案すれば、新潟県域でも7期頃まで残存した可能性を想定しておくべきであろう。しかし、正尺C遺跡より北側に所在する6～7期の西川内南遺跡〔野水2005〕等においては、縄文施文土器は出土しておらず、課題を残す。これらの状況を総合すると、6期には天王山系土器が明らかに存在し、7期になると共存関係が不明瞭となり、8期以降にまで残存する明らかな事例はない。したがって、おおむね古墳時代前期前半（6～7期）で天王山系土器が終焉を迎えると考えたい。

一方、西方に目を向けてみたい。久田正弘は、北陸地方南西部（石川県・富山県）における天王山式土器の集成を行い、猫橋式後半（1期）～法仏I式（2期）と天王山式後半が共伴する可能性が高いとした〔久田2009〕。すなわちこの記述は、弥生時代終末期以降には天王山式土器が存在しないことを意味する。そして、北陸地方南西部においては、天王山系土器が新潟県北部地域より早く姿を消すことが分かる。このような変化は、弥生土器から古式土師器へのスムーズな移行を示すのであろう。

正尺C遺跡は、阿賀野川水系の旧新井郷川の岸辺に立地する。阿賀野川は、時代を超えて新潟平野と会津盆地をつなぐ大動脈である〔若崎・小林2006〕。したがって、考古資料において新潟平野と会津盆地で共通した特徴を見出せることは、ごく自然な事象といえる。正尺C遺跡と会津地方の遺跡とは、直線距離で70kmほど離れているが、阿賀野川の水運を利用すれば決して遠く離れた地とはいえない（第1図）。むしろ、北陸系の土器が会津地方で出土していることを勘案すれば、地域間の関係を積極的に捉えるべきである。先述のとおり、古墳時代前期の土器に伴う縄文施文土器は、弥生時代後期からの系譜にある天王山系土器の終末期を示すと考えられる。特に、天王山系の文化圏にある阿賀北地域においては、同様の遺跡が検出される可能性が高く、類例の増加に注視する必要がある。

最後に、新潟シンボ編年という時間軸が設定されていたからこそ、本稿の検討が可能であったことを強調しておきたい。定点観測の積み重ねという前提があってこそ、本稿は成し得たといえる。どの時代を検討する場合も共通する問題であるが、地域ごとでそれぞれの編年が設定されており、対応関係の整理にひと苦労する。そのような意味においては、2度にわたる新潟シンポジウムで地域間の対応関係が整理されたことによる効果は絶大といえる。編年・分類については、やや抽象的な形態表現も目につくが、近年、滝沢規朗により具体的な解説が加えられ〔滝沢2005b・2006・2007・2010a・b等〕、新潟シンボ編年の有効性が改めて認識されつつある。今後は、各期の良好な一括資料がすべて揃った段階で、改めて検証することが望まれよう。

## おわりに

中村五郎は、杵ガ森古墳・稻荷塚遺跡出土の縄文施文土器について、次のように結論付けている。

「遺構ごとの土器を詳細に観察すると、各遺構により一定の特色を持っている。文様や縄文の特色からそれら遺構別に前後関係の試論も可能である。しかし、ここでの議論の前提として、土師器の型式区分のために発掘時に特段の所見がなければ、作業仮説として遺構ごとに一括資料と一般に理解している。このような限界が存在することを勘案すれば、ここでいたずらに細分するよりも、追加資料の発見の際に検討することが正しいと考える。ここでは SI01・04・06 の各住居跡発見の文様や縄文を持つ土器を、ひとまず会津盆地で最古の土師器の段階としての理解にとどめることが妥当であろう。」[中村 1995b]

中村の記述は、資料操作の適切な過程を示したうえで、然るべき結論を見出したと言える。そして、中村の言う「追加資料の発見」の一つが正尺 C 遺跡出土の土器なのである。正尺 C 遺跡における縄文施文土器を、弥生土器の混在としまえば、研究の新たな一步を踏み出すことができない。しかし、ここで問題の重要性を改めて指摘することで、再び、研究の俎上に上げることができる。

筆者は、糸魚川市内の発掘調査で、同様の状況に直面したことがある。古墳時代前期の遺跡を発掘調査した際、多数出土した剥片石器の位置付けについて判断に苦しんだ。共伴遺物からは古墳時代前期の石器（打製石斧・横刃形石器）と評価せざるを得なく、そのように報告した〔加藤 2008〕。これに対しては異論もあるようだが、紙上の反論は今のところ見られない。実は、北陸地方の古墳時代前期の遺跡においては、打製石斧（石鍬）が多数出土する事例がある。報告書をどう読んでも古墳時代前期の遺構からまとまって出土しているのであるが、その重要性が適切に記載されていない事例が散見された。

発掘調査で異質な遺物が出土したとき、無理な型式学的操作を行う前に、まずは出土状況を吟味すべきである。しかし、このことを検討できるのは発掘調査時のみである。発掘調査担当者は、遺物の出土状況を精緻に観察し、報告書にはその情報を過不足なく記載しなくてはならない。その記載によって導き出された結論が、後に誤りであることが明らかとなったとしても、それは調査・研究の進展によるものである。何も恥じることではない。遺構・遺物に真正面から向き合い、調査所見を真摯に評価することこそが、発掘調査担当者の責務なのである。至極当然のことではあるが、正尺 C 遺跡の「縄文施文土器」の評価をめぐって、改めて痛感することになった。

## 謝辞

門外漢の筆者が本稿を執筆するにあたっては、滝沢規朗氏・野田豊文氏から後押ししていただきました。そして、完成まで程遠い原稿に目を通していただき、適切な助言をいただきました。記して深くお礼申し上げます。また、本稿は 2010 年 12 月 11 日に開催した「新潟県考古学会 2010 年度第 2 回研究発表会」の発表内容をもとにしています。当日、会場にて拙い発表に長時間お付き合いいただき、貴重なご教示いただいた 20 名の皆様に深くお礼申し上げます。

## 引用・参考文献

- 青山博樹 2004 「底部穿孔壺の思想」『日本考古学』第 18 号 日本考古学協会  
青山博樹 2005 「会津における弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年」「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」新潟県考古学会  
赤塚次郎 1990 「V 考察 1 週間式土器」「廻間遺跡」愛知県埋蔵文化財センター

- 猪狩忠雄 2000 「福島県における弥生後期の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年〔第2分冊〕』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
- 石川日出志 2000 「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古』第11号 新潟県考古学会
- 石川日出志 2004 「弥生後期天王山式土器成立における地域間関係」『駿台史学』第120号 駿台史学会
- 伊藤秀和 2000 「丸湯遺跡・新通遺跡」新潟県加茂市教育委員会・山武考古学研究所
- 入澤雪絵・加部二生 2000 「群馬県域における弥生時代後期の概要」『東日本弥生時代後期の土器編年〔第1分冊〕』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
- 岩崎卓也 1963 「古式土師器考」『考古学雑誌』48巻3号 日本考古学會
- 植松暁彦 2005 「山形県の弥生後期～古墳時代前期の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 宇佐美篤美・坂井秀弥 1987 「西谷遺跡」『柏崎市史資料集 考古篇1』新潟県柏崎市史編さん室
- 尾崎高宏 2001 「正尺A遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第107集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 柿沼幹夫 1982 「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第5号 土曜考古学研究会
- 春日真実 2008 「六反田南遺跡・前波南遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第202集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2001 「豊栄市正尺C遺跡の調査」『新潟県考古学会第13回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 加藤 学 2008 「姫御前遺跡I」新潟県埋蔵文化財調査報告書第184集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金子拓男 1981 「狐崎遺跡」『三条市史 資料編1 考古・文化』新潟県三条市
- 金子拓男 1983 「繕立遺跡発掘調査報告書」新潟県黒埼町教育委員会
- 金子拓男・坂井秀弥 1983 「高塙B遺跡発掘調査報告書」『西山町文化財調査報告書第1集』新潟県西山町教育委員会
- 加部二生・前原 豊 1993 「内堀遺跡群（下縄引遺跡）」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 加部二生 1998 「群馬県大屋H遺跡の調査」「古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題」東日本埋蔵文化財研究会群馬県実行委員会・群馬県考古学研究所
- 加部二生 2000 「内堀遺跡群（下縄引遺跡）」「大屋H遺跡」『東日本弥生時代後期の土器編年〔第1分冊〕』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
- 川村浩司 1993a 「北陸北東部における古墳出現前後の土器組成」『環日本海地域比較研究』第2号 新潟大学環日本海地域比較史研究会
- 川村浩司 1993b 「北陸北東部の古墳時代出現前後の様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相－関川右岸下流域を中心に－」『上越市史研究』第5号 新潟県上越市
- 木本元治 2009 「南東北の弥生時代後期の土器編年－会津地域を中心にして－」『福島考古』第50号 福島県考古学会
- 楠 正勝 2003 「装飾器台の成立と展開」『庄内土器研究』26 庄内土器研究会
- 熊野正也 1996 「吉ヶ谷式土器」『日本土器事典』雄山閣
- 小島純一 1983 「赤井戸式土器について－赤城山麓の後期弥生土器の一様相－」『人間・遺跡・遺物』文献出版
- 小島純一 1996 「赤井戸式土器」『日本土器事典』雄山閣
- 駒形敏朗ほか 1987 「横山遺跡」新潟県長岡市教育委員会
- 坂井秀弥・川村浩司 1993 「古墳出現前後における越後の土器様相－越後・会津・能登－」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』平成2年度文部科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書（研究代表者 甘粕健）
- 坂井秀弥・金子正典・川村浩司 1993 「三条市狐崎遺跡出土の古式土師器について」『新潟県考古学会連絡紙』第15号 新潟県考古学会
- 鈴木正博 1976 「十王台式理解のために(2) - 前号の追加1とリュウガイ第IV群a類土器について-」『常総台地』8 常総台地研究会
- 千田一志 2009 「福島県会津盆地における弥生時代後期から古墳時代前期までの様相」『福島考古』第50号 福島県考古学会
- 園田守央・加部二生 1989 「内堀遺跡群II」群馬県前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 滝沢規朗 2005a 「土器の分類と変遷－いわゆる北陸系を中心に－」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2005b 「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」の字甕について」『三面川流域の考古学』第4号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2006 「口縁端部上端がつまみ上げられた有段高杯について－古墳出現期に認められる一タイプの雜感－」『新潟考古学談話会会報』第31号 新潟考古学談話会
- 滝沢規朗 2007 「新潟県におけるタタキ甕・布留式系甕について」『研究紀要』第5号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 滝沢規朗 2009 「山元遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第199集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2010a 「新潟県弥生時代後期における北陸北東部系の高杯・器台について」『三面川流域の考古学』第8号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2010b 「古墳出現前後に盛行する中山南型式の高杯について - 北陸北東部固有の大型・有稜・身の浅い高杯についての一試論 - 」『新潟考古』第21号 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2010c 「山元遺跡と北陸の弥生後期」『第5回 年代測定と日本文化研究 シンポジウム予稿集』シンポジウム事務局・株式会社加速器分析研究所
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2007 「法仏式と月影式」『石川県埋蔵文化財情報』第18号 財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 田中耕作・坂野井絵里 2007 「狐森B遺跡」新発田市埋蔵文化財調査報告第34 新潟県新発田市教育委員会
- 辻 秀人 2003 「東北南部の古墳出現期の様相」「東日本における古墳出現過程の再検討」日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 鶴巻康志・磯部保衛 1990 「岩船郡神林村衣田遺跡の弥生土器と土師器」『北越考古学』第3号 北越考古学研究会
- 土橋由理子 2006 「馬見坂遺跡・正尺A遺跡・正尺C遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第165集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 外山和夫 1996 「槙式土器」「日本土器事典」雄山閣
- 中村五郎 1976 「東北地方南部の弥生式土器編年」「東北考古学の諸問題」東出版寧楽社
- 中村五郎 1995a 「弥生土器・続縄文土器・古式土師器」『福島考古』第36号 福島県考古学会
- 中村五郎 1995b 「文様や縄文を施す土器」「杵ガ森古墳・稻荷塚遺跡発掘調査報告書」福島県会津坂下町教育委員会
- 中村五郎 1995c 「利根川上流域での古墳時代移行期前後の土器編年をめぐって」「杵ガ森古墳・稻荷塚遺跡発掘調査報告書」福島県会津坂下町教育委員会
- 野田豊文・野水晃子 2005 「阿賀北地域の様相」「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」新潟県考古学会
- 野田豊文 2010 「新潟県の弥生時代後期後半期の東北系土器群考 - 村上市淹ノ前遺跡出土土器群の検討から - 」『新潟考古』第21号 新潟県考古学会
- 野水晃子 2005 「西川内北遺跡・西川内南遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第146集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 久田正弘 2009 「弥生時代の東日本系土器集成 - 栗林式・天王山式土器を中心に - 」『石川考古学会誌』第52号 石川考古学研究会
- 深澤敦仁 1999 「「赤井戸式」土器の行方」「群馬考古学手帳」9 群馬土器観会
- 深澤敦仁 2000 「群馬県出土の「赤井戸式」土器について」「東日本弥生時代後期の土器編年〔第1分冊〕」東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会・福島県立博物館
- 前原 豊 1991 「内堀遺跡群IV」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 前山精明 2002 「南赤坂遺跡」新潟県巻町教育委員会
- 水澤幸一 2006 「大塚遺跡第4次」胎内市埋蔵文化財調査報告書第2集 新潟県胎内市教育委員会
- 吉田博行 1995 「杵ガ森古墳・稻荷塚遺跡発掘調査報告書」福島県会津坂下町教育委員会
- 吉田博之 1991 「桶渡台場遺跡」「若宮地区遺跡発掘調査報告書」福島県会津坂下町教育委員会
- 吉村光彦 2002 「大塚遺跡第2次」中条町埋蔵文化財調査報告第23集 新潟県中条町教育委員会
- 若狭徹・深澤敦仁 2005 「北関東西部における古墳出現期の社会」「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」新潟県考古学会
- 若崎敦朗・小林隆幸 2006 「新潟の舟運～川がつなぐ越後平野の町・村～」新潟市歴史博物館
- 和田 聰 1990 「宮東遺跡・中西遺跡・男塙遺跡・御櫻神塚」福島県会津坂下町教育委員会
- 渡邊朋和 2001 「八幡山遺跡発掘調査報告書」新潟県新津市教育委員会

# 上越市岩ノ原遺跡出土の古代土器について

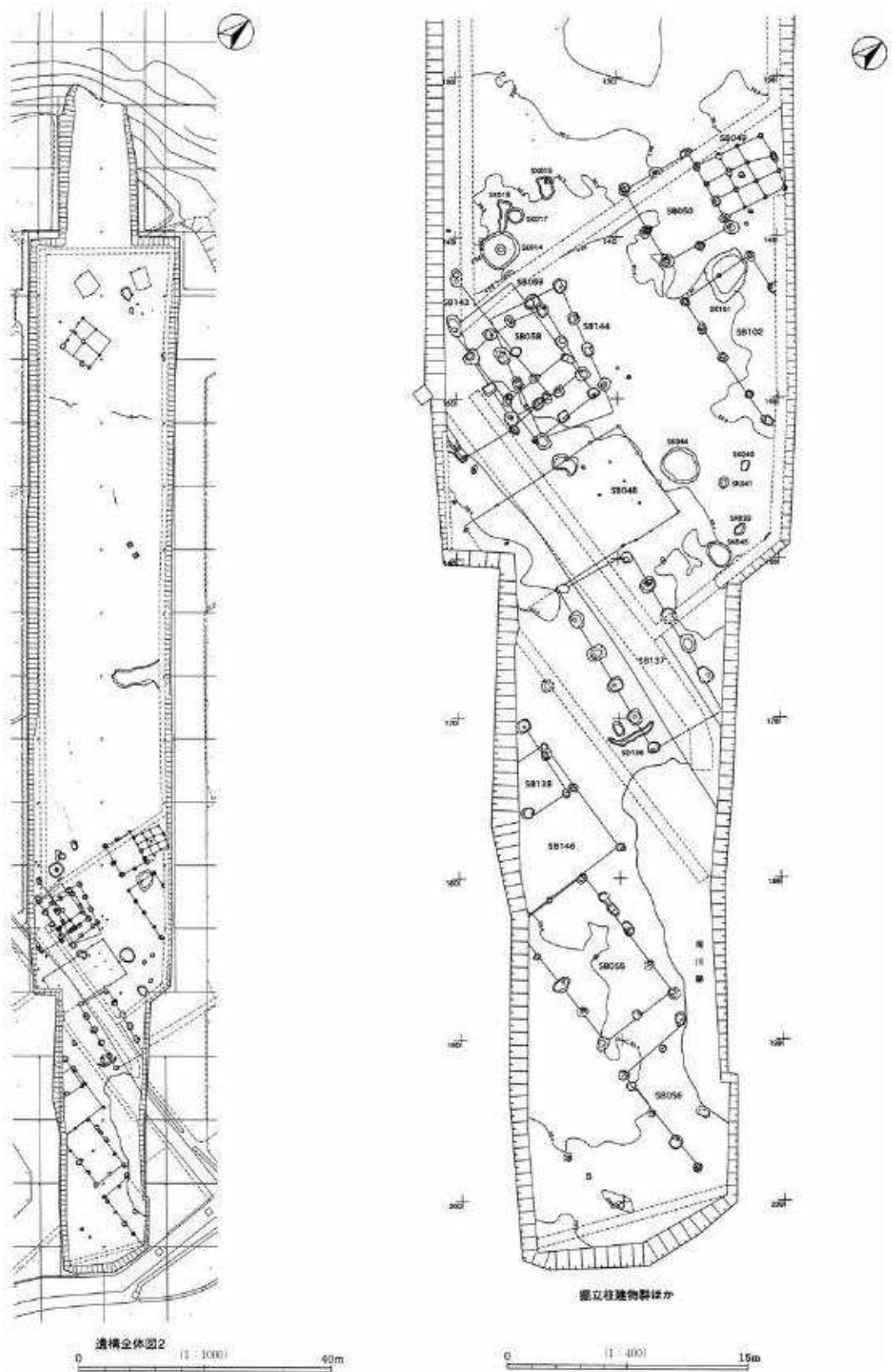
春日真実

## はじめに

上越市岩ノ原遺跡は、上越市大字向橋字内沖 303 番地 1 ほかに所在し（第1図）、北陸新幹線建設に伴い、平成 18 年に 7,500m<sup>2</sup> の本発掘調査が行われた（註1）。調査の結果、8・9世紀を中心とする土師器・須恵器が出土し、掘立柱建物 16 棟や土坑・井戸などが検出された（第2図）。土師器・須恵器には「石井庄」・「石井」・「石庄」・「石」などの墨書き土器があり、大治五年（1130）東大寺諸荘文書并絵図目録等に見られ、天平勝宝五年（753）には成立していた東大寺領石井庄の庄所であることが明らかになった。発掘調査報告書はすでに刊行されており〔高橋・金内・田中ほか 2008〕、報告書の中で金内 元が出土土器の編年的位置付け検討し〔金内 2008〕、田中一穂が墨書き土器・木簡などの出土文字資料の考察を行い〔田中 2008〕、高橋保雄が建物跡の変遷（案）を示すとともに、遺跡の歴史的な意義づけを行っている〔高橋 2008〕。金内・田中・高橋の論考は、それぞれの分野の研究の現状を踏まえ、岩ノ原遺跡出土の遺構・遺物を詳細に検討した優れたものである。報告書が刊行され約 3 年が経つが、これらの論考に関する明確な反論・異議は提出されていない。異論をはさむ余地はあまりないようにも思えるが、以下では、1 金内や田中とは異なる視点で墨書き土器を含む土器群の編年案を示すとともに、周辺地域との土器群との対比から編年案と既存の土器編年との対応関係や曆年代を検討し、2 1 を踏まえ掘立柱建物の時期や変遷を明らかにするよう努め、3 岩ノ原遺跡の性格について私見を述べ、4 岩ノ原遺跡と周辺の遺跡との関連についても簡単に触れ、高田平野の古代集落を考える際の基礎とした。



第1図 遺跡位置図(国土地理院 1:200,000高田 平成10年2月発行より作成)



第2図 岩ノ原遺跡の遺構(高橋2008より作成)

## 1 主要土器群の変遷と年代

### (1) 土器群の変遷案

岩ノ原遺跡からは量的にまとまりのある遺構出土の土器群が出土していない。しかし、報告書でも述べられているように、調査区北西部の遺物包含層から出土した土器群はある程度時期にまとまりがある〔金内 2008〕。また検討の結果、墨書きの記載内容や字体が、土器の年代と対応関係があることが推測できた。以下では、上記の視点から変遷案を述べる（第3図）。なお、須恵器の胎土の分類は表1に従う。

**岩ノ原①期** 金内が指摘するように調査区北西部（4～6 BC グリッド）から出土した土器は、ある程度の時期的なまとまりがあり、かつ岩ノ原遺跡から出土した古代の土器群の中では最も古い一群である。杯蓋は口径 15cm 前後のもの（65・66）と、13～14cm 前後のものがあり（71・72）、いずれも端部の屈曲は比較的長い。有台杯・無台杯の底部切り離し技法は回転窓切りが大半を占め、第3図に示した中では、底部外面に回転糸切り痕を残すものは 104、全面ヘラケズリを行うものは 105 のみで、他は回転窓切りである。有台杯は口径 11～12cm と小型のもの（103・104・107・118～120）のほかに、口径 14.4cm（101）、12.5cm 前後（106・105）の大型で浅身のものが確認できる。無台杯は口径 12.5cm 前後で、器高が低く底径が大きいものが多い。須恵器の胎土は C1 類を相当量含むことも、後述する土器群とは異なる点である。

**岩ノ原②期** S B 055 出土土器・「石井（庄）」墨書き土器は岩ノ原①期に後続する土器群と考える。S B 055 からはピット 07 を中心に 4 点の須恵器が出土している。4 点とも底部切り離し技法は回転糸切りである。3 は底部回転糸切りの無台杯としては底径が大きく、器高も比較的低い。4・5 は底部外面に「石井（庄）」の墨書きがある。底径は小さいが器壁は厚い。4 点の胎土はいずれも C3 類である。4・5 の他に「石井（庄）」と墨書きされた土器には口径 14cm と比較的大型で器壁の厚い杯蓋 69、底部外面に全面ヘラケズリを行う有台杯 104、擬宝珠形の摘みを持つ杯蓋 91・92、底部回転糸切りの無台杯 173・193 などがある。胎土はいずれも C3 類である。

**岩ノ原③期** 「石庄」・「石」墨書き土器の多くは、S B 055 出土土器・「石井庄」墨書き土器に後続する可能性が高い。141～144 の墨書きは比較的大きな文字で、「石」の2画目・「庄」の3画目の先端付近から強く外反し、「石」の4画目の屈曲がやや丸みを帯びる（以下石庄 a 類とする）。底部の器壁が薄く、外面中央に回転糸切り痕を残し、胎土はいずれも C3 類で、140 よりは後出的なものであろう。145・200 の墨書きは草書風の「石」を記す（以下、石庄 b 類とする）。2 点とも胎土は C3 類であり、145 は 141～144 と同様に底部外面中央に回転糸切り痕を残す。

第1表 須恵器の胎土

分類	特徴	須恵器窯
A 群	石英・長石・雲母など花崗岩起源の大粒の鉱物を多く含む粗い胎土。	岡賀北地域の須恵器窯の主体的に見られる。
B 群	軟質の白色小粒子を定量含む胎土。きめ細かい B 1 と、砂質の強い B 2 の2種がある。小型の有台杯・無台杯には B 1、その他の器種には B 2 が主に用いられる。	佐渡市（旧佐渡郡羽茂町）小治窯跡など佐渡市南西部の須恵器窯に見られる。
C1 群	小型の石英・長石を少量含む比較的精良で粘土質の強い胎土。	上越地域では高田平野東側の末野・日向窯跡群で主体的な胎土。他地域では新潟市東部の新津（丘陵）窯跡群、長岡市東部の東山（丘陵）窯跡群でも主体的な胎土である。岡賀北の須恵器窯の一部にも見られる。
C2 群	海綿骨針を定量含む砂質の強い胎土	長岡市西部の旧和鳥村から三島郡郡出雲崎町にかけて分布する西古志窯跡群や浩海川流域に点在する須恵器窯に主体的に見られる。
C3 群	砂質もしくはシルト質で均質な胎土	高田平野西側に点在する溝寺窯跡群などの須恵器窯に主体的に見られる。
D 群	その他	

**岩ノ原④期** 151・174・175・267の墨書は石庄 b 類に比べ文字が小さく、「石」の2画目・「庄」の2画目が直線的で、「石」の4画目が鋭角的に屈曲する（以下、石庄 c 類とする）。151・174・175はいずれも胎土B群の無台杯で、底部外面に回転斂切り痕を残す。器壁は比較的薄く、口縁部の外傾度は大きい。267は底径6.0cmの土師器無台碗であり、底部だけ比較すれば、後述する石庄D類の土師器無台碗と近似した形態である。

263～266の墨書は石庄 c 類と比較すると大きな文字で、「石」の1画目が比較的長く5画目が右上がりとなる。また田中一穂が指摘するように「庄」の4画目がマダレの中に収まる（以下、石庄 d 類とする）。4点とも口径12.5cm前後、器高3.5～4cm、底径6cm前後の近似した形態の土師器無台碗である。

岩ノ原遺跡出土の土器は、以上のような4期に大別して変遷を理解することも可能と考える。

## （2）編年の対応関係（第4・5図）

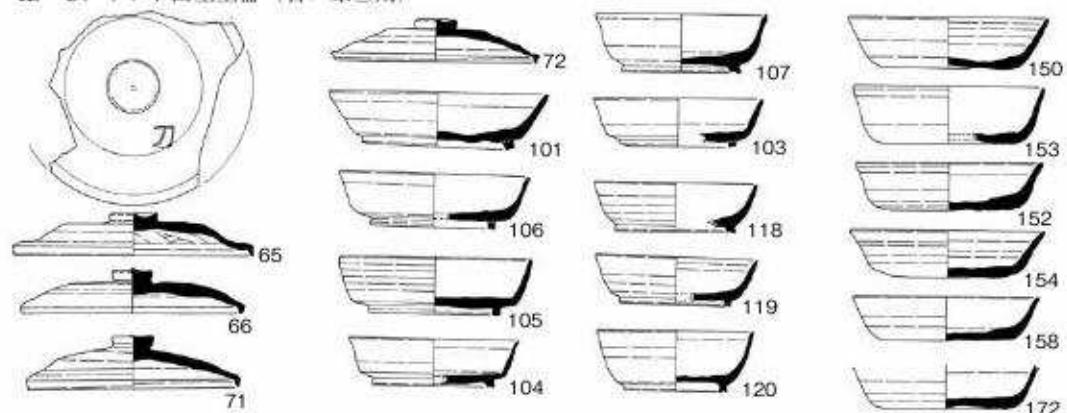
高田平野の8・9世紀の土器編年については、小島幸雄【小島ほか1983】や坂井秀弥【坂井1984】（以下、坂井編年とする）が土器編年を示し、その後笹沢正史【笹沢2002・2003a】（以下、笹沢編年とする）や小田由美子【小田2006】（以下、小田編年とする）らが編年を提示しており、筆者も編年案を示したことがある【春日1999・2005】。小島・坂井・笹沢・小田・筆者の編年（案）は細部に違いがあるが大枠で一致しているものと考えている。以下では（1）で検討した岩ノ原①～④期と既存の土器編年（案）との対応関係を検討するとともに、1で示した変遷が既存の土器編年（案）と大きく矛盾しないことを確認したい。

**岩ノ原①期** 66・71・101・103・105・106・150～152・159は、今池SK24・25出土土器（第4・26図）、岡原遺跡SK18出土土器（第4・30図）などに類似する資料がある。また、胎土C1群の須恵器の主要な供給先と推測できる高田平野東側の須恵器窯では末野窯跡採集資料（第24図）に類例がある。72・104・107・118・120などは滝寺1・7号窯出土土器（第21図）や今池SK21A・B出土土器（第4・27図）などに類似する資料が確認できる。今池SK24・25出土土器は坂井編年Ⅱ期、筆者の編年ではⅣ1期、笹沢編年Ⅲ期～Ⅳ1期に、岡原遺跡SK18出土土器は筆者の編年でⅣ1期、笹沢編年Ⅳ1期にそれぞれ位置付けている資料である。今池SK21A・B出土土器は、坂井編年Ⅲ期、筆者の編年ではⅣ2期、笹沢編年Ⅳ2期、小田編年1期に、滝寺1・7号窯出土土器は小田編年1期に位置付けている資料である。

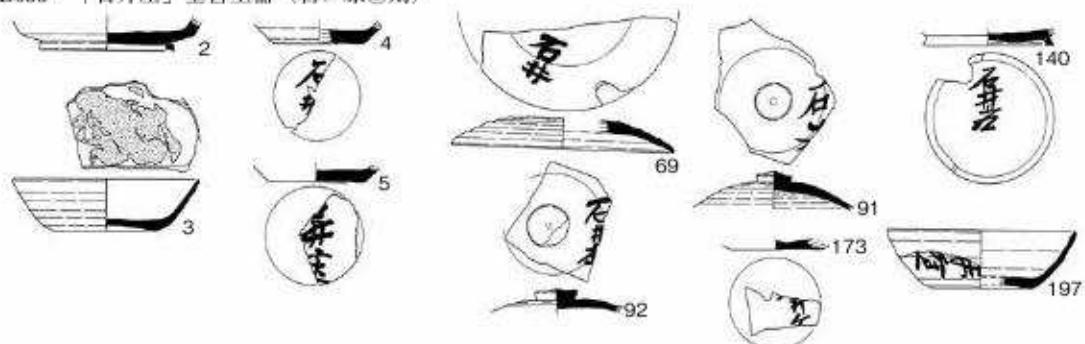
**岩ノ原②期** 須恵器のほとんどは胎土C3群である。杯蓋91・92、無台杯3～5、有台杯140などは胎土C2群の須恵器の主要な供給先と推測できる高田平野西側の須恵器窯では滝寺1・7・12・13号窯出土土器（第4・21図）に対比できる土器群であろう。また、今池遺跡群の中では、SK21A・B、SK102（第25図）、SK254（第26図）出土土器などに類似した資料がみられる。滝寺1・7・12・13号窯出土土器は小田編年1～2期、今池遺跡SK21A・B、SK102、SK254出土土器は坂井編年Ⅲ～Ⅳ期、笹沢編年Ⅳ2～V1期、筆者の編年ではⅣ2～Ⅳ3期に位置付けている資料である。

**岩ノ原③期** 岩ノ原②期同様、須恵器の多くが胎土C3群である。須恵器有台杯141・144、無台杯200は高田平野西側の丘陵の須恵器窯では、滝寺11号（第5図705・第26図）・滝寺2号窯（第5図361・第22図）・大貫1号窯（第5図890・914・第23図）などが対比できる資料である。今池遺跡群ではSD201（第4図256・第28図）、飯田川流域では狐宮遺跡SB1・2（第4図45・第31図）などに類似した須恵器が確認できる。今池SD201・狐宮SB1・2ではこれらの須恵器に伴って器高の低い土師器無台胎土（第5図25・26、226）、底部が厚手のB群の須恵器無台杯（第5図33・227）などが共伴している。今池遺跡SD201は坂井編年V期、筆者の編年ではV2期に、滝寺11号・滝寺2号窯・大貫1号窯は小田編年3～4期に位置づけている資料である。狐宮SB1・2は野水晃子が筆者の編年のV1期に並行する土器群

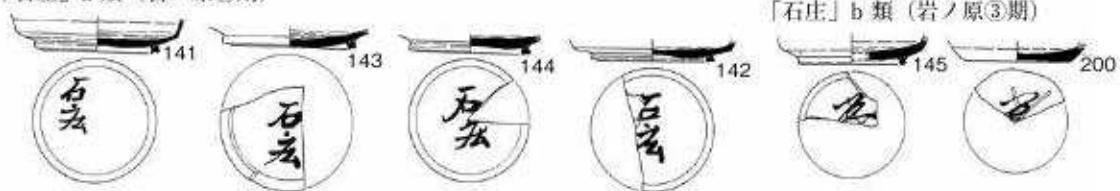
2~4B・Cグリッド出土土器（岩ノ原①期）



SB055・「石井庄」墨書き土器（岩ノ原②期）

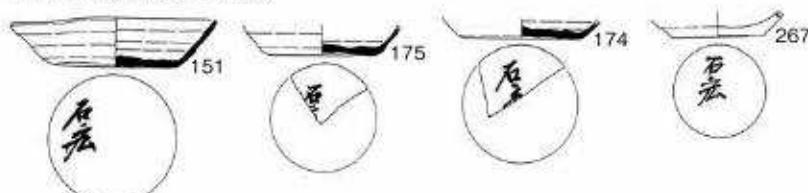


「石庄」a類（岩ノ原③期）



「石庄」b類（岩ノ原③期）

「石庄」c類（岩ノ原④期）



「石庄」d類（岩ノ原④期）



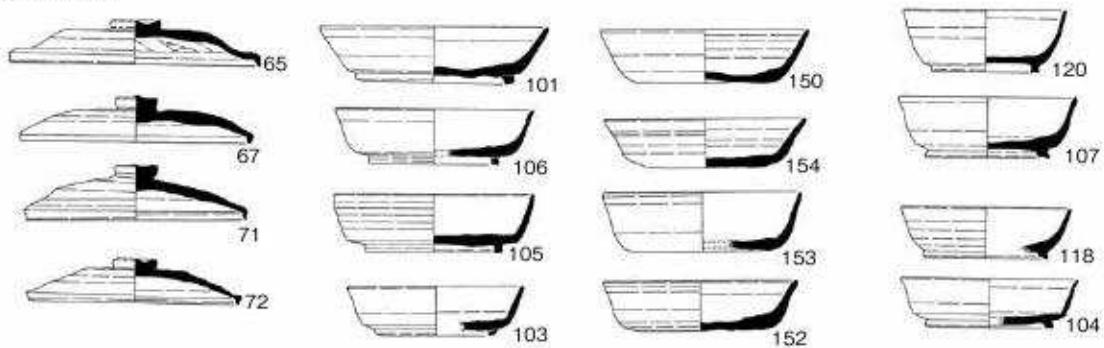
「石庄」その他



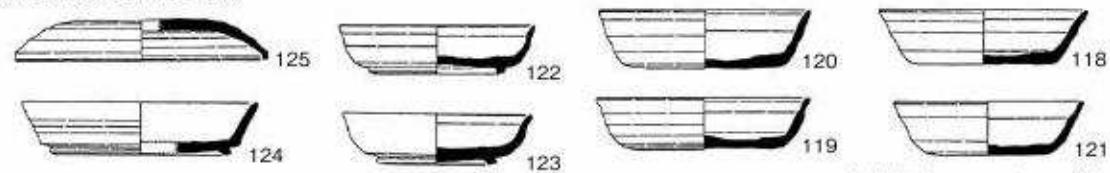
0 10cm 15cm

第3図 岩ノ原遺跡出土土器の変遷案(高橋ほか2008より作成)

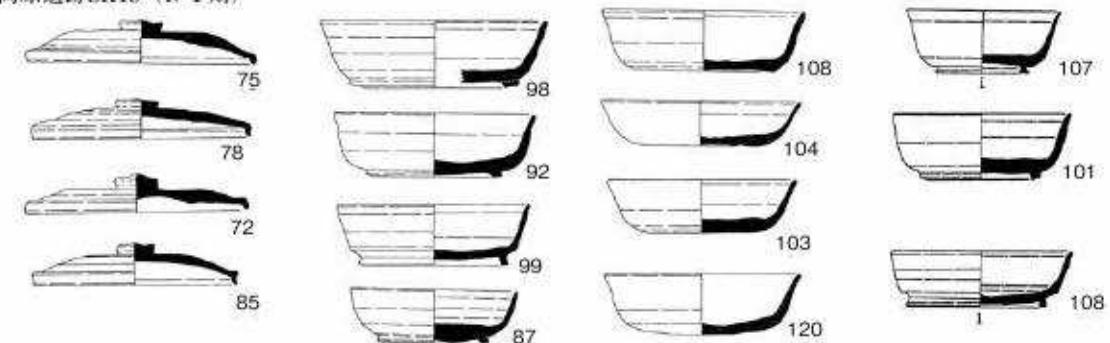
岩ノ原①期



今池遺跡SK25(IV1期)

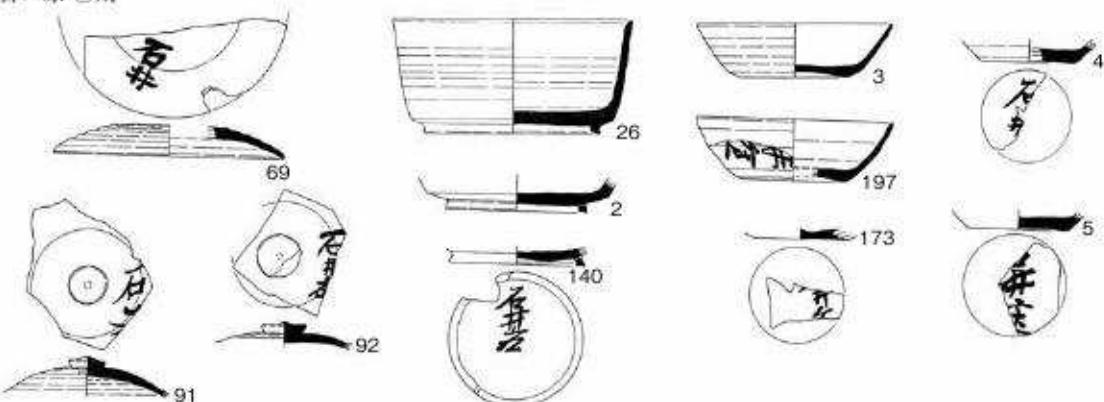


岡原遺跡SK18(IV1期)

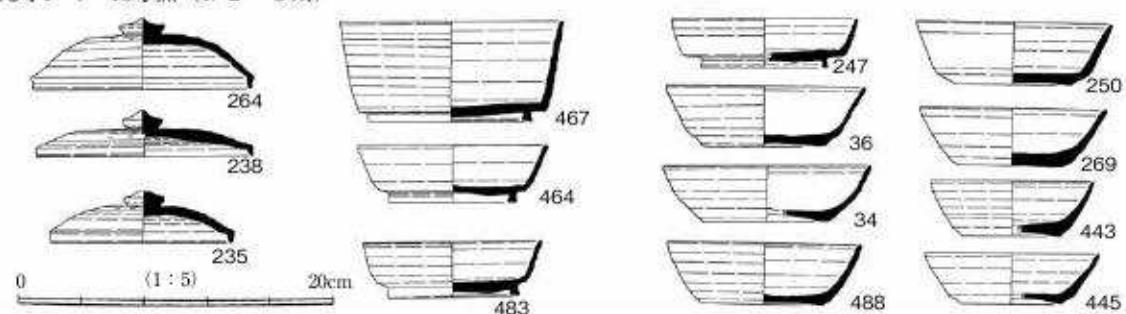


今池遺跡SK21A(IV2期)

岩ノ原②期

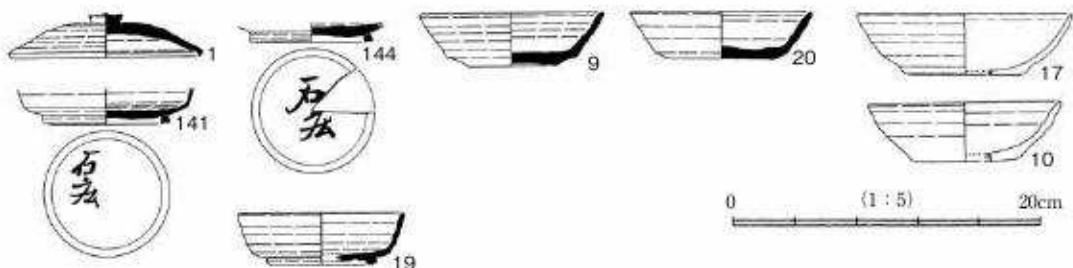


滝寺1・7・13号窯(IV2・3期)

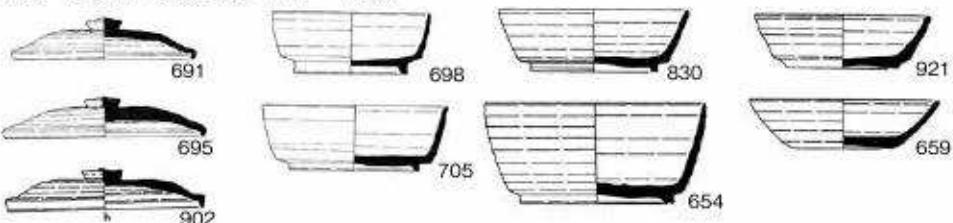


第4図 岩ノ原遺跡出土土器と関連資料(高橋ほか2008、坂井ほか1984、笛川19、小田200より作成)

岩ノ原遺跡 ③期



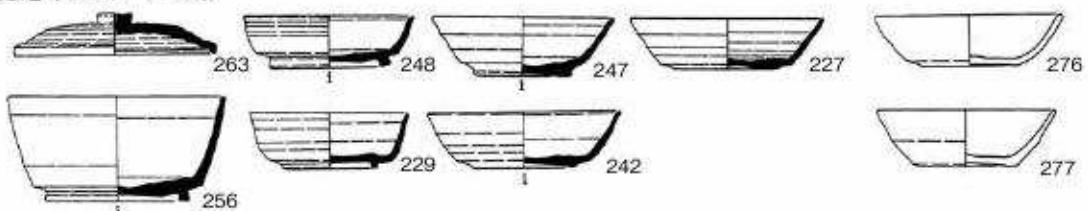
滝寺10・11号室、大貫1号窯 (V1~V2期)



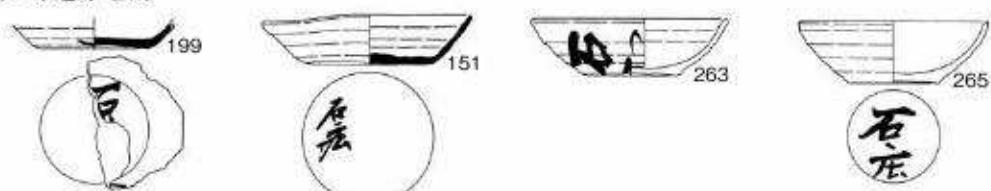
狐宮遺跡SB1・2 (V1期)



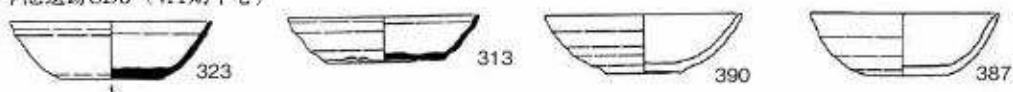
今池遺跡SD201 (V2期)



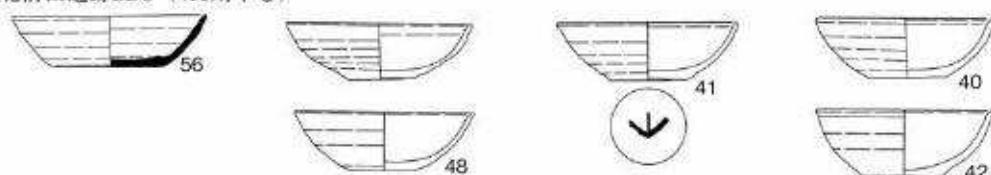
岩ノ原遺跡 ④期



今池遺跡SD3 (V1期中心)



北前田遺跡SD5 (V1期中心)

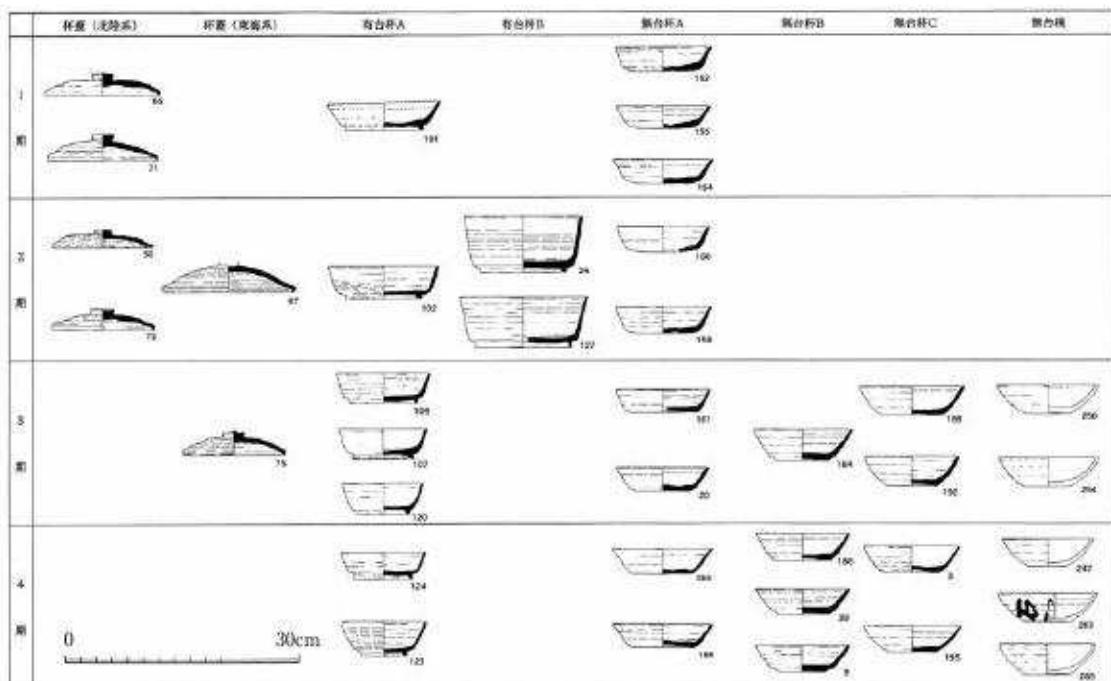


第5図 岩ノ原遺跡出土土器と関連資料

(高橋ほか2008、小田ほか200、飯坂ほか200、坂井ほか1984、金内ほか2008より作成)

と報告しており〔野水2007〕、筆者もこれに賛同する。

**岩ノ原④期** 須恵器以外に土師器無台椀が定量確認でき、須恵器は胎土B群が主体を占めるが、胎土C2群も存在する(第5図199)。胎土B群の須恵器無台杯は底部が比較的薄手で口縁の外傾度が大きい(第4図151)。土師器無台椀はやや浅いもの(第4図263)とやや深いもの(第4図285)があるが、底径は比較的小さい。これらの土器群は今池遺跡群の中では今池遺跡SD3(第5図323・313・390・387・第33図)、



第6図 金内による岩ノ原遺跡出土土器の編年(金内2008より作成)

第2表 編年対応表

本稿	筆者[春日1999]	小田[2006]	坂井[1984]	笛沢[2003]	備考	註
岩ノ原①期	III2期	I期	II期	III1期	神亀二年(725) 天平七・八年(735・736)	① ②
	IV1期			III2期		
	IV2期	1期		IV1期		
岩ノ原②期	IV3期	2期	III期	IV2期	西暦775年前後	③
	V1期	3期	+	V1期	長岡京前後	④
	V2期	4期	V期	V2期		
岩ノ原③期		5期				
	VII期		VI期	VI1期	天安元～貞觀元年(857～859) 貞觀五年(863)	⑤ ⑥
	VI2・3期			VI2期	元慶年間(877～885)	⑦
				VI3期		

① 長岡市下ノ西遺跡でIII2期を中心とした土器に共伴した木簡の記年銘(田中 靖ほか2003)

② 上越市延命寺遺跡でIII2期に共伴した紀年銘木簡の年代[山崎ほか2008]

③ IV2期の龍寺7号窯に共伴した板材の年輪年代測定法から推定した伐採年代

④ IV3期の資料である上越市今池遺跡SK102に「壺G」が共伴(坂井ほか1984)

⑤ 新潟市駒首湯遺跡で天安元～貞觀(857～859)にほぼ限定できる木簡がVI1期を中心とする土器群に共伴

⑥ 「日本三代実録」に記録されている地震が発生した年。長岡市八幡林遺跡・新潟市积迦堂遺跡でこの地震と考えられる断層・噴砂を確認(田中1994・江口2001)。

⑦ 加茂市鬼倉遺跡で「元口」と記された木簡がVI2・3期の土器に共伴

岩ノ原遺跡に比較的近い位置に所在する北前田遺跡 S D 5 出土土器などと対比可能な資料であろう。今池 S D 3 出土土器（第5図）は坂井編年VI期、筆者の編年ではVI 1を中心とする時期の資料である。

### （3）各期の曆年代

筆者の編年案の年代観については、以前に述べたことがある〔春日2006・2007〕。その後、上越市延命寺遺跡から紀年銘木簡などが出土した〔山崎ほか2008〕。延命寺遺跡は上越市東部の飯田川中流域に位置し、筆者の編年の古代I期と古代III2期を中心とする遺跡である。延命寺遺跡 SD1700 出土土器には天平八年（736）の具注曆木簡が共伴した。遺跡の中心的な建物である SB002・003 周辺の遺物包含層とその上位の層から天平七・八年（735・736）年の紀年銘木簡が出土している。SD1700 出土土器、SB002・003 出土土器（第26図）は筆者の編年のIII2期（の新相）に土器群である。筆者はIII2期の曆年代を720～730年を中心とする時期としたが〔春日2006〕、延命寺遺跡の調査成果はこのことと大きく矛盾しない。岩ノ原①期はこれに後続し、筆者の編年のIV1期を中心とし、一部IV2期を含む土器群であることから、8世紀第3四半期を中心とし、一部8世紀第4四半期にかかる時期と考える。

岩ノ原②期は筆者の編年のIV2～IV3期、小田編年の1・2期に並行する時期とした。小田編年1期の滝寺7号窯の「灰原の1枚目の灰層上」には長さ230cm、幅28cmの柱目取りの板材が3枚出土しており〔小田2008〕、このうち1枚の年輪年代測定が行われ、残存最外年輪の年代が742年であった〔光谷2006〕。測定を行った光谷拓実は、除去されたであろう片材を加味し、775年頃の伐採年を推定している（註2）。したがって、小田編年1期は8世紀末を中心とする時期となり、これに後続する小田編年2期は9世紀初頭頃と考える。小田編年1・2期に概ね並行する岩ノ原②期の曆年代は8世紀末～9世紀初頭頃と考える。

岩ノ原④期の胎土B群の須恵器無台杯（第3図151・199）は筆者の編年のVI1期に通有のものである。VI1期は長岡市（旧和島村）八幡林遺跡、新潟市（旧黒埼町）釈迦堂遺跡の断層・噴砂等の検討から貞觀五年（863）の地震前後と考えている〔春日2006〕（註3）。したがって岩ノ原④期は9世紀第3四半期、これに先行する岩ノ原③期は9世紀第2四半期頃と考える。これらをまとめると表2となる。

以上、岩ノ原遺跡出土土器を岩ノ原①～④期の4時期に区分し、既存の編年（案）との対応関係や曆年代を検討した。ここで述べた変遷案や既存の編年との対応関係や曆年代は、金内が示した土器編年（第6図）と一致する点が多いが、曆年代観を中心に異なる点も少なくない（註4）。報告書では8世紀末とされた遺跡の上限を8世紀第3世半期までやや遡らせ、「9世紀第2四半期～第3四半期に相当する」とされた石井庄関係の墨書き土器も8世紀末頃まで遡る可能性を示した。

## 2 掘立柱建物の変遷と年代

岩ノ原遺跡の掘立柱建物の変遷については、高橋保雄が報告書の中で検討している〔高橋2008〕。高橋は主に建物の切り合い関係・主軸方位・建物型式などから4期の変遷を示した。以下では、掘立柱建物を構成するピット（註5）などから出土した土器や柱筋などに着目し掘立柱建物の変遷や年代を考えたい。掘立柱建物の分類は第8図に従う。

### （1）ピットから出土する遺物と建物の関係

掘立柱建物を構成するピットから出土した土器の個別的な検討に入る前に建物の年代とピットから出土する遺物の関係について簡単に触れたい（第7図）。掘立柱建物を構成するピットの断面は柱痕（根）に着目すると以下の大別3種が存在すると考え、その形成過程は第8図のように考えた（註6）。

I類：検出面付近から下端まで柱痕（根）が確認できるもの（SB059-P02など）

II類：上部がレンズ状堆積で、途中から柱痕（根）が確認できるもの（SB055-P07など）

III類：柱痕（根）が確認できないもの（SB058-P05など）

このように考えた場合、I類から出土した遺物は、柱痕から出土した場合を除けば建物が機能する以前の遺物となり、出土した最新の遺物が、建物が建てられた年代の上限を示すことになる。しかし、II類の上層やIII類から出土した遺物は、建物の廃絶後に堆積した土層に含まれる遺物であり、最新の遺物が建物の廃絶の上限を示すことになる。また、周辺に散在していた掘立柱建物の機能時の遺物が含まれている場合もある。遺物に時期的なまとまりがありかつ遺物量が多い場合はこの可能性を考慮してもよいであろう。

## （2）掘立柱建物の周辺や掘立柱建物を構成するピットから出土した遺物（第9・10図）

**SB002・003・006**：他の建物から離れ、調査区北西に位置する建物（群）であり、周辺から岩ノ原①期とした土器群が出土している。建物も岩ノ原①期と考える。

**SB055**：第3図2～4がP07、3がP18から出土している。P07の覆土はII類であるが、遺物の出土した層位は不明である。P18の断面は不明。土器類の出土量は比較的多い。1で述べた通り、岩ノ原②期土器群である。

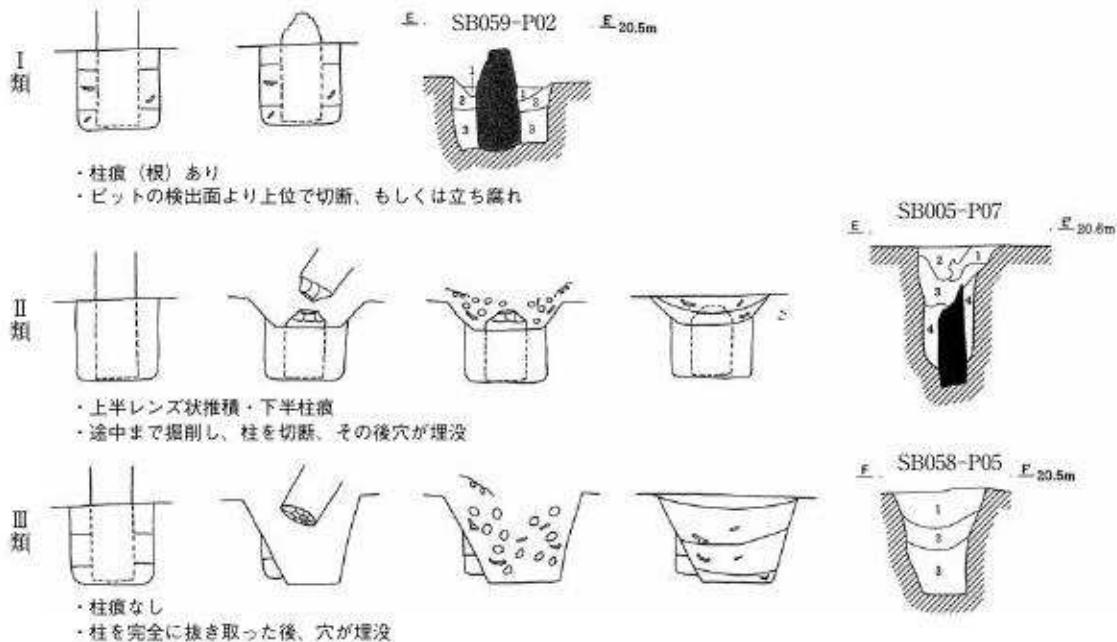
**SB050**：P05から須恵器杯蓋が出土している（1）。1は胎土C3類であり小田編年3期の澁寺11号窯に類例があり、岩ノ原③期と考える。P05の覆土はI類の可能性が高いが、II類の可能性もある。

**SB137**：P03（13・14）、P04（15）、P08（16）から土器が出土している。最新の遺物はP04から出土した15の土師器無台椀と考えられ、岩ノ原④期のものであろう。P03・04の覆土はI類である。

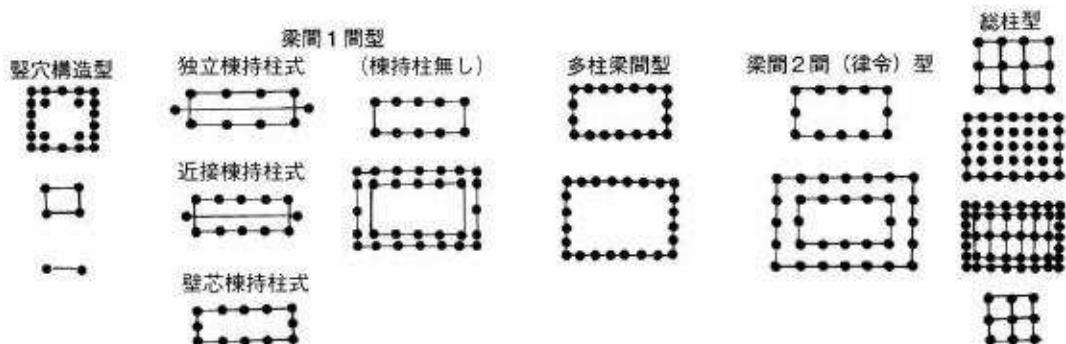
**SB059**：P09から須恵器無台杯（9）、土師器無台椀（10）が出土している。9は胎土C3類であり小田編年4期の大貫1号窯等に類例がある。10は岩ノ原④期とした土師器無台椀よりも底径がやや大きく器高が低い。ともに岩ノ原③期であろう。P09の覆土はIII類である。

**SB143**：P03から土師器無台椀が出土している（17）。17は底径が大きく器高が低い。岩ノ原④期の土師器無台椀より古相であり岩ノ原③期と考える。P03の覆土の状況は不明。

**SB058**：P04から胎土B類の須恵器無台杯（6）、P05から土師器無台椀（7・8）が出土している。



第7図 ピットの分類



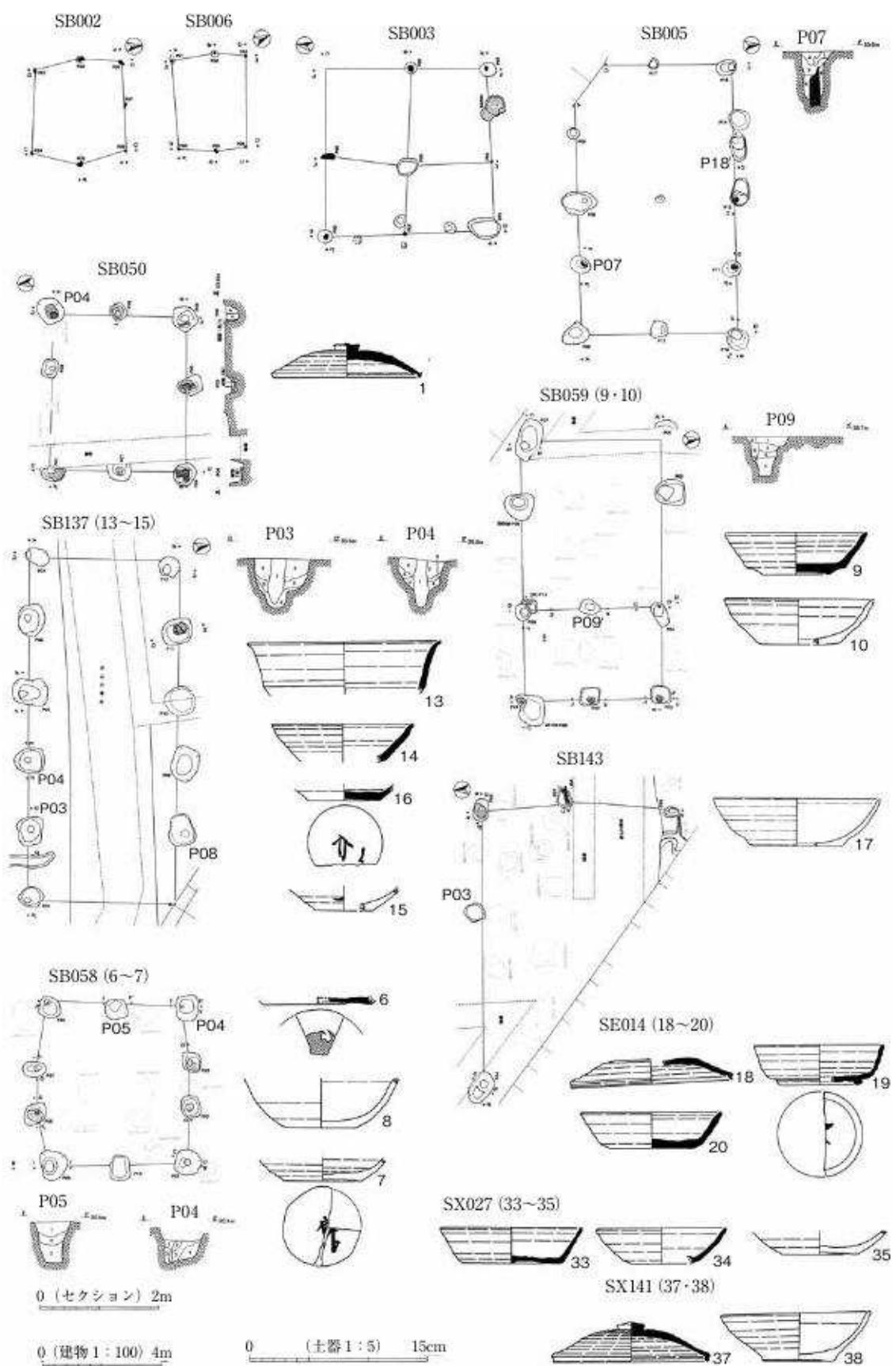
第8図 掘立柱建物 分類図(官本2002を改変)

第3表 岩ノ原遺跡の掘立柱建物

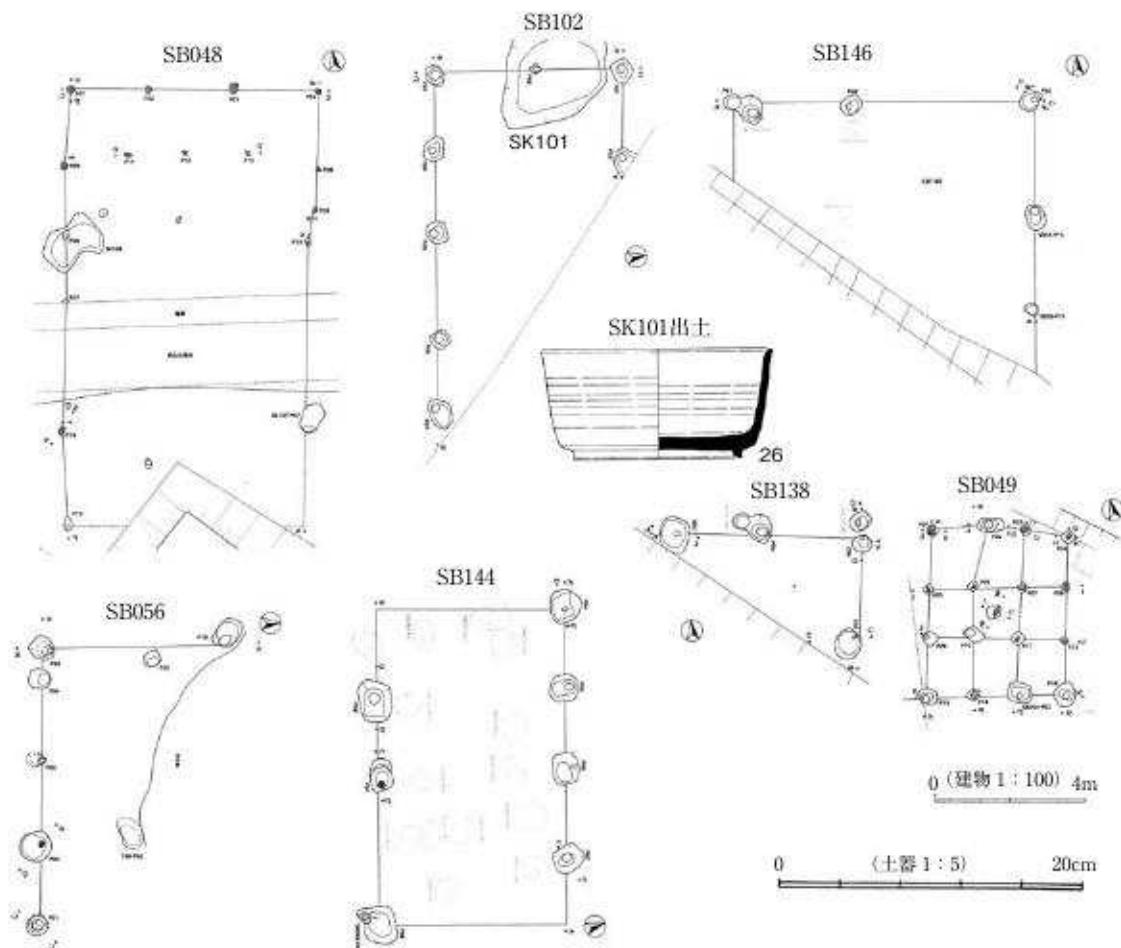
建物名	分類	位置	規模		面積 (m <sup>2</sup> )	方位	切り合い (新旧)	土器の 時期	時期	備考
SB002	独立棟持柱式	4~5C	1×2		3.03×2.85	8.69	N-80° ~W		①	土器の時期は4~6BCの包含層からの出土の年代
SB003	総柱型	5~6C	2×2		5.52×5.54	30.25	N-83° ~E		①	
SB006	独立棟持柱式	4B	1×1		3.01×2.38	7.23	N-66° ~W		①	
SB055	壁芯棟持柱式	18B・17~19C	1×4		5.20×9.00	46.80	N-86° ~W		②	土器は覆土IIのビットから出土
SB056	梁間2間型× 壁芯棟持柱式	18・19B	2×3以上		4.30×7.20 以上	30.96 以上	N-86° ~W		②	SB055と柱筋がおおむね一致
SB102	壁芯棟持柱式	14・15B	1×4		4.96×8.96	44.44	N-83° ~W		②	柱穴を切る土坑から岩ノ原②期の土器が出土
SB144	梁間1間型	14・15C	1×4		4.98×8.28	41.23	N-72° ~W	SB144→ SB059	②	土器無し、SB059は岩ノ原③期の土器出土
SB049	総柱型	13AB	3×3		3.67×4.34	15.90	N-17° ~E	SB049→ SB050	②・③	土器無し、SB050は岩ノ原③期の土器が出土
SB048	多柱梁間型	15BC・16C	3×5		6.56×11.5	75.44	N-08° ~E	SB048→ SB137	③	土器無し、SB137は岩ノ原④期の土器が出土
SB059	梁間2間型× 壁芯棟持柱式	14CD・15C	2×3		4.52×8.55	38.48	N-84° ~W	SB059← SB144	③	土器が出土した柱穴の覆土はⅢ
SB146	梁間2間型?	17BC・18C	2×3以上		7.92×5.51 以上	21.82 以上	N-05° ~E		③	土器無し
SB143	独立棟持柱式	14CD・15C	1×3以上		6.44×9.12 以上	58.73 以上	N-83° ~E		③	③・④
SB050	梁間2間型× 壁芯棟持柱式	13・14B	2×2		4.55×5.21	23.71	N-78° ~W	SB050← SB049	③	③・④ 土器は覆土IかIIのビットから出土
SB058	梁間2間型× 壁芯棟持式	14・15C	2×3		4.58×5.39	25.54	N-09° ~E		③	④ 土器がは覆土IIIのビットから出土
SB137	梁間1間型	15BC・16C	1×5		5.00×11.50	57.50	N-76° ~W	SB137← SB048	③	④ 土器は覆土Iのビットから出土
SB138		17C	2×1以上		488以上× 2.62以上	12.74 以上	N-79° ~W		④	土器無し

6は底部の器壁が薄く、岩ノ原④期であろう。7・8も岩ノ原④期であろう。P04・05とも覆土はⅢ類である。

**SB102**: P06から須恵器甕が出土しているが、時期を限定するのが難しい。P08を切る土坑SK101からは須恵器有台杯(26)が出土している。胎土C3類であり、小田畠年2期の淹寺13号窯に類例がある。岩ノ原②期のものと考える。



第9図 岩ノ原遺跡の掘立柱建物と出土土器(高橋ほか2008より作成)



第10図 岩ノ原遺跡の掘立柱建物と出土遺物(高橋ほか2008より作成)

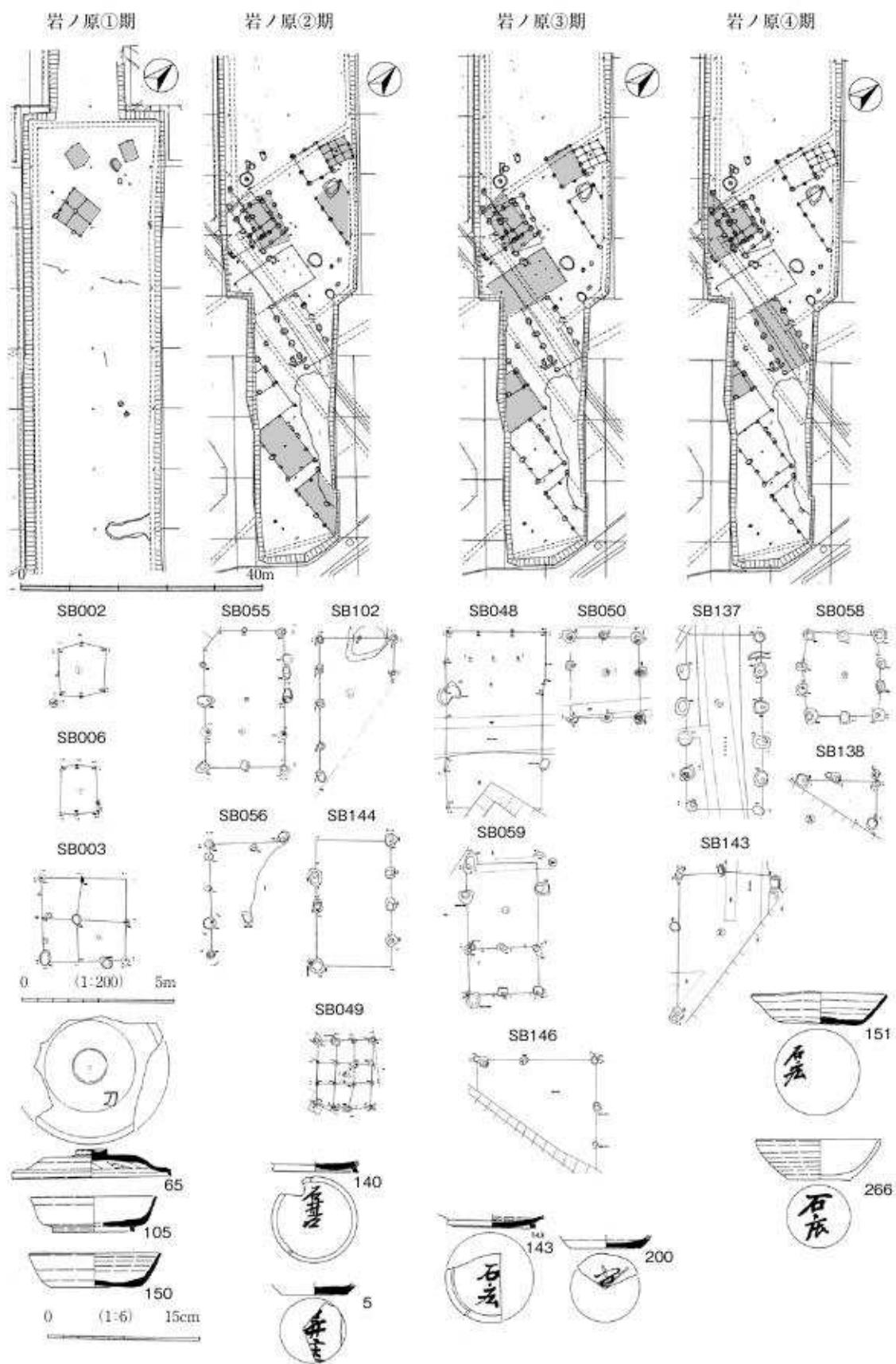
その他：SB049 から土師器片、SB056 から土師器片・須恵器片、SB144 から土師器片、SB146 から土師器片が出土しているが時期を決めるのが難しい。ただし、SB144 は岩ノ原③期の遺物を出土したSB049 に切られる。SE014 からは胎土 C3 類の須恵器杯蓋（18）、有台杯（19）、胎土 B 群の無台杯（20）が出土している。20 は底部の器壁が厚く、大部の開きが比較的大きい。今池 SD201 出土土器に類例がある。今池 SD201 出土土器は坂井編年のV期、筆者の編年のV 2期の資料である。他の須恵器もこれに近いものであろう。SE014 出土土器は岩ノ原③期を中心とする時期と考える。SX027・SX141 出土土器も岩ノ原③期を中心とする時期のものであろう。

### (3) 遺構の変遷

これまでの検討を踏まえ遺構の変遷案を示す（第11図）。時期区分・年代は1で示したものに従う。また建物の分類は第9図に従う。

**岩ノ原①期**（8世紀第3四半期～第4四半期）：調査区北西部のSB002・003・006が当期の建物と考える。小型の棟持柱式建物2棟（SB002・006）と総柱建物1棟（SB003）から構成される。最大の建物はSB006で面積は30.25m<sup>2</sup>である。

**岩ノ原②期**：ピットII類の覆土中から岩ノ原②期の土器が定量出土したSB055、SB055と柱筋がおおむね一致するSB056、覆土III類のピットから岩ノ原③期の土師器・須恵器が出土したSB059に切られる



第11図 岩ノ原遺跡の掘立柱建物の変遷案(高橋ほか2008より作成)

SB144、岩ノ原②期の須恵器を出土したSK101に切られるSB102の4棟から構成される時期。覆土ⅠもしくはⅡのピットから岩ノ原③期の須恵器が出土したSB050に切られるSB049も当期の可能性がある。SB055・SB056・SB102・SB144の4棟はいずれも40～45m<sup>2</sup>の梁間1間型建物（棟持柱式含む）である。「石井庄」墨書土器は、SB102・144周辺でも見られるが、SB055・056周辺から比較的まとまって出土している。

**岩ノ原③期：**覆土Ⅲ類のピットから岩ノ原③期の須恵器・土師器が出土したSB059、SB059と柱筋が概ね一致しL字の配置となるSB048、岩ノ原②期の建物と考えるSB055と岩ノ原④期の建物と考えるSB138と重複するSB146の3棟から構成される時期。覆土ⅠもしくはⅡのピットから岩ノ原③期の須恵器が出土したSB050、SB50に切られるSB049、岩ノ原③期の土器が出土したSB143も当期の可能性がある。建物ではないがSE014も当期のものの可能性が高い。最大の建物はSB048で平面積75.8m<sup>2</sup>、建物の型式は多柱梁間型（註7）である。

**岩ノ原④期：**覆土Ⅰ類のピットから岩ノ原④期の土師器が出土したSB137、SB137と柱筋がおおむね一致し、L字の配置となる可能性があるSB138、覆土Ⅲ類のピットから岩ノ原④期の土師器・須恵器が出土したSB058から構成される時期。覆土ⅠもしくはⅡのピットから岩ノ原③期の須恵器が出土したSB050、岩ノ原③期の土器が出土したSB143も当期の可能性がある。最大の建物はSB137であり平面積は57.5m<sup>2</sup>、建物の型式は梁間1間型の可能性が高い（註8）。

### 3 岩ノ原遺跡の性格

以上のように岩ノ原②期～④期の岩ノ原遺跡では、平面積45～75m<sup>2</sup>の中心的な建物に、3～4棟のこれより小規模な掘立柱建物が伴う建物群が存在した。中心的な建物は近接棟持柱式（岩ノ原②期）、多柱梁間型（岩ノ原③期）、梁間1間型（岩ノ原④期）などいずれも伝統的な建物型式で、岩ノ原③・④期（おおむね9世紀第2四半期～第3四半期）はL字の建物配置がみられた。また、岩ノ原②・③期（8世紀末～9世紀前半）には3×3間（15.9m<sup>2</sup>）の比較的規模の大きな倉庫を伴っていた。

これらの建物群は、周辺からは「石井庄」・「石庄」などの墨書土器が定量出土しており、高橋が報告書中で明言しているように、8世紀中葉に成立した東大寺領石井庄の庄所と考えてよい。建物がL字に配置される可能性がある点も、北陸の初期庄園遺跡を検討した吉岡の論考〔吉岡1996〕に従うならば、調査で検出された建物群が庄所であったことを補強するものであろう。遺跡の立地も儀明川に近接し、関川に通じる内水面交通を確保しうる点も、これまで発掘調査で明らかになった初期庄園の庄所と共通する点である。しかし富山県入善町じょうべのま遺跡・富山県高岡市常国遺跡・石川県金沢市上新屋遺跡・石川県白山市横江庄遺跡などの、これまでの発掘調査で明らかにされている中央官寺庄園の庄所の中心的な建物が、ほぼ例外なく平底を持ち、底を含めた面積が100m<sup>2</sup>を超えていた。岩ノ原遺跡で検出された建物はこれに比べ小規模である。

岩ノ原遺跡で検出された中心的な建物が、中央官寺の庄所としては小規模意である理由を考えるときに、参考となるのは「石井庄」・「石庄」と記された墨書土器の出土と井上慶隆の論考〔井上1973〕である。井上は太治五年（1130）「東大寺諸荘文書并絵図等目録」に「石井庄字吉田」とあることに着目し、天暦四年（941）「東大寺封戸荘園并寺用帳」に現れ、や長徳四年「東大寺領諸国荘家田地目録」に以降の史料に現れない吉田庄が、石井庄と近接した場所にあり、荒廃後に石井庄に統合されたとしたが、卓見であろう。岩ノ原遺跡から庄園名が記された墨書土器が出土する理由に、近接した場所に石井庄の庄所と吉田庄の庄所が存在し、かつ両庄の在地での経営には同一の集団が深く関わっていたため、所属を明確にするた

めに具体的な庄名が記されたと考えてはどうだろうか（註9）。このように考えた場合、石井庄・吉田庄の二つの庄園（あるいは真沼庄をめた三つの庄園）を統括するより上位の施設が近隣に存在し、そのため岩ノ原遺跡で検出された石井庄の庄所が小規模となった可能性を考えてもよいだろう。

#### 4 岩ノ原遺跡周辺の古代遺跡

岩ノ原遺跡周辺は北陸新幹線や上信越自動車道建設に伴い多くの古代の遺跡が調査された。以下では、主要な遺跡の時期や主な遺構の構成を個別に確認していきたい。なお、以下の記述では岩ノ原①～④期以外の時期も対象とするため、土器の時期区分は筆者の編年〔春日1999〕を用いる。

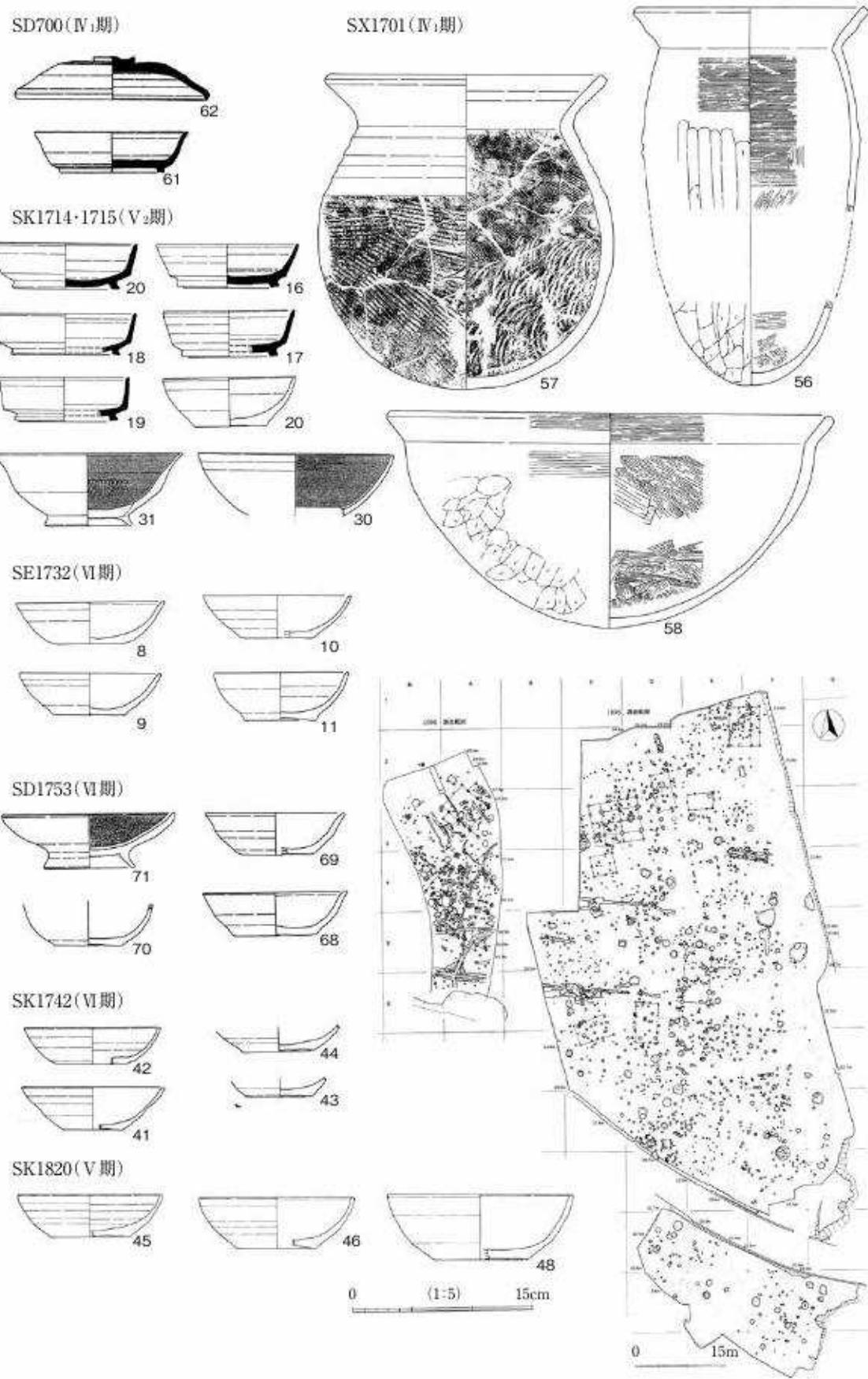
**海道遺跡** [高橋2005]（第12図） 岩ノ原遺跡の西方約600m、儀明川左岸の尾根に挟まれた谷部に位置する。古代から中世の遺跡であり、古代の土器はIV期（SD700・SX1701）、V期（SK1714・1715・SK1820）、VI期（SE1732・SK1742・SD1753）の遺物が出土している。掘立柱建物・井戸・土坑・底面や側壁が焼けた土坑（SX1701）・溝等が検出された。掘立柱建物の所属時期は判断が難しいが、1996年度調査区からは古代の土器が多く出土しており、古代に属するものが多いと考える。梁間一間型建物や棟持柱式建物が定量確認できる。古代の掘立柱建物の方位は30°～50°西（もしくは東）に振れるものが多い。SX1701は土師器焼成遺構の可能性がある。

**蛇谷遺跡** [立木2005]（第13図） 岩ノ原遺跡の西方約600m、海道遺跡の南側約300m、儀明川右岸の丘陵上に位置する遺跡。旧石器時代・縄文時代・古代から中世の遺跡であり、古代の遺構から出土した土器にはV期（SI417）・VI期（SK454・SK422）、VII期（SI414）があり、包含層出土遺物のなかにはIV2・3期頃まで遡る可能性がある土器（426・430・432）も確認できる。掘立柱建物・周溝を持つ竪穴建物・溝・土坑などが検出された。VII期には方形のお堂風の建物や油煙痕を持つ土師器小椀・無台椀が定量出土し、三足釜などの特殊な遺物も定量出土しており、仏教関連施設が存在した可能性がある。V期に建物の主軸方位は約70°西に振れ、VII期・中世の建物の主軸は方位におおむね一致する。

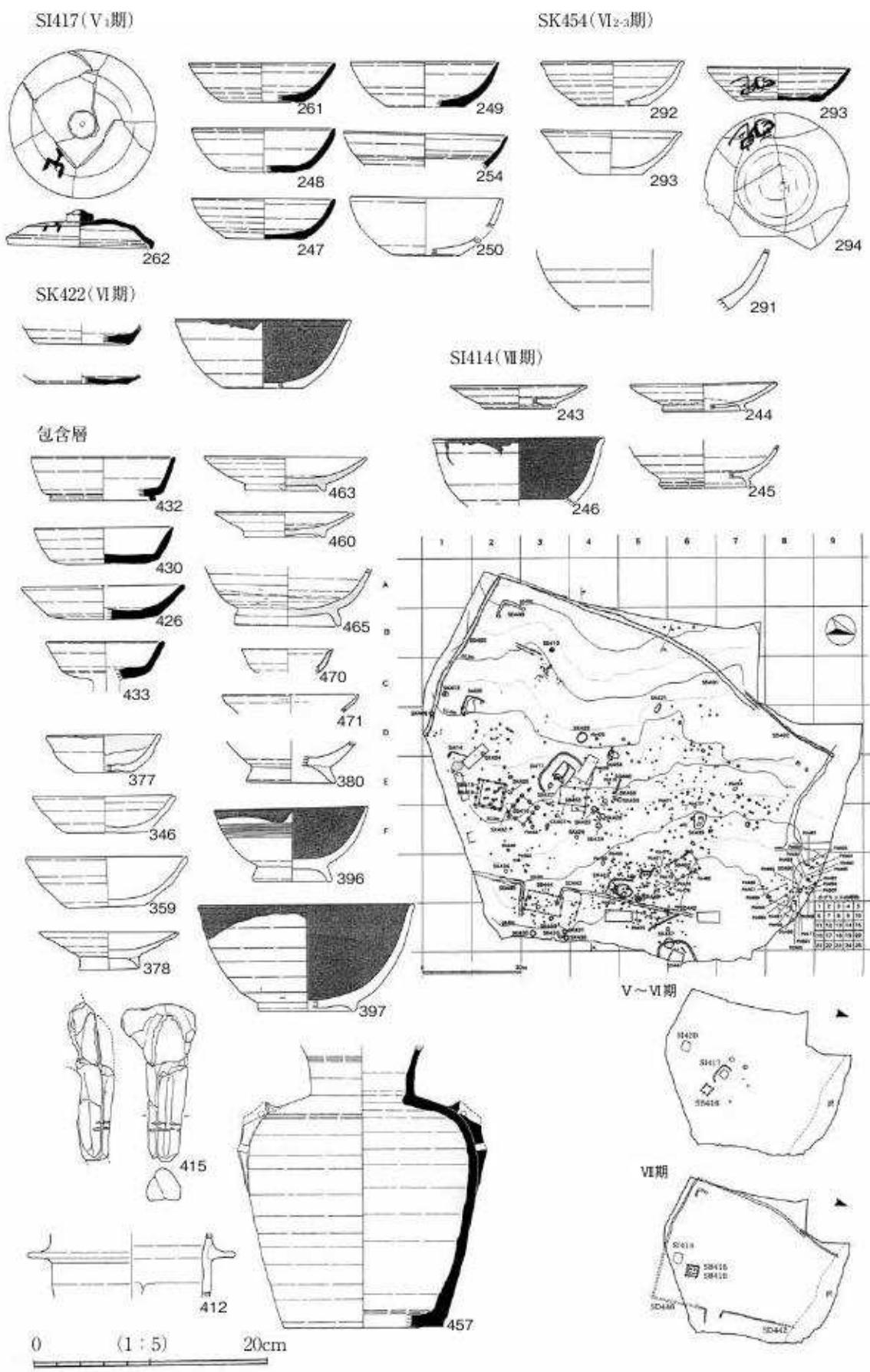
**北前田遺跡** [金内ほか2008]（第14図） 岩ノ原遺跡の南西約2kmの沖積地に位置する。古墳時代前期と古代の遺跡であり、古代はI期・III期の遺物が少量、VI期の土器が定量出土している。掘立柱建物6、土坑・溝などが検出されている。掘立柱建物はいずれも30m以下の中規模なもので、建物の主軸は方位にはほぼ一致する。

**北新田遺跡** [金内ほか2008]（第15図） 岩ノ原遺跡の南西約2.5kmの沖積地に所在する。古墳時代前期から中世の遺跡で、竪穴建物21・掘立柱建物36・井戸・土坑が検出されており、竪穴建物・掘立柱建物が比較的密集して分布している。古代の土器は、I期とIV・V期が多く出土しており、II～III期は少ない。古代の遺構の多くはI期とV期のものであろう。I期は竪穴建物を中心に、少量の掘立柱建物が伴う集落であり、最大の建物は48.6m<sup>2</sup>の竪穴建物（SI570）であり、30m<sup>2</sup>以下の建物が多い。IV・V期は掘方柱建物を主体とし少量の竪穴建物が伴う集落である。最大の建物は41.12m<sup>2</sup>の掘立柱建物（SB938）で、30～15m<sup>2</sup>前後の建物が多い。方位に概ね一致する竪穴建物や掘立柱建物の多くはV期と思われる。報告者の金内は、岩ノ原遺跡と近い位置に所在することや存続する時期が重複することから、石井庄と関連することや岩ノ原遺跡よりも小規模な建物が多いことを指摘している。（註10）

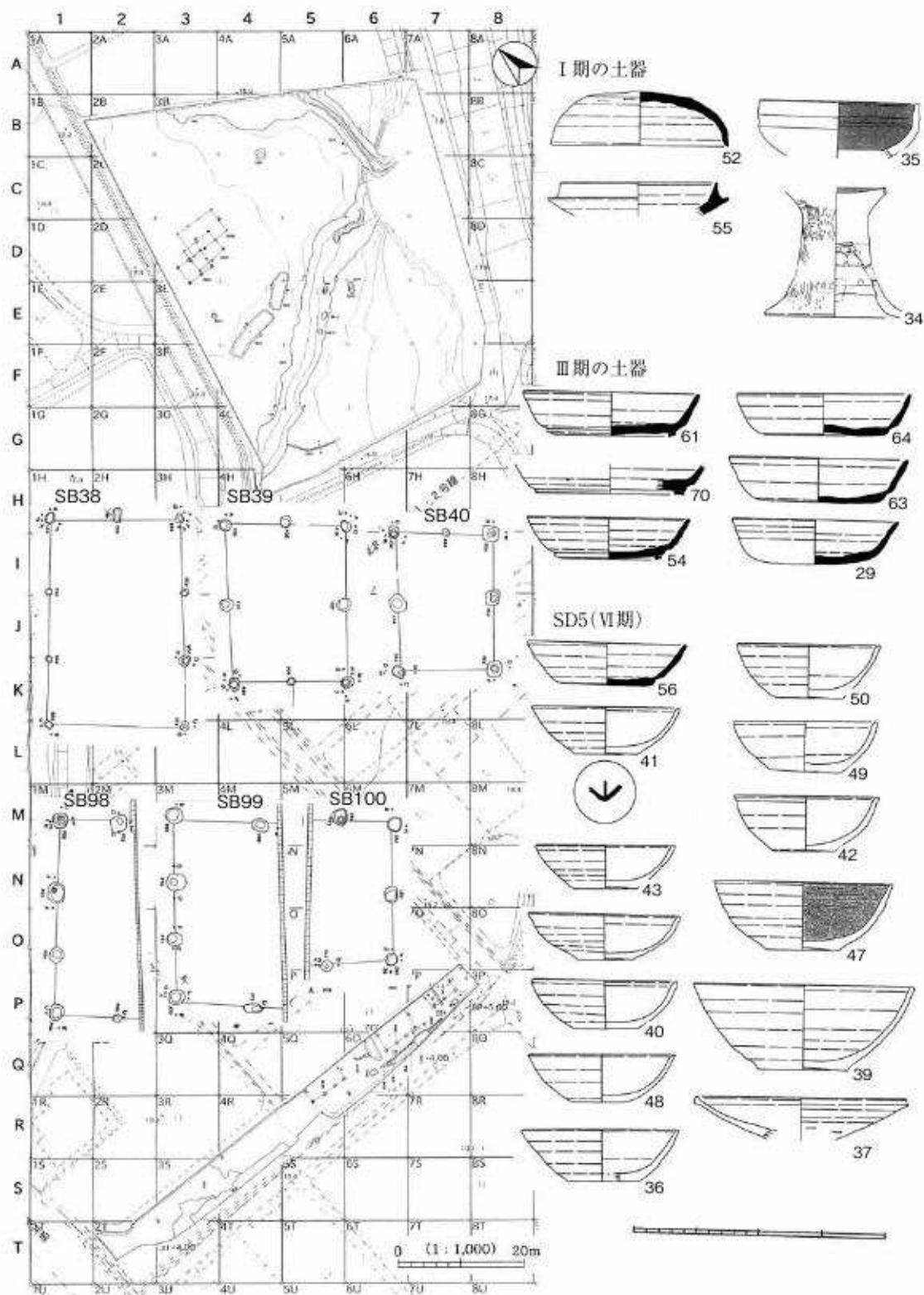
**細田遺跡** [尾崎2005]（第16・17図） 岩ノ原遺跡の南東約2km、青田川の左岸の丘陵裾付近に立地する遺跡で、弥生時代末～古墳時代・古代の遺跡である。15O'・15P'・15Q'北側土器集中区の集中区の遺物はIV2・3期を中心とするが、III期に遡る可能性があるもの（232・246）、V～VI期に下るもの（237・



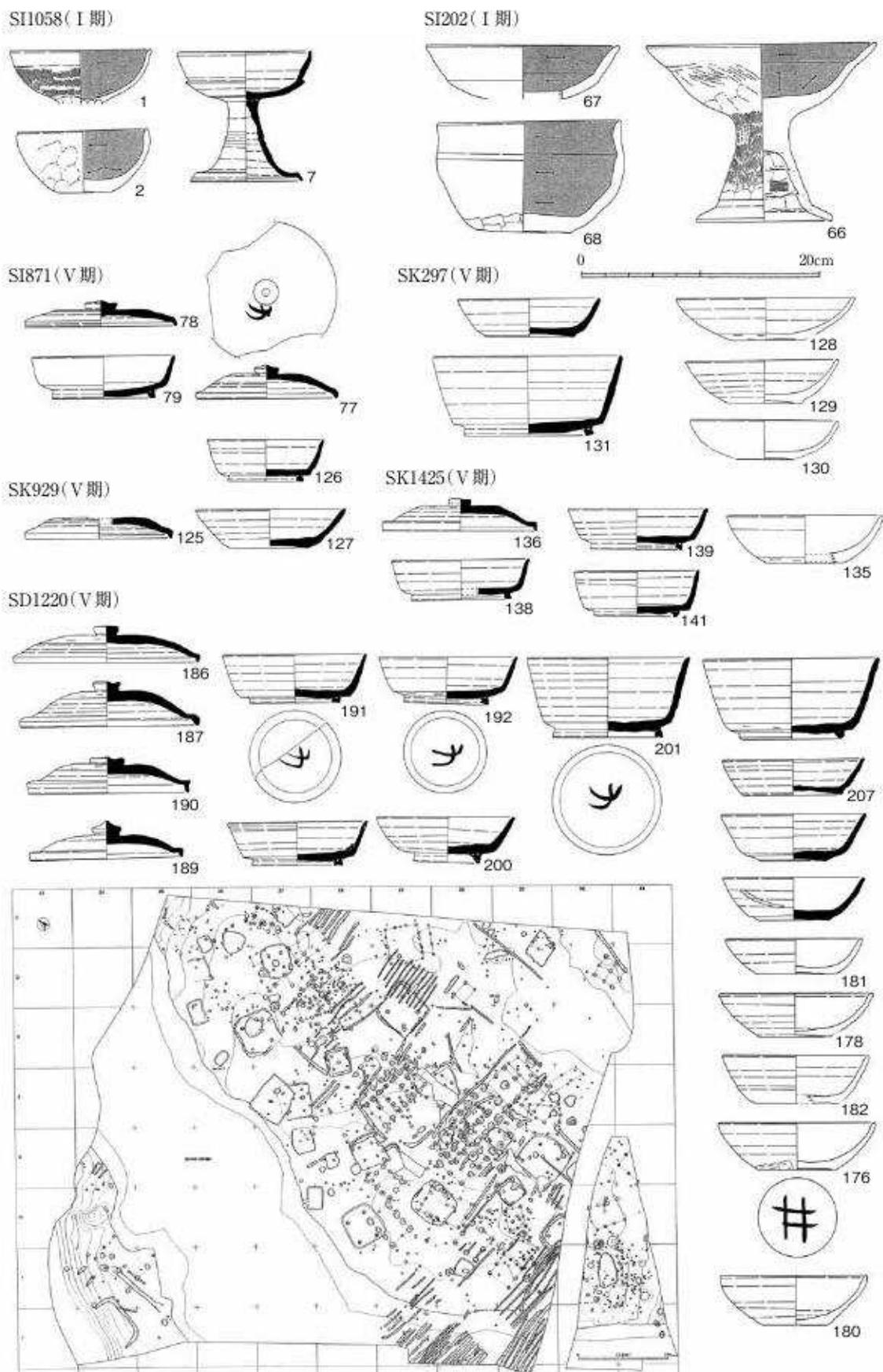
第12図 海道遺跡の遺構と出土土器(高橋ほか2005より作成)



第13図 生它谷遺跡の遺構と出土土器(土橋ほか2005より作成)

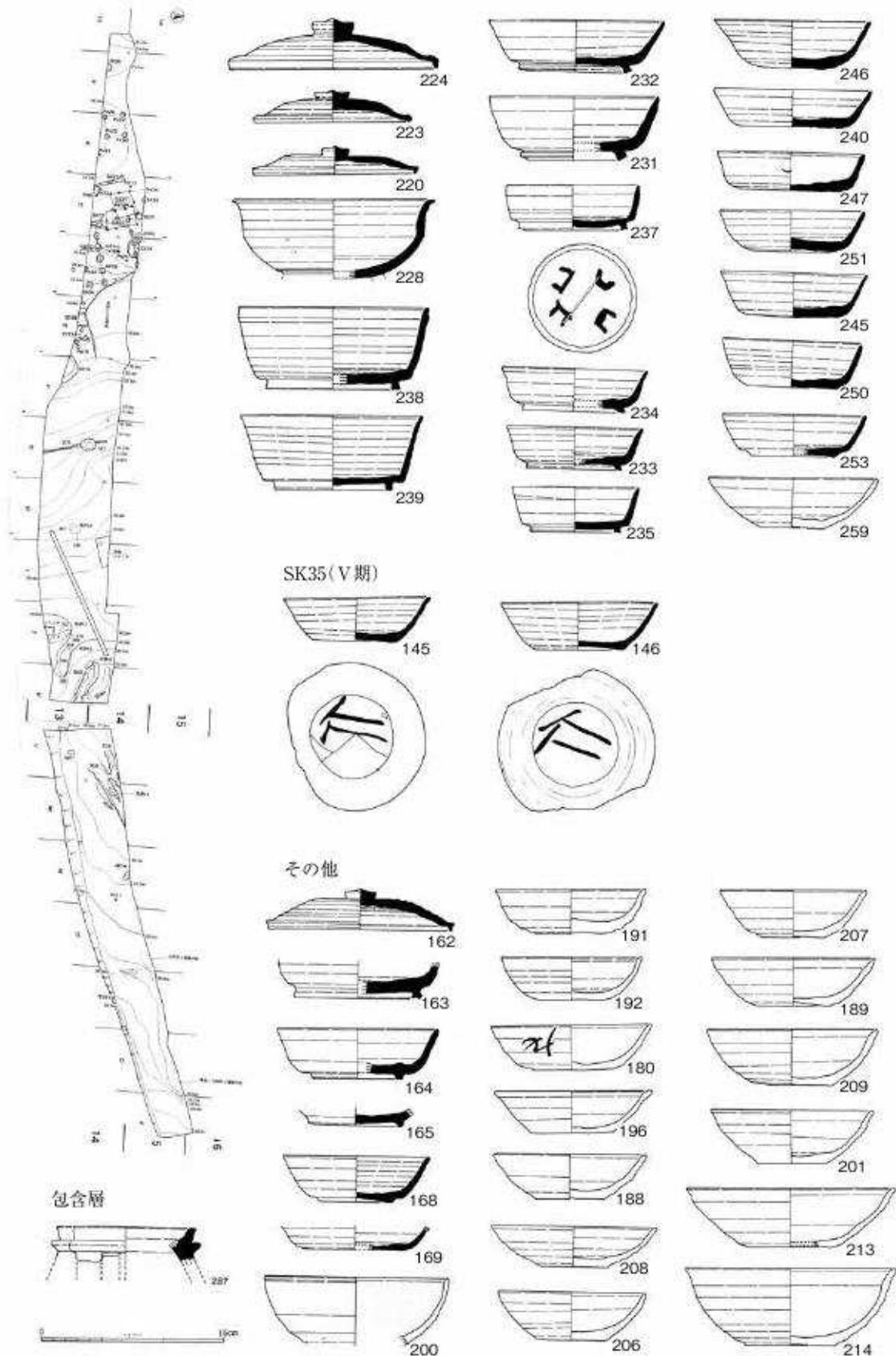


第14図 北前田遺跡の遺構と出土土器(金内ほか2008より作成)

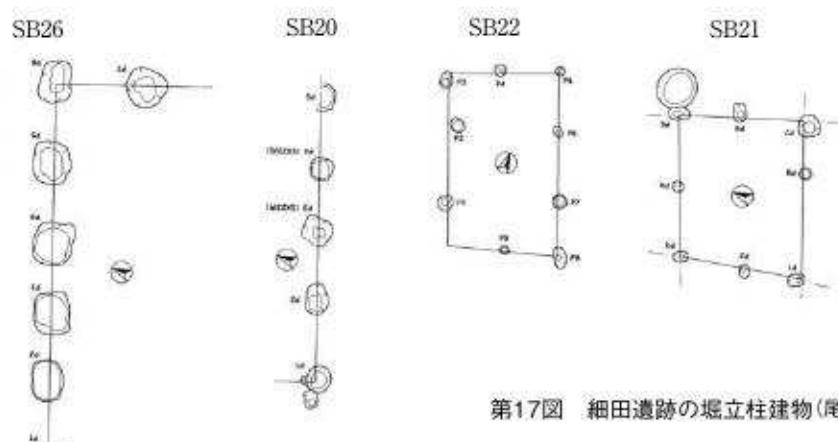


第15図 北新田遺跡の遺構と出土土器(金内ほか2008より作成)

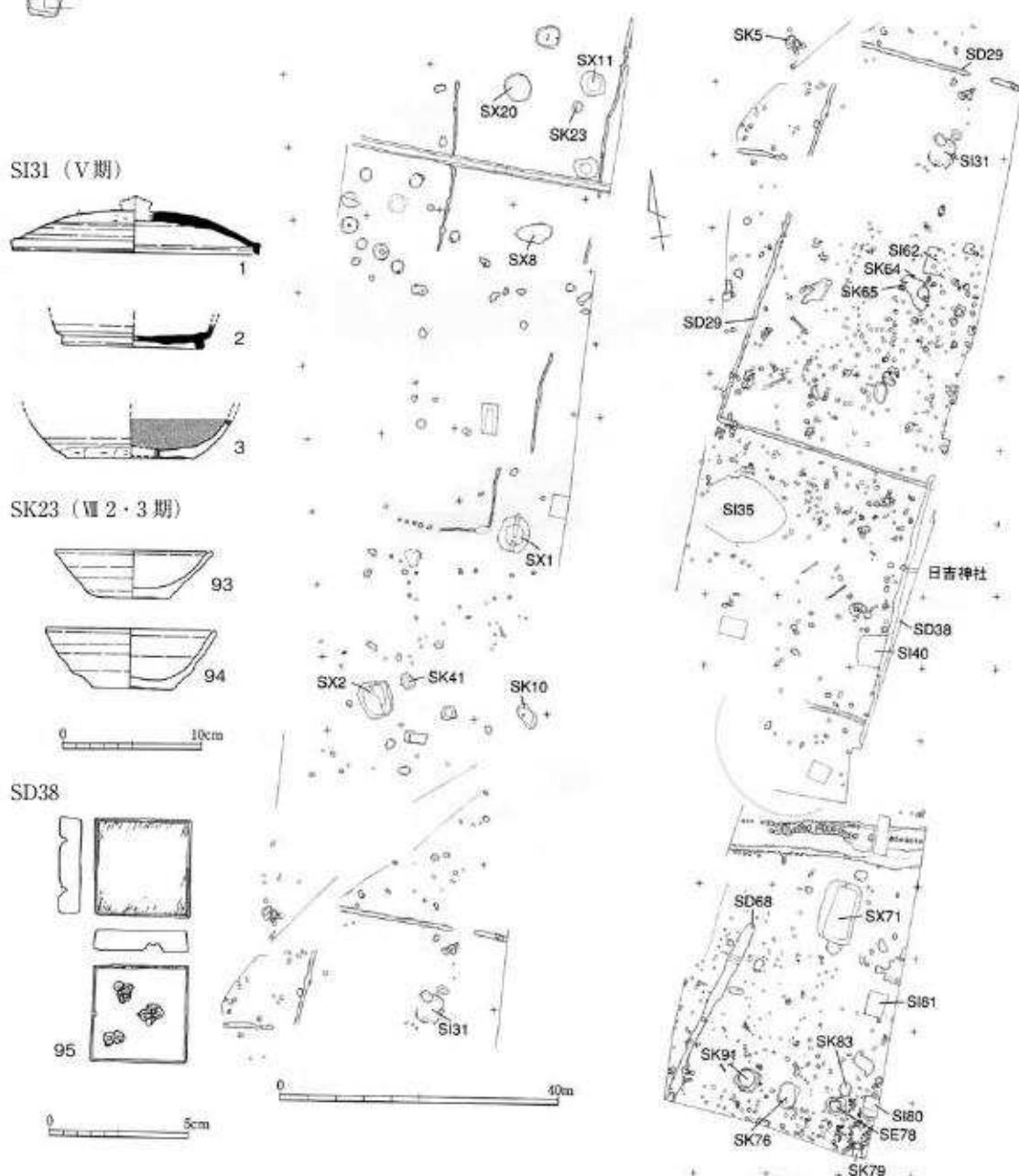
15O'・P'・Q' 北側端土器集中区(IV～V期)



第16図 細田遺跡の遺構と出土土器(尾崎ほか2005より作成)

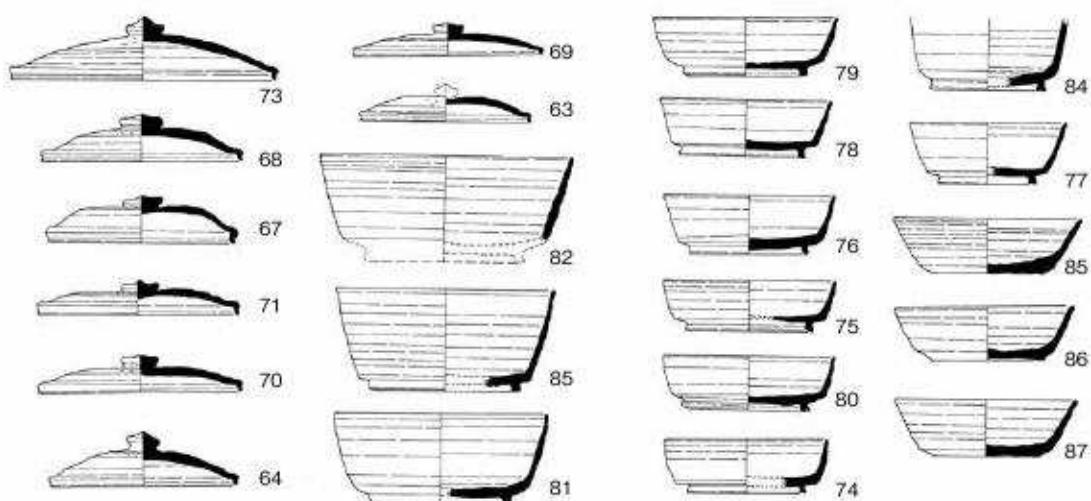


第17図 細田遺跡の堀立柱建物(尾崎200より作成)



第18図 新田畠遺跡の遺構と出土遺物(笛沢2003より作成)

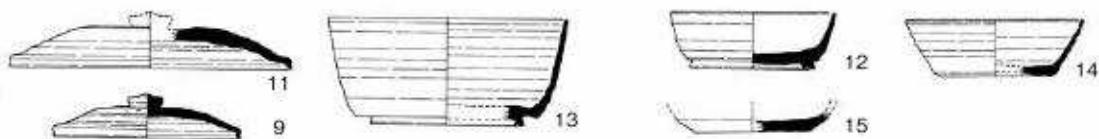
SK65 (IV 2期)



SK41 (IV 2～IV 3期)



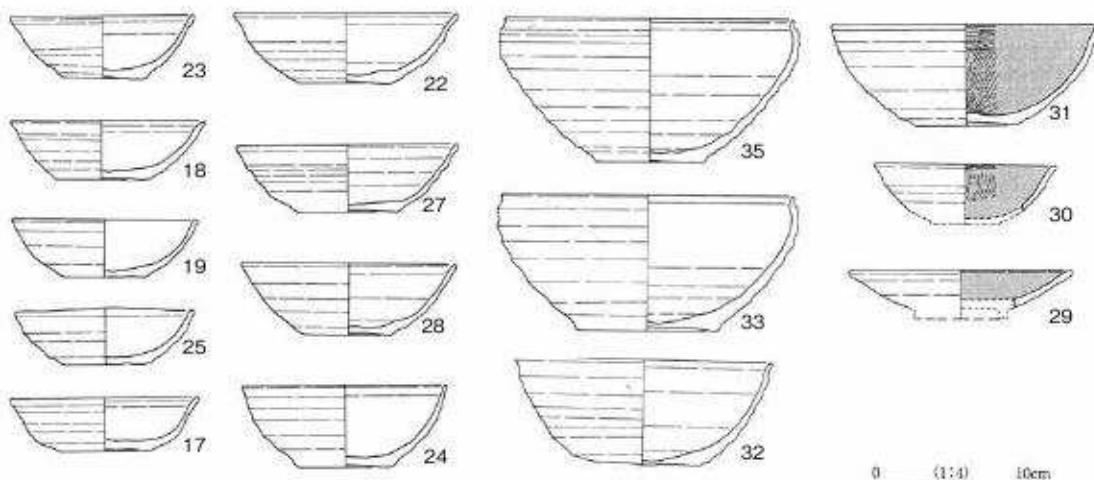
SI40 (V 1期)



SK5 (V 2期)

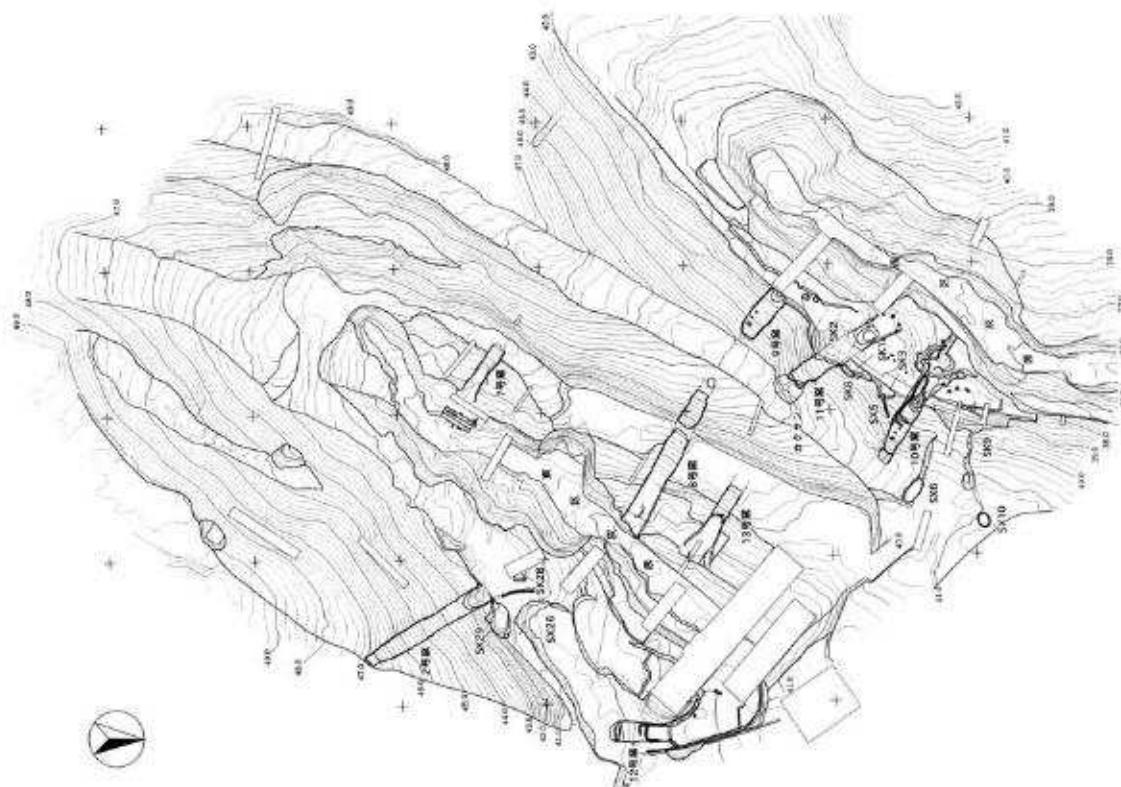


SD38 (VII 1期)

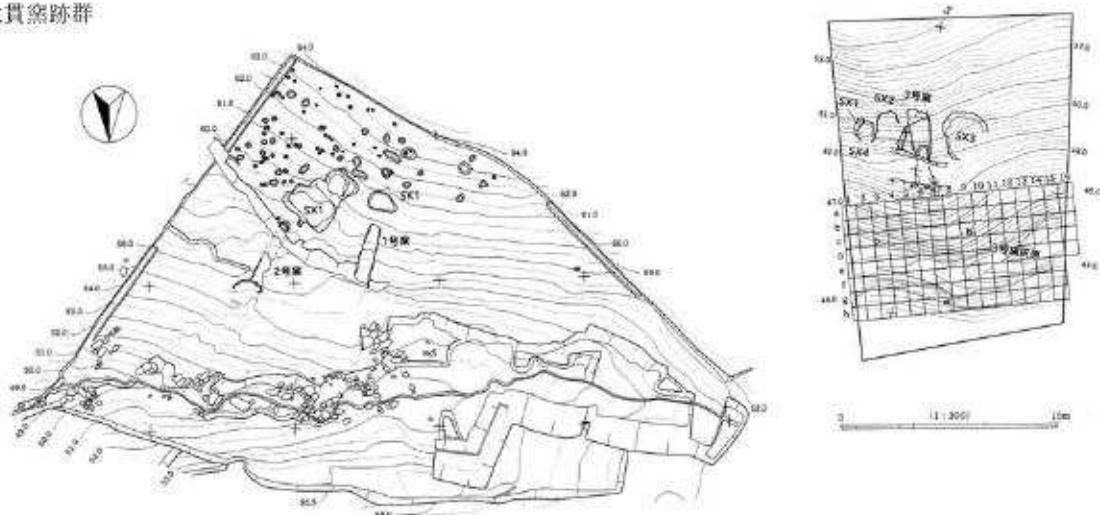


第19図 新田畠遺跡出土土器(笛沢2003より作成)

滝寺窯跡群



大貫窯跡群



第20図 滝寺・大貫須恵器窯跡群(小田ほか2006より作成)

235・253・259) も確認できる。SK35 は V 期、SD4 は VI 期を中心とする時期のものであろう。古代の遺構には掘立柱建物・土坑・溝などが検出されている。桁行 5 間 (SB26) と桁行 4 間以上 (SB20) の比較的大型建物が 2 棟柱筋を揃えて検出されている。報告者の尾崎は、IV 期に成立することや建物の規模・円面覗などの出土ながら、有力農民層の私的な開発の拠点と位置づけ、初期莊園との関連を指摘している。

**新田畑遺跡** [桜沢 2003] (第 18・19 図) 岩ノ原遺跡の北側約 1.3km、儀明川左岸に所在する。縄文時代・古代・近世の遺跡で、IV 2 ~ 3 期 (SK65・SK41)、V 期 (SK5・SI31・SI40)、VI 期 (SD38) の遺物が出士している。竪穴建物 5、土坑・溝等が検出された。竪穴建物の多くは IV ・ V 期のものである。SD38 が

らは石器や、土師器鉄鉢が出土していることから、VII期には有力者が遺跡内に存在した可能性がある。

**関川左岸の須恵器窯**（第20図） 岩ノ原遺跡の南約2.5kmにはII2期の下馬場窯跡〔小島1989〕、北西約600mにはIV1期の向橋窯跡〔高田市1967・笹沢2003〕、北西約2.5kmにはIV2～V2期の滝寺窯跡群・大貫窯群〔小田ほか2006〕が確認できる。滝寺窯跡群・大貫窯群は約600mしかはなれておらず、一連の須恵器窯と考えられており、IV2期～V2期の間に16基（以上）の須恵器窯が存在した。下馬場窯跡（群）や向橋窯跡と比較すると規模の大きな須恵器窯と考えられる。関川左岸の丘陵ではII2期に須恵器生産が確認できるが、III期の須恵器窯は不明でIV2期以降生産が拡大するものと考える。

これらの遺跡の動向をまとめると表4となる。岩ノ原遺跡周辺ではI期に比較的規模の大きい集落遺跡（北新田遺跡）が存在するが、II・III期の遺跡は希薄で、岩ノ原遺跡が成立・拡充するIV期以降遺跡が増加し、周辺の開発が活性化したと考える。これらの遺跡の多くは岩ノ原遺跡が衰退するVI期に衰退する。また、IV期以降の建物には、岩ノ原遺跡の多くの建物と同様に主軸が方位と概ね一致する建物（方位軸建物〔田嶋1996〕）が一定量（北新田遺跡・北前田遺跡など）あり、ある程度の範囲が統一的な地割のもとに開発が進められた可能性がある。またIV2期には滝寺・大貫地区に、関川左岸の丘陵にはこれまで見られなかつたような大規模な須恵器窯が成立した。これらは相互に関連する事象であり、石井庄・吉田庄の在地での経営や、岩ノ原遺跡周辺の開発、須恵器生産の活性化は同一の集団が主導した可能性がある。

## おわりに

小稿で明らかとなつたことはわずかだが、以下の内容を要約し、まとめとしたい。

- 1 岩ノ原遺跡の土器群を出土地点や墨書き器の記載内容・字体に基づき岩ノ原①～④期の4期に区分し、既存の編年案との対応関係の検討し、曆年代を推定した。その結果、岩ノ原遺跡の成立（岩ノ原①期の曆年代）が8世紀第3四半となり、報告書での年代観を約四半世紀遅らせる私見を示した。
- 2 1と関連し、報告書では9世紀第2四半期～第3四半期に限定されるとされた「石井庄」・「石庄」な

第4表 岩ノ原遺跡周辺の主要遺跡の動向

遺跡/時期	春日1999	I			II		III		IV			V		VI			VII		
		1	2	3	1	2	1	2	1	2	3	1	2	1	2	3	1	2	3
集落	本稿								岩①		岩②		岩③		岩④				
	岩ノ原遺跡								◎		◎		◎		◎	◎			
	新田姫遺跡									◎		◎			◎	◎			
	海道遺跡							◎		△		◎		◎	△				
	蛇谷遺跡									△		◎		◎	◎	◎		◎	
	綿田遺跡							△	△	◎		◎		◎					
	中田原遺跡								?	○		○		○					
	野畔遺跡									○		?							
	北前田遺跡	△			◎										◎				
	北新田遺跡	◎	?		○					○		◎							
窯跡	荒町南新田	◎			○					◎		◎							
	用言寺遺跡				◎					△		△		○		○			
	下馬場窯跡群				◎	?													
	向橋窯跡								◎										
*◎・○・△は遺跡の盛衰を現すイメージ ◎>○>△>?>空欄																			

どの墨書き土器の一部が8世紀末～9世紀初頭まで遡る可能性を指摘した。また、8世紀末～9世紀初頭は「石井庄」「石井」と主に記載されていた墨書き土器が、9世紀前半から後半には「石庄」変化する可能性が高いことを示した。

3 土器編年案をもとに、遺構（掘立柱建物）の変遷を検討した。検討の結果、岩ノ原②期～④期では、平面積45～75m<sup>2</sup>の中心的な建物に、3～4棟のこれより小規模な掘立柱建物が伴う建物群が存在した。また、岩ノ原③・④期（9世紀前半～後半）には中心的な建物とこれよりやや小規模な建物をL字に配置しているものと考えた。これは岩ノ原遺跡を天平勝宝五年（753）に成立した東大寺領石井庄の庄所であるとした高橋の指摘を補強するものである。

4 岩ノ原遺跡で検出された建物群を東大寺領石井庄の庄所とした場合、從来発掘調査で明らかとなった中央官寺庄園の庄所としては規模が小さいこととなる。この理由については、「石井庄」「石庄」という具体的な庄園名を記した墨書き土器の出土と石井庄に近接して吉田庄が存在していたことを明らかにした井上慶隆の論考を参考にし、二つの庄園（を統括する施設）が近隣に存在し、そのために岩ノ原遺跡で検出された石井庄の庄所が小規模となったと推測した。

5 岩ノ原遺跡周辺の古代集落遺跡の動静を検討した。その結果、周辺には岩ノ原遺跡と同様に8世紀後半～9世紀に成立し9世紀後半頃衰退する例が多く確認できた。また須恵器生産も8世紀末～9世紀前半に拡大することを確認した。石井庄・吉田庄の成立、8世紀後半から9世紀初頭における岩ノ原遺跡周辺の遺跡の増加や須恵器生産の拡大は相互に関連するもので、これらは同一の集団により主導されたものと考えた。

小稿がなるにあたって、以下の方々から様々なご教示をいただきました。文末ながら記して感謝いたします。

相沢 央・伊藤秀和・飯坂盛泰・石川智紀・岡本範之・北野博司・笹沢正史・澤田 敦・高橋保雄・滝沢規朗・金内 元・野水晃子・山崎忠良

（平成22年2月 脱稿）

## 註

註1 平成20年度にも南東の近接する地区で約1,250m<sup>2</sup>の発掘調査が行われ、古代から中世の遺物が出土し、堅穴建物3、掘立柱建物36、井戸19、土坑・井戸などが検出された〔秋山・金内2009〕。遺物には「庄」の墨書き土器が記された須恵器有台杯がある〔岡本2009〕。

註2 光谷は「年輪年代測定が行われた板材には辺材部が1.7cm残存して」おり、「樹齢300年以上のスギの平均辺材幅4.5～5cmであり」、「板材に5cmの辺材幅があったと仮定すると、3.3cm削られ」、「辺材部に占める平均年輪幅を1mmとすると、33層分の程度の年輪が加算」されることとなり、「775年あたり」という年代を導き出している。

註3 筆者のIV～VI1期の年代観については、百瀬正恒の批判がある〔百瀬2008〕。筆者は批判の内容が十分理解できなかった。また、百瀬はこの中で「須恵器の編年については原稿を用意しており」とも述べている。百瀬氏の批判に対する対応は「原稿」が公表された後に考えたい。小稿では従来の年代観を採用する。

註4 個々の遺物では3・9・107・120などの位置付けはかなり異なる。

註5 高梨清志は「小穴・ピット」と「柱穴」とするのではなく、柱痕・柱根の有無や断面形・覆土の堆積状況などを吟味し、「柱穴」という用語を限定的に使用すべきであるとする〔高梨2004〕。筆者もこれに賛同する。覆土Ⅲ類のピットは厳密には柱穴ではないだろう。

註6 柱痕が斜めに入っていた場合は、柱の抜き取りを行わなかつたとしても、Ⅱ類の断面（図）となる場合がある。また、柱痕を外して断面図を作成した場合、柱の抜き取りが行われなくともⅢ類の断面（図）になる場合があるであろう。

註7 多柱梁間型建物は今池遺跡SB46・105〔坂井ほか1984〕、五反田遺跡平成16年度SB1〔渡辺2005〕など、IV～V期の大型掘立柱建物に使用される例が一定量存在する。

註8 中央に江戸時代に掘削された沢山川用水が掘りこまれている。梁間2間型・壁芯棟持柱式建物の可能性もあるが、

そうなった場合、梁間の柱間が狭すぎると考えた。

- 註9 平成21年に、平成18年の岩ノ原遺跡の調査区約50m南西の地点の発掘調査が行われ、「庄」と記された須恵器有台杯が出土した[岡本2009]。この須恵器有台杯の時期は岩ノ原①期と考えられる。「石井庄」の墨書きが「吉田庄」との混同を避けるために記されたと考え、「石井庄」「石庄」の墨書き土器の出現が吉田庄の成立と関連すると考えるならば、吉田庄の成立は岩ノ原②期となるかもしれない。岩ノ原②期は8世紀末～9世紀初頭である。8世紀末・9世紀初頭は頸城郡に存在したもう一つの東大寺領莊園真沼(田)庄の史料上の上限(延暦八年(789))の時期である。なお、岡本2009では墨書きは「莊」と報告されているが、「ヤマイダレの「庄」」とするのが妥当と考える。
- 註10 II～III期の建物が皆無ではないと考える。例えばSI931やSI848出土土器はII～III期の可能性があり、建物がこの時期となる可能性がある。

## 引用・参考文献

- 秋山泰利・金内元 2009「岩ノ原遺跡II」「新潟研磨増文化財調査事業団年報 平成20年度」新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯坂盛泰・野水晃子・山下研ほか 2007「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第171集 狐宮遺跡」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 井上慶隆 1973「越後の条里制と石井庄の位置」「かみくひむし」第11号 かみくひむしの会
- 宇野隆夫 1991「律令社会の考古学的研究」桂書房
- 宇野隆夫 2006「官衙遺跡からみた横江庄遺跡」「東大寺領横江庄遺跡II」松任市教育委員会
- 宇野隆夫 2001「莊園の考古学」青木書店
- 荻野正博 1986a「初期莊園の成立と推移」「新潟県史」通史編1 原始・古代
- 荻野正博 1986b「東大寺領越後國石井庄の歴史」「山田英雄先生退官記念論集 政治社会史論叢」山田英雄先生退官記念会
- 岡本範之 2009「岩ノ原遺跡II」「理文 にいがた」66号 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 尾崎高宏 2005「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第152集 下馬場遺跡・細田遺跡」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子 2006「第VI章まとめ 1A 土器の変遷」「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第149集 滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小田由美子ほか 2006「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第149集 滝寺古窯跡群・大貫古窯跡群」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川畑誠 1995「集落の様相からみた7世紀の社会」「北陸古代土器研究」第5号 北陸古代土器研究会
- 春日実真 1999「第4章古代 第2節 土器編年と地域性」「新潟県の考古学」新潟県考古学会編 高志書院
- 春日実真 2005「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について—「今池編年」「下ノ西編年」「山三質編年」の検討を中心に」「新潟考古」第16号 新潟県考古学会
- 金内元 2008「出土土器の編年位置」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第182集 岩ノ原遺跡」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 金内元ほか 2008「湯原埋蔵文化財調査報告書第197集 北前田遺跡I・北新田遺跡I」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 亀田隆之 1998「石井庄」「日本莊園史辞典」
- 小島幸雄・秦繁治・水沢省吾 1983「末野窯跡群」「保倉川流域」新潟県教委監査委員会
- 小島幸雄 1989「下馬場古窯跡群発掘調査報告書」上越市教育委員会
- 小島幸雄・中西聰・笛沢正史 1996「新潟県上越市横曾根II遺跡ほか発掘調査報告書(横曾根II遺跡・横曾根III遺跡・上押出遺跡)」上越市教育委員会
- 小島幸雄・笛沢正史ほか 1987「保坂遺跡発掘調査報告書」上越市教育委員会
- 小島幸雄・笛沢正史ほか 1988「保坂遺跡発掘調査報告書」上越市教育委員会
- 坂井秀弥ほか 1984「新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1984「第VI章考察 今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡」新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1988「律令期の須恵器の系譜 - 越後南西部における須恵器の系譜をめぐって」「高井梯三郎先生喜寿記念論集 歴史学と考古学」高井梯三郎先生喜寿記念論集刊行会編 真陽社
- 坂井秀弥 1999「第4章古代 第1節 総論」「新潟県の考古学」新潟県考古学会編 高志書院
- 笛川修一 1995「岡原遺跡・大野遺跡発掘調査報告書」上越市教育委員会
- 笛沢正史 1997「越後頸城群内の須恵器生産の推移と技術系譜の問題について」「北陸古代研究」第6号 北陸お古代土器研究会
- 笛沢正史 2002「上越地方最大の須恵器窯跡群 - 末野・日向窯跡群」「三和村史 自然・考古編」新潟県三和村
- 笛沢正史 2003a「第5章古代 第1節 時代概説」「上越市史」資料編2 考古 新潟県上越市

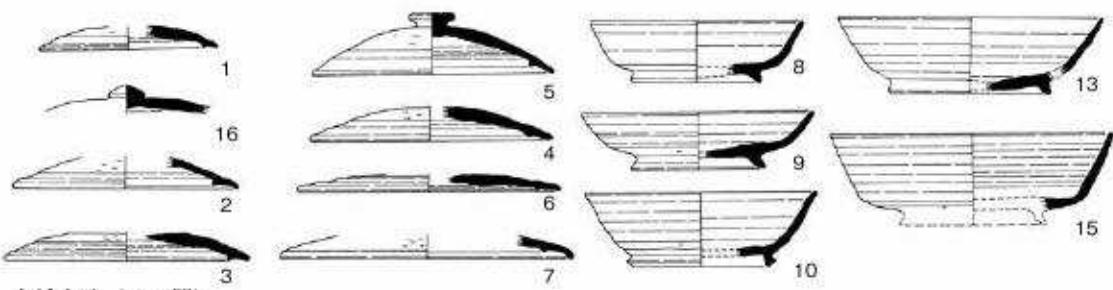
- 兼沢正史 2003b 「第5章古代 第2節 遺跡と遺物 10 越前遺跡」「同 13 子安遺跡」「同 26 新田畠遺跡」「同 30 向橋古窯跡群」「同 31 下馬場古窯跡群」「上越市史」資料編2 考古 新潟県上越市
- 沢田 敦・細井佳浩ほか 2006 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第154集 三角田遺跡」新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高島忠平・阿部義平・橋本 正・船崎久雄 1974 「富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 井波町高瀬遺跡・入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書」富山県教育委員会
- 田嶋明人 1983 「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡」「北陸の考古学」石川考古学研究会々誌 26 石川考古学研究会
- 田嶋明人 1988 「古代編年軸の設定」「シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題」石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 田嶋明人 1996 「手取り届け状地に見る古代遺跡の動態」「東大寺領横江庄Ⅱ」石川県松任市教育委員会
- 高橋一樹 1999 「越後国高田保ノート」「上越市史研究」4号 上越市史編纂室
- 高橋 保 2005 「新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書 第150集 海道遺跡・大塚遺跡」新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄・金内 元・田中一穂ほか 2008 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第182集 岩ノ原遺跡」新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 2008 「遺構について」「石井庄と岩ノ原遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第182集 岩ノ原遺跡」新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中一穂 2008 「岩ノ原遺跡出土の文字資料について」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第182集 岩ノ原遺跡」新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 出越茂和・小西昌志 1993 「上荒屋遺跡(二)」金沢市教育委員会
- 土橋由理子 2005 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第151集 鮎谷遺跡・炭山遺跡」新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中林隆之 2004 「第二章 第四節 古代領域平野の開発と莊園」「上越市史」通史編1 自然・原始・古代 新潟県上越市
- 野水晃子 2007 「第Ⅱ章まとめ 2 遺物について」「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第171集 狐宮遺跡」新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 百瀬正恒 2008 「新潟平野における中世土器の成立」報告の概要」「北陸中世のみち」北陸中世考古学研究会
- 宮本長二郎 1999 「日本中世住居の形成と発展」「建築史の空間 - 関口欣也先生退官記念論文集 - 」関口欣也先生退官記念論文集刊行会編 中央公論美術出版
- 宮本長二郎 2002 「古代末から中世の住居建築」「秋田県埋蔵文化財センター 研究紀要」第16号 財団法人 秋田県埋蔵文化財センター
- 山崎忠良・野水晃子・田中一穂ほか 2008 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第201集 延命寺遺跡」新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 吉岡康暢 1983 「北陸初期庄園の考古学的検討」「東大寺領横江庄遺跡」松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 吉岡康暢 1996 「北陸の初期庄園と横江庄遺跡」「東大寺領横江庄遺跡Ⅱ」松任市教育委員会
- 渡辺裕之ほか 2005 「新潟県埋蔵文化財調査報告書 第138集 台の上遺跡 峰ノ上遺跡 五反田遺跡」新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

補註1 脱稿後、岩ノ原遺跡Ⅱの発掘調査報告書が刊行された(岡本範之・秋山泰利・金内 元ほか 2010「岩ノ原遺跡Ⅱ」「新潟県埋蔵文化財調査報告書 212集 北前田遺跡Ⅱ 野畔遺跡 諏訪前遺跡 北新田遺跡 中田原遺跡Ⅱ 岩ノ原遺跡Ⅱ」新潟県教育委員会ほか)。このなかで、遺構の・遺物の年代を検討した金内 元は、平成18年度の発掘調査時に出土した遺物についても触れ、4~6BC グリッド出土土器の年代を、「8世紀中葉から後業」と訂正している。

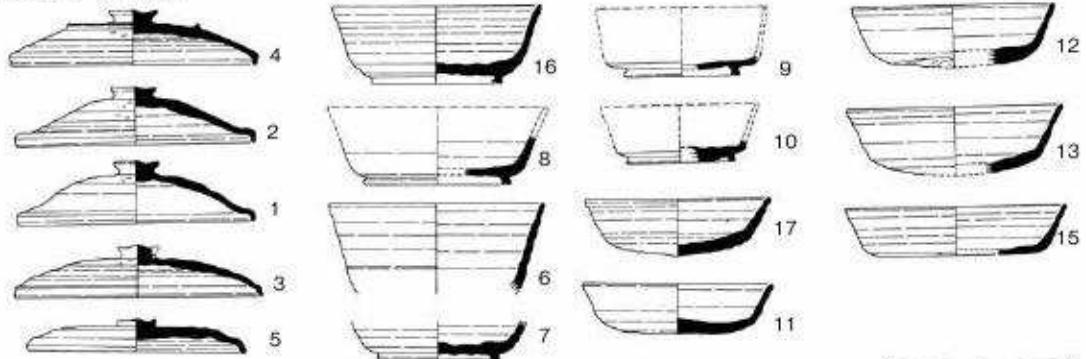
補註2 脱稿後、北前田遺跡Ⅱ(岡本範之・秋山泰利・金内 元ほか 2010「北前田遺跡Ⅱ」「新潟県埋蔵文化財調査報告書 212集 北前田遺跡Ⅱ 野畔遺跡 諏訪前遺跡 北新田遺跡 中田原遺跡Ⅱ 岩ノ原遺跡Ⅱ」新潟県教育委員会ほか)、北新田遺跡Ⅱ・北荒町南新田遺跡(金内 元・小村正之ほか 2010「新潟県埋蔵文化財調査報告書 210集 荒町南新田遺跡」新潟県教育委員会ほか)の発掘調査報告書が刊行された。北新田遺跡と荒町南新田遺跡は旧河道を挟んだ一連の遺跡でI~VI期の大規模な集落遺跡であること、この2遺跡に北新田遺跡を加えた3遺跡では、Ⅲ期の方位軸建物が一定量存在することが明らかになった。これらの遺跡と岩ノ原遺跡の関連については稿を改めて検討したい。

補註3 脱稿後、高橋一樹 1999 「越後国高田保ノート」「上越市史研究」第4号 上越市史専門委員会のなかで石井庄が現在の高田周辺に存在したことが指摘されていることを知った。岩ノ原遺跡の調査以前に石井庄が関川左岸に存在したことを指摘した重要な論考と考える。

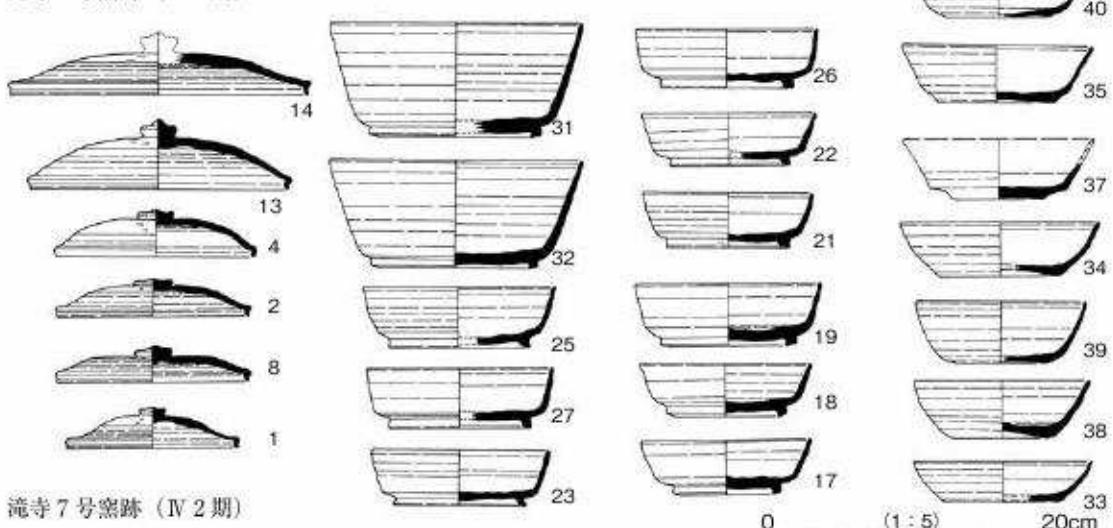
下馬場窯跡 (II 2期)



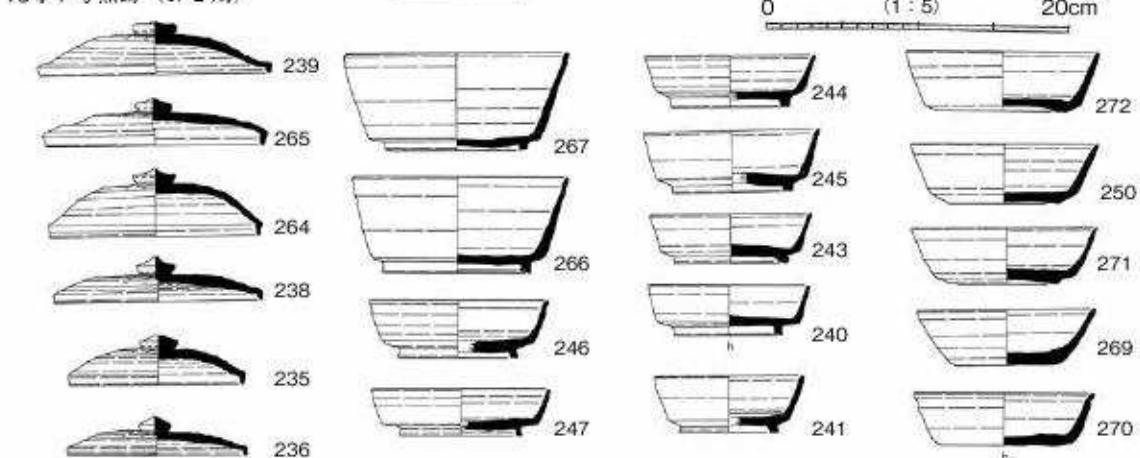
向橋窯跡 (IV 1期)



淹寺1号窯跡 (IV 2期)

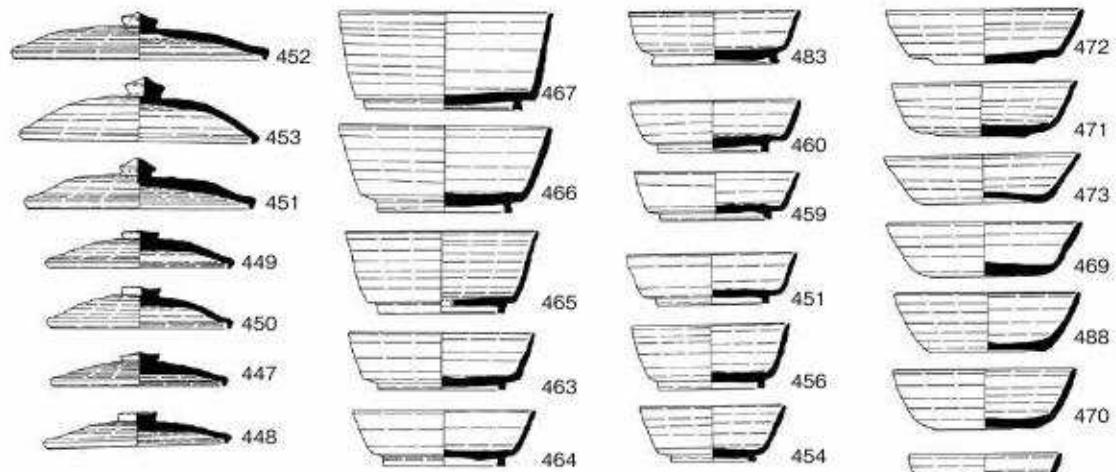


淹寺7号窯跡 (IV 2期)

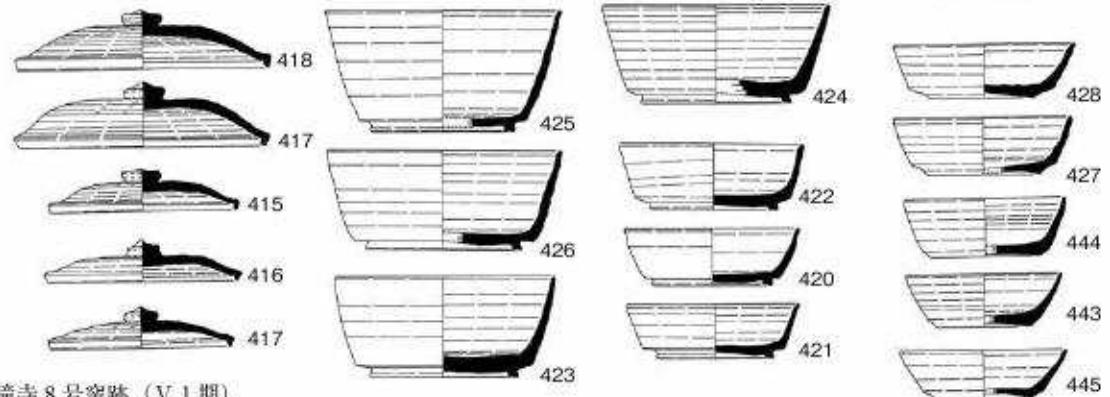


第21図 関川左岸の須恵器窯出土の須恵器1(笛澤2003、小田ほか2006より作成)

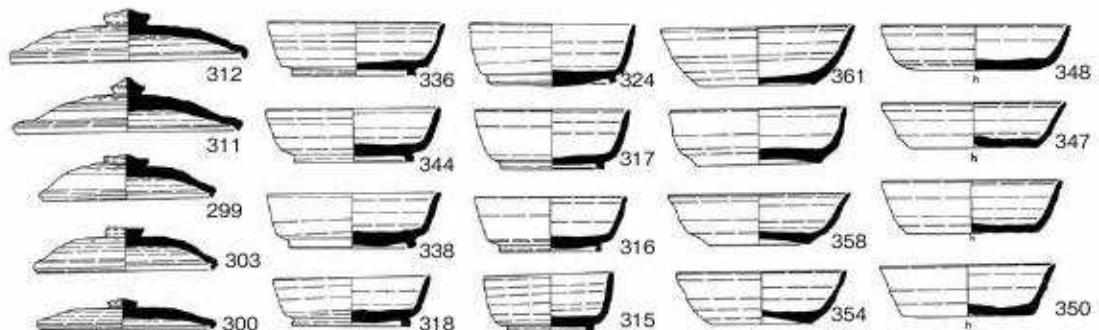
淹寺 13号窯跡 (IV 3期)



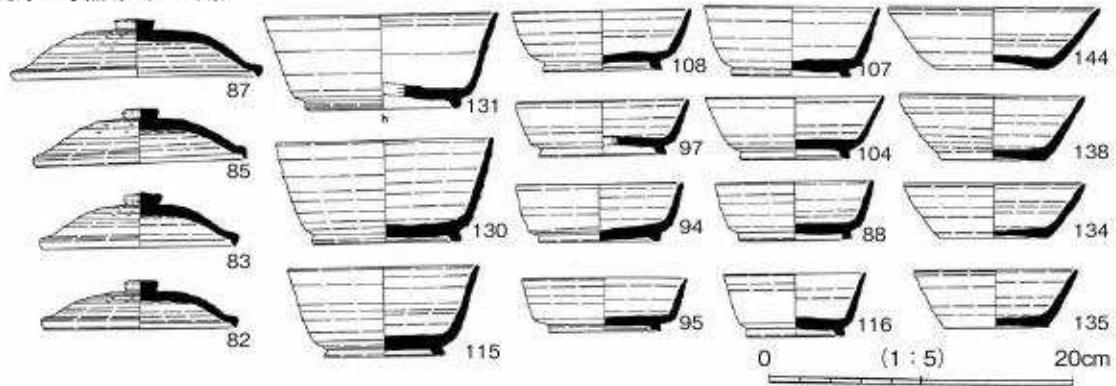
淹寺 12号窯跡 (IV 3期)



淹寺 8号窯跡 (V 1期)

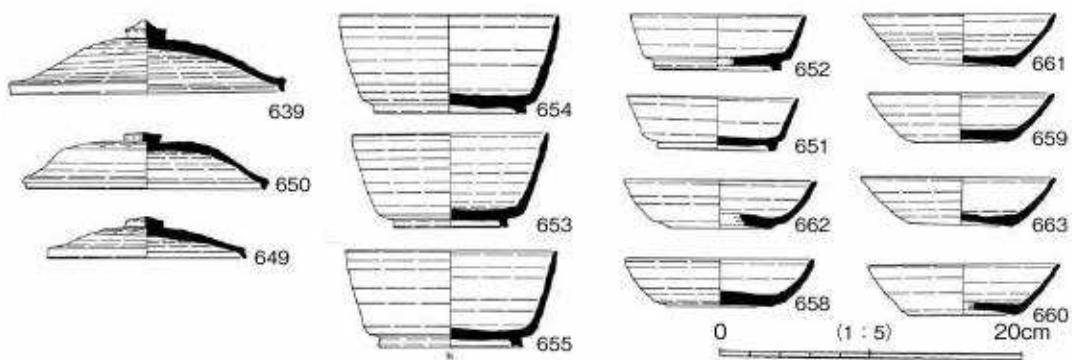


淹寺 2号窯跡 (V 1期)

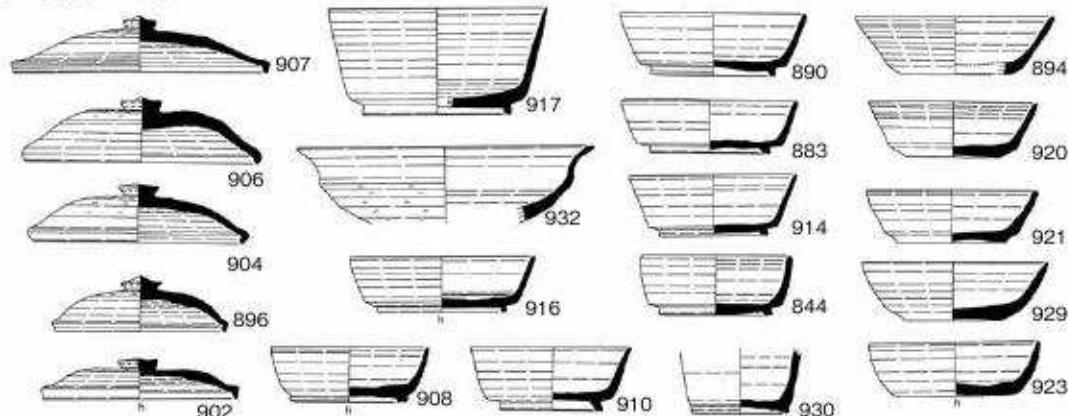


第22図 関川左岸の須恵器窯出土の須恵器2(小田ほか2006より作成)

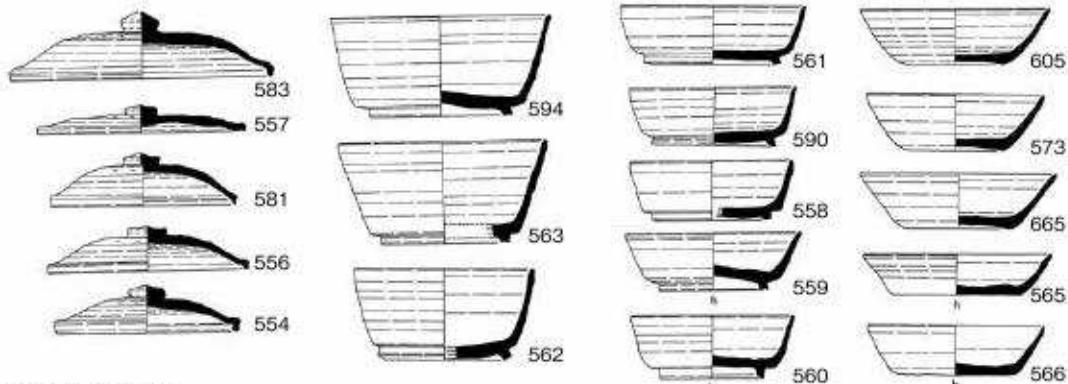
流寺10号窯（V2期）



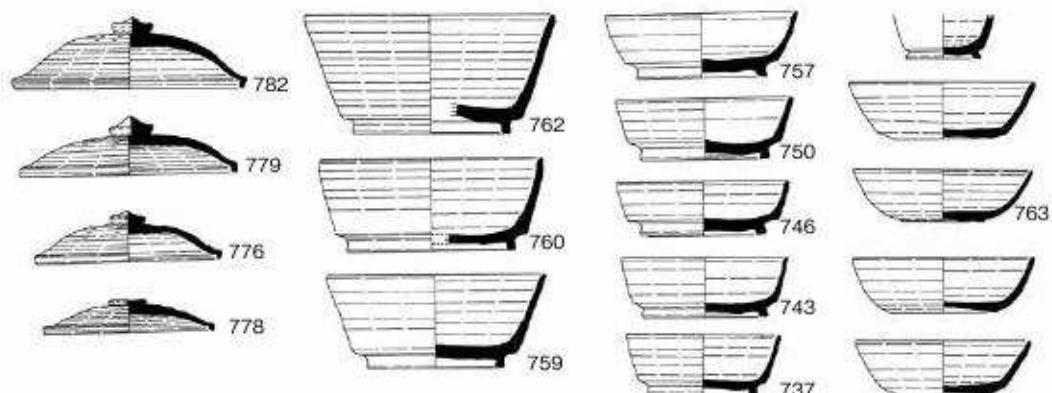
大貫1号窯（V2期）



流寺9号窯（V2期）

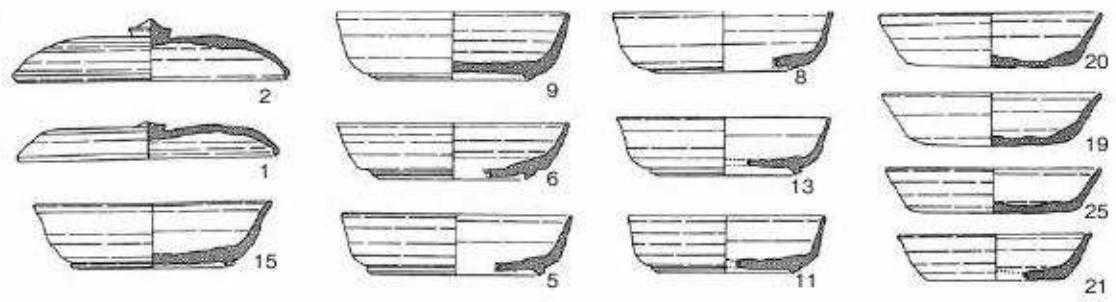


大貫3号窯（V2期）

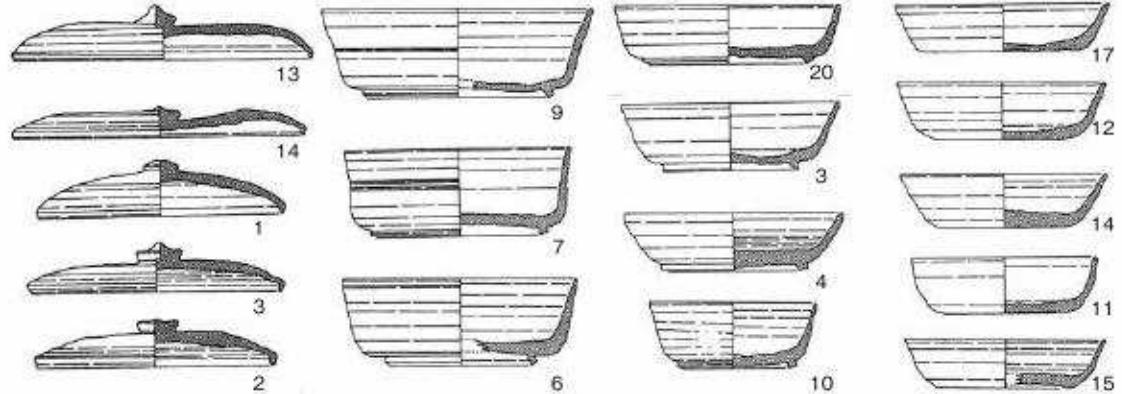


第23図 関川左岸の須恵器窯出土の須恵器3(小田ほか2006より作成)

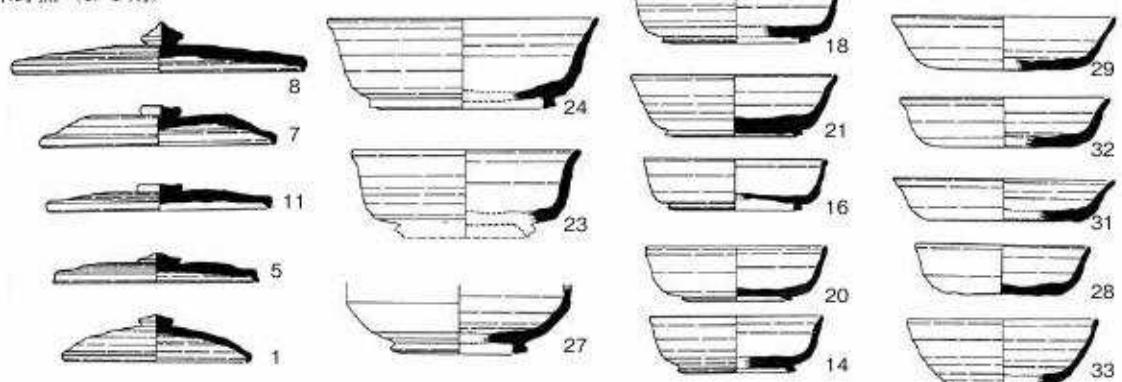
日向2号窯(Ⅲ2期)



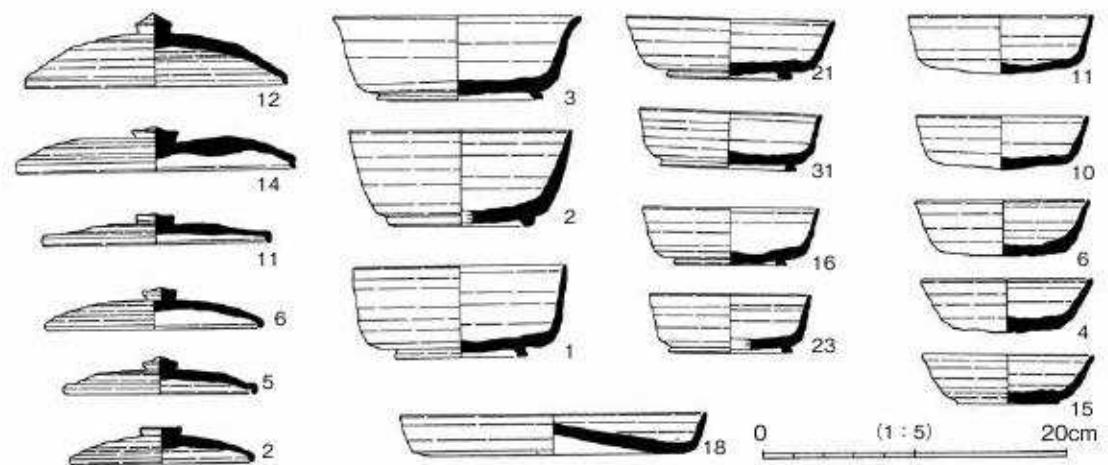
日向4号窯(Ⅲ2～Ⅳ1期)



末野窯(Ⅳ1期)

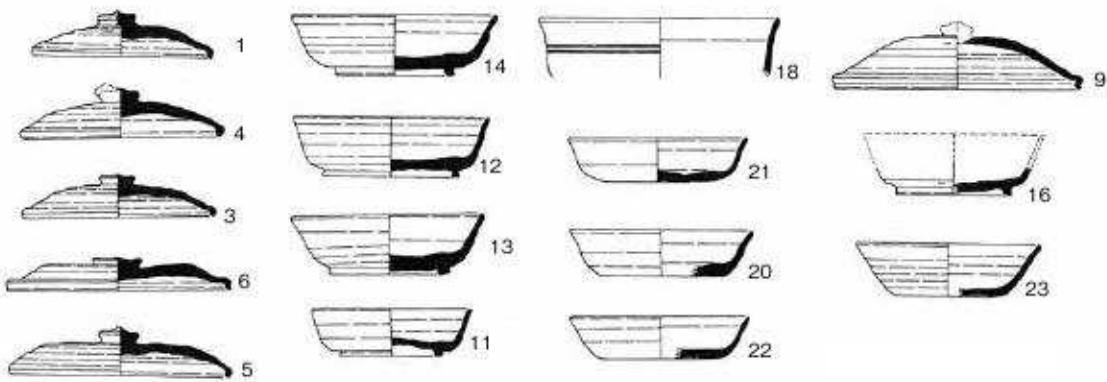


神田長峰1号窯(Ⅳ2～Ⅳ3期)

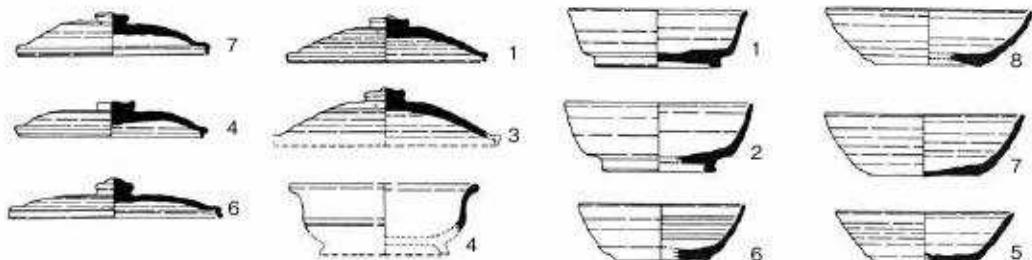


第24図 関川右岸の須恵器窯出土の須恵器1(筆澤200より作成)

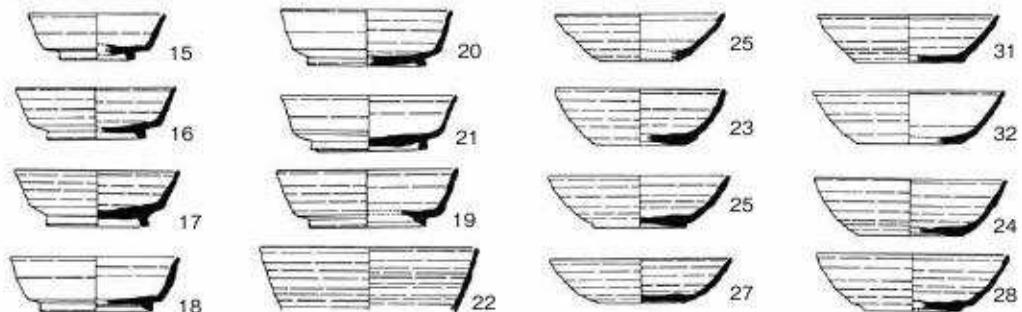
神田長峰2号窯 (IV 2 ~ IV 3期)



今熊1号窯 (VI期)

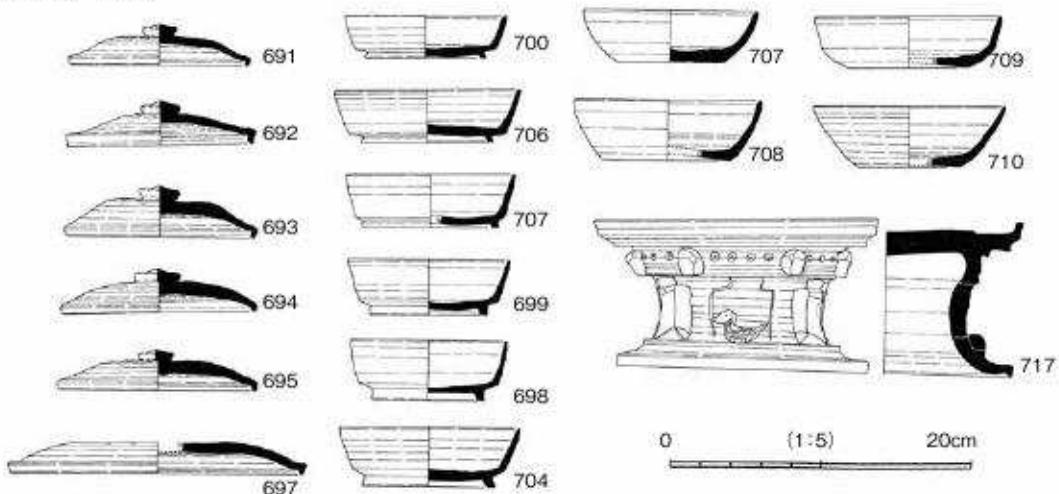


今熊2号窯 (IV 2期)



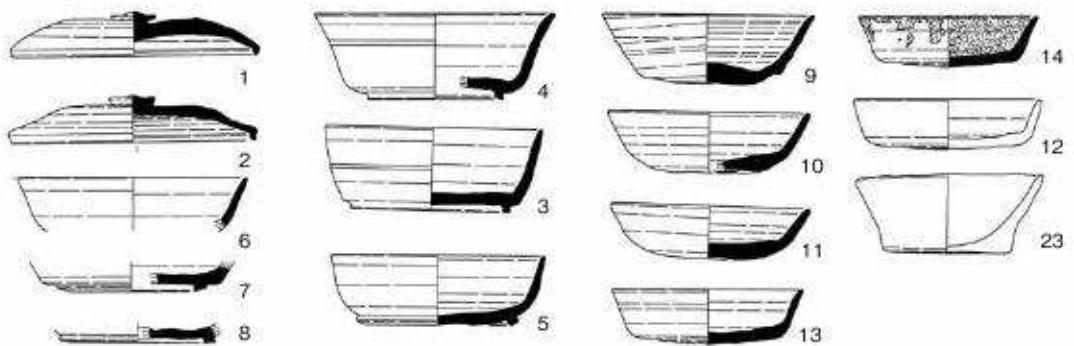
第25図 関川右岸の須恵器窯出土の須恵器2(篠川200より作成)

滝寺11号窯 (VI期)



第26図 関川左岸の須恵器窯出土の須恵器4(小田2006より作成)

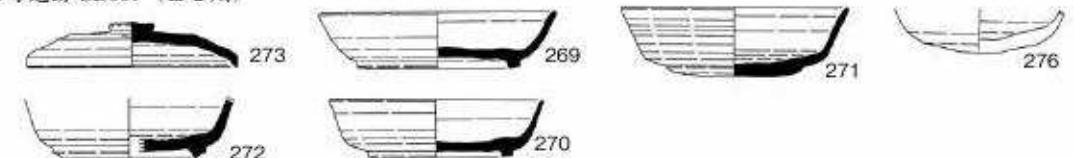
三角田遺跡 SDII13 (III 2 期)



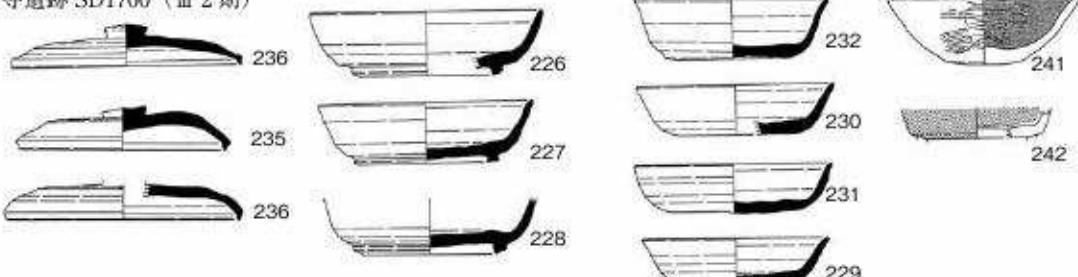
延命寺遺跡 SB002 (III 2 期)



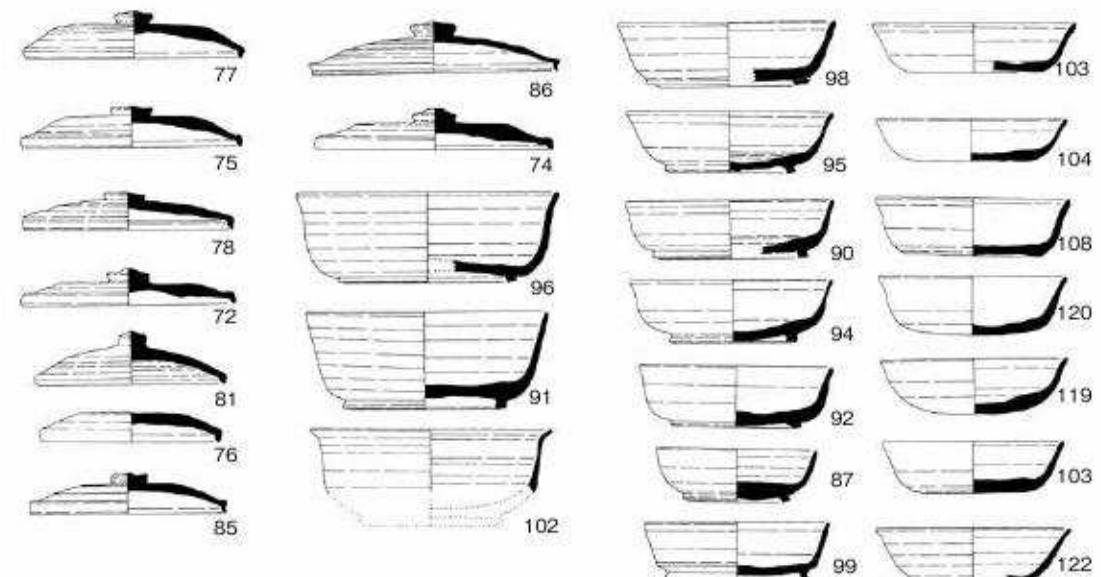
延命寺遺跡 SB007 (III 2 期)



延命寺遺跡 SD1700 (III 2 期)

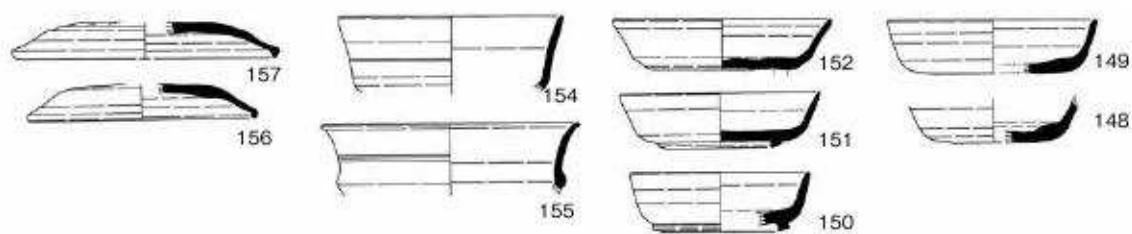


岡原遺跡 SK18 (IV 1 期)

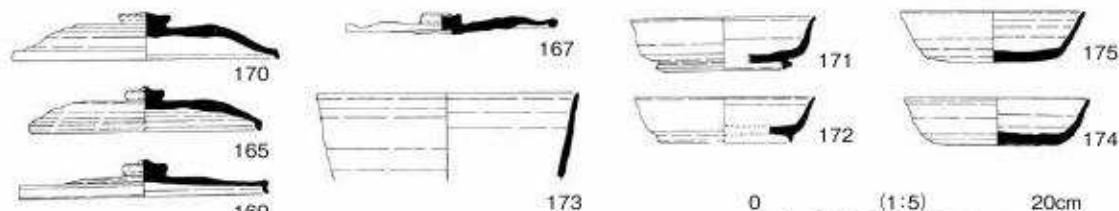


第27図 飯田川・重川流域の古代土器1(澤田ほか2006、山崎2008、筮川1995より作成)

三角田遺跡 SK553 (IV 1期)



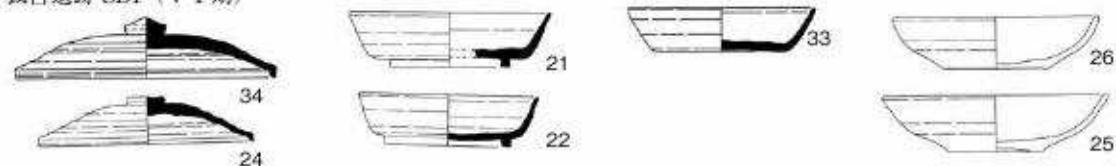
岡原遺跡 SX34 (IV 2期)



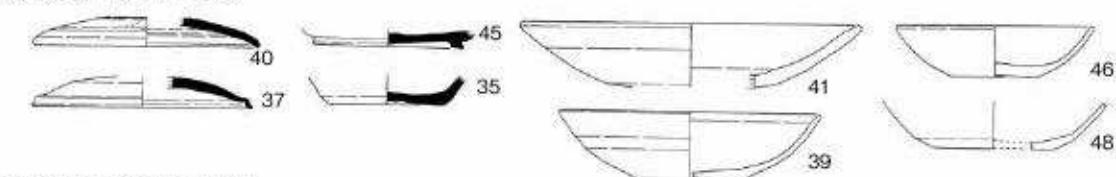
狐宮遺跡 SK358 (IV 2・3期)



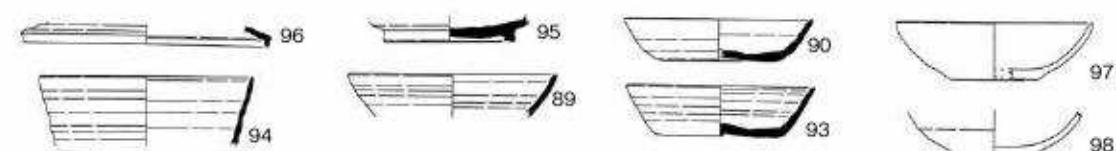
狐宮遺跡 SB1 (V 1期)



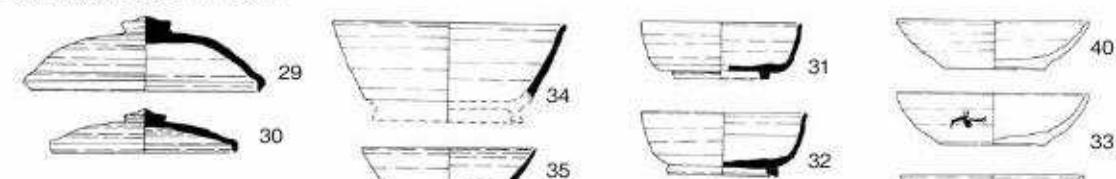
狐宮遺跡 SB2 (V 1期)



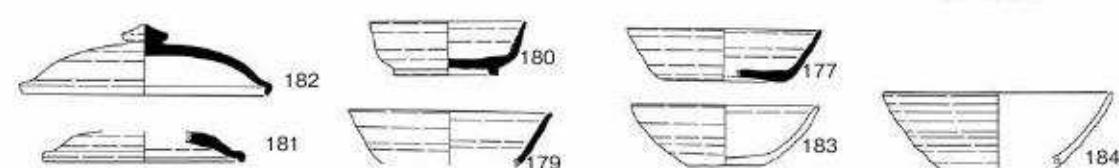
狐宮遺跡 SI394 (V 1期)



上押出遺跡 SX91 (V 1期)

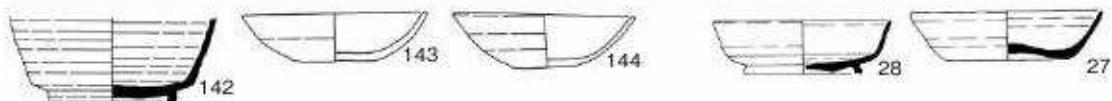


三角田遺跡 SK47 (V 2期)



第28図 飯田川・重川流域の古代土器2(澤田ほか200、佐川199、飯坂200、小島ほか200より作成)

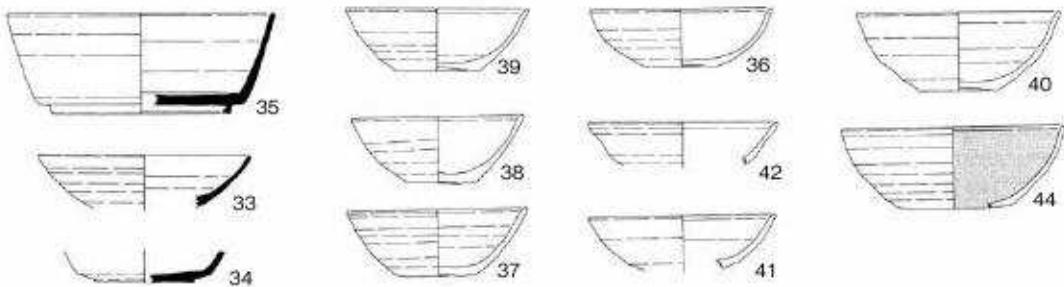
狐宮遺跡 SK472 (V 2 ~ VI 1 期)



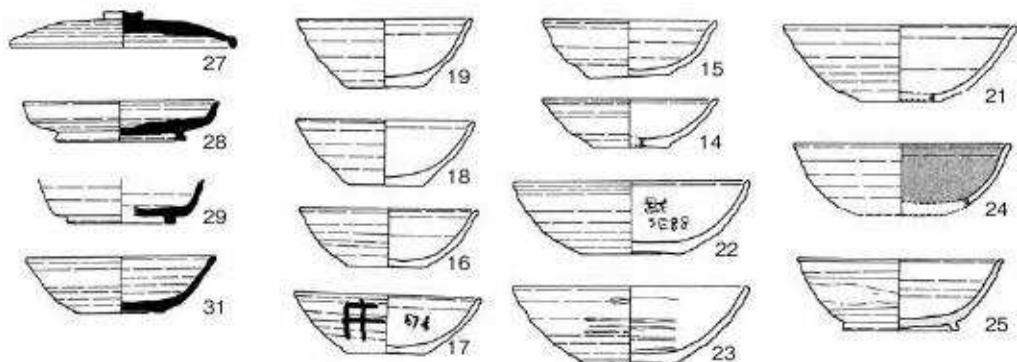
岡原遺跡 SK83 (V 2 ~ VI 1 期)



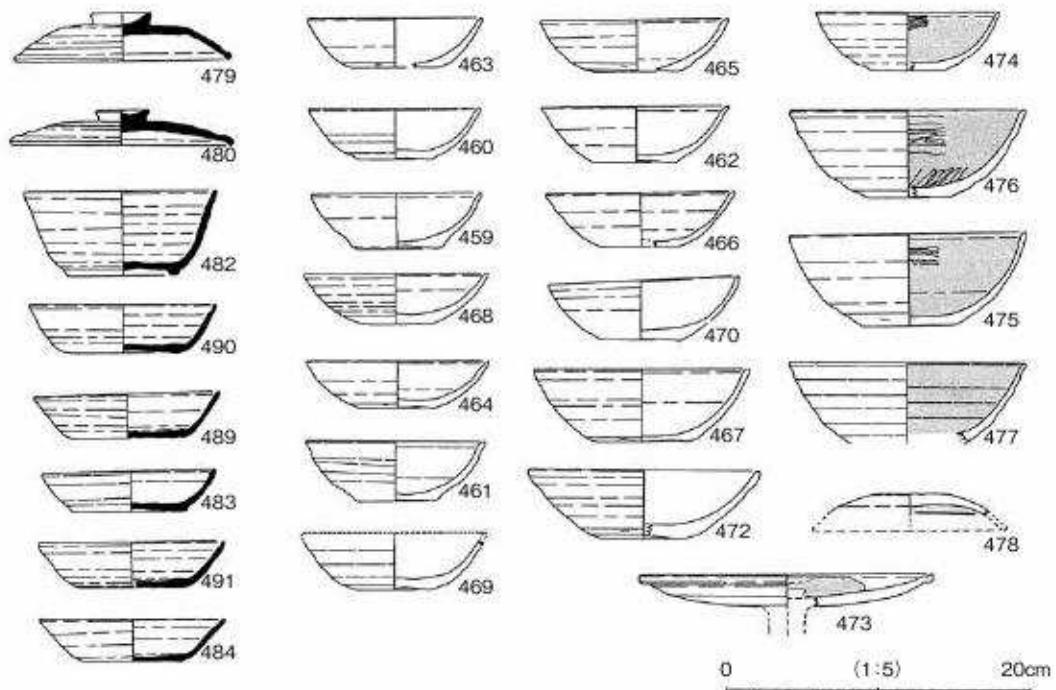
岡原遺跡 SK3 (V 2 ~ VI 1 期)



越前遺跡 SE88 (V 2 ~ VI 1 期)

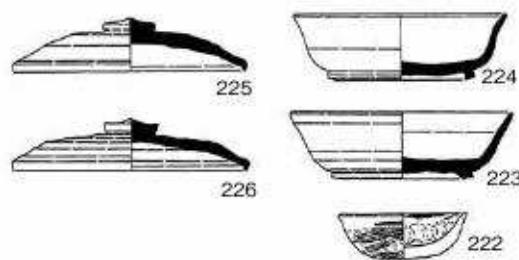


保坂遺跡 SD51 (VI 1 期)

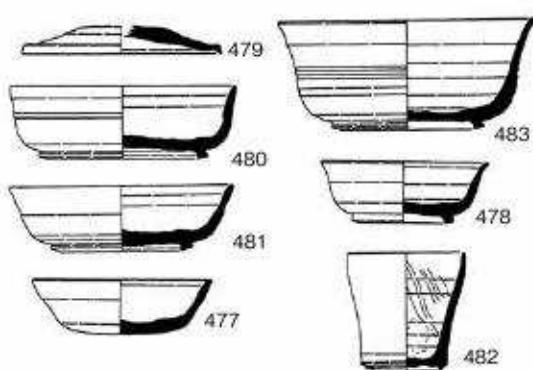


第29図 飯田川・重川流域の古代土器3(飯坂ほか2007、並川1995、並沢2003b、小島ほか1998より作成)

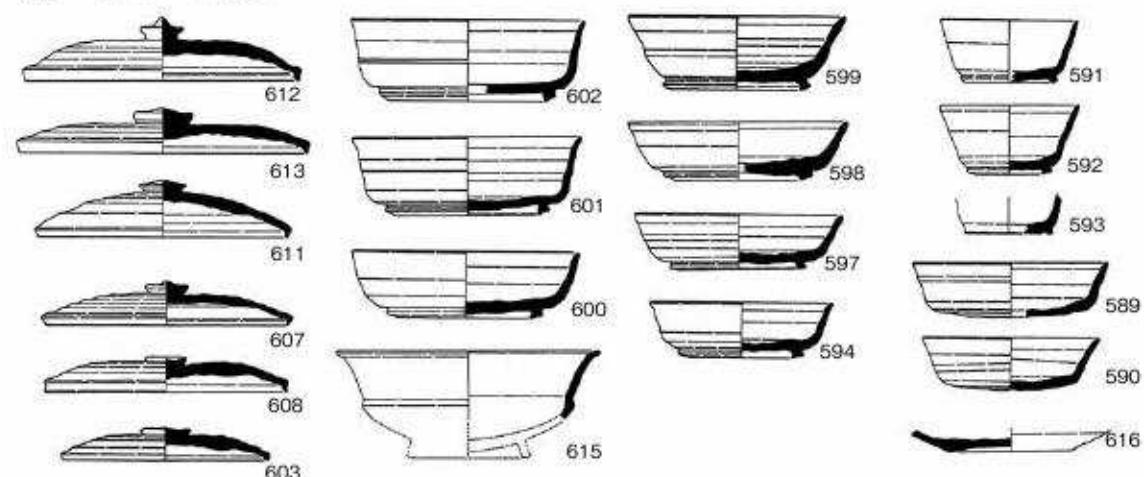
今池 SK140 (Ⅲ 1 ~ Ⅲ 2 期)



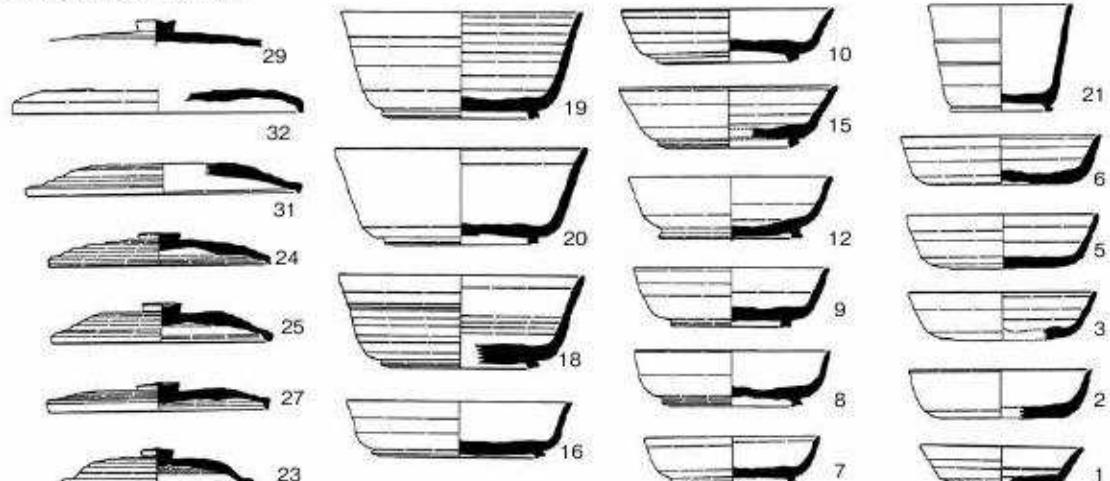
今池 SK391B (Ⅲ 2 期)



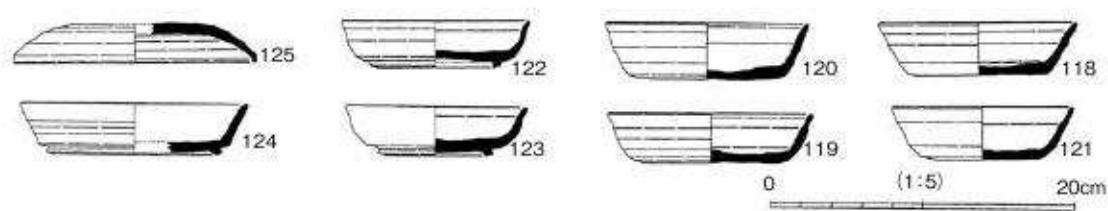
今池 A 地区 (Ⅲ 2 期中心)



今池遺跡 SK24 (Ⅳ 1 期)

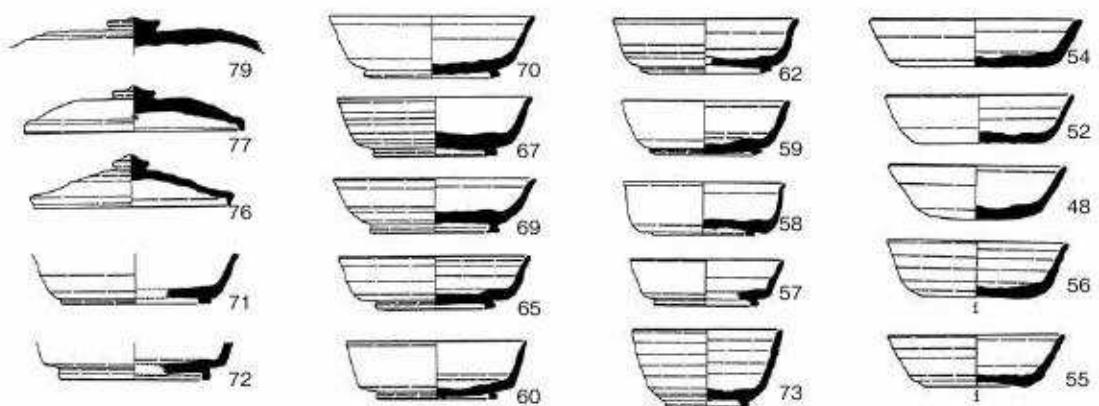


今池遺跡 SK (Ⅳ 1 期)

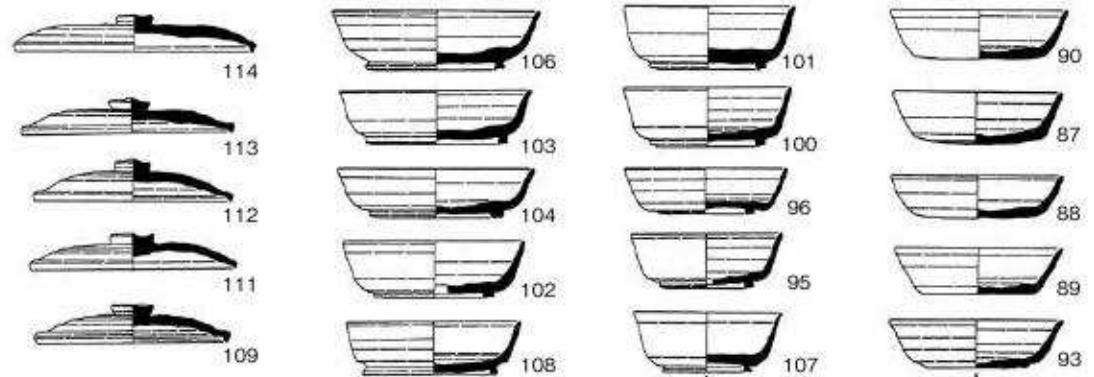


第30図 今池遺跡群出土土器1(坂井ほか1984より作成)

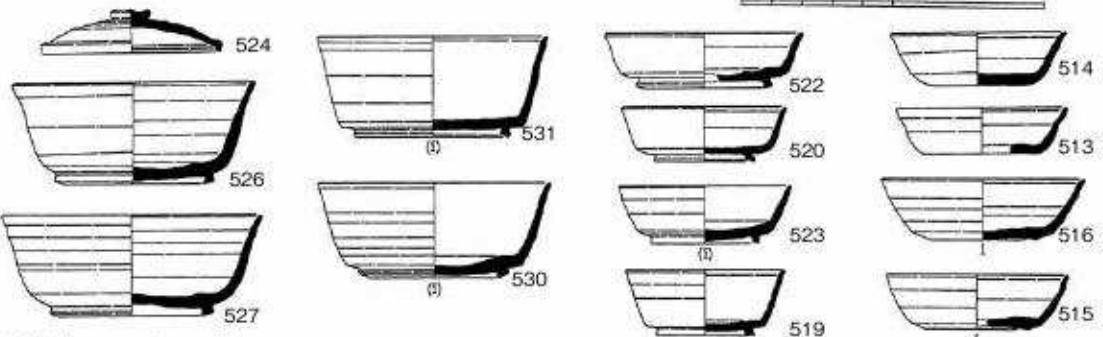
今池遺跡 SK21B (IV 2 期)



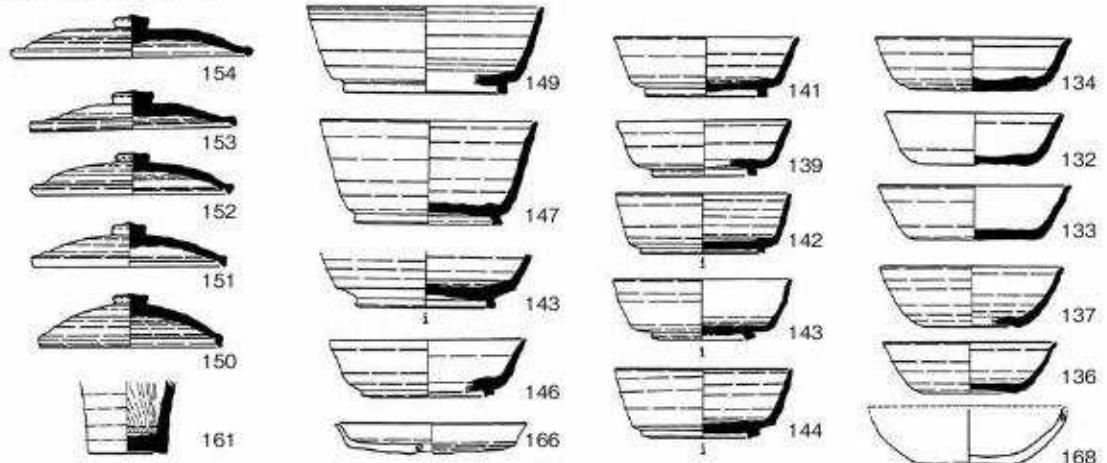
今池遺跡 SK21A (IV 2 期)



今池遺跡 SD321 (IV 3 期)

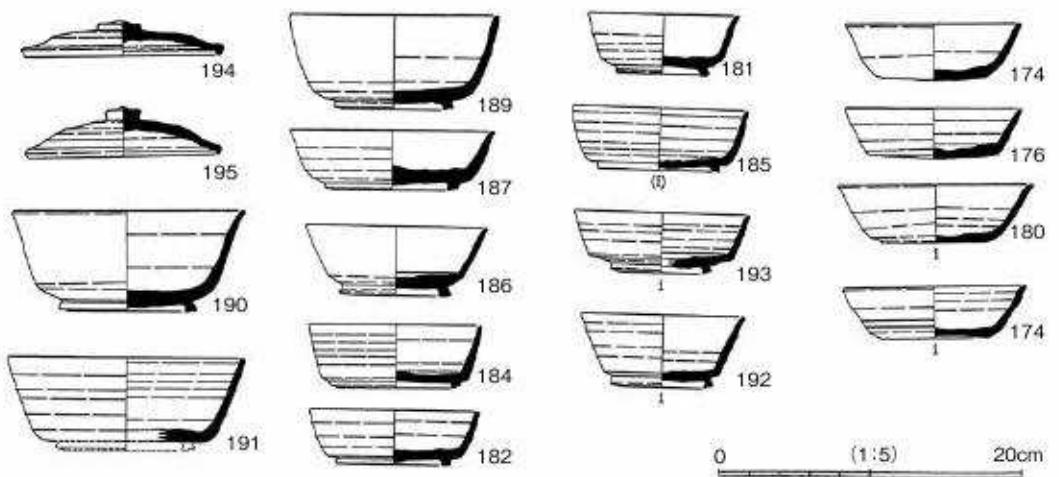


今池遺跡 SK102 (IV 3 期)

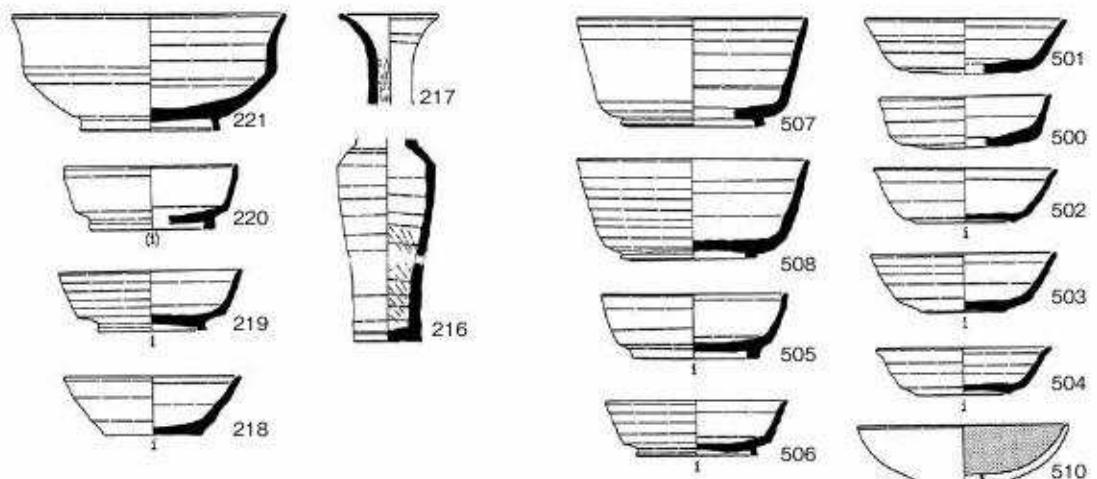


第31図 今池遺跡群出土の古代土器2(坂井ほか1984より作成)

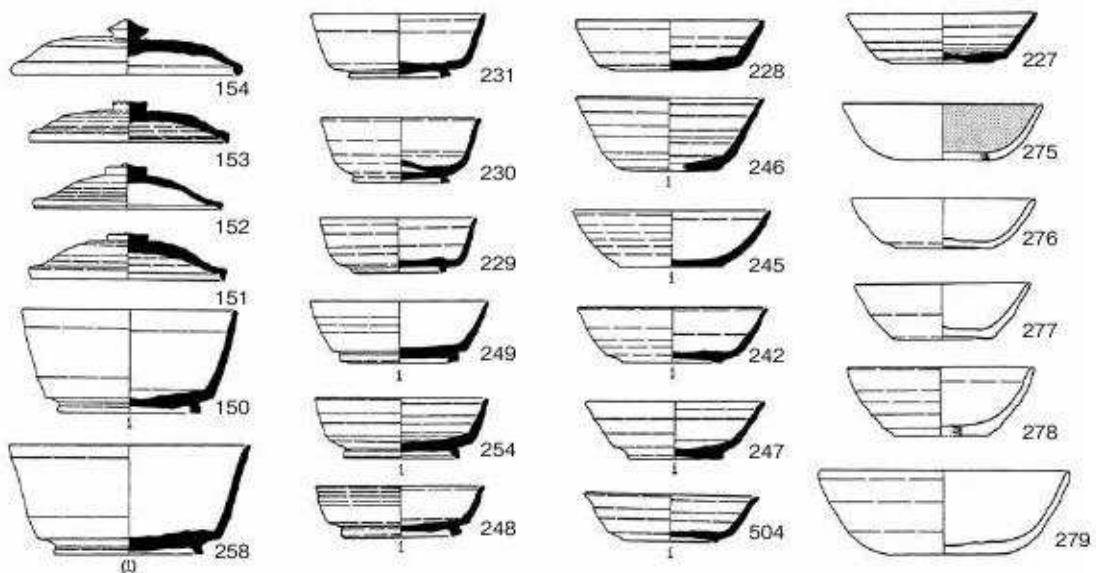
今池遺跡 SK24B (IV 2 期)



今池遺跡 SK120 (V 1 期)

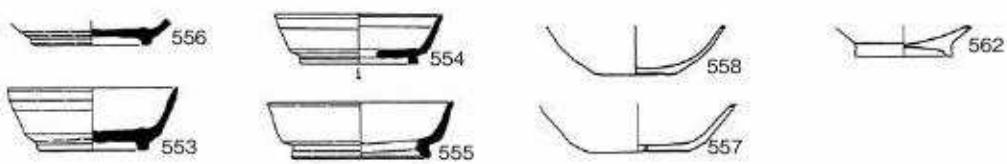


今池遺跡 SD201 (V 2 期)

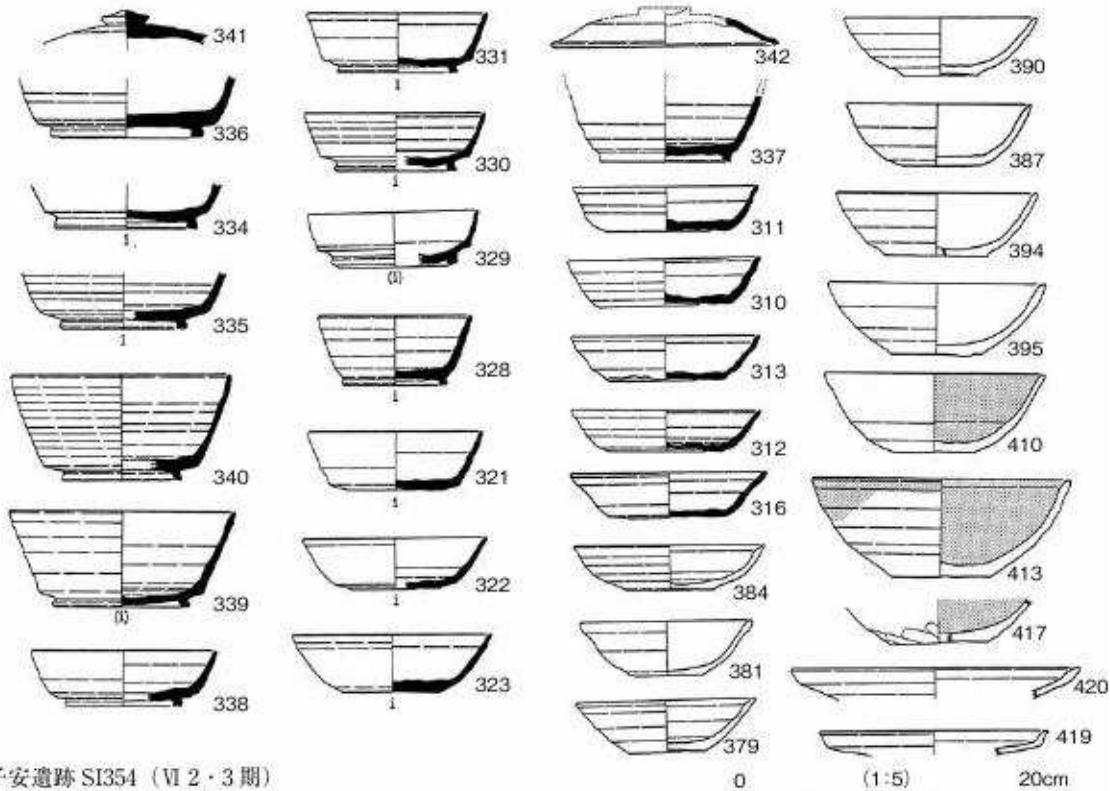


第32図 今池遺跡群出土の古代土器2(坂井ほか1984より作成)

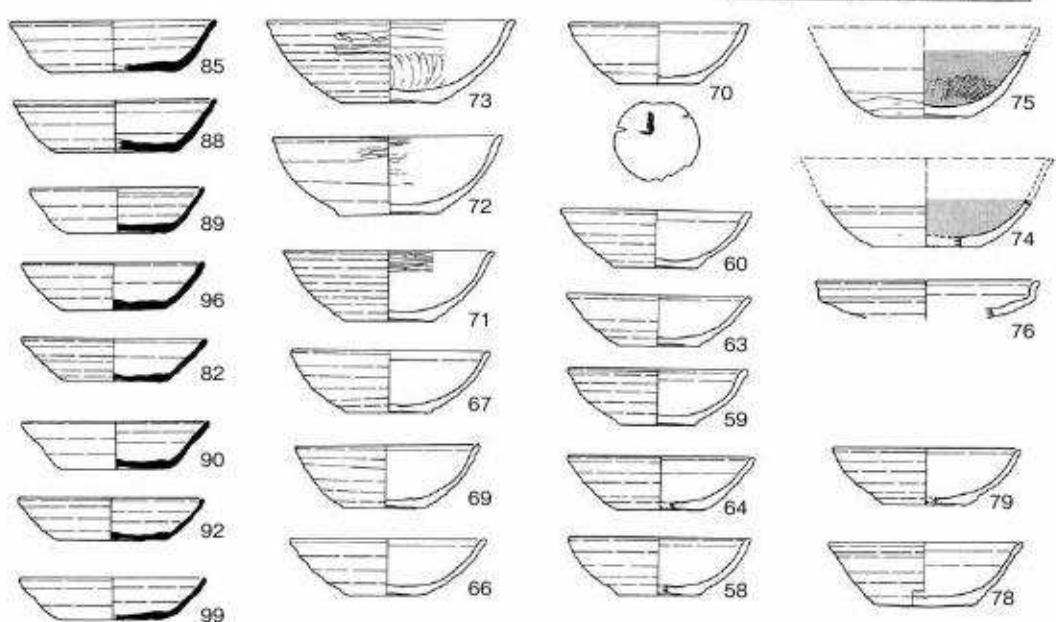
今池遺跡 SD324 (V 2 ~ VI 1 期)



今池遺跡 SD3 (VI 1 期中心)



子安遺跡 SI354 (VI 2・3 期)



第33図 今池遺跡群出土の古代土器(坂井ほか1984、笹澤2003より作成)

## 研究紀要

第 6 号

平成 23 年 3 月 30 日印刷

編集・発行 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

平成 23 年 3 月 31 日発行

〒956-0845 新潟市秋葉区金津 93 番地 1

電話 0250 (25) 3981

FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 株式会社 ハイングラフ

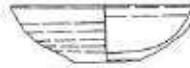
〒950-2022 新潟市西区小針 1 丁目 11 番 8 号

電話 025 (233) 0321

頁	位置	誤	正
61	第1回キャプション	平成10年2月発行	平成10年2月発行

## 『研究紀要』第6号 正誤表

[(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団2011]

頁・行	誤	正						
2p 第1表	<table border="1"> <tr><td>福島・新潟(下越)</td></tr> <tr><td>石川2004</td></tr> <tr><td>福島      下越</td></tr> </table>	福島・新潟(下越)	石川2004	福島      下越	<table border="1"> <tr><td>福島・新潟(下越)</td></tr> <tr><td>石川2004</td></tr> <tr><td>下越      福島</td></tr> </table>	福島・新潟(下越)	石川2004	下越      福島
福島・新潟(下越)								
石川2004								
福島      下越								
福島・新潟(下越)								
石川2004								
下越      福島								
55p 14行目	調整認められ	調整が認められ						
64p 17行目	(第4・26	(第4・30						
64p 18行目	(第4・30	(第4・27						
64p 21行目	27図)などに	31図)などに						
64p 下から11~12行	SK102(第25図)、SK254(第26図)	SK102(第31図)、SK254(第32図)						
64p 下から6~7行目	(第5図361・第22図)	(第22図)						
64p 下から5~6行目	(第4図256・第28図)	(第4図256・第32図)						
64p 下から3~4行目	(第5図890・914、第23図)	(第23図)						
64p 下から3~4行目	土師器無台胎土(第5図25・26・226)	土師器無台柾(第5図25・26・276)						
66p キャプション	笹川19、小田200	笹川1995、小田ほか2006						
67p キャプション	小田ほか200、飯坂ほか200	小田ほか2006、飯坂ほか2007						
64p 4行目	第4図	第5図						
67p 第5図		 51						
69p 8~9行目	SB002・003出土土器(第26図)	SB002・003出土土器(第27図)						
69p 9行目	(の新相)に土器群	(の新相)の土器群						
70p 11行目	P07、3がP18	P07、5がP18						
73p 下から12行目	太部の開き	体部の開き						
73p 下から6行目	分類は第9図に従う	分類は第8図に従う						
75p 14行目	平面闊	平面縦						
75p 下から7行目	小規模である	小規模である						
92p キャプション	(笹沢200より作成)	(笹沢2002より作成)						
93p 2段目	今熊1号窯(V1期)	今熊1号窯(V1期)						
93p 3段目	今熊2号窯(V2期)	今熊2号窯(V2期)						
93p 4段目	滝寺11号窯(V1期)	滝寺11号窯(V1期)						
95p キャプション	(澤田ほか200、笹川199、飯坂200、小島ほか200より作成)	(澤田ほか2006、笹川1995、飯坂ほか2007、小島ほか1996より作成)						